

---

# 蒼い星

らんらら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼い星

### 【Zコード】

Z3077E

### 【作者名】

らんらじ

### 【あらすじ】

宇宙にたくさんの惑星がある。その一つ、少年の住む世界はまだ未開の地。汚れた大気のために【コンイラ】と呼ばれる植物がなくては生きていけない世界。主人公の住む街は大切な【コンイラ】を栽培している特殊な街。だからこそ。狙われたりもするわけで。主人公の少年は十七歳。今日も隣の港町で盛り場をうろついています。待ち受けの運命に気付くこともなく。

## 1・廻された街テイク（前書き）

少し長めのお話ですが。

RPGシナリオとして考えた作品です。

気軽に楽しんでくださいね

## 1・隠された街テイラ

「蒼い星」

### 1・テイラ

蒸し暑い、この季節にしてはやけに重苦しい午後。通りの石畳に濃い影を落として、少年は足早に歩いていた。

港町、アストロードに風のない日は珍しい。かえって潮の香りがしつこく感じる。

少年は、肩に食い込む剣の重みを確認するなり、鞘を鳴らした。まだ、幼さの残る十七歳の彼は、一人きりでこの港町の繁華街に来ている。

昼間でも、酒場からは海の男の歌声やら怒鳴り声が聞こえてくる。早朝の漁を終え、彼らはすでに一日の疲れを癒しにかかっているのだ。

酒場はすでに少年にとって、馴染みの場所だった。

幼い頃から家にいるのがつまらなくなると、そこicamente男たちの豪快な嘘話や、女たちの香水の香りを感じるのが好きだった。子ども扱いはされるが、それを利用してそこそこいい思いをしていくことも確かだ。

酒場の脇を通り、いつもの野良猫が、長い尻尾をゆらりと揺らした。

少年は一瞬立ち止ると、猫をなでようと、手を伸ばす。詫まぐれ

な猫は、ふいと、酒樽から飛び降りて、まるでしてやつたりといふ風に、機嫌な様子で歩き出す。

「ちえつ。かわいくないな。」

ポツリと独り言を言つて、少年は再び歩き出した。

懐にある、金貨の重みが、少しつまづきをせらる。こつもと違つ。今田このために苦労してためたのだ。ちゃんと自分で漁師の手伝いをしたり、酒場で皿洗いしたりして稼いだのだ。母さんにも何に使おうと文句は言わせないんだ。

少年の名は、シンカといつ。

この町の子ではない。街の少年たちに混じれば白い肌、少しうねりのある金色の髪は目立つが、常によそ者の出入りするこの町では、だからと言つて特別に扱われることもない。濃い蒼い瞳は大きく笑うと愛嬌のある顔になる。

この地方の強い日差しは、彼の目を強く射る。

普段は縁のない目的の店を視界に認めるとき、シンカはやらない足を速めた。軒先の小さな看板が、日差しを鈍く反射するのに皿をしばたいて、逃げ込むように入つていぐ。

店内は少しは涼しい。レンガの土のにおいかすかにする。シンカは数日前に確認してあつたそれをもつて一度眺めると、店番の老婆に声をかけた。

「おばさん、この首飾り、ほしいんだ。」

老婆をおばさんと呼ぶのは少年の多少の遠慮だ。だが老婆は少年を見ると、するそくに笑う。

「いいのかい？子供が買つには高いと思つたねえ」

「大丈夫だよ」

「こいつと笑うシンカ。きちんと下調べしたのだ。

「そりかい。十八イルだ」

少年の顔色が変わった。この町の賄いつきの宿で一泊一イル。十五イルでも半月遊んで暮らせるのだ、少年にとっては大金だった。

「この前、聞いたときは十五イルって言つたじゃないか！」

「ぼうや、知らないのかい？輝石は常に値が動くもんなのさ。今ち  
ょうど、高い時期でねえ。・・シシシ」  
いやな笑い声が更なる不快感を誘つ。

「なんだよ、少しくらい負けてくれたつていいだろ！悪徳だな」

三イルは実際少しどは言えないがシンカは食い下がる。一イル稼ぐには一週間市場の荷物運びをしなければならない。

「ふん、買わないんなら帰つとくれ。商売の邪魔だよ」

シンカはどうしてもこの首飾りがほしかったのだ。老婆のしわに隠  
れようとする小さな目を睨み付けた。

明日はミンクの誕生日。この石はあいつの瞳の色に映える。きっと似合つ。

そう思つて働いて小遣いを貯めたのに、今さら買えないなんて。  
誕生日は明日なのだ。今日買えなければ、今までの苦労の意味がな  
い。

「まあ、帰つとくれ。……こいつしゃこませ

シンカの背を押しのけて、老婆は立ち上がった。後から入ってきた客に声色を変える。上客なのだろう。

「ボウズ、そいつを買いたいのか？」

振り向くと、シンカより頭一つ大きい、栗色の髪の男が笑っていた。見たことがある。誰だつたろう、思い出せない。

「俺の頼みを聞いてくれたら、買ってやるよ。」

男は、短くした髪をきつちり整えていて、上質な生地の服を着ている。

金持ちらしい。少し、迫力のある顔で笑つて見せた。

シンカはまっすぐ見上げて、男を観察した。  
本当に、どこかで見たことがある気がする。

「ほしくないのか？」

「あ、ほしい」

ふと口から出た素直な言葉に、男はにやりとした。

仕方ないよな。自分で買わなきゃ意味ない、なんて言つていられな  
いか。

「どんな条件？」

「俺の部下とひと勝負しないか？その背中のものでさ」

男が店の外にいる、男より少し若そうな灰色の髪の男を指差す。店の小さな窓からは、その男の体半分しか見えない。それでも二十代後半くらいで、がつしりしているのが分かる。多分軍隊崩れか何かだ。

「負けたら？」

シンカが背中の鞄を整えながら、問いかける。

「喧嘩なら外でやつとくれ！ほら、ほら」

二人の間に割つて入つて、老婆が追い立てる。シンカと男は店の外に出た。

暑苦しい日差しが眼に痛い。五、六人だろうか、男の部下たちの顔は濃い影がさしてよく見えない。皆、シンカをじろじろ見ている。

「負けたら？」

「俺たちに、烟を見せてほしい。」

栗毛の男は意味ありげにウインクした。

烟とは【コンイラ烟】のことなのか。

「勝てたら足りない分を出してやる！」

男がシンカの頭をガシガシなので、その手を振り払う。

「レクトさん。醉狂だなあんた。こんなガキに負けたら勤まらないつすよ。」

少し変わったなまりで灰色の髪の男が笑つた。

「手加減するなよ、ジンロ」

レクトと呼ばれた、栗色の髪の男は煙草を取り出して火をつける。シンカはぐしゃぐしゃにされた前髪を撫で付けながら言つた。

「受けるよ」

シンカは、剣術の大会では町一番だった。

小さな町だから、威張れるほどではないけれど、まあ、やってみてもいい。

殺されることはないだろ？

シンカが剣を抜くと、相手も剣を抜く。

ジンロと呼ばれた男の剣は、ひじから手先くらいの長さの短剣だ。  
シンカの剣のほうが長い。

こんな条件の相手と戦つたことはない。

シンカが剣を持つ手に力を入れた瞬間、男が剣を肩の高さに構え突  
っ込んでくる。派手な音を立てて、刃がぶつかつた。

## 1・隠された街テイラ 2

ぎりり……

力は男のほうが強い。

シンカは歯を食いしばった。押し倒されないようにするのが精一杯だ。

ふいに、男が後ろに飛びのく。

弾みでバランスを崩したシンカに、男は左膝蹴りを放つ。

危うく左手をついて、顔を背けてそれを避ける。

その勢いのままシンカは相手の懷に入り裏拳を放つた。右ひじ、避けられれば、さらに剣の柄であることを狙う。

男はよけながらもシンカの腕を取りうとする。

余裕なのだ。見切られている。

シンカはとっさにすり抜けた。

身をかがめた男が、脇を狙つて突いてくる。

シンカは、後ろに飛びのく。

強い。

シンカはぞくぞくしていた。それが武者震いなのかななんかわからない。

だけど、初めて感じる高揚感は不思議と気持ちのいいものだ。

見物人から一人を隠すように囲む男たち。

その中にあって、レクトだけは口元を緩ませて笑っていた。

男との間に三歩の間合いを作つて、シンカは再び剣を構えなおす。

つと間合いを詰めながら、下から鋭く剣を振り上げる。

男は的確に捉えて短剣で受け流す。そのまま、力でシンカを突き飛ばす。

その瞬間シンカは男の短剣を持つ右手首をつかむと身を沈め、乗りかかる相手の体を蹴り上げた。  
やつた、と思ったのも一瞬だった。

投げられた男は、すぐに体制を整える。

間合いを詰め、低い姿勢で突きを繰り返す男。シンカに余裕を与えないつもりだらう。

長剣では不利な間合い。後ろに下がつても、すぐに詰められる。  
シンカは三回目の突きを避けつつ、相手の膝に足をかけぐるりと飛び越える。

着地と同時に、背後の男に剣を突き出して、けん制した。

男は無理につめようとせず、間合いを計つている。

攻守の勘は獣のようだ。

表情はないが汗すらかいていない様子にシンカは気づいてしまう。

勝てないかも。

暑さのせいで、汗が頬に伝つ。

不思議と息は切れていなかつた。

大丈夫。

腹から吐き出す息に力を込め、集中する。

再び男が突つこんできて、刃を合わせた。

間近に見えるジンロの四角張つた顔にも、うつすら汗が光つていた。  
同じだ、俺と。

その時だつた。

不意に男が、シンカの田につばをはきかけた。

「！」

反射的に、目をこすつた。

シンカに隙ができた。

剣を持つ右手をひねられ、男はシンカに馬乗りになつた。

「はあ、は、……俺の勝ちだぜ。レクト。ボウズ、殺されなかつた  
だけありがたいと思え」

レクトはあからさまに不機嫌な顔をしていた。

「大人気ないな、ジンロ。」

「いいよ。負けたんだ。言つとおりにするよ。」

服を払いながら、シンカは言つた。実際、怪我の一いつつは覚悟し

ていた。ジンロと呼ばれた男は、よほど手加減していたのだらう。相手がどうなつてもいい戦いであれば、とっくに生きてはいない。シンカには良く分かつた。

レクトは、ジンロを含めて五人の仲間を連れていた。

シンカは、約束どおり、彼らを「デイラ」に案内することにした。

「ちょっと、歩くよ」

そういうふたシンカの後を男たちはぞろぞろとついてくる。

デイラは、シンカの生まれた街。

そこにはこの国唯一のコンイラ畑がある。コンイラとは植物の名前で、特別な効能があるので国の管理のもとで栽培されている。その精製工場もデイラにある。

蒸気を使った機械で、たくさんのコンイラの成分を取り出している。それは、【コンイラのしづく】とかいう薬として聖帝が民に与えるといつ。

この国の分も隣の国の分も、すべてこのデイラで作られる。

貴重だから、厳重な警備が敷かれる。

つまり「デイラは街」と国の管理化にあつて、他の街との交流を禁止されている。

シンカは我慢できず、よく隣のこの港町に遊びに来ていた。もちろん誰にも内緒だ。母さんにも幼馴染のミンクにも。

しばらく行くと、シンカは心配そうに男たちに言った。

「なあ、なんで畠を見たいのか知らないけど、悪いことしないでくれよ」

それを聞いて、ジンロが吹く。

「笑うなよーあたりまえだろー俺たちにとつては大切なところなんだからさ。」

ジンロの袖を引っ張つて文句を言つ少年に、レクトは苦笑いだ。

「別に、コントラを盗んだりしないさ。場所さえわかれればいいんだ。あそこには警備兵もいるだろ？安心しろ」

「まあ、ね」

シンカは思つ。この軍隊ぐずれの危険そうな男が六人もいたら、警備兵なんか、いてもいなくても関係なさそうだ、と。

……だけど、負けたしなあ。

## 1・隠された街デイラ 3

アストロードから狭い山道を一時間ほど歩くと、デイラの城壁にたどり着く。

デイラは小高い丘に囲まれた地形をしている。丘の手前の門番のいる城壁を越えなければ外からは街は見えない。

街には約二千人が住んでいる。そのほとんどが、ウンイラの工場か畑で働いている。残りはその子供が街の人々に商品を売る商人だ。商人の売る物資さえ、すべてこの国、聖帝國ファシオンから支給されるのだ。

二十日」とに警備兵が交替に来る以外を除けば、この街道を通るものはいない。そんな話をシンカがするとレクトが笑った。

「お前は、なんでアストロードなんかで遊んでるんだ?」

「だって、デイラはつまらないよ。ほらあそこ、この街道の先には城門に門番がいるんだ。だから、俺はいつもこっちから行くんだ」

シンカは城壁にそつて北に回り込み、人気のないとこころで城壁を登る。

城壁を乗り越えたり、くぐつたり、割れたとこからすり抜けたり、いくつかの抜け道をシンカは知っていた。

シンカは一番ウンイラ畑に近い抜け道まで男たちを案内した。たまに使う場所だ。

城壁によじ上りそこから指差す。

「おっさん、あそこに見える黒い布に覆われたところがコンイーラ畑。  
ここからなら降りて林沿いに近くまでいけるよ」

大人の身長ほどの城壁に、男も登る。

遠くに城壁の先、丘の向こうの海が見える。青くてちらちらと輝いている。デイラの町が一望できるこの場所はシンカのお気に入りだ。ぼんやりしたときにはここにくる。

「変わらんな」

男がポツリとつぶやいた。少年は聞きのがさない。

「来たことあるの？」

「さあな」

城壁に男と一緒に腰掛けている。

レクトと呼ばれるこの男は長いまつげと高い鼻、切れ長の黒い瞳。よく見ると端正な顔だ。

女にもてそうだな。

以前も誰かと、こんなふうに座った記憶がある。いつだっただ。

不意に思い出した。

父さん！？

じっと見つめるシンカに、レクトは涼しげな視線で返す。

小さい頃、多分五歳くらいの頃一緒に遊んでくれた。

そう、確かにこんな顔だった。

でも母さんはこの人を「お父さんじゃないのよ」とこいつて認めなかつた。

俺は……俺はこの人のことをお父さんじゃないかと、ずつと思つていた。

心臓の音がやけに耳元に感じた。

「びつじょひ、お父さんなの、って、聞いてみていいかな。  
でも俺のこと、覚えてないのかな。

複雑な表情の少年にレクトは笑つた。

「ありがとうな。シンカ。こいつは駄賃だ。今日中にあの首飾りほ  
しかつたんだろ?」

差し出された金貨を受け取つて、それでもシンカは視線を目の前の男に向けたままだ。

「なんだ、急がないと店が閉まるぞ」「あ、あのや。また、会えるかな」  
それだけ言つのが、精一杯だった。

レクトは、シンカの頭をぐいぐいとなでて言つた。

「ああ、すぐに会えるわ」

「ありがと！おっさん」

言つなり飛び降り、再び城壁の外にかけていく。

嬉しくて自然と笑みになっていた。

ずっと、会いたかった。

母さんは教えてくれないけど、お父さんは遠いところに生きてこつて言つた。

金貨を握り締め、シンカは急いでもと来た道に戻つていく。

とにかく早く済ませて、もう一度レクトに会つんだー。

それで、確かめる。

母さんは違つて言つていた、でも。もしかしたら。

「笑うと似ているな」

レクトは少年の後姿をじょじょと見つめていた。

「レクトさん、今のひまに済まないこと。寄り道はいいがまだこてしましょう」

シンカが座つていたそこにはジンロが足をかけた。

「ああ。仕事だな」

男の端正な顔は表情を変えた。

## 1・隠された街デイラ 4

「結局、二十イルとられたよ。ちえつ、残つたら母さんに何か買おうと思つたのに」

シンカは薄暗くなりかけた城壁沿いを、デイラに戻ろうとしていた。言葉とは裏腹に、その顔は嬉しさが隠せない。

俺に会いに来てくれたのかな。

でも、それなら、コンイラ烟なんか関係ないよな。

「またすぐ、会えるわ」そう言つてくれた。

シンカは夕日の影になりつつある城壁に、とんとんと調子よく登つた。ふとレクトと並んで座つた瞬間を思い出す。

緩やかな夕方の涼しい風が、いつもなら頬に当たるはずだった。煙が林の向こうに見える。

「！？なんだ、よ…」

空が赤い。炎を背にし、林は黒いやせたシルエットを見せる。向こう、コンイラの煙は一面炎に包まれていた。

鼻腔をくすぐるしつとりとした香り。覚えがある。コンイラが焼けているのだ。コンイラを燻すと独特の甘い匂いがする。その煙はコンイラの成分を含んで、直接神経に影響するために、吸引すると酔つたようになつてしまつ。一種の麻薬だ。

「まさか、あいつら、何したんだ！」

煙を囲う石垣はすでに真っ黒になつていて。門を護る警備兵が二人、倒れていた。

「…死んでる」

レクトたち、なのか。

俺が案内したから、だからこんなことになつたのか？

コンイラはこの国の人々には大切なものだ。それをこんな。

シンカはじりじりと熱に火照る類を両手でぱんぱんと叩くと、一つ息を吐き駆け出した。畠の中、まだレクトたちはいるかもしれない。いつもなら、黒い布に覆われた日陰で、一面にコンイラの緑の葉が広がっているはずだった。

水と植物。

そんな風に燃えるはずのないそれがまるで石炭のようにゴウゴウと眩しい炎を上げ、シートを溶かし巻き上がる気流にねじれたような煙が白く、黒く立ち昇る。

その前に男が立っていた。

レクトだ。

氣付いたのかゆっくりと振り向いた。  
炎に照らされた笑顔はぞつとさせた。

「おっさんー何したんだ！」

「おや、ついてるな。探す手間が省けた」

シンカは一步下がった。

「なに、してるんだよ！」

その間にも、先ほどの男たちが炎を吐き出す大きな銃で、畠を焼き払っている。青い炎がコンイラをなめると、あつという間に白い灰になる。コンイラを育てるための栄養の入った液体のパイプが焼けただれ、パイプに沿つて炎が走る。

焼け落ちた黒い保護布が赤い炎に包まれてぼとぼと腐つたリンク

のよつに落ちていぐ。

男たちは顔にマスクのようなものをしていた。

甘つたるコンイラの匂いと、炎の熱が胸を苦しめる。

見たことがなかつた。そんな武器も、マスクも、彼らの黒い服装も。こんな、炎の海も。

「や、やめり！」

止めなきや、やつと思考が動いてシンカは叫んだ。

男の一人に飛び掛かうとするシンカの腕をレクトにつかまれた。

「離せよ！ 大切だつて言つただろ！」

「シンカ、君は連れて行くよ。ロスタネスには話がついている」「なんで、母さんもこのこと知つてるんだ！？ あんた、何なんだよ！」

振りほどけとした瞬間にレクトの圧倒的な腕力を感じて、慌てて膝蹴りを繰り出す。

「おひど」

レクトはにやと笑う。

この男は、こんな時に笑つてゐるのだ。

二歩、後ろに下がると、シンカは田の前の男を睨み付けた。父さんだと思つたのに。ずっと、そう、思つていたのに。なんで、こんなことするんだ。

ジンロが後ろで怒鳴る。

「レクトさん。俺は反対ですよ。余計な荷物背負つことにになりますよ。皆殺しつて命令じゃないですか」

「皆殺し・・・!?」

皆、つて？

気付かなかつた。

シンカは慌てて石壙の外に飛び出した。

遠く畠の炎の向こう、デイラの町も同じ海に飲み込まれていた。夕闇の中、空に火影を落とし町じゅうが炎に包まれている。空に何か大きな黒い影があつて、そこからちかりと光線が延びた。光線が落ちた場所からまた、新たな白い炎が湧き上がる。

「母さん！」

駆け戻るうとするシンカの背後を、ジンロが追つ。

「ジンロ、殺すな！」

「ダメっすよ、レクトさん」

シンカは懸命に坂道を走っていた。家までの近道を、小さな川の石橋を渡るうとする。

乾燥した熱風に喉が焼け付き、痛む。煙なのか視界は白く濁つている。

と、急に視界が回転した。

背中が熱かつた。

石畳に頬がすれ、丸くなつた自分の背後に男を見た。

ジンロと呼ばれていた男だ。

けふ、とむせ、体が動かないことを悟つた。

シンカはぼやける視界で、デイラの最後をまぶたに焼き付けた。

背中がじわりと疼いた。

赤い夕日だった。「お父さん」は俺の隣にいた。  
にかつと男前の笑顔。

俺、変な夢見たよ。父さんがさ、変な男たちと町を焼き払うんだ。  
そんなのあるわけない。

な、母さんもそう思うよな。

それともあの変な武器とか空を飛んでいた機械。あれは母さんが教えてくれた、遠い俺の知らない世界のものなのか。

「お父さん」は言った。

「お前を連れて行く。ロスタンスとは話がついているんだ」

母さんと、話…？

「つ…」

ぴくりと意思とは関係なく腕が震えた。

「痛い」

シンカは目を開いた。

そんなのあるわけない。

視界にはくすぶつた白い煙が漂つ。コソイカの匂い。幻覚でも見ているのか。

体を起こし、頭を振つてみる。

背中が痛んだ。

でも、きっと大丈夫。痛いだけだ。だって、ちゃんと手も動くし、息もしている。大丈夫だ。

しばらくそのまま、じっとしていた。

辺りは闇だ。

なんの音もない。熱くも寒くもない。星が、見えるはずなのに。空は真っ暗だった。

「街は！」

唐突に思い出した。

焼かれた町はどうなったんだ。

街のあるはずの方角を見つめるが、所々にぼんやりと炎の明かりが見えるだけで、灯りも何も見えない。どれくらい時間が経ったのかどうなっているんだろう。

シンカはゆっくりと歩き出した。

「母さん！母さん？」

橋から一番近いところにあつた酒屋さんの家はない。いや、その横も。暗がりにぽつかりと穴が開いたように、なにもない。

瓦礫となつた壁と燃えた屋根や崩れた石垣。シンカは、炎が残つて

いる木の切れ端を灯り代わりに、町の中心部に向かつた。

領主の家の横、小さいけど新しかつた俺の家。白い壁が目印で、オレンジの屋根が太陽に映えて。

その場所には何もなかつた。崩れた白い壁と灰にまみれた木材の形をした残骸。

「母さん！母さん？！」

返事はない。

「……か

かすかに小さな声。隣の領主の家は頑丈な石造りだった。大ぶりの石垣がそのままの形で倒れ、井戸との間に隙間があった。声はそこからのようだ。

「母さん？」

「……助けて。シンカ」

「ミンク！」

そっと手を入れてみる。暗闇で触れる髪。耳、首。鼓動がある。このまま引き出していくものだろうか。

「ミンク、どこが痛い？ 動かせないとこはあるか？」

「シンカ、足が、挟まつていて。動けないよ」

あれから一時間は経過している。意識が今もはつきりしているということは重大な怪我ではないと判断していい。松明を近くの瓦礫に差し、石をどけるため、長い柱を持つてくる。てこの原理で瓦礫を浮き上がらせ、そのすきにミンクの襟首をつかんで引っ張つてみる。何とか、引き出せた。

とにかく、どこか明ることひるで手当しないと。

シンカはミンクを背負い、まだ、火の勢いのあるあたりに移動する。

「ミンク、何があつたんだ？ 母さんは？ 他のみんなは？」

「わかんない。ロスタヌスさんの悲鳴が聞こえたから尋ねようとしたら、何かが頭の上から落ちてきて、後はもうよくわかんない」

ミンクの声はだんだん涙声になる。そのうす、くすんと鼻をすすぐた。

「…そつか。でもよかつた。お前が無事で」  
ミンクの足の傷に裂いた服を巻きつけながら、自分の手も少し震え  
ていることに気づく。

「シンカは、大丈夫なの？」

ミンクの問いに、精一杯笑つて答える。

「ああ。大丈夫。俺、街の外に行つてたんだ」

「街の外！？だつてそれ、禁じられてるのに」

「……ん、まあ」

禁じられているのに、俺は外に出て、レクトたちを案内した。  
俺のせいなのか。

シンカは黙り込んだ。

レクトは、「ロスタヌスとは話がついている」って言つていた。町  
を焼き払う前に、母さんに会つたんだ。どういうことなんだ。なん  
で母さんに会いに行つたんだ。

父さんだから？

小さく首を横に振つた。

父さんなら、本当に父さんなら町を焼き払うなんてしない。皆殺し。  
ジンロと呼ばれた男の声がよみがえる。もしかしたら、俺が畑につ  
いた時にはもう、母さんは……。

震える手を強く握り締めた。シンカの肩に乗せた、ミンクの手も震  
えていた。

横に座り、肩を抱いた。

取り乱す気力もなく、二人はそこで夜を明かした。

背にした瓦礫をつたう朝露のしんみりした冷たさで目がさめる。傍らのミンクはまだ眠っていた。

怪我は大丈夫なようだ。医者に診せたいが、それにはまず隣町まで行かなくてはならない。

「こんな大惨事が起こったのに、国の軍隊は何しているんだ」

小さくつぶやくと、シンカは立ち上がって周囲を見渡した。

朝もやに包まれた瓦礫は日に蒼い影を作り、形容し難い無残な形をしている。まだどこかに生存者がいるかも知れない。じっと耳を澄ましてみる。目を凝らしてみる。

静かだった。何の、物音もしない。朝は、駆け回る子供たちの声、犬のほえる声、工場の動き出す蒸氣の音、母さんが、起こしてくれる。

母さんのやせしこ声。

何もない。何もかもなくなっている。

頬をぬぐつた。

一度と、会えない。

隣のおじさんやおばさん、仲間たち。ふざけあつてよく遊んだ。喧嘩した。友達だった。

いつの間に起きたのか、ミンクの細い手が、ぎゅっとシンカの手をつかむ。

「泣かないで」

ミンクも泣いていた。

「…俺たち、だけかも」

ミンクの大きな目から涙が伝づ。シンカはぎゅっと抱きしめた。

陽が高く昇る頃、シンカたちは泥だらけになつて立ち尽くしていた。母、ロスターの遺体を埋葬し、となりにミンクの両親の墓も作つた。その作業の間中、ミンクは泣いていた。

街はひどい状態だった。壊されたというより、ものすごい熱さの何かに溶かされたようにあちこちに深い穴が開いていて、どの遺体も無残だった。

とても、他の人たちの分も埋葬する気力はなかつた。

街の中心を流れていった川は黒くにごり、どの井戸も使えなかつた。

ここにはいられない。

シンカはそう判断した。

「な、ミンク。俺、聖都に行こうと思つんだ」

両親の墓の前で座り込んでいるミンクに、シンカは声をかける。

「どうして？」

泣きじやくつた後の、鼻にかかる声がシンカの涙をせそつ。

「ここにいても水も食料もないし。それにこの事件のこと、聖帝に知らせねばならぬべきだと思うんだ。聖帝に訴えて犯人を捕まえてもらつんだ」

「でも、遠いよ。行つたことないし」

シンカが肩に手を置くとミンクは大きな赤い目で見上げた。

「ここに、一人で残るか？」

また、ミンクの頬に涙がこぼれる。

「やだ」

「じゃ、行こう。大丈夫。俺がついてる。護るからさ」

# 1・隠された街デイラ 6

シンカは、もうく崩れた城壁を越え、ミンクとともに港町へ向かった。

この国、聖帝國ファシオンの首都である、聖都シオンへは、確かに船があつたはずだ。

子供の頃から、アストロードで遊んでいたシンカには、船乗りの友達もいた。

夕方。ミンクが少し嫌がつたけど、酒場の知り合いを訪ねた。

「どうしたの？シンカ、ひどい有様じゃない」

客は誰もない。

この時間は、漁師はもう眠りについていた。だから、酒場も片付けに入っている。

立て付けの悪い扉を、音を立てて入っていくと、カウンターの中で洗い上げをしていたのだろう、

ユーン姉さんが声をかけた。

「うん。ちょっとね」

「なあに？また、喧嘩でもしたの？その子は戦利品なの？」

そう言いながら、シンカを手招きして、自分の部屋に連れて行つてくれた。

「あの、誰？」

ミンクが緊張した面持ちでシンカの袖を引っ張る。

その声は弱弱しい。疲れているし、つらいことがあったのだ。ちょっとしたことでも、泣き出しそうだ。

シンカは、できるだけやさしく笑つて、ミンクの肩を抱いた。

「大丈夫。友達なんだ。でも、デイラのことは知らないから、言つちゃダメだぞ」

「……」

ミンクは黙つてうなずいた。

「「めんね、ちらかつてるけど」

「そんなのいつもの」とじやん」

慣れた様子で入つていくシンカに、ユーン姉さんは笑つた。

「あんたに言つてないの。その子に言つてるんだよ。まったく、女の子泣かすんじゃないわよ」

ぬらした布を一人分渡してくれながら、酒に焼けた声の姉さんがシンカの頭をこつんとつついた。

「ほら、これ、ちょっと大きいけど。その埃だらけの服、なんとかしなさいよ」

ユーン姉さんの手に、ぽんと肩を叩かれて、ミンクが一瞬泣き出しがけた。

「あ、なあに、どうしたの？大丈夫？」

少女の大きな瞳を覗き込む。

その、日に焼けた女性の心配そうな笑みに、ミンクはうなずいた。大きな瞳をぎゅっと閉じて。

「あの、姉さん、ミンクは」

服を勝手に着替えたシンカは、ミンクの肩に手を置いた。

それをぴしゃりと叩いて、ユーン姉さんはにらんだ。

「シンカ、この子に何したのー。」

「え、違うよ」

「いいから、あんたは向こうに行つてなさいー。」

シンカの肩を押して、部屋から追つ出されたある女性の服を、ミンクが引つ張った。

「あの、私、シンカのそばにいたいの」

ミンクの赤い大きな瞳に、コーン姉さんの勢いがそがれた。

「あ、そう。」

「「めん、ちょっと訳ありでさ。俺、この子連れてシオンに行くんだ」

着替え始めるミンクに背を向けて、シンカは言った。

「なあに、遠いじゃない」

木の小さな椅子に座つて、シンカは小さくため息をついた。  
隣で、姉さんはテーブルに肘をついている。

「でも、行かなきや行けないんだ」

「話してくれないわけ？」

「男にはそういうときがあるんだ」

ブツと吹き出して、コーン姉さんは少年の金髪をなでる。  
「誰かさんみたいなこと言うんじゃないわよ」

それは、コーン姉さんを置いていった、船乗りのことを見つけていた。  
シンカも、彼とはしばらく会つていなかつた。

頼りになる親友だつた。

コーン姉さんが寂しげな顔をして、窓の外を見つめた。

明日もいい天気なのだろう。嫌になるくらい夕焼けが赤い。

「大丈夫、すぐに、帰つてくるよ」

「誰のこと言つてるの？シンカ、あんたは約束を守る子だわ。あの  
人とは違つ」

「うん」

「お金、あるの？」

「……大丈夫。俺、何だつてできる」

コーン姉さんは、少年を見つめ、次にミンクをちらりと眺める。

「上の部屋、あの人部屋が空いてるから今夜はそこにとまって行

きなさい」

「ありがと」

酒場の一階は、宿になつてゐる。

辺境の港では、そんなに泊り客はない。たまに、大きな商業船が停泊すると、

その乗組員が何人か泊まる。

年上の、ユーン姉さんの恋人もそんな一人だった。

シンカもよく、遊びに来た部屋だ。

「ユーン姉さんはね」

シンカは黙つたままのミンクに、話しかける。

「俺が初めて、この酒場に来たときこ、『飯食べさせてくれたんだ』

「……」

黙つて、ミンクはスープをすすつた。

「なんか酒場の雰囲気が好きでさ。俺、ずっと通つてたんだ。もう十年くらいになる」

不思議そうに見つめるミンクに、シンカは話を止めた。

ミンクの赤い大きな目はまだ少し腫れていて、それを見るたびシンカの心も痛む。

「シンカ、強いね」

ポツリと言つた少女の言葉に、シンカは笑つた。

「そりゃ。俺、逞しいんだー! ミンクは『テイラから出た』ことないけど、俺、あちこち行つたことがあるからな。さすがに、シオンまでは行つたことないけど」

「……」

笑顔にならないミンクに、シンカはまた微笑んでみせる。

「大丈夫。俺に任せておけよ」

翌日、ユーン姉さんの紹介でシンカたちはアストロードから聖都シオンのあるラシア州の港町キャストウェイまで行く船に乗せてもらつた。

アストロードからは、その港町が一番シオンに近い。船にはじめて乗るミンクは、片道3時間の船旅に、すっかり参つてしまつていた。

船酔いで、もともと白い顔はさらに青ざめている。

シンカはミンクに付き添つて、ずっと、甲板で風に当たつていた。

「じめんね、シンカ。私、みつともない。」

また泣き出しそうになるミンクに、シンカは笑つ。

「そういうところが、かわいいんだから、いいんだ。」

半分、照れながら言つたのに、ミンクは聞き流す。

ミンクはデイラでも、一、二を争うくらい可愛い女の子だ。小さい頃から、みんなに

可愛いつて言われているから、俺が一言言つたくらいじゃ、ぜんぜん気にならない。

ずっとそばについて、幼馴染で。たぶん、俺が一番の仲良し、だと思つたんだ。

でも、誰にでもやさしいから、ミンクが俺のこと特別つて思つてゐるかは分からない。

誕生日のプレゼント、奮発したのも、ちよつとがんばつてゐただつてとこ、見せたかったんだ。

シンカは、渡せずにずっと持つていたそれを思い出した。

シンカはミンクの銀色の長い髪が風でふわふわ頬に当たるのを感じた。

くすぐったくて、髪を手で束ねる。

白こうじなじが見えて、少しどきつとした。

十七歳という年齢にしてはかなり経験をつんでいるつもりなのに、俺、ミンクに対してはぜんぜん駄目だ。

目をそらしてうなじを隠すように肩に腕を回した。

これから、ミンクをシオンへ連れて行く。

聖帝が保護してくれるはずだ。

デイラの住民は、この国にとつて特別なんだ。

普通の人は、デイラの存在自体知らないけど、聖帝はデイラを大切にしていた。

デイラの住民だけが、ユンイラの栽培方法を知っていたし、精製する技術を持っている。

この国にとって、重要なんだ。

少し熱っぽいミンクに、そつと自分の上着をかけた。

聖都シオンのあるラシア州、その玄関口港町キャストウェイは活気があった。

デイラと小さな港町しか知らなかつた二人が見たことのないような大きな蒸気船が並んで少しづつ違うタイミングで揺れる。

船員が何かの合図で振る白い旗が青空に眩しい。

汽笛が昼夜下がりの町に響き渡るたび、ミンクはびくりと震えた。そのたびにつないでいる手に力を込めてシンカは大丈夫だよ、と笑う。恥ずかしそうに口を尖らせるミンクの子どもっぽい仕草が好きで、からかつてばかりいた小さい頃を思い起こす。

でも今は、俺が支えてあげなきゃいけないんだ。

「あれが、蒸気船なんだね、大きいんだね。私、初めてのことだらけでなんだか怖い」

シンカの服のすそを片時も離さずに、ミンクが愚痴をもらす。生まれて初めてデイラから出たのだ。無理もない。

「大丈夫だよ。俺がいるし。俺も初めてのことだけだ、言葉が通じないわけじゃないだろ」

シンカは新しい空気を吸い込もうとするかのよう、腕を伸ばして大きくのびをする。

背の低いミンクは、それをまぶしそうに見上げた。

金色の少しきせのあるシンカの髪が、潮風にゆれる。

背中の剣が、昼の陽光をちらりと弾く。

「ほら、大きな鳥だ。たくさんいるな。何ていうのかな。魚とつてるぞ！すごいな」

元気付けようとするとシンカの言葉も、今日は上手く行かないようだ。

「シンカはやつぱり特別ね。私たちと違う。シンカは強いよ」「特別って？」

特別な男の子という意味なら大歓迎だけれど。

「だつて、たくましいというか、平氣というか。無邪氣というか、能天氣というか」

並べる言葉が増えるにつれ不機嫌さを増す少女にシンカは肩をすくめる。

「惚れ直した？」

ミンクは真剣ににらんだ。

「もうっ！そういうことじやなくて！－！」

「なんかお腹すいたな！－あっちのほう行つてみようぜ、焼肉の匂いがする！」

強引に手を引くシンカに、引きずられながら、ミンクは見慣れない町並みを見上げる。

三階もある共同住宅が並ぶ。波止場にはレンガ造りの倉庫。倉庫の裏通りはどうやらテントが並ぶ市場だ。そこからあぶつた肉の匂いがしているのはシンカの言うとおりだった。

鳥の丸焼きが軒に吊られ、それをぞぎとつて香ばしいタレにつける。それをスライスしたパンにはさんだ食べ物を一人分買つと、食べながら歩いた。

「ミンク、宿についたら、ゆっくり休めよ。俺は漁師の手伝いして朝戻るよ。ごめんな、そばにいれらなくて」

「いいよ。私一人で出歩くなんてできないし」

少女が小さく肩の力を抜いたのに気付く。

慣れない旅は、両親をなくしたばかりのミンクには少し酷なのかもしない。気が晴れるようにと思い悩んでも、今は仕方ないと考えた末の行動だつた。ミンクは一人になりたいのかもしない。

シンカは街を出て以来、泣いても笑つてもいらないミンクの様子が気になっていた。

宿屋なら部屋にいれば怖いことはない。

宿にミンクをひとり残し、漁師たちが待つ港へと歩く。夜の街の様子はアストロードに似ている。酒場から喧嘩しながら飛び出す男たち。そろそろ漁の準備にと人の流れは船に向かう。

見送る家族がいて、漁師たちは夜の海に出る。

温かい陸からの風に背をあおられながらシンカはデイラが失つてしまつたものを改めて思い知る。

求人の看板の前、集つてきた男たちに仕事を割り振つていた男がシンカを見つけるとすぐに目をそらす。シンカの後ろに並ぶ男に声をかける。

「なんだよ、無視するなよ。俺も働きたいんだ」

「んあ？お前がか？おい、聞いたか？」

男は抜けた前歯でしーしーと息を漏らしながら笑つた。周囲の男たちも笑う。

「子ども扱いすんなよ」

「ああ～じゃあ、お前はこれだ。一晩で3ヘル

「は？」

「安いとか文句言うなよ？お前がなにができるってんだ？ここに来る奴らはな、みんな外洋を経験した立派な船乗りばかりなんだぜ。お前、まともに帆もはれないだろうが」

文句は言えなかつた。男の差し出す紙切れに書かれた内容は、小さな漁船の手伝いだ。賃金が少なくとも、釣つた魚をもらつたりはできるかもしれない。

ミンクの宿代で、ぎりぎりだらう。

デイラから持つてこられた金はわずか。あの時、レクトがくれた金貨の残りが救つてくれていた。気に入らぬことに。

汽笛の音が不意に響いて、窓の木枠がミシと軋んだ。

「ん、まぶし……」

朝の日差しを直接肌に受けて、ミンクは日を覚ます。窓辺の鳩がばたばたと慌てて飛び立つていった。

「あ、そうか。港町の宿屋だった」

独り言と一緒に起きると簡単な木のベッドがきしむ。シンカはまだ戻っていないようだった。もともとこの部屋にはベッドは一つしかない。シンカは宿で休むつもりがないのだろう。

そういう優しさは少しばかり胸が痛むが、結局何も出来ないのだからミンクはただ黙つて言つとおりに従つた。

ミンクは部屋の壁にかけられている鏡にむかつ。そこに映るのは少し歪んだ青白い顔。自慢の銀色の髪もくしゃくしゃだ。赤い瞳はまだ少し涙の後がある。

「まぶたがちょっとはれてる。やだな。かわいくない」

ミンクは髪を整え顔を洗う。港でシンカが貰つてくれた香油を少し、首につけてみる。

白い花のいい香りがした。

ブルルッ。馬の声とともに馬車の止まる音。宿屋の前に止まつたようだ。一階の部屋からミンクがのぞくと、金髪の少年が馬車から降りてくるところだ。

「ミンク！」

「はあーー」

返事をしながらもう一度鏡を見て、にっこり笑つてみる。

昨夜一人きりでたつぱり泣いた。だから、今日はもう泣かない。シンカのお荷物にはならないんだから、そう鏡の自分に言い聞かせる。

## 2・強盗もひき

シンカが乗っていた馬車は、隣の町ラツールに向かう商人のものだつた。漁師の手伝いで得た駄賃で宿の支払いを済ませるとシンカは自慢げにミンクに説明した。

小さな漁船で、大きな魚を釣り損ねたのだと。

それは幸運を呼ぶといわれる蒼い魚。それを惜しくも逃したけれど漁師はかかつたことで大喜びしたという。

しかもその後には面白いように大物を釣り上げ、予想以上の駄賃をもらつた。

すっかりシンカを気に入つた漁師が商人を紹介してくれた。

魚の卸業者だつた。これから獲れたての魚を、ラツールという街まで運ぶらしい。その手伝いをする代わりに乗せて行つてもらつことになつたのだ。

「ふうん、シンカはたくましいね」

ミンクは馬車の中自分の膝をぎゅっと抱きしめて座る。時折、揺れで倒れそうになるのを支えたいと思つシンカと平氣だよと口を尖らす少女。

どうにも、ちぐはぐだ。

「なに、淋しかつた？」

「平氣つてば、暑いからもう少し離れてて」

「ちえー」

それでも、少しだけ顔色の良くなつた少女にシンカはホッとしていた。

ミンクはその笑顔から視線をそらした。

キャストウェイからラツールまでの道のりは、荒地を横切る。

乾燥した空氣と照りつける日差し。それは灰色の勝った岩の海を容赦なく焼く。まばらに細い影を従える木々は、そよとも吹かない風を待ちわびるようひつそりと景色に溶け込み。それと氣付くには数を数えようといつシンカの子どもっぽい提案がなければ不可能だった。

それも数えられてしまつぽい。

淋しい荒地には、強盗がよく出るといわれていた。

魚を運ぶ馬車は、全部で四台。

「まあ、魚は普通襲われないんだ」

魚屋の若旦那さんは穏やかに笑う。お人好しらしく優しい弧を描く眉が細い田に似合う。

日差しは畠に向かつてさらりと強く熱く照り付けた。

一番後ろの馬車に乗つて魚と一緒に揺られながら、『ティラ』ではこんなに暑いことはなかつたとシンカが笑う。

魚の匂いに少々『機嫌斜めな』ミンクは取り合わない。

「なんだ、不機嫌だな。せつか珍しい経験してゐるのに、楽しまなきや損だろ」「……魚と一緒になつて蒸されてるのつて、樂しくな」と思つよ

「そりかな?ほら、この魚、焼くと美味しいんだつてさ。あ、そうだ、こいつセコの日向で焼いてみる?鉄のところならかなり熱いし」

「やだ」

つれないミンクにもシンカは笑つてゐる。

ふいに馬車が止まつた。

「なんだろ、なあ、何かあつたの?休憩?」

シンカは荷物との間の布の仕切りをはらりと開いて、御者台の男に

話し掛ける。

「さあ、休憩にはまだ早いだろ。前が止まつたから止まつたんだ  
ぼんやりした男が答える。

ミンクを振り返るシンカ。

「なあに？」

ミンクは本格的に機嫌が悪い。

「ちょっと、見て来るよ」

シンカはそつと馬車を降りる。

本当は少し前から、走つてもいいから全部の馬車をのぞいてみた  
くなつていたシンカは、これ幸いと前に止まる馬車を見物しながら  
歩き出す。

見たこともない珍魚に出会つたら、ミンクにも見せてやひつと画策  
しながら。

「ここに置けよ」

黒髪の背の高い男が、にやりと笑つて言つた。

馬車の列の先頭だ。

男が握り締める剣は熱を帯び、若旦那の喉もとに押し当へられて  
いた。額に伝う汗が目に入り、何度も瞬きすると若旦那はじくじくと睡  
を飲み込んだ。

「そこの金貨の袋、全部だぜ」

男の指示で従者が金貨の袋を置くとしていた。

「おっさん」

シンカはひらりと従者と男の間に立つた。

「なんだお前。動くなよ。こいつがどうなるか

男は黒い瞳を細めて、金髪の少年を見つめる。シンカの背には長剣がある。腕を組んでシンカは面白そうに笑った。

「おっさん、見たところ軍隊とかにいたる。すげえ強そうだもんな緊張感はない。」

「し、シンカ君ー無茶なことしたら駄目だー若旦那が」

従者が小声でたしなめる。

そんなこと関係ないといわんばかりに、組んでいた腕をそのまま頭の後ろに持っていくと、シンカは黒髪の強盗に言った。

「俺さ、その人に世話になつたんだ。恩人が危険な目にあつているのに何にもしないって、男として良くないと思つんだ」

「ふん、で、お前に何が出来る?」

強盗はにたりと笑う。黒い長い髪を腰まで伸ばした威丈夫で、鍛え上げられた日に焼けた手足がその強さを物語る。

「俺と勝負してよ。俺が勝つたらその金貨、半分残してほしいんだ」

「お前が負けたらどうするよ」

「おっさん、強盗の手伝いするよ」

男が吹き出す。都合のいい選択だ。

「な、おっさん、どうにしろ悪くない条件だろ?」

「変なやつだな。いいだろう。けどな、お前が負けたときには、お前は死んでるわけだ。一体どうやって手伝つてんだ?」

「やつてみなきや分からないよ」

肩の剣を抜いて構える。つかんでいた人質を突き飛ばし、男も構える。

遠巻きに一人を見ていた従者が慌てて若旦那を招き入れた。

じりと照りつける太陽に熱を帯びた剣。息を潜め動くものがない中、反射光だけがかすかに揺れた。

男の剣のほうがシンカのそれより少し短い。

軍人用の武器なのだろう、湾曲した刃の根元に返しがついている。剣先を見てはいけない。眩しい光に視界が奪われる。と、測つたように同時に二人の刃が硬い音を立ててぶつかる。

「ふん」

男はぐ、と間合いを詰めるが思った以上の手」たえに一步下がる。少年も少しばやれるのだと男は悟る。嬉しそうに唇を舐めた。体格差も腕力の差も歴然としているが、シンカには恐れはない。二人の間には二つの刃。かすかな火花を散らして切り結び、また間を保つ。

数度目の接近の早い段階で男は力の差を利用しようとした。

ぐ、と力任せにシンカを突き飛ばす。

シンカは後ろに転びかけ、男は剣を振り上げる。

かがんだシンカはその手首をつかんで、引き寄せつつ男の足を横から切りつけた。

寸前で転がってよける男。

立ち上がりて低く構えるシンカ。

ぶる、と馬が鼻を鳴らしたタイミングで、「し、シンカ君がんばれ」と若旦那が声援を送る。じろりとシキに睨まれ、首をすくめて再び従者とともに馬の後ろに隠れた。

「若旦那、駄目ですよ、そんな従者がいたらむ。

シンカの突きにぐんと身をかがめ、男は左拳をシンカの腹へ。

鋭いパンチの勢いを少しでも軽減しようと後ろに下がったシンカにさらに剣を振りかざす。

「う」

シンカの表情がちらりと変わる。足元の石ころ。

思わず伏兵にシンカはしりもちをついた。

横たわつたまま、両手で剣を持ち、鋭い斬撃を受け止めるシンカ。男がにやりとする。男の優勢は確固たるもの。

その瞬間、シンカはつばを男の口に吐きかけた。

「！」

下から男のわき腹にかかとで蹴りを見舞う。それを男が理解したときにはがらんと派手な音を立て男の剣がシンカの蹴りで叩き落された。シンカは男の首に剣を突きつけた。

「勝負、あつたよね」

男は、悔しげにその場に座り込んだ。

「卑怯だぞお前。つば吐くなんてよ」

「教わったんだ」

荒い息を整えながらシンカが笑つて、突きつけた剣を背中の鞄に収めた。

「約束だよ。金貨の半分は置いていてくれよ」

「捕まえないのか？」

座り込んで、強盗は両手を広げて見せた。

男の言葉に誘われたて従者が前に出ようとすると、シンカが止めた。

「危ないよ。素手じゃ、かなわないよ」

少年は笑つて男に向き直る。

「おっさん、約束だからな。捕まえないけど、もう襲つたりしないでほしいんだ」

「お前何者だ？」

従者が近寄つたらまた、人質にしてやろうと考えていた男は当てが外れた。

この子供、まだ十六、七歳か。腕は立つし、何より勘がいい。

「俺はシンカ。ただの子供だ。でもおっさん、ただの子供に負けたことを逆恨みしてみつともない悪さしたりしないよね。大人なんだからさ」

むすっとして言葉を失う男。

につこり笑う子供の思う壺にはまっている。わかっているのだが、子供相手に卑怯な真似して、後味の悪いこともしたくない。ちょうど、資金を調達しようと思つただけだ。面倒臭くなつた。

「金もいらん。もういい、行けよ」

金貨の袋を投げ捨てるど、男は座つたまま背を向けた。

「じゃ、行きましょう。若旦那」

シンカはにつこり笑つて、先頭の馬車の馬を歩かせる。脇を歩きながら、御者台の若旦那に話し掛けた。

「すみません。少し、危ない思いさせちゃつて」

「いや、君のおかげで助かつたよ」

汗をフキフキ、笑う若旦那。田の細い従者は忌々しそうに睨みつける。

「でも、よくあの男が君の言つことを聞いてくれると分かつたね。」

「たまたまですよ、若旦那様。間違つたら若旦那の命が危なかつたんだ、誓めすぎですよ」

従者がさらににらむ。

「軍隊崩れだと思うんです。でも、軍神の護符を首に下げているような人は、まだ軍人として、男としての誇りがあるんですよ。軍人は人を傷つけることにためらいはないけど、誇りを傷つけられることには耐えられないから」

子供の頃から城壁を守る軍人たちをからかって遊んだ。剣術も彼らに習つた。気のいい、でもちょっと威張つた人たちだつた。

父親がいなかつた分、年上の男にあこがれていた。

だから、そういう手合いには慣れていた。

感心する若旦那を横目にシンカは歩みを止め、ミンクの居る最後尾の馬車を待ち合流する。

「大丈夫か？」

「うん。何かあつたの？」

ひざを抱えて座つたまま、シンカを見上げるミンクの赤い瞳。馬車が止まつている間に飲み物をもらつたらしい、少し顔色が良くなつていた。

「別になんにも」

小さい頃ミンクは俺について歩いた。俺が警備兵と遊んでいると、いつも不機嫌になつた。

ちょうど、今みたいに。

あの頃のデイラの生活はもう戻らない。残つているのは、この子ど、思い出だけなんだな。

シンカはミンクの隣に座ると、小さくため息をついた。

「ねえ、シンカ。馬車の後ろ。あそこ。大きな男の人人がついてくるみたい」

振り返ると砂埃の先に、徒步でついてくるあの強盗の男。ゆっくり進む商隊にあわせるよつについてくる。

シンカはひざと首をかしげた。

「どこ？俺には見えないよ。そついえば、この辺さ、死んだ戦士の亡靈が出るんだ。眼が会つと追いかけてくるつて！」

「えつ…うそ…！」

法えるミンクに笑い出す。

守らなきやな。この子を。

そして、あの男を絶対許さない。

レクト。母セミもミンクの両親も、みんなを殺したんだ。

作り話の報酬にミンクを抱きしめながら、シンカはそつと拳を握り締めた。

『シンカ、お前は連れて行く』レクトはそう言った。  
なんでだろ？

答えのない疑問が、ちくつと刺される。

## 2・強盗もむか 3

ラツールは商人の町。港から運ばれたたくさんの品々が、街道が集中するこの町に集まり、ここから各地へ売られていく。魚屋の若旦那と別れ、二人はにぎやかな市場を見に行くことにした。

ミンクはあまり気が乗らないようだった。

「でも、ほら、見たことないだろ？　こいつのつって」

「別に、興味ないもの」

「ええと、じゃあ。お腹すかないか？　ほら、いい匂いするだろ？」

香ばしい魚を焼く匂いがしている。近くに料理屋があるのだ。

「別に……」

「だめ！　お腹すいたから俺、来いよ。な？」

料理屋まで歩いてみると、どうやらそこは魚しか売っていない。

ミンクが顔をしかめたので、じゃあ、肉を売っているところを探そうとまた一人は歩き出す。

店先のきれいな石や見たことのない花、動物や町並みに、少しでもミンクが喜んでくれたら。

元気を取り戻してくれたら。そしたら、俺は少し安心できる。そう願えば願うほどシンカは二口二口と笑い、逆にミンクは元気をなくしていくようだった。

店先できれいな花をサービスで髪につけてもらつても、小さなサルがかわいく首をかしげてミンクの手に乗るつとしても。笑わない。

市場の通りを一つ過ぎたところで、ミンクが言った。

「私、疲れちゃった」

確かに長く馬車に揺られていたし、この町は気温が高いから、体の弱

「ミンクにはつらいのだろ？」「

「やうか。じゃ、宿に行こう」

「どうしておひの？」

「セツヤ、若田那に聞いた。一、三軒あるからどうが空いていると思つよ」

宿の方向を目指しながら、シンカは微笑んだ。

「私、一人の部屋がいいな」

「ああ。分かつてよ」まあ、当然か。と落ち込みつつも、シンカはあと少しがんばってみることにした。

「あ、そうだ。ミンク、これ。忘れてた。」

シンカは荷物の中からあの首飾りを出した。一瞬レクトの顔を思い出すが、シンカは頭を小さく振つて残像を追い払う。あこつは関係ない、これでミンクが喜んでくれるなら。

「なあに？」

いつもなら、「わーきれい！」とか言つのだけ。

それでも、それを手にとつて見つめるミンクの顔は、嬉しそうでもあつた。

「ほら、誕生日、過ぎちゃつたけど」

「そうか。そうだったね。ありがと」

やつと、笑つた。

ミンクの笑顔に無理がない」と安心し、首にかけてやる。

思つた以上に似合つていた。

よかつた。

本当によかつた。

シンカは少しばかり水っぽくなつた瞳で少女を見つめている。

「シンカ？」

「あ、なんでもないよ、埃っぽいな、目に入った  
月並みながら、笑つてみせる。

人ごみの中立ち止まる一人。周囲は子ども一人に興味などなく、そ  
れぞれの方向へ進んでいく。

これだけ遠い町まできたのに、俺たちの気持ちは未だに動けずにい  
る。あのときのデイラに、あの惨劇の跡地に留まっているかのよう  
だ。

それでも、ミンクが笑つてくれれば、少しだけ、時間が経つたのだと  
感じられた。俺の行動は、間違つてない。

「おい」

振り向くと雑踏の中、あの強盗の男が立つていた。

「おっさん…まだついてきてたの？」

「亡靈！」

ミンクが慌ててシンカの背に隠れた。

「なんだよ、亡靈って」

男は怪訝な顔で眉をひそめ、ミンクを睨んだ。

シンカは笑いをこらえながらも、肩にしがみつくミンクの手を感じ  
て嬉しくなる。護つていると実感できる。

それはシンカを強くする。

素早く男を觀察し、腰の剣にも男の構えにも戦意を表すものはない  
ことを知る。

「何か用？」

「お前ら、口どモだけでじ行くつもりなんだ？ 家出じやないだろ  
うな」

シンカとミンクは顔を見合せた。

「おっさんは家出なの？」

「まじめに答える」

シンカは肩をすくめた。

「俺たち、聖都に向かってる。会いたい人がいるんだ」

デイラのことは、言わないほうがいい。あの時の罪悪感がシンカの口を閉ざす。

あの時、レクトに気を許した。だから、デイラはどうにじる、普通の人々がデイラの存在を知っているはずがなかった。

「俺はシキ。お前らがどうしてもって言つなら、聖都まで連れて行ってやつてもいいだ」

黒髪の男は、白い歯をのぞかせて豪快に笑う。

「は？」

何を言い出すのか、この男は。あきれるシンカの横で、ミンクが言った。

「一緒に来たいならそういうえばいいのに」

素直すぎるミンクの言葉は痛いところをついた。

そうか、ミンクはあの強盗騒ぎを知らなかつたな。

ちらりとミンクと男を見比べて、シンカはうなずいた。

「うん、いいよ。俺はシンカ。この子はミンク。俺たち幼馴染なんだ」

新しい仲間は元は軍人だつたんだと威張つて見せた。どつりで、軍人崩れの強盗もどき。とシンカが笑い、ミンクが強盗の言葉に反応すると、慌ててシキはごまかした。

シキの声はよく通り、豪快に笑うと周囲の注目を集めくらいく立つた。

「いや、お前、変わつたガキだからさ、どんなやつかと思つてさ」

「ガキ呼ばわりはなんだよな！俺もう十七だぞ」

「ガキだらう」

「じゃ、おっさんはいくつなんだよ」

「大人に年を聞くな」

そんな大人気ない会話で、夕食中シンカは久しぶりに大きな声で笑つた。シキと共に取つた宿は市場の外れに立つ小さな宿だつた。良くある形で、一階には食事のできる場所があり、カウンターでは男たちが酒を飲んでいる。煙草の煙とざわめく会話が、シンカにアストロードを思い出させて懐かしさすら感じていた。

「シキ、知つてるんだ？」

「ああ、俺は常連だからな」

「常連だけど、上客つてわけじやなさそうだね」

酒を運んできた女性の肩に手を回そそうとし、叩かれて見送るシキをシンカは面白そうに頬杖の上から眺めている。温かいスープと卵がふわりとしたオムレツにトマトのソース。小さな手の女将さんが元氣な声を出しながら作る料理はシキの言うとおり美味しかった。

小さくため息をついて、ミンクは立ち上がつた。

「あれ、もういいのか？あんまり食べてないじやないか  
シンカが、同時に立ちあがつてミンクの手をとつた。

「ううん。いいの。お腹いっぱいだよ。私、もう寝るね。疲れちゃつた」

シンカの手をするつと払つて、少女は自分の部屋に向かう。

「部屋まで送るよ」

「おい、シンカ」

シキが、呼び止める。

「すぐ戻るよ」

軽くウインクしてシンカは少女を追つて行った。

残された黒髪の男は、ミンクの後姿に目を細めた。

程なくしてシンカが戻つた時には、美味しいと気に入つていた鳥の蜂蜜焼きは綺麗にシキの腹に収まっていた。

「あ！なんだよ、全部食べちゃつたのか？」

「お前が悪い」

悪びれる様子は皆無。美味かつたぜと笑うシキに、シンカはすねた目を向けた。

「お前、酒は飲まないのか？」

すでに、何本か麦酒の空瓶を転がしているシキはシンカの肩に腕を回す。

「あんまり、強くないんだ。飲めないに近い」

「勘定は気にするな。この心やさしきジ Yunca 姉さんがおこつてくれるつてよ」

シキは酒場の女主人に手を振る。女主人はカウンターから笑い返す。

「そこのかわいい坊ちゃんのだけだよ。シキ、あんたにただ酒飲ませてたら、店がつぶれるわよ」

「一杯くらいいいだろ？愛してるからさ」

ワインクで食い下がるシキ。

笑うシンカ。

「ていうか、俺、飲めないって言つてゐるのに」

「お前、このくらいはいけるだろ」

聞こえているのかどうか、シキの頬んだ細いグラスに作られた青い色の飲み物がシンカの前に置かれた。

シンカは苦笑いしながら、ちびちび飲んでみる。

柑橘系のジュースに似ているが、少し苦い味がする。出されたつまみのナッツを食べながら、女たちをからかうシキを見つめる。

シキは、あんまり見たことない肌の色だつた。

日に焼けているからといえば、そうなのがもしそれないと、少し褐色が強い。瞳の黒は、とても深い色で、はつきりした目鼻立ちは凜々しい感じだ。それでいて軽薄なんだから、女にももてるだろう。軍人特有の身のこなしと、歯切れのいい話し方。鍛えられた身体。うん、男ならこんな風になりたいって憧れるタイプだ。強盗やつてたけど、悪い奴じやなさそうだ。シンカは一人満足そうに、再びグラスを口元に持つていく。

俺たちはどう見てもお金ないの分かるだろうし。何が目的なんだろう。

「ほれたか？」

「は？」

逆に見つめられていたことに気付いて、シンカは少し慌てる。

「お前さ、聖都に知り合いがいるつていつてたけど、貴族様かなんかか？」

「なんで？」

「いや、ミンクさ。あの子、普通の子じやないよな。見たことない種族だぞ。かわいいし、な。酒で言ひと最高級のぶどう酒、ロストコステイアみたいな」

「人を酒呼ばわりすんなよ。そんなお酒知らないし

ふざけているようでいて、見ていくところはしつかり見ている。

デイラでは普通だったミンクの姿は、多分この人たちには特別に見

える。銀の髪、色素のない赤い瞳。白い肌。

だけど、デイラを知らないということは、同時にその住民の姿も知らないということになる。

「……貴族じゃないけど、大切な人だよ」

嘘はついてないさ。シンカはかすかな同様も見せまいと笑つて見せた。

本人がいたら恥かしくていえなかつた台詞だろうが。

「あと、お前」

シキが睨む。

「えつ？」

俺は普通だぞ。絶対普通に見えるはずだ。

見透かされるようでシンカは何度も瞬きをする。

「それ、俺の酒だぞ。」

「えつ？どうりで変な味……」

気づくと、シンカは男が飲んでいた濃い酒のグラスを持っていた。

「あれ、やっぱり、俺、だめだ」

酔つたシンカは、今さら、目が回っている事に気付く。

目の前の男がぐるぐると回りだす。その歪んだ顔が少し面白くなつてくすくすと笑い出す。すっかり、そう、酔つ払いが出来上がつている。

「弱いなあ。おい、寝るな！」

「……うるさい寝てないよ」

すっかり立てなくなつていて、不本意ながら担がれて、部屋に運ばれる。シキの背中から眺める床はさらに遠くてぐるぐると回転し続ける。

「最悪……」

「自業自得つて奴だな。情けないな、あれくらいで」

部屋に入るとシキはシンカをベッドに寝かしてくれ、水を飲ませてくれた。

胸につかえたかのような重苦しいものを少しばかり水で押し流し、

シンカは目をつぶつたまま火照る額を押された。

「なんだ、シキ、案外優しいじやん」

「白状しろよ。お前らどこのからきたんだ」

眠くなりかけて、重いまぶたを庇う手をしづしづじけてシンカは男を見上げる。ベッドの脇で、シキが覗き込んでいた。その視線は真剣だ。

「……知らない」

「可愛くねえなあ」

元軍人は黒い前髪をかきあげると、煙草に火をつけた。吸い込んだ煙を宙に一つ吐き出すとしばらく見送り、再びシンカを見る。

「よし。いうなつたらことんついでいってやる。どうせ、行きたいところも、やりたいこともなかつたんだ」

「……暇なんだな、おっさん」

ゴツッ！

軽くシンカを小突くとシキは隣にある自分のベッドで胡坐をかいた。「なんで、知りたいんだよ」

「ふん。家で少年を放つておけないって言う親心さ。久しぶりに首都に行くのも悪くないしな」

シキは笑う。

「親心、ね。……知らないだろ？けど。デイラつていう町から来たんだ」

なんで言いたくなつたのか、シンカにも分からぬ。酔つたから、と自分に言い聞かせる。

「そうか、やはりな」

知らないだろ？と思つていた。だから、適当に西のほうにあるとか小さい街だとかでごまかそうと思つていた。しかし、シキの表情は、それでは済まさない用意があると語つている。

知つてゐる、のだ。『デイラのことを。

「……知つてるんだ。あ、そうか。軍隊にいたんだもんな。警備兵は国の軍隊だもんな。噂くらゐは知つてるんだな」

「ミンクは、『デイラの住人なんだろ?』

シキの声が小声になる。隠された存在だと、思わずにはいられない。

「ミンクのあの髪や瞳、色素がなくなるんだろう? コンイラの成分を吸いすぎてさ」

シンカは、観念した。そこまで知つてゐるのなら隠しても無駄だろう。

シキの態度は噂で聞いた程度のものではない。

何かしら知識があつて確信を持つて、そう、だから俺たちに近づいたんだ。

「……うん。ミンクは『デイラで生まれ育つている。デイラの人間はみんなあんなどよ。俺は落ちこぼれで普通だけどさ。『デイラの住民が外に出られないのは知つてるだろ?』

うなずくシキ。

「ああ、寺院の連中は神聖な存在として崇めている。『デイラの民は特別だ。』『コンイラのしづく』を作れるんだからな」

『『コンイラの霊』を作り出す。それは特別な能力というわけではない。ただ、その技術を知つてゐるか否か、それだけのことだ。』

「神聖、か。……代々『デイラ』の中でしか生きられなかつたんだ。そして、『デイラ』では誰もが皆、何かしらコンイラに関わつてゐる。姿も変わるよ。だけどさ、俺を見れば分かるとおり、皆普通の人間なんだ。誰も自分たちが祟められる存在だなんて考えたことない。逆だよ。閉じ込められていた。一生あの小さな町に暮らすんだ。一度も他の街を見ることもない」

「ふうん。それでも、『コンイラのしづく』という奇跡の薬が身近にあるんだろう? 傷とか病気とか治るし。この汚れた大気の病から身を護るんだ。普通は五年に一度、聖帝から直接もらう。ほんの少し

の薬でみんな長生きできる。それを作れるんだ、デイラの呪は長寿で幸せだろ？」

胃の辺りがむかむかするのが酔いでない」とは確かだ。  
シンカは再び仰向けの顔を腕で覆つた。

「副作用があるんだ。分かつてないよ。少しだけなら素晴らしい薬でも、それに毎日浸つていたら、おかしくなる。デイラの住民はみんな中毒になつてる」

「…それが、あのミンクの銀の髪か」

「綺麗だろ？透き通つていて。肌も、瞳も。綺麗なのは。儂いからだよ」「なんだ、お前、詩人だな」

「茶化すなつて。ミンクも、他の住民も。四十歳を迎える前に、みんな死んでしまう。それが寿命だ。今だって、年に一度コンイラを直接食べなきや、病気になるんだ」

そう、ミンクは誕生日のその慣わしを受けずにいる。丁度、あの朝が誕生日だった。

どこか具合が悪くなつていらないといいけれど。

ミンクは、そういうことはあまり言わない。

「知られてないんだよ、コンイラの靈はありがたい神のお薬。それがそんな恐ろしいものだなんて、国が表沙汰にするはずがないんだ」シキは、いつのまにかシンカのベッドに腰掛けている。シンカのほうに身を乗り出し、さらに声を小さくする。

「お前たち、逃げてきたのか？」

シンカは首を横に振つた。腕の下の表情は分からぬ。

「あの方、教えたたら、助けてくれるのか？」

「？」

「……。約束、してくれたら。助けてくれるってあんたが約束してくれるなら、話す」

これは、賭けだ。

シキがデイラの話をじつは受け止めてくれるのか。知つて、じつあるのか。

危険かもしれない。俺は、レクトたちを知つてゐる。俺の責任かもしれない。

捕まるかもしない。

それでも。

ミンクのためを思えば、俺一人よりシキがいてくれたほうがいい。

「子どもが泣いて助けを求めてるのに、放つておくバカはないだろ」

「はあ？ 泣いてなんかないよ！」

シンカは思わず起き上がる。

足を組んでこちらを見ているシキは穏やかに笑っていた。

「助けてやるさ。恩に着るんだぜ？」

シンカは、話した。

「デイラは滅ぼされたんだ。何だか分からぬ、異世界の文明に攻撃されて。生き残つのは俺とミンクだけだった。工場も、町も、護衛の軍隊も、みんななくなつた。」

「そのことを知らないのか？ 聖帝は」

「分からない。俺、聖帝に知らせようと思つて。見たの俺だけだし。とにかく、ミンクを保護してもらわないと。デイラの住民は誕生日にコンイラのスープを飲むんだ。あいつ、誕生日の前の日に町がな

くなつちゃつたからさ、スープを飲んでないんだ。今もあんまり体調よくなくて、ずっと我慢しているんだ。聖帝に訴えてユンイラをもらわないどうなるか分からなんだ。ただでさえ、あいつ両親を亡くしてつらいのに

何も、泣き言を言わない。もつとわがままになつていいはずだつた。不機嫌でしかいられない自分が嫌だから、今日も早めに寝室に入つた。それら全てが、シンカにはいじらしい。

「分かつた。こんな子供が大変な目にあつていてるんだ、見過ごすわけには行かないな。ほら、飲め」

シンカはシキが差しだす水を飲んだ。喉が乾いていた。

「ぶつ！お酒？」

頭がくうくうしてくる。

「分かつたから、もう寝ろ。おまえ、あの子を助けながらここまで一人でがんばつてきたんだろ。両親とか友達とかさ。お前だつて亡くしたばかりなんだろ？ガキのくせに無理すんな。少しば休めよ」

シキに子供のように寝かされて、額に手を置かれる。それは母さんが時々してくれた仕草。シンカはされるがままになつていた。お酒のせいか、打ち明けたのがよかつたのか、久しぶりに眠れる気がした。

今なら眠つても、母さんのこと思い出しても、大丈夫な気がした。涙が。デイラを出て以来止まっていた涙が頬を伝つた。

シキに見られていないといい。

心地よい眠りに落ちながら、うつすらそんな風に考えた。

「シンカ。おはよ」

耳元にミンクの心地よい声。

「わざと起きないと、置いてくぞ!」

「…」

シキの怒鳴り声に飛び起きるシンカ。耳元で大声を出されて心臓が異様に踊っている。

「なんだよ、自分がお酒飲ませたんじゃないか」

二人の笑顔がのぞいている。

ミンクも今日は笑っていた。

「早くしろよ。今日中に聖都まで行くぞ」

「おはよウ」ミンクが笑う。

つぐづぐ、頼もしい仲間ができたことが嬉しい。

### 3・聖帝と呼ばれた男

ラツールを出て次の町ランドロまでは、あつという間だつた。シキは三十五歳。この聖帝国ファシオンの隣国、工業国のダンドラの軍隊にいたらしい。そこを辞めて、今は傭兵としてファシオンの有事に備えているといつ。

「備えているつて言つたつてよ、何にも起こらなきや、仕事もない。たまには、誰かに恵んでもらいたくなるわけよ」

「だからつて、強盗は向いてないと思うよ」

シンカは笑う。自称色男のシキは、馬鹿にするなといきがつてみせる。

ミンクは呆れた様に一人を見つめている。

「なんだか、二人兄弟みたい」

「こんなおっさんの兄貴は要らないよ」

笑うシンカに、黒髪の男は軽く蹴りを入れる。

「おっさんて言うな！」

「おっさんだろ！」

けり返すシンカ。ミンクを盾にして、シンカは逃げ回る。

「もう！」

後ろをすり抜けるシンカを捕まえようとして、シキが飛び掛かつと構えたときだ。

シンカが止まつた。

「あ、城門が見えた」

街道は右に大きく曲がつていて、枯れかけた並木がまばらに立つている。乾燥しているのか、黄色い砂埃が少しの風でも巻きあがる。シンカは並木の間、砂埃の向こうに小さく見える土壠と巨大な扉を指差す。日は傾きかけていた。夕日が土色のランドロの城壁を照らす。

この季節は日が長い。疲れを感じないまま、三人は五時間近く歩き

つづけていた。

それほど、シキの話す遠い国の冒険談は、ものめずらしく面白かった。デイラ以外を知らないミンクにとっては、なおさらだ。疲れているはずなのに、話の続きをせがんだ。

「寺院の町ランドロ、か

シキが歩みを止めた。

夕方の涼しい風が黄色い地面に溜め込んだ熱を奪つて流れる。

男の髪が揺れる。風をはらんだマントが長身に似合ひ、シンカは目を細めた。

「何、かつこいつてるんだよ？ シキ」

「ばか」下がれ、と手振りで示すシキに何かを感じ、シンカはミンクとつないでいた手を離した。

ミンクはシキとシンカの背後に隠れる。

ランドロの町の城門には、二人の門番らしい男たちが立っている。衣装は裾の長い地味な草色のローブで、顔をフードで隠している。寺院の僧だ。こちらを見ている。

まだ、普通の会話くらいでは聞こえないはずだ。並木が三人を隠している。

「ミンクを隠せ」

「えつ、何？」

シキの言葉に驚いて、シンカの眼を見上げる少女に、少年はワインクしてみせる。

「大丈夫。ミンク、お前可愛いから立つんだ」

つまり、デイラの住人そのもののミンクの姿が寺院の僧たちに知られていればまずいことになる。

「ミンク、これ、かぶつてろ。顔が見えないよつて、巻くんだ」

シキが布切れを取り出す。

「うそ、なんか、汚い…これ」

「掴まりたいのか！」

シキはもたつくミンクの手から布をとり、荒っぽく巻きつける。ミンクは目だけ少し開いた状態で、覗き込んでも、影で瞳の色が見えない。

髪の色は「まかせてても、瞳の色が特殊なことは「まかせない。隠すのが正解だ。

「ひどいよーもうーうーー！汗臭いつ」

むつとするミンクの肩に手を置いて、シンカがなだめる。

「まあまあ」

「だつて！ほかに何か方法あるでしょ？シキって優しくない」

「ミンク。俺たちじゃ分からぬことたくさんあるんだ。シキに従

うしかないよ

「シンカまで」

ミンクはつないだとするシンカの手を振り払って、先に歩き出す。

「ミンク！」

小柄な少女は、また少し苛立つてゐるようだ。

疲れているのか。シンカは放してしまった手のひらを握り締める。つないでいた少女の手は熱かった。熱があるのかもしない。

気分が悪いはずなのに何も言おうとしたミンクに少しばかり胸が痛む。

精一杯がんばるつもりなのか。迷惑をかけたくないと、そう思つているのか。

それでも、苛立つてしまつのが可愛いけれど。

シキが、歩きながらシンカにそつと話しかけてきた。

「この町はな、寺院がすべてを治めている。村人はみんな僧侶の言うなりだ。氣をつけろよ。ミンクの姿がばれたら、何されるか分からぬいぞ」

殺されはしないだろう。だが、面倒に巻き込まれるのは必須。シンカは頷いた。

ミンクの姿は、普通の人と違つ。デイラの住民を神として祭り上げる寺院の僧侶に見つかつたら、ただじやすまない。

「分かつた。あんたに任せると。ミンクはちょっと事情に疎いから、態度悪いけど気にしないでくれよ」

「おまえも、死くすタイプだな」

にやりとシキが黒い瞳を細める。

「おまえもつて、シキは違うだろ？」

「俺にも死くせよ

シンカはふざけるおつさを「意味がわかんないよ」と肘でつつぶ。

城門が近づく。近くへ行くと、土壙に見えた城壁が、土で作られた

神像のレリーフであることが分かる。

しかもかなり大きい。たくさんの人の力が使われている。精巧で美しくもある。寺院とは無縁だったシンカには、その迫力はある種の恐ろしさを感じさせた。人が、これを作る。どんな思いで、どのくらい時間をかけるのだろう。

ここにこめられた人の思いが、この迫力を生むんだな。

「お前たち、どこに行く」

僧侶の一人が声をかけてきた。

気付くと、ミンクもまた、城壁を見上げてしまつていて。それじゃ、顔が見えてしまう。

「聖都へ向かう途中なんだ。仕事でな。」

シキが答える。いつもより少し、きどつた口調だ。

「俺は、聖帝に仕える傭兵だ。聖帝キナリスの命で、罪人を捕らえ連行する途中だ」

俺たちは罪人扱いか。シンカはミンクを見る。ミンクもまた、不服そうな目を向けている。

「こいつらは、『コンイラのしづく』を盗んだんだ」

「だつて、それがあれば、病氣が治るつて聞いたんだ！だから、しようがなかつたんだ」

シンカも演技に参加することにした。

ミンクが驚く。

「うるさい、馬鹿者！」

シキが軽く突き飛ばす。よろけて、転ぶシンカ。

「シンカ！」

ミンクが駆け寄る。

「すまないが、さつさとこつらを送り届けて、俺は故郷へ帰りたいんだ。通してくれないか」

「その娘。教えに背き、聖なる『コンイラのしづく』を飲んだのにな。神の裁きで病にでもなったか」

薄汚れた布でぐるぐる巻きになっている少女に、少しばかり嫌味な笑みを浮かべ歩み寄る僧侶を、シンカが遮る。

シンカの手が僧侶のロープに触れた。

「きさま、汚い手で私に触れたな！」

いきなり、ロープの下からシンカのわき腹に槍を突き立てる。鞘を被せてはあるものの、鋭い痛みにシンカは息ができず、うずくまつた。

「僧侶殿、すまない。さつさと連れて行く」

ミンクの手を強引に引っ張り、シキはシンカに来いと促す。

その時。

僧侶がミンクの胸元、光る首飾りに目を止めた。

「おい、その娘の首につけている」

「え？」

槍を首に突きつけられ、止まるミンク。立ち上がり難くにいたシンカは、ミンクの胸元から、あの首飾りが引きちぎられるのを見上げていた。青い石がきらりと夕日を反射する。

それは！

「僧侶殿、穢れた安物です。お手が汚れます  
シキがすかさず奪い返す。

「あ、……」

遅かった。ミンクが取り返そうとして身を乗り出し、顔を覆つていた布がはらりと落ちた。

「おまえは！」

恐ろしいものをみたよつて、後ろに下がる。同僚の男も震えている。

ミンクの銀色の髪が風にゆれる。

「なによー私の何が悪いのよー！」

ああ、ミンクを怒らせると、後が大変なのに。

シンカは手で顔を覆つた。

「私は普通なんだから！町ではみんな同じだったわー私たちがこんな姿なのは、あんたたちのコンイラを作るためでしょー！」

「ミンク！」

シンカは慌てて、口をふさぐとする。

「放してよー！シンカのほうがよっぽど変じじゃない！私たちとぜんぜん違うし、コンイラもいらない……」

言いかけて、ミンクは我に返る。

シンカの青い瞳が、悲しそうにミンクを見つめた。

「ミンク、おい、それは」

シキがミンクの肩に手をのばす。

シンカはそつとミンクを引き寄せて、大人たちの顔を見た。

それでも、シンカは笑つた。

僧侶も、シキも、今はシンカを見ている。

「こいつ、熱があるんだ。コンイラが足りなくてさ」  
誰も、何も答えない。

シンカの姿を、改めて見つめるシキ。

シキまでそんな風にみるなよな。大丈夫、外見は普通だよ。普通のはずなんだ。

「もう、言つよ。俺たちは、デイラからきたんだ。こいつはコンイラを飲まなきやいけないのに飲んでなくて。体調悪いんだよ。だからさ、シキ。演技なんてできないし、平氣でいる俺に八つ歎たりするんだ。助けてやつってくれよ。頼むから」

いたたまれず、ミンクを抱きしめ、顔を伏せる。

「いめんね・・

ミンクが小声で言つのが聞こえる。

立つてゐるのがつらいのか、ミンクは体重を預けてくる。  
シンカも一緒になつて、その場に座り込む。

なんだつて、そんなにいつもこんだ。デイラで生きてきたことがそんなに悪いことか？

なんで、俺たちがこんなに苦しまなきやならない。

「・・すまん。気付かなかつた。」

シキが、ミンクの額に手を当てる。

「僧侶殿、理由は説明するから、まあこの子を休ませてくれないか。

「・・いいだろ?」

ミンクの姿に氣おされたのか、一人の僧侶は、すぐこうなずいた。

なにやら一人で打ち合わせすると、一人が走つて、先に町に入つていく。残つた一人は、シンカの腕を引き、立ち上がらせた。

三人は町の真ん中の寺院にある、僧侶の寄宿舎に案内された。ミンクは、シキに抱えあげられ、シンカはただ、ついていくしかない。

ミンクの声が、繰り返しシンカの脳裏に響く。シンカのほうがよっぽど変わつてゐる！・・・変わつていてる。

自覚があるだけに、少しつらい。

デイラでは、俺は特別扱いだつた。そつだらづ、一人だけ金の髪、蒼い瞳。彼らのよう

に、コンイラを飲む必要もなかつた。理由は知らない。

母さんが言つた。「お前は、デイラの希望なんだから」

そういうて、母さんは、俺にはみんなと同じ学校へも行かせなかつた。母さんが、勉強を教えてくれた。

特別扱いが嫌で、俺はデイラにいるのがつまらなかつた。母さんにも反発した。

だから、誰も俺のこと特別扱いしない、アストロードに入り浸つた。ユンイラの副作用を受けない、ユンイラがなくても生きていける。それは、彼らにとつてはうらやましいことだ。きっと。

だけど、俺は、デイラでの普通でいたかつた。

赤い瞳がよかつた。

でも、そんなこと、誰にもいえない。彼らにとつて俺はうらやましい存在だつたから。

いつの間にか、うつむいて歩いていた。

立ち止まつたシキにぶつかる。

「シンカ。  
『じめん。』  
『じ見てんだよ。』」

案内されたのは質素だが居心地のいい部屋だった。窓が二つあり、夕暮れの涼しい風が入ってくる。

日よけの麻布が、薄くやわらかい光を投げかける。

「シキどの。まもなく僧正様がいらっしゃいます。その時には、きちんと説明してください」

ね。

先ほどの門番の僧侶とは少し名が違うのだろう、綺麗な発音の丁寧

な言葉で案内してくれた僧侶がいった。

横たわるミンクの傍らに、シンカが座る。

その姿は、とらわれた野生動物の子供が、互いをいたわる姿のようだ。

ミンクの言葉がこたえたのか、シンカは元氣がない。

ミンクの前で、好きな女の子の前で、めいっぱい意地を張っていたのだろう。

シキは、つべづべ、シンカを面白い奴だと思った。どうやら、単なる子供でもなさそうだ。

興味半分ではあるが、まあ、二人の助けにはなれるだろう。

「シンカ。なあ、どうする。」

案内の僧侶が部屋を出ると、シキが聞いた。

「うん。ミンクに『コンイラのしづく』をもらいたいんだ。話せるといまで話す。大丈夫だよ。シキ。心配しないで。」

笑顔を見せる少年が、痛々しい。

「おっさん、何珍しい顔してんだよ。そういうまじめな顔で女をくだけば、もつともてるのに。」

「十分もてるが、俺は

僧正と呼ばれる偉そうな老人が部屋に入ってきた。従者を四人も従えていた。腰に僧侶独特の柄の長い刀をもち、疑わしそうな目でシンカたちを睨むが、ミンクの姿を見るなり表情を変えた。畏れとうのだろうか、態度も少し変わる。

神だなんてほんとに思つてゐるのか。

「この娘が、『デイラからきた』といふのか」

僧正は、シキにたずねる。

「そうです」

シンカが答える。

僧正は、今はじめて氣付いたかのようにシンカを見つめ、改めて向き直ると、今度はシンカに尋ねる。長い白いひげをなでてゐる。その手に視線を奪われたまま、シンカは話を聞いていた。

「なぜ、デイラからでたのじゃ。聖地である『デイラを出る』とは許されぬはず。」

別に聖地なんかじゃない。

「コンイラの畑が、燃えてしまつたので、仕方なく」

僧侶たちがざわめいた。

シンカは、周りの僧侶たちを見回した。

「畑が燃えたじゃと? まさか」

僧正が眉間にしわを寄せ、もう一度確かめるようにシンカを見つめた。

シンカは大き目の青い瞳で、それに答える。

「本當です。それを、聖帝キナリスにお知らせしようと思つて。あと、この子に『コンイラのしづく』をいただきたいのです。もし、こちらにあるのでしたら、分けていただけませんか」  
ざわめきがいつそう大きくなる。

「残念じゃが、コンイラは聖帝直りが授けてくれるもの。この寺院とて、一滴も持ち合わせていないのじゃ」

「そんな」

こんな大きな寺院ならと思つた。甘かつた。

「僧正、この子は聖地のただ一人の生き残り。このままでは、死んでしまいます。」

シキがうつたえる。

「ここから、聖都は半日もかかりません。お願ひです。今すぐ、私たちを行かせてください！」

ミンクの手を握っていたシンカも立ち上がる。従者たちが、互いに見合わせ動搖している。

僧正は、シンカの瞳を穏やかに見つめた。

「私が聖帝に使いを出さう。だれか迎えをよこすよつこと。『コンイラのしづく』を持つてな。今、その娘を動かすことは、感心せん。

「……私も行きますよ。僧正」

シキが前に出る。

「シキ？」

シンカが不安げに、黒髪の男を見上げた。

「聖帝キナリスには面識があります」

「おお、それはまた、ありがたい。貴族の『子息か？』

僧正の表情が緩む。

貴族？強盗もどきのシキが？

シンカの視線に照れるように苦笑いすると、シキは言つた。

「いや、貴族ではないが。まあ、寺院の従者殿の助けにはなるでしょう」

シンカは、ここに残されることが少し不安だ。僧侶なんて得たいが  
知らない。

僧正は、シキの手を取り、お辞儀をした。

「では、頼みます。」

大人たちが、話をしながら部屋を出て行くと、シンカは再びミンクの横に座った。

熱が高いようだ。コンイラさえあれば。

額にそつと手をあてる。ミンクの熱が手のひらを通してシンカに流れ込むかのようだ。

明日、きっと明日の午後には、シキが戻つてくれる。

「もうちょっと、我慢してくれよ。ごめんな、ミンク」

額にキスして、そつと立ち上がる。水でももらいに行こう。

「……母さん」

ミンクがうなされている。かすかな叫びがあのテイラを思い出せた。

あのテイラの崩壊から、五日しかたっていない。無理もない。  
シンカはぎゅっと目を閉じた。

俺たち、どうなるんだろう。

どれくらい眠ったのだろう。遠くから僧侶のなにやら囁く声が聞こえてくる。

何が樂しくてそんなことするんだろう。病人がいるって言ひのに。静かにしてくれよ。

シンカは眠つていられなくて、ついに目を開いた。

ミンクのベッドから少し離れた、窓際のソファーに横たわったシンカは、目をこする。窓からはかな夜風と月明かりだけが透けて見える。

まだ、暗い。松明を持つて歩き回つてゐる様子も窓にかけられた布越しに伺えた。お経でも唱えていると思つた声は、僧侶たちのざわざわした話し声だった。

なんだよ。うるさい。

「シンカ」  
ミンクの声。

シンカは一気に起き上がりつて、ミンクに駆け寄る。

「どうした？」

「ううん。いなくなつちゃつたかと迷つた

かわいい。大きな瞳が、見上げている。

「ここにいるよ

額に手を置く。少し、熱が下がつたようだ。

「気持ちいいな、シンカの手。なんだか氣分がよくなる気がする」「な、あんまり一人で我慢するなよ。つらかったらやつまへよ」

「……ん。でも、シンカは分かつてくれるもん

思わずふつくらしたミンクの唇に目が行つて、シンカは慌てて視線をそらす。

こんな時に何考へてるんだ、俺。

ざわざわした声が、いつの間にかすぐそばまできていた。

「シンカ、戻つたぞ！」

「シキ！ 早いじゃないか！」

ホツとしたのががっかりしたのか、シンカは満面の笑みを浮かべて立ち上がった。

黒髪の男は、にっこり笑つて、手に持つ小ビンを差し出した。

『コンイラのしづく』か。

「ミンク。『コンイラのしづく』だ。起きられるか？……無理なら口移し、とか。

「大丈夫」

少年のかすかな期待をミンクの笑顔がさらりと振り払う。体を起こしたミンクに、シンカは受け取つた薬をそつと手渡す。

「ほんの数滴でいいらしいからな。飲みすぎるなよ」

そう説明しながら、シキが何を感じ取つたのかニヤニヤしながらシンカの頭をかき混ぜる。

「煩いよ、シキ」

「うん。ありがとう」

シンカも初めて見る。小ビンは、深い青い色のガラスでできてい、細工の模様が美しい。

液体を少しだけ口に含んで、ミンクは深いため息をついた。

見る見るうちに顔色がよくなる。

「よかつた」

シキにも礼をとシンカは振り返り、その横に見慣れない男が立つていることに気付いた。

誰だろ？ 僧侶じゃない。

顔はすっぽりとフードに覆われている。夜の明けきらないこの部屋の明かりでは、表情は見えない。

シキと同じくらいの背で、金糸の刺繡の衣装のすそだけが見える。

「こゝの者は？」

「深く落ち着いた、声。

「シンカだ。こいつもデイラからきたんだよ」

シキが答える。

「誰？」

「変わった色をしているな」

シンカの質問には答えず、その男はつぶやいた。

シキは首をかしげて笑う。

「そうなのか？俺はよく知らないからな。キナリスだよ。シンカ。いくらなんでも、その名を知らないとは言わないだろ

「皇帝陛下！？」

ミンクも息を呑んだ。

「お前ら、ありがたく思えよ。俺が聖都に着いたのは夜中だつたんだ。事情を説明したら、陛下がすぐに迎えに行くと言つてくださつてな。夜通しだぜ。しかも、陛下自ら、だ。まあ、『コンイラのしづく』は陛下しか持つてはいけないとそれでいるから仕方ないといえば仕方ないんだけどよ」

そこでシキは伸びをした。皇帝陛下の前でその態度は、一体どういふ男なのかとシンカに思わせる。

「さすがの俺も夜通しはこたえたよ。酒の一杯もないとな」シキのあっけらかんとした口調とは裏腹に、シンカは聖帝キナリスの視線に、痛いものを感じていた。こっちをずっと見ている。そんな気がする。かといってじつと見つめ返すのも失礼かと、気になりつつも気付かないふりをしている。

フードの下の表情が分からぬだけに、嫌な感じだった。

「あの、ありがとうございます。わたし、ミンクといいます」

ミンクが、聖帝に手を合わせるようなしぐさをして見上げる。

「よい。デイラでの不幸を、心苦しく思つていたところだ。生きていたものがいたとは、幸いだつた」

「では、やはり、誰も残らなかつたんですね」

ミンクがうつむく。

「我が軍に、知らせが入るまで三日かかつた。駐留軍もすべて全滅していたからな。交替の警備兵が到着するまで発見されなかつた」

「すみません。もつと、早くお知らせしたかったのですけどミンクが咳き込む。水を渡しながらシンカがそつと背をなでた。

「お前は寝てろよ。陛下、御前で申し訳ありませんが」

「つむ。よい。ゆっくり休め」

「御前つて、よくそんな言葉知つてたなシンカ」

「俺だつて少しは勉強したぞ！」

からかうシキに、抗議する。確かに、皇帝陛下が目の前にいて、どうしていいのか分からるのは確かだ。誰もがシキのよじに平氣でいられるわけじゃない。

「何の勉強だか」

「それは、ええと。いろいろだよ」

「いろいろ？ 誰に剣術を習つたんだ？ お前に負かされたことは悪いが一生忘れないからな」

「なんだシキ、お前が負けたのか」 皇帝も目を丸くした。それほど、シキの実力は買われているということか。

「信じられないだろ？ だから、こいつが何物なのか知りたくないな」 何者、って。あれは、ジンロのやり口を真似ただけだ。

シキの目が笑いながらも真剣なことにシンカは気づく。まだ、言つていないこと。それを、悟られているのか。

「もう、いいだろ、シキ。そんなこと。根に持つ男はもてないぞ」 「だから、俺はもてるつて」

「仲がよいよしだな、そなたたち。それより、シキ、我らも休もう。明日も早い

「ああ、そうだな」

キナリスに促されて、シキも部屋を出る。

シンカは一人を部屋の外まで見送つた。

「本当にありがとうございました」

深くお辞儀をする。

「シンカ、そなたに明日、いろいろ話してもうわねばならん。私は時間がない。朝一番に聖都に向かいながらになる。よいな

「はい」

夜明けまで後何時間もない。大丈夫かな、シキたち。

「また、後でな」

シキが背を向けたまま、手をあげる。その手はそのまま、あぐびを押さえる。

キナリスはその後ろを歩いていく。

シンカは一人の姿が見えなくなるまで見つめていた。  
うそみたいだ。皇帝だ。この国で一番偉い人だ。初めて見た。  
顔はよく分からなかつたけど。

さすがに迫力がある。

ただ、一言。シンカの心には引っかかっている。

「変わつた色をしている」、キナリスはそう言った。

俺は正々堂々と聖都なんかに行つて大丈夫なんだろうか。デイラでは俺だけ違つた。その理由なんか、俺は知らない。

「変わつた色」の俺を、聖帝は妖しいと思つたんじやないのか。

いつか、母さんが言つていた。お前は確かにここで生まれたのよ。  
デイラの住人なのよつて。本当にそうなんだろうか。  
デイラで生まれて、母さんの本当の子なら、母さんと同じ赤い目をして  
いたんじやないのか？勘違いで迷い込んだ、捨て子だったかも。  
シンカは首を振つた。

小さい頃から何度も想像しては、一人怒つたりイラついたりして  
いたそれを、今考えても仕方ない。俺だって知らないことだ。知らな  
いつて素直に言つしかないだろう。シキがいてくれるし。何とかなるさ。

ひとつあぐびをし、ミンクが眠つているのを確かめて、シンカは再びソファーに横になつた。  
うつすら見える朝焼けと、変な色の双子の月が不気味に見えて、ぎゅっと畳をつぶつた。

翌朝、身支度をしながら、シンカは背中の剣がやけに重く感じられた。『テイラを出て、五田町。むづいぶん時間が経つたように感じる。』

寺院の外に出ると、豪華な馬車が一つ待っていた。ミンクは後ろの馬車で横になつたまま運ばれる。まだ、眠つていた。ユンイラが効いたのだろうか。

シンカはいつもの旅の服装で、昨日の貴族風な変な服は辞めたらしい。やつぱり貴族だったのかな？

シンカの視線に気付いて、シンカは笑つた。

「お前、俺を信じろよ」

「何だよ。気持ち悪いな」

「まあ、なんだ。陛下の御前だからさ、剣はいつまでもひいておいていいか」

やつぱりそういうもんなんだな。皇帝陛下の前で帯刀を許されるのは限られた人だけだわ。

「うん。いいよ」

肩の鞄」と取り外そうとシンカの背後に回ると、シンカがささやいた。

「俺は、キナリスよりお前の方が気に入つてるからさ」

「は？」

シンカが剣をはずすと同時に、護衛の兵がシンカを取り囲んだ。剣を突きつけられ、あつとこく間に縛られてしまった。

「ちよつと、何すんだ！ シキ、何だよこれ、シキ！」

「悪いな、シンカ。お前がなかなかの使い手だつて、昨日ばかりしちまつたから」

腕を後ろに縛られ、剣を突きつけられながら、馬車に押し込まれた。

派手な内装の馬車の中で、不機嫌そうに窓の外を眺めるキナリスが

座っている。ちらりと、長い金髪越しに視線をよこす。

「陛下！ これは何の真似だよ！」

言葉遣いなんか気にしていられない。忠実な国臣の仕打ちはないだろう！

「だまれ」

物憂げに窓に額を押し当てたまま、聖帝と呼ばれる男は言った。

抑揚のない冷たい口調はシンカを黙らせた。

シンカの後ろから、シキが乗り込む。

「シキ！」

シンカは睨みつける。

「まあ、怒るな」

「信じろって、こういう事かよ」

縛られた手がしびれてくる。馬車は走り出していて、揺れるたびにどちらかに倒れそうになる。シキのほうへはいいが、聖帝のほうに倒れ掛かるわけにはいかない。

「まあ、シキ。俺、なんだと思われてるんだ？ ものすごい凶悪犯か？ こんないたいけな可愛らしい少年が？」

ぶ、ヒシキがふきだし、キナリスは同時にシンカを見下ろした。

「つるさいと言つたらうー！」

キナリスの腕が振り上げられる。危うく顔面を殴られそうになつたシンカは、何とか避けた。

縛られているから、バランスを崩してずり落ちそうになる。

「キナリス、子供相手に大人氣ないぞ」

「子供は嫌いだ」

シキのたしなめも、皇帝陛下様では効かない。相変わらず不機嫌そくな皇室陛下の横に置かれて、シンカは居たたまれない気分になつていた。

すべて素直に話そうと思っていたのに、それすらさせない。なんだよ、昨日はあんなに偉そうにしてたくせに。少しでも、かつこいい

なんて思つたのが間違ひだつた。これがこの国の皇帝だなんて。俺は皇帝しか頼れないと思つて、ここまできたのに。皇帝に報告することと、ミンクを守ること、それだけが、俺ができることだつてここまで来たのに。

悲しくなってきた。

「どうした。大人しくなつたな」

シキが、シンカの頭に手を置く。

「……大人はうそつきだ」

見上げるシンカの瞳に、シキは目をそらす。

返す返事はないらしい。

味方してくれると思つたシキも。頼りにならないらしい。

信じたのに。助けてくれると、約束したのに。

だから、デイラでのあの事件を。包み隠さず話したのに。

何が信じろだよ。

シンカは悔しくて、何度も額を座席の背もたれに擦り付けた。ふと、式の手がそれを抑えてとめたが、シンカは黙つて睨みつけた。

シキが困つた顔をしたから、シンカは目をそらした。

どれくらい黙つたままだつたろう。シンカは、キナリスに背を向け、柔らかな背もたれに体を預けじつとしていた。息が詰まる。

シキはシンカの縛られた手をさすつてくれた。それでも、痺れた手首は何も感じない。

「シンカ。お前は、どこから來たのだ」

不意にキナリスの声。先程とは少し違う。

「よくなつたのか。キナリス」

「ああ、コンイラが効いた」

やけに爽やかな会話をする一人を、シンカは交互に見つめていた。キナリスはシンカと眼があうと軽く睨んだ。

ちえっ！なんだよ、いやな感じ。

「おいおい、いいかげんにしろよ一人とも。シンカ、キナリスは朝に弱いんだ。

体質つてやつか。頭痛がしてまともに話もできないんだ」

「だからって、人を殴るのかよ」

「まあ、そう、怒るな」

シキは笑つて、肩をたたく。

「あのせ。いきなり縛られて、怒鳴られて殴られそつになつたら誰だつて怒るだろ。しかも、俺の話なんかちつとも聞こいつとしてない」

キナリスを見る。睨まれたつて怖くなんてないぞ。つて顔してやる。

「すまなかつたな」

聖帝は笑つた。

いや、笑つたからつて、油断できない。

「シンカ、キナリスはお前がデイラの人間じゃないつて言つんだ」

シキが頭をかいて、申し訳なさそうに言つた。

「悪いと思つてるんだ。でも、もう言われるとや、俺もお前の出生を証明できるわけじやなくてよ」

出会つたばかりだから。それは、仕方ないかもしれない。俺自身だって、証明しようがない。シンカは、蒼い瞳を皇帝に向ける。

キナリスは前髪をさらりとかきあげて見せた。

「お前は、デイラの色をしていない。あの町で生まれればみな、あの娘のようになる」

やつぱりそこか。シンカは予想していたものの、落胆を隠せない。そこは。自分が何を考えて何をしたかは説明できても。どうして生まれてどうしてそこにいるのかなんか、誰も説明できない。それは、どうして男に生まれたのかを問われるのと同じだ。どうしてお前は色が白いんだとか、どうしてお前は蒼い瞳をしているのかとか。それが悪いわけでもないのに追求されると弱みを突かれた気分になる。

「俺だけ違ったんだ。理由なんか知らない」

「デイラではな、子供が生まれると、みな、肩に聖帝国の紋章が刻まれる。お前にはそれがない。生まれたことを隠していたのか、他で生まれたのか。その姿からして、他で生まれたと考えるのが普通だろ?」

聖帝の言ひとおり、俺はやつぱり拾われたのかもしれないな。

妙に納得してしまつ自分が余計に悔しい。

昨日の晩、シンカは素直に話そうと思っていた。全部、レクトのことや、あの、空を飛んでいた兵器のこと。そんな気分ではなくなった。

なんだよ、俺は何のために、ここに来たんだよ。情けないよ。

シンカは黙り込んだ。話せば話すほど、立場を悪くしそうだった。

「おい。シンカ?」

「じめん。シキ。俺、やめるよ。」  
もう、話せないよ。

静寂が三人を包む。

「やつぱり、放してやれよ。キナリス」

音をあげたのはシキだった。

「かわいそうになつたか?私には、一百万の人民の命がかかってい

る。ゴンイラを全滅させたかもしれない男を、野放しにはできない

「俺じゃない！」

シンカは叫んだ。

「俺だつて母さん！」くしたんだ！＝＝ンクだつて、両親を、友達とかみんな・・なんで、そんなこと言えるんだよ。俺の話を聞こうともしないくせに！俺はあんたを信じて、あんたらあいつらを捕まえられると、そり、思ったから……」

抑えられなかつた。涙が、あふれた。  
平氣なはずはなかつた。

「もうやめだ。キナリス、俺はこいつを信じる」  
シキはナイフを取り出すと、シンカの縄を解いてくれた。  
「泣くなよ。悪かつたよ」  
シキが、いつむくシンカの髪をくしゃくしゃなでる。

「ガキ」

ポツリとつぶやく皇帝。キッとにひむシンカ。

「シキ、お前、私よりその子供を信じるといつのか  
すねたようにも見える。

シンカは、氣付いてしまつた。  
もしかして、この男、皇帝、この国の一一番偉い、彼は、シキがシン  
力にやせしーから不機嫌なのか？  
ガキ？

どつちがだよ。

よくみると、皇帝はまだ若い。シキよつ俺に年も近いよつだ。一十  
五、六歳だらうか。  
負けないぞ。

「ふう」

改めて背もたれに深く体を寄せて、シンカはしごれた手をさする。

赤く残つた縄の跡がすと消えていく。

シキが気付いた。

「おい？」

「俺は、大人で男だからさ、ちゃんと話すよ。陛下。信じてくれなくともいいし、どう思つかはどうでもいいや。俺が、体験したことそのまま話すよ」

シキはまだ、シンカの手を見ている。

「いいだろう。話してみろ」

挑むように睨む皇帝。

「俺が、最初から、こいつに頼らうと思つてた俺が間違つてたんだ。シンカはそう思つたとたん元気が出ってきた。俺はこんな奴に頼らず、俺の考へで行動する。そつ、決めた。

「俺が、本当はどこで生まれたかは別として。俺はとにかく、デイラで生活してた。あの日、俺はデイラを抜け出して港町アストロードへ買い物に出かけたんだ」

「抜け出す？」

キナリスが確認する。

「そうだよ。俺、外の町が好きだったからな。そこでさ、変な男たちに出会つたんだ」

シンカは話しつづけた。レクトを畠に案内したことも、その、変わつた武器や、空を飛ぶ黒い兵器のことも。ただ、レクトを父親だと勘違いしていたことだけは、言わずにおいた。

二人は黙つて聞いていた。

話し終わつて、ふと、息をつく。

「これで全部。俺たちは、町を出て、ここまで来たつてわけ。陛下、

あなたにこのことを話して、レクトたちを見つけてほしかった

「分かつた」

キナリスがうなずいた。

「探してくれるのか？」

シンカはもう、友達のような口調だ。シキもキナリスもたしなめる  
氣にもならない。

「いや、お前が言つのは本当かもしれない。だが、その、他文明の  
兵器が、他の町を襲つた形跡はない。私としては、コンイラ工場を  
再生させることが最優先なのだ」

「そうだな」

シキもまじめな顔してうなずく。

それならそれで仕方ない。シンカも思つ。

俺は、自分の力であいつを見つける。皇帝には皇帝の仕事がある。

「……何してんだ？ シキ？」

シンカの手を取り、シキはしげしげと眺めている。

「指輪でも買つてくれるのか？」

「バカヤロ」

シキが笑う。いつもの、シンカの軽口にシキは皿を締めた。

「陛下、俺は自分であの男を探すよ。ミンクが元気になつたら、デ  
イラに戻る」

あてもなく旅しても仕方ない。まず、デイラに戻る。

「だめだ」

シキも驚いてキナリスを見つめる。

「言つたまう。わが国に必要なコンイラがなくなつたのだ。備蓄だ  
けでは、一年ともたない。しづくを受けられない人民を危険にさら

すことになる。コントラの精製ができるのは「デイラの民だけ。お前たちは国の監視下に置く」

「キナリス、ユンイラがなくたってすぐに死ぬわけじゃない！ミンクのように中毒になつているわけじゃないんだ。精製の方法だけ聞けばいいだろ？？」

シキの抗議は意味がなかつた。

「精製する事は危険を伴つ。」

冷たく言い放つた皇帝。表情に何の感情も見えない。

デイラの人間なら危険でもいいというのか！シンカに怒りが込み上げる。

「そつやつて、デイラの人々を犠牲にしてきたんだ。冗談じやない！何が聖地だ」

いきり立つシンカ。シキも、怒りのこもつた目で皇帝を睨んでいる。「シンカ、そなたは、町を抜け出し、デイラに賊を導き入れた。結果として町を壊滅に追い込んだ。大罪に値する。残念だが、自由にするわけには行かない」

キナリスが宣言するそれは、何の反論もできなかつた。それが、罪だと言われるなら。シンカには、対抗する言葉はない。

シキも黙つて睨んでいる。馬車は周りを騎兵に囲まれている。逃げ出せない。ミンクもいる。

シンカは再び皇帝に背を向け、やわらかい背もたれに顔をうづめた。

#### 4・いくつかの友情

聖都シオン。

ラシア大陸の中ほどにある。

背後にそびえるジ・リュリ山の裾野にあたるその場所は、西に向かって低くなつており、東の果てに位置する城からは、とても眺めがいい。

暑い季節が過ぎ、北に落ちる夕日は、昨日よりもさらに小さく見える。市街には貴族の豪奢な邸宅や、商人の家、共同住宅のような広い屋根の家などがある。いずれの建物も、白い壁とオレンジの屋根に、夕日の赤を光らせて、美しく輝いている。

城の三階にある、小さいバルコニーのついた窓辺に、黒髪の男が立っている。長い、腰までの髪をひとつに結わえ、黒い皮でできた動きやすい服を身につけている。腰に差した短い剣は、軍人用のもので、軽くて丈夫、そして、何より血をたくさん吸っている。

シキは、くゆらせていた煙草の火を消し、身を翻した。

地下にいる、友人を助けに行くのだ。

扉を勢いよく足で蹴り開く。予想通り、見張りの兵一人が慌てて槍を構える。

「遅い」

槍を構える二人の懷に飛び込む。

シキの敵ではない。

シンカも、いや、キナリスですら今のシキの表情は見たことがないだろう。気の進まない戦争でもない、ふと思いついた盜賊稼業でもない。

自らの意思で決した行動は人を強くする。

先刻、もう一人の友人聖帝キナリスと決裂したばかりだった。キナリスの立場もわきまえ、それでも少年を牢につなぐのは酷に過ぎないかと話し合いに臨んだものの、耳を貸す様子はない。

皇帝がまだ皇太子で、ちょうど、シンカと同じくらいの年だった頃、戦場で助けたことがある。当時のキナリスは何の自信もなく、力も持ち合わせていかつたが、必死で自らの務めを果たそうとしていた。好感が持てた。

変わるものだ。

シキが軍の縛りを嫌い、自由な身になつてからも、幾度となく国政を手伝つてほしいといわれた。

断りつけた。

キナリスが嫌いだつたわけではない。この国のあり方そのものが嫌いなのだ。

コンイラという植物は人々を惑わせ縛り上げている。シキにはそう取れる。

シキが生まれた国、ダンドラも同様だ。隣国のファシオン聖国からコンイラを買い取り、国民に与えている。それを使って、人を操つている。人々の命を左右する薬を権力者が保持するのだ。国民は従わざるをえない。

軍に入つてから、例の五年に一度コンイラのしづくを飲むように指示された。

しかし、シキは決して飲まなかつた。それは、幼い頃に決めた自分なりの掟だ。民のためなど偽善なのだ。

コンイラを受けるために、人々は税を納める。

納められない貧しい人々は、辺境の町に追いやられ、コンイラも与えられず、デイラとは逆の、だが同様につらい病気にかかる。

楽園のように美しいこの聖都は、ほんの一握りの人間のためのもの

でしかない。両親を幼い頃に失ったシキにとって、生きてこじへじと楽しみを見出せる世界ではない。

シキの育つた辺境の町はこの世界の大気に含まれる毒素で、違う姿の子供が生まれる。肌の色も聖都の人々とは違う。成長するにつれ、黒い瞳が白くにじりだし、喉をいため声を失い、五十歳の前にほとんどが関節をやられ、歩けなくなる。そして死だ。

その人々の姿を見て育っている。心の底から、国を統べる連中とは仲良くなれない。

世をすねて気ままに生き、目的のない旅を続けてきた。だが、シンカたちに出会った。子供がデイラという重いかせを背負つている。放っては置けない。

シキの旅にも目的ができた。

シキは、隣の部屋に幽閉されていたミンクを助け出した。

「シキ、すごい！」

廊下に累々と倒れている兵たちを見て、ミンクは驚く。

「だてに傭兵やってたわけじゃない。俺を怒らすと怖いからな。お

前も氣をつけろよ」

本気で怒っているのか、黒髪の男は、にじつともしない。

「やだなあ。すごいんで」

言いながら、ミンクは背筋にじわざわしたものを感じる。今まで見てきたシキとは違う。戦場に立ち生き残ると言ひ意味をシキは怒りを露にする背中で少女に示した。

#### 4・いくつかの友情2

二人は、地下に下りていく。じんわりと空気が湿つていて、御香のような、甘いけだるい香りがしている。

「これ！」ミンクが口をふむぐ。

「シキ、この香り、ユンイラの煙よ！」

「なんだと？」

「この煙を吸うと酔つたようになる。デイラにいた私たちでさえ、長時間されされてはいけないって言われてた。吸いすぎると何も考えられなくなる。人形のようになつて、死んでしまつの」

地下に充满した香り。

いつからこんなことを。

二人は見合させて走り出す。

地下牢は、一番奥の一室を除いて空だった。

暗い天井の低い部屋の床に、シンカが横たわっている。何もない、毛布一つない牢。青い顔をして、深く眠り込んでいる様子の少年を見て悪寒が走る。

「どおりで、牢番もいないわけか。キナリスはここで、シンカを殺すつもりだつたんだな」

「どうして？皇帝陛下は、どうしてシンカを？」

「俺に聞くな！」

先ほど倒した衛兵から奪つたカギをミンクが手渡す。シキが扉を開くと、シンカを抱き起こす。

「シンカ！大丈夫か！おい！」

強くゆする。

反応がないので頬を叩いた。

「！いて、何だよ。うるさいな。夕食か？」

意外にも少年は深い蒼色の瞳をパツチリ開いた。のんきなことを言つてゐる。

「シンカ、大丈夫？」

「ミンク。お前こそ、大丈夫か？」

立ち上がり、逆に少年が少女を心配する。

「何だよ、平氣じやないか。脅かすなよミンク」

シキは氣が抜けたようだ。

でも、と言いたそうな顔でミンクがシキを見上げる。

「……つと！」

ふらついたのはシキだ。額に手を当てて自分の視界を確かめるように瞬きする。

「シキ…！？ ユンイラか！」

今さらのようにシンカが氣付いた。

「ありがと、シキ。ミンク。早くこいを出よー！俺はともかく、シキは慣れてないだろーし」

「確かにな。強烈な酒を一気飲みした氣分だぜ」

頭を軽く振ったシキの髪がふわ、と頬に張り付く。

「！風だ」

「換気し始めたようだな。このままじゃ、兵が降りてこられないからな。入り口には大勢待ち伏せてこるってことか」

壁にもたれかかったシキがうなる。

シンカが風のくるほうをくんくんと嗅いだ。

「草の匂いがするな」

「動物かお前」

「酔払いは黙つてついてこいよ。行こうミンク。多分、この先、

何かある。外に出られるはずだ」

シキの懸念を無視するように、シンカは笑った。

「換気できるつてことは、入り口以外に風の通る道があるつてことだろ。ほら、奥から空気が流れてきている」

「分かるのか？」

シンカは田を丸くしてシキを見た。ミンクは一人を見比べるばかりだ。

「草の匂いがするだろ？ あ、ダメか、ユンイラの香りが強いから。ほら、あっちだよ。俺、昔から鼻は効くから」

シンカが風のくるほうをくんくんと嗅いだ。

「動物かお前」

「酔っ払いは黙つてついでこよ。行こ//ミンク。多分、この先、何がある。外に出られるはずだ」

三人はシキを真ん中にし、暗い牢の奥へと進む。灰色の石を積み上げた壁が、だんだんと狭くなり、整えられていた表面も石がただ積まれているだけのものに代わっていく。

#### 4・いくつかの友情 3

「この辺、古いな」

シンカは松明を持つミンクの後から、シキを半分引きずるようにして進む。

「おっさん、重いな。な、まだ歩けないの？」

「そ、うよ、もうコンイラの香り、しないのに」

ミンクも一人の横に来て、灯りでシキの顔を照らした。

「うるさい、お前らと違つて、俺は纖細なんだ！」

「ありえないー」

「可愛いくせに口は悪いな、ミンク。シンカも俺はそんなに体重かけてないだろ？がー」

「随分元気じやないか、シキ」

「ああ？ そうか？」

また、ずんとシンカの肩に体重をかけてくる。

「お、重い、シキわざとやってるだろ…」

「氣のせいだ、ほり、行き止まりだぜ、どうするんだよ」

三人の前には、灰色の岩が立ちふさがっていた。

背後から、兵の気配がする。

「どうつて…」

ミンクは、松明で天井や壁を確認する。

「この辺、やけに壁が平らだな」

シンカは途中でこぼこの筋膜の洞窟のようだったことを思い出した。今いるここは、少し違う。地下牢と同じよう、人の手が加わった平らな壁。

「さて、どうするんだ？」

シキはシンカに体重をかけたまま、にやにやしている。

「……風は、そこから吹いてくるよ」

シンカが指差した場所には、壁があるだけだ。

「ね、早くしないと、追いつかれちゃうよ」

「そうだよなあ」

シキはやけにのんびりしている。

シンカは、肩に手を回したまま寄りかかるシキに、肘うちをかました。

「いて！」

「さっきからさ！シキ！人に頼つてばかりでなんだよ！軍人だろ？なんか知ってるんだろ！離れろよ！」

少し息を切らして、シンカは男を突き飛ばした。

そのまま壁に寄りかかる。

自分より大きな男を背負つようになると歩くのは、なかなか体力がいるのだろう。

「おいおい、せっかく助けに来た友人をその扱いか？」「逆になつてるだろ！」

シキは髪を一振りして、伸びをした。  
しゃんと立つて、まるで昼寝したあとのようにだ。

「ねざとだ、やつぱり」

ミンクもシンカの傍らで、目を丸くしてシキを見ていた。

シキは一人をちらりと見て、笑った。

「いや、お前がどんな奴かと思つてさ。手伝つてほしいか？」

「はあ？」

シンカの呆れた声にシキは益々楽しそうに笑つた。

「助けてほしいかって聞いているんだ」

唚然として言葉を失うシンカの脇で、ミンクが松明をシキに突き出した。

ニヤニヤしたまま松明を受け取ると、シキはもう一度言つた。

「助けてほしいか？」

「な、なんか、むかつくけど……助けてほしい」

シンカが睨むと、シキはにっこりと笑つた。

「よし。だいたいな、お前、人が真剣に助けに来たのに可愛げないんだよ、平気そうな振りしやがって」

「何だよそれ！」

鼻歌でも歌いだしそうな調子で、シキは一人壁際に立つた。  
突き当たりの壁の一角。ちょうど、シンカが風が吹いてくるといった場所だ。

一番下のひときわ小さな石が削れたように凹んでいる。  
そこを蹴つた。

4 いくつかの友情4

「ロツシ、ヨーの感じの純一音。」

「…シキ、痛そう」

ミンクが口を手でふさぐ。

「アーチャー。アーチャー、アーチャー！」

シキに引かれて、二人は通路の一番奥、突き当たりの壁の前に立つた。

جولہ

地響きがする。

五  
十九

周りを見回す一人の目の前に、突然壁から何かが出てきた。

シキの蹴つた場所から、一本の亀裂が天井まで走ったかと思うと、天井のほうから傾き始め、まるで切り取ったかのように、ゆっくりと壁が倒れてきた。

二二九

といふ大きな音と  
其煙

思わず抱きついたシンケを庇うように、シンカも顔を伏せた。

「もういいぜ」

シキの声に、顔を上げる。

三人の目の前には、三角の壁が立っていた。

「サンディウイッヂみたい」

ミンクの感想にシンカが笑う。

「なに、だつて、そうでしょ？ほひ、二角に切つた形してて、この階段のとこがハムとかで……」

「階段？」

壁から現れた二角の壁は、上面が階段になつていた。それは斜めに壁に向かつて上れるようになつっていた。

「さ、ハムの上を登るぜ」

シキが松明を持つて先頭を行く。

「これ、そういう仕掛け？」

ミンクが続いて、最後にシンカが登り始めた。手すりも何もない、人一人がやつと通れる幅。

時折、よろけるミンクを前から後ろから支えながら、三人は壁の奥へと進んでいった。

両側は平らな壁。かすかにかび臭い。

足元のこの階段は、この壁に隠されていて、シキの操作した何かの仕掛けである通路に出てくるようになつっていたのだ。

「まるで、ケーキを一切れ切り取つたみたい。不思議ね

「ミンクのたとえは食べ物ばかりだな」

シンカが笑うとミンクが立ち止まる。

ぶつかりそうになつて、シンカはミンクの肩に手を置いた。

「もう、からかつてばかりなんだから！」

その手を振り解くようにミンクがぐるっと背を向ける。

勢いでシンカは後ろに倒れ掛かる。

「うわ！バカ、落ちるよー！」

手すりも何もない平らな壁。足元は急な狭い階段。バランスを崩したまま、シンカは両側の壁に手をついてからうじて落ちずに停まる。

「だつて！」

「ほら、つかまれ

ミンクの肩越しからシキが手を引いて起してくれた。

「シンカ、お前今頃になつて足元ぶらついてんじやないのか？」

松明の下シキがにやつと笑つた。

「そんなことないよ」

シンカは口を尖らせた。

「ねえ、それより、」  
「……」

そこで階段が終わつた。狭い踊り場。

その先は扉のようだ。

シンカが登りきつたところで、シキは再び扉の脇の壁を蹴つた。  
地響きがした。

「何？」

「階段を元に戻した」

シキはそういうと、扉を開く。

金属の重い扉はぎしぎしがしと軋みながらゆくつと開いた。

「あ、草の匂い」

扉の外は暗かつた。

それでも髪をなでる風に、三人は深く息を吸つた。

「何、ここ？ シキは知つてゐるのか？」

「遺跡だ」

「遺跡？」

シキの松明が、崩れかけた壁の残骸や、半分土に埋まつた石の柱を照らし出した。

シンカたちが出てきた扉は、こちらから見ると山のがけ下にうずもれるようにひつそりとしていた。

周囲には縁の苔が生え、土がむき出しへなつたところからは木の根がひげのように伸びる。

足元も、やわらかい草で覆われている。

周囲は林のようだ。時折、イキモノが葉を揺らす音がする。

そこだけ林にぽっかりと穴があいたようになつていて、夜空が見える。

#### 4・いくつかの友情5

ちょうど、シンカがすんでいた家くらいの広さがある。林に向こうがどうなっているかは、暗くて分からぬ。

「シンカ、見て！」

シンクが、なんとなくもたれかかっていた石壁に手のひらを当てる。声を上げる。

駆け寄ると、文字が刻まれていた。

所々草が生えたり、崩れたりしているが、読める。

「神の山ジ・リュリ山が火を吐いた後、のろいは国全体に広がった。病があふれ、目の見えないもの、口の利けないもの、歩けないものが続出した」

シンカが読み上げた。

「カンカラ遺跡だ」

シキが納得したようにあごをなでた。

「カンカラ遺跡？」

シンクが聞き返す。

「ああ、この国ができるずっと前の、カンカラ王朝の時代のものだ。同じようなものが、俺のいたダンドラの国にもあった。さつきの階段の仕掛けも、まったく同じ。この大陸を統一していたというのも本当らしいな」

「違う国があつたの？」

シンクが変な質問をする。

「あれ、学校で習わなかつたか？」

「知らない。シンカこそ、何で知ってるの？」

頬をふくつとふくらます。シンカの好きなしぐさだ。

「シンカ、笑つてないで説明してよ」

シンカが話しだした。

「この国になる前には、この大陸を含めて、今は人が住んでいないすべての大陸を、ひとつの大國が治めていたんだ。カンカラ王朝って呼ばれている」

「多分五百年前くらいかな。すごく進んだ文明だつたらしいんだ。太陽の光を熱に変えて、製鉄していたとか、海の水から動力を作つたとか。すごいんだぜ、水の成分が分解するときのエネルギーで、空も飛べる船を作つていたんだ」

「お前詳しいな」

シキが感心する。三人はやわらかい草に座つたり、寝そべつたりしながら、シンカの夢のような話に耳を傾ける。

「信じられないだろ？ 空を飛ぶんだ。そういう技術が、どこかに眠つているんだ。空を飛んで、遠い遠いところまで、人は行けたんだ」

シンカの手は夜空の星に向けられている。

「遠い遠い、ところ？」

ミンクが同じように見上げた。

「そう、俺たちが行くことのできない遠いところ。そういうところがあるんだってさ。母さんが言つてた」

あの、黒い空飛ぶ兵器も水のエネルギーなのかな。ふとシンカは思つた。

あのときの、デイラの上空にいた、あれ。あれは絶対空を飛んでいたんだ。母さんも知つていたんだ。だから。

レクトも母さんを知っていた。

「シンカのお母さんが？どうして？」

ミンクの問いにシンカは応えない。

少し遠くを見る少年の厳しい表情に、ミンクは視線をそらした。

「…ねえ、どうしてそのカンカラ王朝は滅びちゃったの？」

「あ、ああ。ある時、ジ・リュリ山が噴火したんだ。噴煙は遠い大陸まで広がって、この世界すべてに黒い雨を降らせたんだ。雨は長く続いた。半年で、噴火は収まったが、黒い雨のせいで、飲める水がなくなつた。空気はにごり、人の体を蝕んだ」

「怖い」

「人は、全滅するところだつた。でも、変化した水や大地から、新しい植物や動物が生まれだした。大気の毒で長く生きられなくなつた人間は、この新しい植物によつて救われたんだ」

「それって、コンイラ？」

シンカはうなずいた。

「生き残つた人々が集まつて、新しい今の国々が生まれた。コンイラはそのときの毒を含んだ水や空気で育つた。当時は、毒も濃かつたから、コンイラはどこにでも生えたんだ。だけど、コンイラはたくさん使いすぎると副作用が起つる。その成分を、今のように精製して使いこなすには時間が必要だつた。でも、その長い時間の間に、この世界の毒素自体が薄れていつたのだと思う。コンイラも減つていつた」

シンカは、石の柱に背を預け、背後の石版を見上げる。

「貴重な存在になつた。だから、今、コンイラは、このジ・リュリ山を水源とするシン川のほとりに栽培所であるデイラを作つて、国に管理されている。人に害を成す空気の毒素はまだ完全に消えたわ

けじやない。俺が思つてゐるや、毒素がなくなつたら、コンイラもな  
くなるんぢやないかな。まるで、毒を消すために生まれてきたよう  
な氣がするんだ」

「ふうん」

ミンクは黙くなつたのか、遠い田をする。

「やう考へるとさ、俺たちは振り回されているんだけど、コンイラ  
自体は悪くないんだ。母さんがさ、よく俺に話してくれた。コンイ  
ラはまだ、なくすわけにはいかないの、つてさ。こつか、そつ遠く  
なこいつこ無くなることを知つていていたみたいに」

實際になくなつてしまつた。母さんはあの田がへむことを知つてい  
たのかな。

シンカはもつと何か思い出でと考へたが、涙が出やうになつてや  
めた。

「ミンク。おいで」

シンカがミンクを傍らに呼んだ。  
額に手を当てて、熱を測る。

「多分、あのじゅくだナジヤ足つなくなると思つただ  
「どうする? キナリスにはもう来ないぞ」

シキが足元の草をかかとでしきる。キナリスはシンカを殺そつとし  
ていた。

もう一度とあの都には立ち入らない。

#### 4・いぐつかの友情⑥

「ヨレ、ゼ。」ジ・ココリ山莊、今も野生のコンイラがあると思つ

「思つて、お前」

「行つたことないからさ。俺だつて。でも、あるはずなんだ。ジ・リコリ山のこの地下から、あの毒素が流れ出たんだ。もつとも毒の強い地域だよ」

「そいつを探つて、精製できるのか?」

「ああ。デイラではみんな、子供の頃からやつてゐるよ。傷薬とかにしてたんだ。明日、明るくなつたら行つ。ここにこても仕方ないしね」

いつのまにか眠つてこんシンクに、そつと自分のローブをかけてやる。

薄暗い夜の闇に、ミンクの白い肌は余計に透き通つて見える。地下を歩くつづけにつけたのだろう、頬に埃のような汚れがついていた。

シンカは拭おうとして、自分の手を見つめた。手も綺麗ではない。

ミンクが持つっていた荷物を開けて、じんじんと中を確認するシンカに、シキは手を伸ばした。

「なに?」

「煙草ないか?」

「あるわけないだろ」

ふーん、と残念そうに伸びをして、シキは再び自分の居場所に戻る。壁を背に、腕を組んで空を見上げた。

シンカは取り出した綺麗な布で、ミンクの頬をそつと拭いている。

「お前ら、単なる幼馴染か?」

「何だよ、単なるつて」

「宿だって別の部屋だつただろ? 深い仲ならそばで守つてやるもん  
だろ?」

シンカが言葉に詰まつた。

「かわいいよなあ? お前がのんびりしてゐなう俺がいただこつかな  
「ま、待てよ! それ、ダメだよ」

「早い者勝ちだらうが」

楽しげなシキの口調にシンカは口を閉じる。  
黙つて、足元の土をかかとで蹴る。

「いやなうさうひとしきよなあ?」

「からかうなよ」

「アドバイスだろ?」

「今は、言えないんだ、……だから。からかうな」

シンカは傍らに横たわるミンクを見つめた。  
時折、悲しそうにゆがむ表情を、あの寺院でも見た。

両親を亡くした。

幸せだったのに、一夜にしてすべて失つた。

それは、レクトの仕業なのだ。

レクトが、何者なのか。

考えたくないが、もし、もし自分の父親だったら。

俺は、どうしたらいいんだろ？……。

「どうした？シンカ」

「つめたい。俺もう、寝るから」

膝を抱えて顔をうずめる少年に、シキは皿を細めていた。

#### 4・いくつかの友情⑦

昨夜、林だと思っていたところは、明るくなつてみると、かなり深い森であった。

うつそうと茂る樹木は季節のせいもあり色濃い緑の薄明かりを三人の足元に投げ込む。風も感じられない。

シキが、昨日見た星の位置から方角を覚えていなかつたら、一步も動けなかつただろう。

足元をさえざる草を、剣で払いながら進む。

「こんな状態で、コントラ見つかるのかよ」

もと軍人のシキは他の二人よりは山道になれているはずであるが、先頭を切るのはなかなか体力がいる。

ぐちもこぼれようものだ。

シンカが言うには、コントラは朝日がよくあたる、南の斜面に生えるといふ。

朝、彼らは山頂から南東の方角の中腹にいた。西に向かつて、進むことにした。

日が、頭上に上がる頃、三人は見晴らしのよい高台に出た。眼下には緩やかに下る山肌、遠くシン川が、きらりと光る。高い場所に来たからか、もう、腰以上の高さの木はない。もつすこし、上に登れば、木はなくなり、草花だけが生息する区域になる。

そこで、コントラを探そうといふのだ。

歩きつかれたミンクは、休憩を要求する。

シンカは、途中で捕まえた野ウサギを取り出した。シキが、さつさと火を起こし、シンカはウサギをさばく。見事に息の合つたすばやい作業だった。

聖帝軍の姿を見ることはなく、追われているのかは、分からなかつた。

「煙を流さないために、こいつをかけるんだ」

葉がついたままの木の枝を焚き火の上に立てかける。

「あ、シキそれ！」  
シンカが気付いて笑つた。  
シキはふふんと目をそらす。

「なあに？変なにおいの煙ね」

シキの乗せた枝の葉は、燻されてじわじわと縮んでいく。  
「煙草にするんだろ」

「ばれたか」

ふざけあいながらも「きはき」といなす一人を、ミンクは木陰に座つてみていた。

「ハハク、もつちよつといひちててひててひるよ、ほり、陽が当たつてる。日差しが強いから、気分悪くなるぞ」

新たな場所に厚みのある大きな葉を敷き詰めてくれた。

「ありがとう。ね、シンカ。楽しそうだね」

シンカは一瞬、言葉を失った。

ミンクの表情が、曇つていて見えた。

「あ、はは、うん。シキって変な奴だよな」

「シキは、ほんとに頼りになるね。ねえ、シンカ、私たちどうなるの？」

ミンクの顔にかかりそうな邪魔な木の枝を手折りながら、シンカは動きを止めた。

間近にあるミンクの瞳に見上げられて、シンカは視線をそらした。

一晩考えていたことを、話すことにした。

「あの、ミンク。俺、考えたんだ。

もし、もしも、ミンクがよければ、ミンクだけ聖帝のところに

ミンクが顔をしかめた。予想できた表情だ。

シンカは続けた。

「そのほうが、安全だし……その。俺、シキとミンクに助けてもらつておいて、なんだけど。俺をいなければ、シキだつてミンクだつてさ、聖帝に保護してもらえる」

「なに言つてるのー？」

シンカは拳を強く握り締めていた。

「そういう、方法もあるから。考えてみて。はは、煙が臭いな」

シンカは何度も瞬きすると、立ち上がった。ミンクの視線から逃れるように背を向ける。

「シンカ！」

シンカは焚き火の方に向かう。

その金色の髪がうつむいて悲しそうなことなど、今まで一度もなかつた。

あのデイラがなくなつた日以来、ミンクの前ではいつも笑っていた。

少年の背中に追いつこうと、ミンクが立ち上がつたときだつた。

「おい、見ろよ」

眼下に山々の見渡せる高台で、シキが叫んだ。

「なに？」

二人が駆けつける。

先ほど三人であつちが何、こつちがデイラだと話した場所だ。

澄み渡つた晴れた空の向こうに美しい街並みや、遠く川のきらめきが見て取れた。

今はその水平線に黒い煙が立ち昇り、上空で風にあおられたそれは地を這うように見える。

「シキ、あれ、国境の方角じゃないか？」

シンカが煙を上げる南の方角を差す。

シキが腕を組んだ。

「そうだ。いよいよか

「何が？」

「キナリスが言つてた。隣国のダンドラが、コンイラを奪つために、戦争を仕掛けてくるかもしないとな

三人は遠い町を想つた。

歴史が動いていく瞬間を感じる。

大きな、どうしようもない流れが、すべてを押し流していくようだ。

「おなかすいた」

「なんだ、ミンク？」

シンカが振り返ると、ミンクとは違う姿が焚き火のそばに座り込んで、ウサギ肉をくわえている。

「なんだ、お前！」

シンカの声に、そいつは逃げ出す。ウサギを持ったまま。すかさずシキが襟首を捕まえた。

小柄な、女の子？なのか、褐色の肌に、少し先のとがった耳、漆黒の髪に布を巻いていた。

布には赤い糸で模様が刺繡され、少女の肌の色に合っている。

吊り上げられ、もがく。

「シキ、下ろしてあげて」  
ミンクがうつたえた。

少女は服装を整えてシキを睨んだ。

「なによ、ウサギはこの山のものでしょ。山のものはみんな平等に分け与えられるべきだよ」

「じゃあ、お前は何かしてくれるのか？」

どうぞ」と、皆の輪に入り、ウサギをしゃぶる少女にシキが言つ。

「何つて？」

「俺は、火をたいた」

シキが自分の胸を親指で指す。

「こいつはウサギを獲つた。お前は何かしてくれるか？」

少女はくりくりした目を、ミンクに向けた。

「シキ」

私も何もしていない、とミンクの目が語る。

「ミンクはいいんだ。病人だからな」  
少女は、そう言つたシンカを見つめる。

「あたし、ガガン。この先の村に住んでるんだ。村に案内するよ。  
それでいいだろ?」

少女は半分馬鹿にしたようにシキをにらんで言つた。

「助かるよ。俺はシンカ。彼はシキ、この子はミンク」  
「ふうん。ミンクもシンカも変わった綺麗な目をしているね」  
興味深々だ。シキには目もくれない。ミンクの服の飾りや、髪の結  
い方が気になるのか盛んにミンクに話し掛ける。

「シキ、シキと同じ肌の色なんだな」

シンカが、焚き火から少しはなれて、煙草をふかす男に言つた。シ  
キは、ちらと少年に目をやると、つまらなそうに煙を吐く。

「俺は、もつと東の民族だ」

「シキも山岳民族なんだ。知らなかつた」

不機嫌を隠さない男に、シンカはどうしたものか迷う。

そういえば、シキは軍隊時代の話や、傭兵の頃の話はしてくれたが、  
自分の家族や生まれたところの話はしていない。だれでも、言いた  
くないことはある。

「村に行つて、どうするつもりだ?」

そう言つて、シキは煙草をもみ消した。

「コンイラの精製に必要な鍋と、布をひとつもらおつかと思つて」

「それなら仕方ない。行くか」

「シキ、シキが行きたくないなら、俺一人で行つてくれるよ

「それはできない」

こんなに無愛想なシキは初めてだつた。大体どんなときも、シキは  
笑つていた。

「村では、コンイラのことは言つた。山岳民族はコンイラを使わない。逆に、コンイラを使うものを悪く思つてゐる」少し遠い目をして、シキが言つた。シキの経験してきたことのほとんど何も、俺は知らないんだな。

そんな風に、シンカは思った。

こうして、一緒に旅をして、守つてもらつてばかりだ。

「分かつた。コンイラを人間が使い始めた頃、副作用で家族を亡くした人々の中には、コンイラを憎んで、決して使わないと決めた人たちがいた。きっと、彼らの末裔なんだろうな」

そう、シンカが言つと、シキは黒い前髪をかきあげて、目を細めた。「昔はそうだったかもしれない。だが、今はちがうさ。彼らだって、コンイラをうまく使えば、病氣から逃れられると知つてゐる。だがな、コンイラを使つには、国に高い税を払わなくてはならない」

「税?」

シンカは、知らなかつた。

「貧しいからこんな山に追いやられる。貧しいから病氣になつても薬がない。シンカ、覚えておけよ。そういう民族が聖帝國の人口の半分以上いるんだ」

「半分も?」

「だからさ、彼らはコンイラのない生活を受け入れているんだ。俺も同じだ。五歳のときに一回コンイラを受けた。その後両親が戦争で死んで、俺にはコンイラを手に入れる金なんかなかつた。いつか大氣の病にかかるとしても、今生きるかどうかのときにそんなことは気にしていられない。成人して軍に入つてコンイラを受けられたと分かつたときにも、うれしくなんなかつた。結局、いまだに『コンイラのしづく』を飲んでいない。あの、五歳のとき以来な。」  
うつすら笑いを浮かべて、はき捨てるように告白する男を、シンカは見つめていた。

「体は大丈夫なのか?」

大氣の病。それはコンイラを飲めなければ確實に体を侵す。シンカが心配そうにシキの表情をのぞく。

「大氣の病は緩やかに進む。俺も三十五だからな。後数年で目が見えなくなつてくるだろう。」

「それでも、コンイラはいらないの?」

シンカにはわからない。子供の頃からあたりまえのように目の前にコンイラがあり、大人の目を盗んでは傷薬などにして遊んでいた。政府に反発することと、コンイラを憎むこととは違うのではないか? 「シキ、もし俺があの子の村で、コンイラの精製方法を教えたらどうする?」

「...」

「いやな人は使わなければいい。だけど、あの子のように、小さい子が、選択の余地なく病気になるのを見過ごしていいのかな。

野生のユンイラを見分けて、精製する。そうすれば、国に操られることもないし、病も防げるじゃないか」

「俺は、いらないからな」

男は、悲しげに微笑んだ。

「シキ」

膝を抱えて考え込む。シキが、少年の頭に手を置いた。

「お前が悩むことないだろ」「う

「けど、人を助ける方法を知っていて、助けないのは良くないと思うんだ」

シキが病に侵されるのを、ただ、見守ることはできない。

「助けを望んでいる奴は、助けてやれ。助けてって言わない奴は、

そいつが悪いんだ」

そう言って、シキはにやりと笑った。

シンカは膝に顔をうずめる。

一方でミンクのためにユンイラを求め、一方でシキはいらないとう。俺は一人とも元気でいて欲しい。

ミンクは、Jの褐色の肌の少女に、なんとも言えない可愛らしさを感じていた。

言葉遣いや動作は荒っぽいが、素直な表情がぐるぐる入れ替わる、大きな黒い瞳に、吸い寄せられるようだ。

「あたしはね、この山のもう少し向こうに行つた、ほら、あっちの草原。そこの村に住んでるんだ。」

よくよく見ると、小さく家らしき影が見える。

「ガガーンは一人でここまで来たの？」

「ううん。違うよ。グラン・スーと一緒に

「グラン・スー？お友達？」

たずねると、黒髪の少女は、瞳をくづくづさせて、あたりを見回す。

「ううん。お母さんのお母さん」

「お母さん、お母さん？」

ミンクは繰り返す。そんなの聞いたことない。

「途中までそばにいたんだけど、どうかいつかやつたみたい」

「お母さん、お母さん」

ミンクはまだ、じだわつてこる。

「ねえ、それより、どうしてミンクは白い髪なの？赤い眼をしているの？」

「え、うんと、私……」

「どうしよう。言つてもいいのかな？」

「ガガーン…そんなところで何をしているのじゃ…」

突然、しゃがれた怒鳴り声が聞こえた。

振り向くと、麻で織られた衣装をつけた、黒髪の老婆が立っている。腰には小さな籠を下げ右手に杖を持つてこる。

「グラン・スー？」

駆け寄る少女。

シキとシンカが、いつのまにかミンクの左右を固めている。

少女は、老婆に向やら叱られている。老婆は一通り小言を並べ終え  
ると、少女には見向きもせず、こちらに向かつてきた。

「すみませんな。旅のかた。あの子が何か迷惑をおかけしません  
でしたか」

見合わせるシキとミンク。

「いえ、別に。たまたま、ウサギを焼いていたところに通りかかつ  
て、お腹がすいているというので、誘つてしましました。  
こちらこそ、すみませんでした。」心配をおかけしてしまって  
ミンクが丁寧に話す。

老婆は、しげしげとミンクの姿を眺める。

田がよくないのか、細めたり、見開いたりしている。

「あの、俺たち・・」

言いかけたシンカを止めて、老婆が大声をあげた。

「誰か、来ておくれ！怪しい奴じや！悪神スー・ラの使いじや！  
慌てて、逃げ出せうとする老婆。ガガンを引っ張つて、村のほうに  
逃げていく。

「何？」

あつけにとられるシンカとミンクに、シキが説明する。

「・・多分、あの村ではコンイラを忌み嫌っているんだ。  
だから、コンイラの神、スー・ラを悪神と呼ぶ。きっと、そういう田  
族なんだよ。

昔からの言い伝えか何かで、コンイラの中毒になつたものが、ちょ  
うど今のミンクのような白い髪、赤い瞳だつたつて知ってるんだ」

「・・・失礼ね」

私を見て逃げたつてこと？ガガンは綺麗だつて言つてくれたのに。  
変なの。

ミンクは頬をふくらと膨らませた。

「お出迎えだ。どうする、シンカ」

シキが、周りを遠巻きに囲んでいる村人に気付く。

「うーん。鍋、欲しいんだ」

「とつつかまるぞ」

「話して分かつてもらえないかな」

ミンクが言つ。

だつて、別に私は悪者じゃないし。それに、ミンクはグラン・スーの存在が気になった。

「じゃ、行こう」「う

シンカがミンクの言いなりになつて、三人の行動が決定した。

「俺は暴れるぞ？」

シキが非難がましく言つ。

「こざとなつたら俺だってやるよ。けど、鍋もりつまでは我慢しよう

シンカがなだめる。

三人は、村人におとなしくついて行つた。

小さい村には、木で作られた平屋建ての建物が三つ立っていた。この建物に、家族が十組くらい住んでいるらしい。長い形で、一部屋に一家族という風だ。

その建物の真ん中に、集会場のような丸い建物があり、そこに三人は連れて行かれた。

どこも、山で手に入る材料だけで作られている。質素で、素朴だ。

集会場（と、勝手に決め付けていた）の真ん中には、シキと同じくらいの年の男が座っていて、そこに村人たちが三人を立たせる。シンカは不思議に思っていた。彼らを捕らえるときから、皆、無言だ。代わりに手振りでなにか合図めいたことをしていた。

ちらちらと、横に立っているミンクを見る。彼女の視線も、あちこちを見回している。

目が会うと、にこりとする。シンカも目配せを返す。

シキは、手を動かして、何か真剣に田の前の男を見つめている。

「シキ、それ、会話してんの？」

シンカが気付いた。

「まあな。この村は、通常会話はみんなこの方法らしいんだ。」

「意味わかる？」

「なんとかな。」

ミンクが感心する。

「シキ、すごい！城でバシバシ兵隊やつつけたときもすごいと思つたけど、今度は尊敬するすごいだわ！」

「そんなんにすごかったの？」

シンカがたずねる。

「うん。すごい怖かったの。」

「ふつー吹き出すシンカ。」

「黙れよ。」

ちょっと、むつとして、シキは一人をにらんだ。

声を出して会話する三人を見て、周囲にいた村人は少しづざわざわと手で会話する。

「仕方がない。」

シキと手で会話していた代表の男が、話した。初めて、村人の声を聞いた。

三人のうち二人が、手話を理解しないと分かり、声を使って会話することにしたらしい。

「私は、この村の村長。ハン・ルクという。お前たちの名前はいま、この男に聞いた。

この村の大半は、まともに声が出せない。だから、通常は声を使わないようしているのだ。」

「鍋が欲しくて、山に迷い込んだそうだな。」

微妙なところが通じていないかも知れない、とシンカは思った。  
「はい、鍋をひとつ譲つていただけたら、俺たちはすぐ、出て行きます。代わりに、これを差し上げます。」

シンカは、懷から塩の石、つまり岩塩を取り出した。小指の先ほどとの小さな塊を、一袋分。旅に塩は必需品だが、いつの間に手に入れたのか？シキは首をひねる。

魚屋にでももらったのか？

「塩か。よいだろう。我らにとつて塩は貴重だ。」

「だまされではないかんぞ！そやつらは悪神スー・ラの使いじゃ、その娘の姿がそれなのじや！」

事の成り行きを見守っていたグラン・スーが叫んだ。  
つかつかと、村長の横に立ち、三人を睨みつける。

「なぜ、悪神の使いだなんて思うんです？」

ミンクが言つた。悪者にされるのは本当に、腹が立つ。しかも、容姿のことだから、余計にいやだ。

一応デイラでは可愛いほうだったんだから！

「・・ああ、ミンクを怒らせいやだめだよ。」

小声でシンカがつぶやく。

怒るとすぐく、早口になつて、口論では負けない。普段おつとりしてこるからそつは見えないが、けつこつしつかり物事を考へているんだ。

「お前の、その髪の色、瞳の色。それはコンイラの仕業によるものじゃ！」

「・・この村ではコンイラを使つていなんですね。」

ミンクは村長に話しかける。

「ああ、やうだ。」

「では、なぜ、私の髪の色や瞳の色がコンイラの仕業だつてわかるんですか？」

コンイラを使つているふもとの町の人たちだつて知らないのに？

「あ、いや、その。グラン・スーが昔から伝わるところの。」

今度は、グラン・スーに質問する。

「グラン・スー。あなたは見たことがあるの？」

「わしは、・・わしもわしの親から聞いたのじや。」

老婆は、落ち着きがない。

「この、コンイラのない村で、どうしてあなたは長生きしているの？」

ミンクの言葉に、集会場はしんとなる。

「コンイラのない村では、人は五十歳まで生きられない。グラン・スー。あなたはどう見ても、

五十歳は過ぎてこるわよね。」

「わしは特別なのじゃ！」

「どう、特別なの？まさか、」

「ミンク！そこまでにしておけ！」

シキが、あの怖い表情で、止めた。

「だつて！」

「お前のいいたいことはもう、分かつたから。みんな、伝わっているよ。」

シンカもなだめる。

「ここで、コンイラが禁止されていようが、どんな神様を信じていようが、俺たちが干渉することはないよ。

ミンクが悪い神様なんかじゃないことくらい、承知しているし、その姿も可愛いと思うよ。」

シンカの言葉に、ミンクは照れて頬を赤くする。

「お、やるなシンカ。」

シキがからかうから、余計にミンクはおとなしくなった。大きな声を出したことが恥ずかしいようだ。

「あの、すみません。我らも、別に、コンイラを怖がっているわけではないのです。ただ、必要ないと思つてゐるだけで。グラン・スーは昔の人だから、どうも過剰に反応するんです。」

村長が、詫びた。

グラン・スーはミンクの言葉がこたえたのか、黙り込んでいる。その横で、ガガンが、くりくりした瞳でミンクとグラン・スーを見比べている。

「いえ、こちらもすみませんでした。」

シンカが、ミンクの肩に手を置きながら微笑む。

村長は、ほっとしたようで、お詫びに、村で一晩休んでいってくれといった。

三人も、喜んでその好意に甘えようと決めた。

夕食を「」馳走になつて、三人はいい氣分で割り当てられた部屋に戻る。

部屋は、木の壁に刺繡を施された布が一面に張られ、まるで、アストローデの生地職人の家にいるような氣分だ。シンカには少し懐かしい。

部屋には、先客がいた。

ガガンだ。

「「」めんね。勝手に入つて。」

少女は、部屋の真ん中の、小さいテーブルの横にちょここんと座つていて、可愛らしい。

「どうしたの？お家でお母さんが心配するわよ。」

ミンクが笑う。

「大丈夫。うち、お母さんいないの。早くに死んじゃった。」

「そうか。じゃ、グラン・スーとお父さんと暮らしてるんだ？」

「うん。あのね、お母さん、ミンクと同じだった。」

酒はないかと物色していたシキも振り返つた。

「あのね、グラン・スーを怒らないで欲しいの。」

「聞かせてくれるかな？ガガン。」

シンカが懐から、小さな飴玉を取り出して、ガガンに渡す。ガガンは一瞬驚いていたが、同じものを口に含むシンカやミンクを見て、おそるおそる口にしてみる。

「おいしい！」

「港町の市場で買つたんだ。白花の蜜が入つてゐるんだ。」

「ありがとう。あたしのお母さんはね、生まれたときから、ミンクみたいに白い髪に赤い目をしていたの。」

それはね、グラン・スーが、間違えてコンイラを食べちゃつたからなんだ。

そのときグララン・スーのお腹にいたお母さんに、その毒が入つてしまつて、それで、お母さんはあんまり長く生きられなかつたの。あたしが産まれてすぐに、死んじゃつた。グララン・スーはすぐ后悔しているの。

自分がコンイラを『えたために、早く死んでしまつた。しかも、自分でなかなか死なないつて。』

ミンクは、見開いた目を、すでに潤ませている。

「そうだつたんだ。ごめんな。俺たち知らなくてさ。」

「ごめんね。」

ミンクの瞳から涙がこぼれる。

「ううん。あたしも、今日のはグララン・スーが悪いと思つもん。あたしは、ミンクを見て、お母さんってこいつ感じだつたんだつて、思つた。うれしかつたよ。」

ミンクはたまらず、少女を抱きしめた。

「最後まで言わなくてよかつただる？」

シキがぽつりと言つ。

何も言えず、うなずくミンク。

そういう姿も可愛いと、シンカは思つ。

「あつたぞ！んー、ちと匂いがきついが、まあ同じだひつ。」

部屋の隅の棚から、シキは酒瓶らしいものを引つ張り出した。

「シキ。」

「それ臭い。」

シキをのぞいた全員が、鼻をつまむ。

「大丈夫だよ。」

コルクのふたを開ける。

「うわっ！」

シンカがあまりの匂いに声をあげた。すでに、酔つたのか頬が赤い。「飲むなら外行けよ！」

「お前も來い。つきあえ。」

嫌がるシンカを無理やり引きずつて、シキは外に出て行く。女は女

同士、話も合つだらう。

鼻をつまんだまま一人を見送ったシンカは、改めて、ガガンとおしゃべりをはじめた。

「なあ、シンカ。お前、お父さんは知らないって言つたな」集会場の外にある木のベンチに座つて、シキはその、ものすゞい匂いの酒を、「じぐ」く飲んでくる。

「……匂い、気持ち悪いよ。シキ」

「匂いはきついが味はなかなかだぞ」

しつかり肩をつかまれてるので逃げ出そうにも逃げ出せない。シキは、シンカの瞳を覗き込み、もう一度質問をする。

「お前、自分が何か特別だつて知つていいか?」

「うん? デイラではそんなふうにも言わっていたよ」シンカは、視線をそらす。

「キナリスにも言われただろう?」「あの、不快な馬車のたびを思い出す。

「あんな奴の言葉を信じるの?」

「キナリスは、お前の話が信じられずに、拷問にかけたって俺に話した」

「……それで?」

足元に視線を落とし、シンカはシキを見ようとしない。シキは、再び酒をあおる。

「俺はそこでぶちきれかけていたしな。耳が変だつたかもしれん。あの時、お前は平氣だつたとキナリスは言つたんだ」

「それは……、痛かつたさ。つらかつたよ」

シンカは痛みを思い出していた。焼きじてを背中に当てられたときの、あの激痛。自然に険しい表情になる。

「でも、傷が残らない。と。治つてしまつといつていた」

「それはさ、だれだつて、自然に治るだろ? 時間はかかるけど」

そこで、シキは小さくため息をついた。

「お前は、俺たちが駆けつけたとき、傷ひとつなかつたよな」

「……化け物とでも言うのか? あの皇帝はそう言つていたけどな。それで、手に余つてウンイラで殺そつとしたんだ。……残念。それも平氣だ」

「シンカ?」

シンカは黙り込んだ。

皮肉に浮かんだ一瞬の笑みも、今は消えている。

「昔からそうなんだよ。どんな傷もすぐ治る。母さんには人に言うなって言われていたから、隠していた。だつてさ、ただでさえ姿が

皆と違うんだ。それ以上、変な奴だつて知られたくなかった」

急に顔を上げ、シンカがこれまでにないくらい真剣な表情で、シキに頼む。

「ミンクには黙つていて欲しいんだ」

「あの子だって、俺と同じで、お前を化け物扱いなんかしないぞ」

「……どうだか」

ゴツッ！

シキの拳がシンカの額にあたる。痛い音だ。

「いてつ！ 何すんだよ」

「信じろといつたろ？！」

シキは怒っている。

「何だよ、なんでそんな怒るんだよ」

「俺は、お前を信じて、キナリスを裏切つてここまで来た。お前がどんなだらうと、俺の知つているお前を信じてこる」

シンカが、見開いた青い瞳でシキを見ている。

「なのに、お前は俺を信じないのか？」

「ごめん。信じてるよ」

「じゃあ、いいじゃないか」

「？」ミンクに言えつて？

シンカは頭一つ分背の高いシキを見上げた。

「一杯くらい飲んでも」

シンカはそこで初めて気付いた。シキは、酔つている。

いつから、どこからおかしいのが分からぬけれど、多分、信じる信じないあたりから記憶には残らないだろ。

「いやだよ。ばか。もう、匂いで十分酔つているよ」

笑い出すシンカ。

「へへへ。」

シキも笑う。

翌日、シンカは、村の集会場の外にある、木のベンチで目がさめた。背中が痛い。気付くと、ベンチの下、つまりシンカの足元に、シキが眠っている。

あきれるよ。恥ずかしい。

あれから、シキと何を語ったのか覚えていない。とにかく、匂いが強烈で、何も考えられなった。

考えられなくて、よかつたのかもな。

ふと笑う。

今まで、自分の中で、隠していたこと、いやだと思っていたこと。そういうことを、すべて「それでいいんだ」といつてもらっている気がする。

だから、シキのそばにいると心地いいのかもしれないな。

涼しい朝の空気を吸つて、大きく息を吐く。気持ちのいい朝だ。鳥の声を聞きながら、部屋に戻るとミンクはまだ眠っていた。

室内はいつかミンクに上げた白花の香水が香り、様々な模様の布の中に包まつて眠る少女は幻想的ですらある。

一人残したら、きっと悲しむ。

でも。シキがいてくれれば。

「信じないのか」そう言つたシキの言葉を思い出す。

お前がもたもたしているならもう、そんな冗談も言つていた。冗談か？

違うかも。

ミンクは、やっぱり可愛い。

じつと見つめていたシンカはポソリとつぶやいた。

「…やつぱり、やめた」

ミンクを誰かに取られるなんて許せない。たとえ、シキでも。

「止めちやうの？」

「えい、やめ……ミンク、起きてたのか！？」

シンカは二つのまにかミンクの頬を手で包んでいたことに気が付いて慌てる。

「止めちやうの？」

同じ質問を繰り返す少女は瞳の色に映える朱色の布を肩にかけたまま、起き上がる。

不安げな様子にシンカは笑った。

「ああ、止める。ミンクを安全などに置いていいのが、思つてたけど。止めた。悪いけど、一緒に連れて行くから」

「あ、止めるってそういうこと？」

「え？ なんだと思つたんだ？」

ミンクは頬を赤くして拗ねたように視線をそらす。

「なんだよ？ なんだと思つたんだよ？ なあ！」

「なんでもないもん！ もう、いいから向こうに這いつてよ！」

口調とは裏腹に布に顔を隠そうとする。真っ赤になつて、何を想像したんだ？

「なんでもないって言われると氣になるだろ？」

「やだやだ、言わない！」

「言えつてば」

「やだ！ するじよ、言わないもん！」

「…キスしていい？」

「！ ！ ！ ！」

まん丸に見開いた目に半分涙を浮かべてこむミンクに、シンカは笑い出した。

「くく、あはははは！」

「男のそういう想像力は逞しいんだからさ。わかんない分けないだろ？」

「い、意地悪……」

「それとも眠ってる間が良かつた?」

「シンカ!」

だめだ、やっぱり手放すなんて出来ない。

しつかりミンクの唇はいたぐりにして、シンカは覚悟を決める。  
そばにいるからには護らなければ。

シキは、村長と話をし、鍋をひとつもらって戻ってきた。  
一夜の仮宿を出ようとしたところに、ガガーンがグラント・スーを連れ  
てやってきた。

ミンクはなんと言つていいか、わからない顔をしていた。

「お別れを言いにきたの。あたし、ミンクにあえてすごいうれしか  
ったよ。一緒に旅して、いろんな町を見てみたいって思った。でも、  
あたしにはグラント・スーがいるし。お父さんもいるし」

「うん」

ミンクがうなずいた。やさしい笑顔だ。

「また、こつでも来てね」

ガガーンとミンクはそつと抱き合つ。

「その」

今まで黙っていたグラント・スーが口を開いた。

「すまなかつた。わしは、どうも、その、どうかしていたんじや」

「いいえ、こちらこそすみませんでした。事情もわからないのに、  
ひどいこと言つてしまつて」

ミンクが笑つて手を差し出した。

老婆は恐る恐るミンクの手を握った。痩せたしわのある手は弱々し  
く冷えていた。彼女の生きてきた時間がそこに見て取れるように思

い、ミンクはぎゅと握り返した。娘を思い出しているのだろうが、グラン・スーの濁りかけた小さな黒い瞳には涙が浮かんでいた。

「また、いつでも来るがよい。歓迎するよ。あの子が生き返ったようじや」「

「はい。ありがとうございます」

シキにはミンクが少し大人びたように見えた。

ガガンの村から半日ほど山を登つたところで、シキが休憩を要求する愚痴を始める。なだめでこらつちにシンカがコンイラを見つけた。コンイラは、薄い緑の色の葉で、根から伸びるまっすぐな太めな茎に四枚が対に生える。

茎には細かい毛が生え、その先から粘液を出すため、人によつては皮膚がかぶれる。

茎には触らないように、器用に葉だけを切り落とし、沸かした湯にさっと浸す。

色が薄紫に変わつたところを水で冷やし、細かく刻む。

粗い布にくるみ、ぎゅつと絞る。青い滴がいくつか落ちる。

これを繰り返し、以前もらったコンイラの小ビンに一杯になるまでためた。

「この沸かした湯に、青い輝石が必要なんだ。この首飾りにはね、青い輝石と、金、銀、水晶とがちょうどいいバランスで使われているんだ。ミンクのお守りになると思つてわ」

シンカはミンクにあげた首飾りをそのまま鍋に入れている。

無理をしなくても女を幸せにできる性格、シキはそう評してシンカをからかう。

常に相手のことを思い遣つてゐるから、その行動が後になつて生きてくる。運がいいというのは、こういう事なのかもしない。

## 6・知らなかつた世界

デイラの跡地には、建物と呼べるものは一つも残っていない。あの悲劇から、十一日が過ぎようとしていた。

四日目の雨で、灰や土砂が、シン川に流れこみ、美しい川はにじりつていた。デイラの真ん中を流れているその大きな川にかかる橋も、崩れたままだ。

朝、まだ夜が明けきらない青白い風景の中、瓦礫の野原は黒い影を落とす。

その中を、一人の男が立っている。瓦礫の一部のように動かない。男は、濃い金色の髪を短くしてて、白く鈍い光を反射する変わった服を着ている。年齢は、四十歳くらいか。

背が高いので小柄とはいえないが、あまり、体を動かすことをしていたとは思えない体型をしている。

男が立ち尽くしている場所には、小さな木の棒が地面から突き立っている。三本。

その一つに、白い真珠をあしらつた首飾りがかけられていた。

港町、アストロードまで戻つて来たあたりで、シンカたちは、帝国軍の兵が、町のあちこちにいるのを見かけた。

一応、お尋ね者の三人は、コーン姉さんのいる酒場によることはせず、あまり馴染みのない町外れの宿に夜のうちにもぐりこんだ。コーン姉さんに迷惑をかけるわけには行かない。

デイラのことも、三人のうわさも知らない港町の人々は、遠い町で起ころっている戦争のために、帝国兵が来ているのだろうと感じていた。

宿屋の主人も、「ここんとこ、戦争だなんだで物騒だからね。お客さんたちも、いざというときは自分で自分を守つてもらわんとなあ。ま、お兄さん強そだから大丈夫だろうけどね。どうせなら、帝国軍の兵隊さんたちも、この宿に泊まつてくれればいいのに。安心だし、儲かるしねえ。野営なんかしないでさあ。」

などと、客がくるたび話し掛けていた。客から何か情報が入ることでも期待しているのだろう。

こういう時には、宿屋は情報が行き交う場所となり、傭兵時代のシキはそれをよく利用したという。

だから、港町キャストウェイの宿屋の酒場で馴染みになっていた。ま、こんな辺境では、旅人も少ないから、あてにはならんけどな。そういうながらも、夕食の後、シキは一人で酒場に行き、さまざまな情報を仕入れてくれた。

一部屋に集まり、デイラに入る前に確認する。

「まずな、デイラに資材や木材、鉄の鋳造の機械なんかが運び込まれていてるらしい。

町の人間は、国が、ここに基地でも作るんじゃないかとうわさしている。

多分、ユンイラの精製工場再建のためだろう。デイラには、帝国軍がうようよしているつてことだ。入るのも難しいかもな。」

「今城壁はかなり崩れてるしさ、目立たずに入れる場所はたくさん知っているよ。大丈夫。そこは任せてくれよ。」  
シンカが請合づ。

「次にな、十日くらい前に、変わった客が泊まつたって言つんだ。四十歳くらいの男で、変わった服装で、背が高い。デイラのほうに旅立つたまま戻つてきていな。」

シンカは、身を乗り出した。

「レクト？」

ぞくつと気分が引き締まる。

「いや、一人きりで、金色の髪をしていたらしい。レクトは確か栗色の髪だつたよな。」

うなずくシンカ。

「レクトのことは、あのデイラが襲われた日に町の人間が見ていて、けつこう印象に残つていたらしい。人数がいたからな。目立つよ。なんでも、街中で喧嘩していただのなんだのつて。だから、レクトなら、町の人間もわかつたと思つんだ。」

「そ'うか。」

残念そうな複雑な顔をしたシンカを、じつと見つめてシキは言った。

「なあ、お前、なんか隠してないか？」「・・え？」

## 6・知らなかつた世界2

田の前の黒い切れ長の瞳ににじまれて、シンカは田をそらす。そらした先で、今度はミンクの視線とあつた。

「隠してるので？」

「え。」

「なあ、シンカ。おかしくないか？」

「なにがだよ。」

「だつてよ、お前の話だと、街を破壊したのは空を飛んでた黒いものだろ。」

シンカはうなずいた。確かにそつだつた。

「じゃあ、レクトたちがわざわざ、お前に案内せせる必要があるのか？」

「・・・。それは、俺も知らないよ、理由なんか。」

シンカは、少しそむつとして、伸びた前髪をかきあげた。

「お前、全部話していないだろ。」

シキがにらむ。

もう一度つむれやうに、金髪をくしゃくしゃする少年の手を、シキがつかんだ。

「なんだよ、放せよ。」

「お前こそ、話せ。」

強引に手を振り払つて、シンカはため息をついた。

「わかつたよ。何で案内させたかは、分からぬけどさ。・・俺、父さんだと、思つたんだ。」

「なに？」

「・・俺、子供の頃から父さんになくてや。」

ミンクが傍らでうなずいた。

「俺が、三歳とか五歳とか、とにかく小さい頃に、遊んでくれたんだ。レクトが。」

「・・はあ。」

予想外の話だつたためか、シキは気の抜けた表情になつてゐる。

「あたしも、覚えてる。一緒に林で遊んだよつな。」

「うん。その人なんだ。けど、あの頃母さんは、あの人はお父さんじやないのつて言い張つてたし。本当のこととは分からぬ。」

シキはコップに麦酒を注いだ。

「で、お前、確かめたのか？お父さんがどうか。」

シンカは、首を横に振つた。

「そんな余裕なかつたんだ。俺のこと捕まえようとするし、街は黒いのに攻撃されてたし。」

「・・お前に、会いに来たんじゃないのか？」

「母さんには、会つたらしい。よく、分からぬ。だつて、逃げよつとした俺を変な武器で撃つたんだ。」

お父さんが、そんなことするのかな。それに、・・『ティイラと一緒に、母さんを殺したんだよ？』

痛いほど握り締めていた拳に、ミンクがそつと小さな手を添えた。

シキは、目を細めた。

「お前、自分のお父さんが街を破壊したつて、そう思つて、言わなかつたんだな。」

「・あいつは、父さんじゃないよ。」

また一口、酒を飲み込むと、黒髪の大きな男はにんまり笑つた。

「うそつくなよ。お前、そう思い込もうとしてるだけだろ。本心では、お父さんだといふと思つてる。」

「そんなこと、思つてない！」

「・・どんな親でも、生きててくれたら嬉しいもんだろ。いないと、あえないと思つてた父親が、生きて田の前にいたら、それは嬉しいだろ。」

シンカは、黙つた。

「分かる気がするな。」

ミンクが、ポツリと言つた。

「生きていてくれれば。」

その大きな赤い瞳が、涙をためる。

ミンクは、両親を「くしたばかりだ。しかも、それは、レクトがやつたんだ。

シンカは目をつぶつた。

どう、思つていいのか、分からなかつた。

いろんな、感情がうずまいて。どれが本当の自分の気持ちなのか、よく分からない。

「あ、とにかく、探し出すしかないな。」

「うん。」

シキとミンクがうなづきあつて、うつむいたままの金髪の少年を見つめた。

「余つてから、話してから決めろよ。きっと他の時には、何が本当か分かるぞ。」

「・・・」

うつむいたままの、シンカを横目に、シキはミンクを手招をする。

「あんな、ミンク。」

「なあに? シキ」

シキは、にやにやしている。やけに小声で、でもシンカに聞こえるようにミンクの耳元で言つた。

「面白こと聞いたんだ。シンカ、この街でかなり遊んでたんだぜ。」

「

「一何だよ、シキ!」

驚いてシンカが顔を上げた。

「シキは酔っ払ってるんだ！本氣にするなよ、ミンク。」

シンカが睨む。

シキはにやり。

ミンクは一人を見比べながら、酒のビンにコルクを詰め、酒場から持ち出された魚の干し物をシキのほうに押しやる。

「お前のこと知ってるって、酒場の女が言つてたぜ。」

慌てるシンカ。ミンクの頬がふくつと膨らむ。

シンカはやめろといわんばかりに、テーブルの下でシキの靴をける。

「それにな。この宿屋の娘が、ほれてるんだと。」

「俺、何にもしてないって！」

「シンカ！」

「そうか？俺は真剣に聞かれちまつたぜ、一緒の女の子とはじついう関係なの？ってな。お前、ちょくちょく町の港や酒場に入り出していたつて言うじゃないか。」

シキが女口調を真似る。気持ち悪い。

「俺、知らないぞ！確かに酒場とか、遊技場とか闘犬場とか行って遊んだけどさ！」

ろくなこと調べてこないな！シキは！

「ま、色男はにくいね。歩くだけで女を泣かすってか？」

「私、もう寝る。」

ミンクが立ち上がる。

「ミンク！」

慌てて追うシンカを面白そうに見送つて、シキはうまい酒を飲む。

多少は進展するんじやないか？

想像すらも、酒と一緒につままれている。

「まあ、今を楽しめよ。レクトに会つて知る真実が、何だとしたつて、今さら変えられるわけじゃないんだ。」

だったら、悩んだって仕方ない。  
足を組んで、煙草に火をつける。

』

## 6・知らなかつた世界3

「待てよ、ミンク」

「待たない」

ミンクの部屋は廊下の反対側、一番奥だ。廊下をずんずん歩くミンクに扉の前で追いついた。

「あのおさ、本気でシキの言ったの信じてるのか？」

「だつて、遊んでいたつてシンカも言ったもん。それに、小さい時からこの町のこといろいろ話してくれたよね？酒場であつた人の話とか、年上の友達のこととか。なんか、その。皆が噂してたけど、シンカは経験豊富だつて」

「覚えてるんだ」

「だつて、帰つてこない日とかあつたよね？隣だから、シンカの部屋の明かりがつかないとすぐ分かるんだから」

「気にしてたの？」

自然とシンカの表情はほころぶ。

「！……おやすみ」

「！？つて、待てつて」

バン！

木の扉を軋ませてシンカが手で止めるのとミンクが勢いよく閉めるのと同時。

挟んだと思ったのかミンクが「あ」と小さく声を上げた。

「大丈夫！？」

シンカが右手を左手で覆うとごめん、痛かった？見せて、と真剣だ。実際は音を立てたのはシンカの足で、扉が閉まるのをしっかり防いでいたのだが。

心配する顔が可愛くてシンカはつづみいた瞳が長いのをじつと見ていた。

「ごめん、冷やす？ねえ、入つて」

ミンクは慌てて室内の水場で布を濡らす。

「どうしようか？」シンカは両手とミンクの後姿を見ながらしばし考える。

ふと夜風が吹いたことに気が付いて、部屋の奥、開け放たれた窓に向かつた。

宿の一階の酒場は盛り上がりしているようにぎやかな歌や笑い声が聞こえる。一つの月が時折雲間に隠れながらも仲良く並んでいた。上空は風が強いのか雲は流れるように動いていき、まるで日が夜の海を泳いでいるように見える。

「あれ？ シンカ」

「空の上って、どんなかな」

ミンクが首をかしげながら、隣に立つた。

「風が気持ちいいね」

「ああ。ね、ミンク。俺さ、大人になつたら旅に出ようと思つていたんだ」

「旅？」

「そう、俺、父さんを探しにね、旅をしたかった。いろんなところに行くのが好きだし。いろんな人がいる。デイラでは皆が顔見知りで、それはそれでよかつたけどさ、俺はもつと広いところに行きたかった。母さんがね、遠い、俺たちじゃいけないような遠いところにも人が生きていて、俺たちの知らないような生活をしているんだつて、そういうてた。行つてみたくないか？」

ふわりと甘い香りが喉元に漂う。

ミンクがシンカの腕にしがみついて、のぞき込んでいた。

「どうした？」

ミンクの瞳は大きくて、月明かりにつるんと光る。夜のしつとりした空気を吸い込んだみたいに綺麗だ。

瞬きする。

「シンカはね、どこか遠いところを見るの。そういう気がするの」

「ミンクは、……その、一緒にいてくれないかな？ 俺、一人じゃ淋

「……」

「……淋しいから？」

「……違うよ。いてほしいから」

「……わかんなー」

少し拗ねて尖らせた唇。見下ろすと少しだけ胸元が見える。余計に鼓動が早くなる。

「だから、や。ミンクだからねばにして欲しいんだろ？」

「それだけじゃいや」

背に手を回してうつむけば田の前に小柄なミンクのおでこ。キスしてそのまま抱き寄せる。

「それだけじゃ嫌つて、後何が欲しいんだよ？」

「ちゃんと……」

口を塞ぐ。

慌てて押しのけようとすると手も丸」と抱きしめる。白い手が胸元にしがみついている、それも。切なげに身じろぎするのも。もう、どうしようもなく愛しい。

「好きだから、ミンク。ずっとそばにいたい」

ミンクは黙つて頷いた。

翌朝、シンカに起こされて、シキは田がさめた。

港町は朝が早い。だからといって、俺たちまで早起きしなくてよい。まだ暗いじゃないか。

ベッドに横たわったまま愚痴る。

「帝国軍が動く前に移動したほうがいいだろ？」「

シンカはすっかり、出かける準備が済んだ様子で、剣を背負つてい

る。やわらかい金色の

後ろ髪が剣の鞘にはさまれている。気になるのか、はずやつとある  
がうまくいかないらしい。

ここに。体を起こして手招きするシキ。

近づいて、取つてとばかりに背を向けるシンカ。

不意をついてシキがシンカの首に左腕をかけてベッドに倒す。

「じてつ！」

「お前、昨日どうだつたんだよー明け方まで戻らなかつたの知つて  
るんだぞ！」

「起きてたの」

「白状しろ」

もがくシンカを押さえつけのシキの、なんと楽しそうな」とか！

「離せつて。ひらやましいんだろう」

「つまくいったのか？」

「俺を馬鹿にしてんのか？」

そこで、シンカがつと笑う。余裕の笑みだ。

「なんだ、つまらん。いいよなあ、若いってさあ」

しみじみ言いながら、やつとシンカを離す。シンカは余計に絡んだ  
髪を撫で付けて、息を整える。

「自分だつて酒場でしたい放題じゃないか」

「人聞き悪いな、お前！」

笑いながらまた組み付こうとするシキの手をさつとかわして、シン  
カは飛びのぐ。

「感謝しろよ。きつかけは俺なんだぞ」

「面白がつてたくせに、何が感謝だよ」

不ぞろいな兄弟みたいな二人は、ミンクを迎えて行く。

ミンクは銀色の髪を綺麗に結つて、オレンジ色の刺繡模様の入つた

絹のストールをちょこんと肩にかけている。シキにはミンクもまた、大人っぽくなつたように見えた。

## 6・知らなかつた世界4

アストロードから、二時間。シンカは、レクトたちを案内したところより、さらに回り込んだ城壁の奥の割れ目から、町に入った。ここなら、すぐに林に紛れることができるのはずだ。

三人は、荒れ果てた町を見渡して、改めて、破壊の力の大きさを思い知る。直撃を受けたらしい大人の背丈ほどもある深い穴が、あちこちに開いている。

コンイラの畠の跡は、瓦礫が片付けられていて、脇に帝国軍の野営地だろう、テントの群れが見える。

まだ、起きていなか人影は見えない。  
「ひどいな。」

シキは、二人の肩に手を置いた。

改めて、気持ちが引き締まる。残骸が一面広がり、何があつたところなのか、まったく分からぬ。

よく、一人が無事だつたものだ。この惨状を、聖帝キナリスは見たのだろうか？

いや、知らないのだろうな。

見たのであれば、この破壊をシンカがやつたなどと、考えられるはずがなかつた。

この国のどんな兵器の力で持つてしても、不可能な攻撃。火薬を使つても、石壁やレンガを溶かすことはできない。

たくさんの、人であつたものが、この瓦礫のあちこちにある。ひどい異臭がそれを想像させる。

戦場で、いろいろなものを見てきたが、こんなに吐き気を感じるのは初めてだつた。

「母さんのとこ、ちょっと行つていいかな。」

シンカの言葉に、二人は黙つてうなづく。

この、不毛な廃墟で、どんな手がかりが得られるのか、何もないような気がした。絶望感が漂う。自然と、三人とも無言になる。

瓦礫をよけて歩きながら、三本の木が立つた場所、もともと、シン力の家だったところに三人が立つた。

三本の木の一つに、母さんの気に入っていた首飾りをつけておいた。・・・はずだつた。

「あれ、ない。ここに、母さんの首飾りをつけておいたんだ。」

シンカが座り込む。

シキは眉間にしわを寄せる。

「盗まれちゃつたのかな？」

ミンクも、シンカの横にしゃがむ。

「『めん、母さん。一緒に入れてあげればよかつた。』

シンカの声が少し震えている。ミンクがくすんと鼻をすすつた。

背後に、人の気配を感じて、シキが振り返る。同時に、腰の剣に手が行っている。

「おい。」

シキの声に、墓を見つめていた一人も立ち上がり振り返る。

背の高い、金髪の、四十歳くらいの男。うわさの、あの男だとすぐわかる。

想像していたより細い。あまり日にも焼けていない。

「君たちはなんだ。」

そいつが怪訝そうに三人を見つめる。男の手には、小さな白い花束がある。

「そつちこそ、誰だ！」

シキが睨んで、剣を抜く。朝日が、男たちを横から照らす。  
「何のつもりだ。」

男は、腰に手をやる。腰に、何かかかっている。剣ではない。シン

力には、見覚えがあつた。

## 6・知らなかつた世界5

「あんた、レクトの仲間なのか？」

シンカも剣を抜いた。ミンクを後ろにかばう。

「その、変な武器、あの日レクトの仲間が使つていた。」

シキも男の手元を見つめる。

男は落ち着き払つた様子で、シンカを見つめた。

「レクト・シンドラなら、知つてゐる。」

同時に、シンカは飛びかかつた。男との距離は約八歩。

シキも、続く。

ミンクは後ろの瓦礫に隠れる。

男は、飛びのきながら、あの武器で、シンカを撃つた。一瞬だつた。

黄色い細い光が、シンカの肩を撃ち抜いた。

シンカは撃たれた右肩をかばうように転がつた。動かない。

「シンカ！」

駆け寄るミンク。

シキは、シンカを気にしながらも、二人の前の盾となる。

「シンカ？」

男がそうつぶやいて、武器を下ろした。

「きわま！」

シキが飛び掛る。男は武器を腰に戻した。

「待つてくれ！」

相手が両手をあげて、纖維喪失を表現する。

振りかざした短剣を、止めた。

軍人のシキには、丸腰の相手を斬ることができない。

「その子供、シンカというのか！」

剣を男の喉に突きつけても、抵抗する気配がないので、シキも剣を

納めた。

「シンカ！」

ミンクがシンカの体を揺らす。

シキも、剣を納め、シンカの傍らにひざをついた。シキは、落ち着いている。

氣を失っているシンカを、男も見守る。

「シンカ、しつかりして！」

ミンクの泣き声で、シンカはうつすら目を開けた。

「大丈夫だよ。ちょっと、痛いけど……治るよ。」

シキが、シンカの背の鞄を外してやる。少年は小さく息をついた。

「ミンク、シンカはちょっと特殊なんだ。大丈夫だよ。」

血が止まっている。シンカが、体を起こそうとするのをシキが支える。

「多分、傷はもうふさがったよ。」

シキが、そっとシンカの手をどけて、破れた服をめくつてみる。

「ああ、傷はない。」

「本当？ よかった。」

素直に、うれしそうにしているミンクの表情に、シンカは弱々しく微笑んだ。

「痛みが消えるのには時間がかかるけど、つつ……傷だけは早いんだ。」

ミンク、「じめん。だまつていて。」

「ううん。撃たれたときはすごに怖かった。今のは、うれしいすごいなの。」

涙を拭きながら微笑むミンク。シンカはその額に手を当てて慰める。ミンクはたまに変な言葉使うな。

「君は、ロスターの子供なのか？」

三人はすっかり忘れていた男を見上げる。

「そうだよ。母さんを知っているの？」

残る痛みに、表情を硬くしながら、シンカが問い合わせた。男は、近づいて、シンカの顔をよく見ようとする。

シキとミンクがシンカをかばう。

「いや、すまない。君たちがいきなり飛び掛ってくるから。でも、大事に至らなくてよかった。

私はダン・デリストという。科学者だ。」

かがくしゃ？

シキとミンクはは顔を見合わせる。聴いたことのない言葉だ。

シンカが一人を見る。

「知らないの？母さんが、教えてくれた。なんか、いろいろ勉強する人だつて。本物は初めて見たけど。」

「そうだよ。ここ地下に研究するところがあるんだ。」

シキが、不意に立ち上がった。

野営地のほうを見つめる。

「そろそろ、やばいぞ。」

兵が起きだしたらしい。

「ここでは危険だ、研究所にこないか？そこなら安全だ。」

シンカが、二人を見る。

二人とも同時にうなずいた。行つてみよう。レクトにつながる手がかりだ。

ダンに導かれ、三人はデイラの真ん中を流れるシン川の、橋があつたあたりに来た。痛みの残るシンカは、肩で息をしている。ミンクが心配そうに手を添えている。きっと、すごく体力を消耗してしまうんだ。ミンクは思つた。

傷が消えたからといって、治つたと判断するのは早い。体の中はまだ、傷と戦っているのかもしれない。

二人の男の後姿を見つめながら、ミンクは頬を膨らます。

もう、大人一人はぜんぜん気にしないんだから！

## 6・知らなかつた世界6

シン川の水は、あまり多くない。白くにじつた水が、緩やかに朝日を反射しながら流れている。

ダンは、腰につけた機械を操作した。

「ここから入る。」

川の真ん中から、筒状の大きな塊が突き出てきて、とまつたと思つたら岸に向かつて大人一人がとあるだけの幅の、黒いわたり板が延びてきた。

「うへ、なんかなあ。」

シキが嫌な顔をする。

「はじめてみるね、こういうの。」

ミンクがシンカにしがみつく。

シンカは黙つてうなずいた。緊張を隠せない。レクトが、いるかもしれないのだ。

四人はそこを渡り、筒に開いた穴から、中に入つた。  
筒の中は、予想以上に広く、ダンの操作で四人が立つてゐる床」と、下に降りていく。

「怖い。」

しがみつづミンクの肩をシンカが抱いてゐる。その様子を、ダンが見ている。

「なんだよ。ミンクが珍しいのかよ。」

睨むシンカを見て、男が笑つた。

「いや、ロスタンスも同じだつたらう?まあ、見るたびに、デイラの人々は美しいなとは思つが

ね。」

ダンはシンカより少し黄色味のかつた肌をしていて、短い金髪に、茶色い瞳。穏やかな

顔で、やさしそうでもあった。レクトとは正反対に思つ。

床の下降がとまる。機械を操作しながらダンがシキに言つた。

「私のような研究者が、もう、十五人ほどいる。後、ここを守つている兵士も数人いる。だが

が、君たちに危害を加えるようなことは私がさせない。安心してくれ。」

「あの、レクトは、いるの？」

シンカがたずねる。

「ん？いや、彼はもういない。以前は、そうか、かなり前になるのか。ここに来ていたこともあつたがね。」

「そう。」

「あんた、レクトの仲間なのか？」

シキはまだ、腰の剣に手を添えていた。

「私は、レクトの仲間ではない。シンカの母親のロスタネスとは仲間だった。

大丈夫、ロスタネスの大切な子供を危険な目に合わせるわけないだらう。」

「・・分かつた。」

シキはしづしづ、剣から手を放す。

部屋の壁の一部が不意に音もなく開いた。

シキはつい、剣に手が行く。くせなのだ。

扉の向こうには、白くて明るい光の中、通路が先に伸びていた。

この灯りはなんだろう。三人とも、初めて見る世界に圧倒されている。

「ここは、太陽帝国の研究所なんだ。」

ダンが、先頭を歩きながら説明する。

「分かるかな？君たちのいるこの惑星のほかにも、人が住んでいる星があるんだ。」

「わくせい？星？」

ミンクが問い合わせる。聞いたことがない。  
シンカは、うなずいている。

「お前知ってるのかよ。」

シキがシンカに問う。そういえば、歴史にも詳しかった。  
「母さんが、話してくれた。俺、ミンクたちみたいに学校行けなか  
つたから、何でも母さんが教えてくれたんだ。  
この俺たちの惑星はリコードって言うんだ。惑星って言うのは、今、  
この同じ空気を共有しているすべての土地のことと言うんだって。  
だから、他の惑星って言うと、空のずっとずっと上方、夜空に見  
えるあの星のことなんだって。」

「あれに、人がすんでいるのか！」

「全部じゃないけどね。昔のカンカラ王朝にあつたような進んだ技  
術とかがあるんだってさ。」

ミンクは尊敬のまなざしをシンカに向ける。

ダンが、うれしそうに笑った。正確に言うと少し違うのだが。  
この文明レベルにあって、ここまで理解しているなら、上出来だろ  
う。

「私の生まれた惑星リドラは、ここからずっと遠いところにあるん  
だよ。このコード星に一番近い惑星セダまでの距離でも、人が一  
歩きづけてもたどり着かないくらい、遠いんだ。」

ダンが説明する。

「どうやってきたんだよ。」

シキが聞く。

「光分子エネルギーという力を使った宇宙船で来る。とても早いから、ここからセダまでなら4時  
間くらいで着くよ。」

「シンカが言つてた、水が分解するエネルギーっていうの？」

ミンクがたずねる。

「それは、もう少し違うものだよ。」

「すごいな。」

シンカは単純に感動している。

「その船に乗つてみたいな！」

「私、怖い」

「お前ら単純だな。」

シキがぼやく。

「ここだ。」

ダンが立ち止まり、三人も止まった。

通路はそこで行き止まりになつていて、ダンが機械を操作すると、壁ごと開いて、その先が見える。

女性が立っていた。

「ダン。久しぶりね！」

三十歳くらいの女性は、体にぴったりした鈍く光る服を着ていて、赤い髪が肩あたりでゆれている。綺麗な人だ。ダンと握手すると、ダンの頬に軽くキスした。

「いつ帰つてきたの？知らなかつたわ。」

「一週間前にな。君はステーションに行つていたつて聞いたから、すれ違ひだつたな。十七年ぶりか。ずいぶん色っぽくなつたな。」

「ダンはすっかりおじさんになつたわね。」

「ずいぶんだな。」

「ふふふ。会えてうれしいわ。」

首を傾げて笑うくせは、その女性の年齢にしては少し幼いしぐさだ。それがまた、魅力的でも

あつた。

そこでその女性は、三人の存在を思い出したらしい。

「ところで、このリュード人は？」

三人は顔を見合せた。リュード人って呼ばれているのか。

「！・・シンカ？」

女性がシンカに気付いた。

「俺のこと知つているの？」

ダンが、ウインクしながら紹介した。

「ああ、彼がシンカだ。ロスタネスの子。横にいるのがミンク。デイラの生き残りだ。で、後ろの青年がシキ。見たところ、山岳民族だと思うんだ。」

「この人はだれ？」

ミンクが聞いた。

「ああ、ごめん。彼女はセイ・リン。この研究所を警護している太陽帝国の軍人なんだ。」

セイ・リンはシンカをじろじろと見ていく。

ダンは、セイ・リンと別れて、さらに奥へとシンカたちを案内した。鈍い鉄色の部屋が続く。白い不思議な灯りが天井の隅から足元を照らす。

「この先は大勢いるぞ」

そう言って、ダンは扉を開いた。

そこは、白い壁白い光、広い部屋だった。

大勢の大人が立っていたり、機械の横に座つていたりする。みな、白い上着を着ている。

ダンに気付いた一人が、三人を見て声をあげる。

「シンカ！」

「えつ？」

一斉に注目を浴びて、シンカはどきりとする。

## 6・知らなかつた世界7

ミンクがつないでいた手に力を込めるのが分かる。ミンクも驚いている。

若い男性が、かけよつてきて、シンカの肩に手を置いた。すゞくうれしそうに。

「よかつた。無事だつたんだな。心配したよ。」

心配つて、俺はあんたたちのこと知らないけど・・シンカは思った。「ダン、よく見つけたな。」

「いや、ロスターの墓に來ていたんだ。」

シンカたちは、大勢の白い人たちに囲まれてどうしていいかわからず、ただ、一人一人を

呆然と見詰める。

握手してきたり、髪に触れたり、涙ぐんでいる女性もいる。

「あの、何なんだよ。」

シンカの声もうまく届かない。

「もうつ！私たちにも説明してよ！」

ミンクが怒った。

一瞬、シンとなり、ダンが笑った。

「じめんごめん。みんなすまない、奥の部屋を借りるよ。」

にこやかな白衣の研究者たちに見送られながら、四人は奥へと進む。広い部屋の隣に、小さい部屋があつた。

そこには、革張りの大きな椅子のようなものと、ガラスのテーブル、壁に絵のようなものもかかっていて、くつろげるようになつっていた。向かい合わせの大きな椅子に三人を座らせ、ダンは壁にある棚から、飲み物らしきものを取り出してきた。

氷の入つた薄いガラスでできたコップに、淡い黄色の飲み物が入っている。

お腹のすいた三人は、すぐに飲んでしまった。おいしいというのかよく分からぬ味だ。

「お腹すいているのか。すまない、気付かなかつたな。後で、何か作らせるよ。まずは、説明しないとね。」

ダンは、シンカの正面の位置に座つた。

「まず、なぜ私たちがここにいて、何を研究しているかから説明するよ。」

ダンは話し始めた。

この、宇宙には、太陽帝国って言う大きな国がある。そこは、たくさんのが惑星を持つていて、地球人が住んでいる。

太陽帝国は、新しい惑星を見つけては、そこに移住している。

太陽帝国に属さない惑星もある。そのほとんどが、地球人が住めない環境の惑星だ。

惑星はそれぞれ環境が違つ。氷ばかりだつたり、熱くて水もなかつたり。地面がない星もある。

地球人以外のその惑星で生まれ育つた人たちも住んでいたりする。

ダンのリドラ人は惑星リドラの原住民なのだ。

惑星リドラは、このリュードに大気成分がよく似ていた。地球人は住めないとこだつたのだ。

しかし、宇宙図の重要な拠点になりうるリドラ星を手に入れたかつた太陽帝国は、その科学力で惑星リドラを変えてしまおうとした。それは、見方を変えれば、そこに住んでいたリドラ人が生きていけない環境になるということだつた。

そして、さらに悪いことに地球人は、失敗した。

一つの惑星の環境を、根本から変えるなどということは不可能なのだ。

その惑星が今の環境になるには、何億年という時をかけて、なるべくしてなつたのだ。

鉱物の組成、惑星を囲むガスの成分、太陽からの距離、公転軸の傾きや距離、軌道、すべてが複合した結果が、惑星の環境になつていい。それを、表面上変えようとしてもバランスが崩れるだけだ。惑星リドラは、誰も住めない環境になつてしまつた。死の星に。リドラ人は星を追われ、他の惑星への移住を余儀なくされた。リドラ人が生活できる環境のコロニーが出来上がり、地球基準の共有区域で生活するための特殊マスクが完成する

までに、数十億いた彼らは、数千人まで減少してしまつた。

その事実は、すべての惑星政府から非難された。有人の惑星では、その原住民で組織する政府がある。

太陽帝国の支配を快く思わない惑星も多い。そこで、強大な太陽帝国の横暴を防ぐために、「惑星保護同盟」という、団体ができた。そこには、もちろん太陽帝国の皇帝も参加しているが、対等の立場で他の惑星の代表者が参加している。

リドラの事件から、惑星保護同盟は、新しい惑星を発見した場合、まず五十年間の調査をすること。

地球人が移住できる惑星でも、もともとそこに住んでいる人々の文化や歴史を壊さないようにすること、という約束を決めた。

リュードは最近発見されて、今調査の段階だという。

調査団は、大気に適応できるリドラ人で構成されていて、有人大陸に五チーム、無人大陸に二チーム派遣されていた。

「ここまでは、いいかな？」

・・・分かつたような分からぬような。

しかし、そのまま受け止めるしかない。

三人は先を促した。

「ここでの研究はもう三十年になる。」

「このリュードで、私たちはユンイラを発見した。」

三人の表情がこわばる。ユンイラは、ほかの惑星の人にも興味がも

たれるようなものなのか。

「コンイラは、人の、免疫に何かしらの効果がある。」

「免疫？」

シンカが聞く。

「そう、免疫というのは、人が自分の体に入ってきた毒素に対しても、対抗手段をもつ機能のことだ。」

一度入ってきた毒素を、覚えていて、次にまた入ってきたときに、攻撃をする。」

「ふうん。一度蛇にかまれたら次にかまれても平氣つてことか？」

シキが想像している。

「平氣ではないが、攻撃するすべを持っているということになるんだ。しかし、その機能は両刃の刃でね。その生き物が環境に順応するために免疫が邪魔になることもある。」

「順応とは、免疫があることは違つていてね、我々リードラ人が、ここリコードで平氣で息ができることと同じようなことだ。」

免疫は、さつきの例でいうと蛇の毒を有害とみなすことなんだ。このリコードの大氣を、有害とみなして武装してしまった体は、常に戦っていることになる。だから、君たち山岳民族は長く生きることができないでいる。」

「うーん。」

シキがうなる。

「免疫は、生き物には必要なことなので、なくすわけにもいかない。コンイラは、免疫という概念をなくしてしまうんだよ。」

「?順応できるようになる?」

シンカが、言つてみる。

「そうだ。まだ、研究中なのでその仕組みまではわかつていらない。ただ、コンイラを使えば、地球人だろうと、ぜんぜん環境の違う惑星の人だろうと、リードで生きていけるようになることは、分かつていいんだ。」

「そうか。それは、この星の歴史で実証されているんだ。」  
シンカが思いついたように話す。

「環境が変わったここで、人が生きていくためにコニイラが必要だつたように、その地球人がここで生きていくためにもコニイラが使えるってわけか。」

「そのとおり。基本的に、リュード人と地球人は似ている。」

ダンがにっこりと笑う。

「ただ、コニイラ自体は、今この星と、この星の上空にあるステーションでしか栽培されていない。  
なかなか、デリケートな植物でね。まだ、実用化にはいたらないんだ。」

「実用化したら、地球人とやらが、この国に大勢来るのか？そんな物騒な武器をもつて？」

「そう、なるかもね。」

ダンが穏やかに言う。

「そんなの、困るよ。」

シンカの言葉に、ミンクが答える。

「でも、惑星保護同盟との約束があるから。ねえ、大丈夫よね？」

ダンはミンクを見つめた。

「つい一ヶ月前に、太陽帝国は同盟を脱退したんだ。」

「え！」

「なんと言つても太陽帝国は強大だからね。君たちが心配するように、同盟に参加している惑星の人々も心配しているんだ。」

コニイラを使って太陽帝国は、宇宙のすべてを地球人だけにするつもりではないかとね。だから、同盟は、コニイラの研究には反対している。」

ダンは続けた。

「レクトは、今、ミストレイアといつ会社に所属しているんだ。そのミストレイアも、帝国に対抗する組織だな。」

「会社？」

「ああ、同盟だけじゃなくて、いろいろな惑星政府の依頼を受けて活動しているんだ。まあ、傭兵のような仕事だな。」

シンカは拳をぎゅっと握り締める。

ダンは、じつとシンカを見つめた。穏やかな笑みは、不思議と彼らを安心させる。

「シンカ。そういえば、何でレクトのことを知っているんだい？レクトの仲間とか何とかって。

レクトとは昔、仲間だった。彼は、以前は帝国軍の軍人でね。この惑星を含む広い地域を管轄していた。」

「だつて、あいつがデイラを滅ぼしたんだ。」

シンカがうつむいたまま言った。

「君は、見たのか？」

ダンは顔色を変えて、シンカの肩を強くゆすった。

さつきの傷が痛むのか、シンカが表情をゆがめても気にしない。

「見たのか？証拠があるのか？」

さらに強くゆする。その表情は、嬉しそうでもあった。

「痛い、放せよ…」

シンカが訴えるのと同時に、シキが、ダンを引き離した。

「あんた、止めるよ、痛がってるだろー！」

「あ。ああ、すまない。」

あれほど、穏やかな印象だったダンが、違う人間のように思えた。「教えてくれないか。レクトがデイラの破壊に関わったという、確たる証拠があれば、あいつを犯罪者として指名手配できる。捕まえられるんだ。」

「捕まえる？」

「ああ、そうだ。君もロスタヌスを殺されただら、捕まえて、罪を償わせよう！な。教えてくれ。」

シンカは、うつむいた。

「どうした。デイラを破壊したんだろ？あいつが。」

「・・あんた、やけに嬉しそうだな。昔仲間だつたんじゃないのか？」

シキが、シンカの迷いをかばうように、口を挟んだ。

ミンクがそつと、シンカの手を握る。

「レクトはね。冷酷な男なんだ。力もあるし、才能もある。太陽帝国軍にいた頃は、いや今もそうだが、ちょっとした有名人でな。若くして大佐になつて。軍の情報部の将校だつたこともある。」

ダンは、室内を腕を組んだまま行つたり来たりしました。

「あいつは、まあ、大げさだが、宇宙最強の軍神とまで言われたことがあつてね。奴が軍を辞めたことは帝国軍にとつて大きな損失だった。

しかも、なぜか、帝国軍に逆らつかのよつて、民間の軍事会社を立ち上げたんだ。」

「帝国の人間からすれば、裏切り者だ。皇帝陛下もレクトのことは気にしている。きつかけさえあれば、捕らえてしまいたいわけだ。今後の憂いを無くすためにもね。」

不意に立ち止まるど、シンカの顔を覗き込んだ。

「な、教えてくれ。見たのか？」

シンカはぎゅっと目をつぶる。

「なあ、ちょっと待てよ。考えさせてやれよ。」

シキが、ダンの肩に手を置いた。

ダンは、ピクリと眉をひそめた。

「まあ、いいだろう。そもそも、部屋も用意できているだらうからね。ゆっくり休んで、その後でもいい。」

シキの手を振り払つように、肩を引くと、ダンは身を翻して、部屋

を出て行つた。

まだうつむいているシンカに、シキが声をかけた。

「腹減つたな。」

クス。

シンカが笑つた。

「シキつたら。」

ミンクも笑う。

やつとシンカが顔を上げた。

「うん。お腹すいてたら、ちゃんと考えられないもんな。」

「ああ、そうや。」

にやりと笑うシキ。一人は拳を合わせる。

## 7・シンカ

そこに、彼らの会話が聞こえたかのように、食べ物らしきものを乗せたワゴンを従えて、ダンが入ってきた。

ワゴンは、どういう仕組みなのか、ダンが進む方向にゆっくりついてくる。

三人のいるテーブルまで来ると、ワゴンはテーブルの高さにせり上がり、テーブルにぴったりと一体化した。目を丸くして、その様子を見ている三人に、ダンは笑う。最初の印象の、穏やかな研究者だ。

「お口に合うといいが。ロスタネスは気に入ってくれていた。」すでにスープらしきものを口に入れようとしていたシンカが、熱さに舌を引っ込めた。

スプーンを掲げたまま、ダンを見つめた。

「ダンは母さんと仲間つて言っていたけど、どうこうことなんだ?」「ああ、その話もしてあげないとね。」

穏やかに笑うと、ダンはポケットから、あの首飾りを差し出した。

「！それ。」

「君が、ロスタネスの墓にかけてくれたんだろ?」これは、私が彼女にプレゼントしたものなんだ。」

「！」

「ロスタネスはね、デイラで一人暮らししていた。偶然、研究所のことを知られてしまつてね。

でも、彼女は聰明だつたから、新しい世界に前向きな興味をもつてくれた。私たちにとつても、ウンイラの情報を得るためにとても貴重な存在となつた。

当時十八歳だった彼女は、私や仲間の研究員から、いろいろな知識

を得て、二十歳の頃には立派な研究員になっていた。「

「母さんが・・・」

「彼女はね、デイラの人々を救いたかったんだ。私たちとコンイラを研究すれば、デイラの人たちを救えるのではないかと考えていた。彼女には、時間がなかつた。だつて、そうだろう? デイラの人たちは四十歳まで生きられるかどうか。彼女は人生の半

分を過ぎていた。」

「そこで、君に、すべてを託したんだ。」

シンカは見つめるシキとミンクとに視線を合わせた。

「・・俺に、いろいろ教えたのはそのため? 研究者になれつてこと?」

「うん、まあ、・・そういうことかな。後継者として、必要な知識を、教えてもらつていたんだ。」

「お前、そんなに覚えてるのか?」

シキがニヤニヤしてからかう。

シンカは、野菜のようなものをかじりながら、顔をしかめた。

「変な言葉なら覚えてるよ。あと、なんだつけ、惑星の名前とか、なんか、そういうの。」

「なんだそれ。」

「ああ、共通語を教えてもらつたんだろう。この星の言葉とは違つからね。」

シンカがパンを口に含みながら、もじもじと変な言葉を話す。半分ごまかされているような。

「お前、本当かそれ。あやしいぜ。」

シキがあきれで笑う。

「いや、正しいと思つよ。」

ダンが真顔でそういうのを、シキはつまらなそつて鶏肉うしき料理に手を伸ばす。

「そつか。だから、みんなシンカのこと知つてたのね。」

ミンクが言った。

「私は、研究の都合で、ロスタネスが二十歳になつた頃に、他の惑星に行くことになった。

そのとき、お別れのしるしにその首飾りをプレゼントしたんだ。」

「ふうん。」

「ティラが攻撃を受けたとき、我々も、ここを守るのが精一杯だった。ロスタネスを、助けに行く余裕がなくてね。残念なことだ。」シンカの口がとまつた。

「まあ、ゆつくりしていつてくれ。歓迎するよ。好きだけいるといい。仲間の家族なんだから。」

・・家族。シンカは久しぶりに聞いた気がする。家族か。

ダンが部屋を出て行つてから、三人は食事に夢中になつた。味付けや形は変わつていて、基本的なことは同じらしい。肉は肉だし、野菜もそれらしい。肉は肉なり、おいしかつた。

「驚きだよな。惑星だの太陽帝国だのはまあ、そういうもんかも知れねえが、シンカのお母さんが研究員だなんてよ。」

シキの言葉にミンクがうなづく。

「なんだか、一度にたくさん、いろんな」と聞いたから、実感わかないね。」

「うん。そうだね。」

シンカもうなづく。

そこで、ふと、シンカはフォーケを置いた。

顔を上げて、二人を見つめる。

「なんだ? 食べないのか?」

返事が来る前にシキは、シンカの目の前の肉を焼いたものを一つ取り上げる。

「あ、もう。あのさ、一人とも、さ。」

「なんだ？」

「なあに？」

シンカは一人の顔をかわるがわる見つめて、話しだした。

「俺のことでは、一人を巻き込んでる気がして。もし、その、

バシンと大きな音を立てて、シキが少年の頭を叩いた。

「いつてえ！」

「馬鹿か、お前。前にも言つただろ！ ことんついてくつてな。」

「そうだよ、シンカ。シンカが私のこと守つてくれるって言つたんだから。最後まで責任とつてね。」

そう言つて笑うシンクを、シキがからかう。

「お、それは愛の告白か？」

「もうーおじさんなんだからー。じゃあ、シキのだつてそうじやない！」

「俺がシンカに愛の告白してどうすんだよ。」

「・・ありがと。うれしいよ。」

にっこり笑うシンカのタイミングに、一人は吹き出した。

「お前今、受け入れたぜ、俺の告白！」

「馬鹿、なに言つてんだよ！」

顔を赤くして、言い争いに少年も加わった。

## 7・シンカ2

研究所の中を自由に歩いていいといわれ、食後、散歩を始めた。見たことないものばかりで、シンカはわくわくする。

シキは途中で面倒くさくなつて、部屋で寝るといいだした。

「また、お酒？」

ミンクがあきれる。

「ミンク、口うるさい奥さんになるとシンカに嫌われるぞ。」

「奥さんじゃないもん！」

顔を赤くしながら怒る。

「シキ、本当に体調には気をつけろよ。もう年なんだからさ。」

シンカは知っている。あの、山岳の村に入る前、一人で話した時、シキの瞳に、少しにじりが出てきているのを見た。  
だんだん、視力が落ちてくるはずだ。喉にも痛みを感じていのでは  
ないか。

体調が悪いから、部屋に帰るつて言つてしているのか。

「お前！人を年寄扱いするなよな！」

シキは笑いながら、シンカの首を腕で締め付けてふざける。

この、楽しい時間が続くといい。ミンクはつづづく思つていた。ミ

ンクは十七歳。シキは三十五歳。

平均寿命で言つとミンクに残された時間は後二十三年、シキにいたつては十五年しかないので。

シンカは、特別だから分からぬけれど。・・だから、この楽しい時間が続けばいい。

ロスタヌスもきっと、そう思つたんだな。

短い人生を嘆くより、みんなが哀しい思いをしなくていいよう、  
精一杯自分にできることをして生きようとしたんだ。

だから、あんなにいつもちゃんととしていて、かつこよくて綺麗で、素敵だつたんだ。

シンカは知らないけれど、私の目標は、いつも彼女だつた。ロスタネス、私がシンカを守る。あなたに代わつて、精一杯。

そこで、ふと、アストローデのシンカのぬくもりを思い出し、頬を赤くした。

「ミンク、熱でもあるのか？」

シンカに声をかけられ我に返る。

「ううん。大丈夫。」

シンカに額に手を当てられ、ますます赤くなる。

いつのまにか、シキは部屋に戻つたらしい。廊下には一人しかいな  
い。

「行こうぜ。」

「うん。」

シンカの後を追いながら少女が気付いた。

「ねえ、シンカ、背が伸びてる！」

「そうか、気付かなかつた。」

自分とミンクとの差を測つて確認しようとするシンカに、ミンクが口を尖らせる。

「私だつて伸びてるもん！」

「え？ それは気付かなかつた。」

笑うシンカ。

二人はふざけあいながら、楽しい散歩を続けた。

「いや、本当に、驚いたよ。ロスタネスの報告で、知つてはいたけ

れど、まさかあんなに早く傷が治るとは。

レーザー銃で撃ち抜かれた傷が、ものの二分もたたずくふさがるんだ。

ダンが、他の研究者に話している。

「すごいですね。私も見てみたかったです。」

若い、あの、一番最初にシンカに駆け寄った研究者が興奮気味に聞き入っている。

他の研究員は、それぞれの席から、自分のデスクでコンピューターに向かいながら耳を傾けている。

「君は最近、赴任してきたんだろう?」この研究は、確かに過ちから始まつたが、だからこそ宇宙で唯一の研究だ。参加できることを誇りに思いなさい。」

ダンが微笑む。

「あ、はい。所長は、これが原因で辺境へ行かれたんですよね。大変でしたね。」

「まあ、帝国が同盟を脱退した今、この研究は急務だ。倫理がどうの人権がどうのという議論はなくなつたのだろうな。」

「相変わらずね、ダン。あなたの子でしょ? よくそんな風に話せるわね。」

セイ・リンだった。研究室の入り口を背にして立っている。

「俺の子ではないさ。誰の受精卵だつたとしても関係ない。単なる被検体だ。たくさんの中の一つに過ぎない。」

ただ、それが成功して、あそこまで育つた。ラッキーなことに、皇帝陛下の期待通りにね。それだけのことだ。」

「冷たいこと。」

セイ・リンが腕組みをして眉間にしわを寄せ。そんな表情まで美しい。

セイ・リンは女性にしては大柄であるが、バランスのいい美しい体型をしている。

ふくよかな胸元に、つい目が行く。

「君の子なら別だつたかもしれないよ。」

「そつかしら？期待はしないわよ。」

セイ・リンは赤い髪を翻して、研究室を去る。

警備兵の集まる制御室へと歩きながら、セイ・リンは考えていた。ロスタヌスは、ダンのようには思つていなかつた。彼女が倫理上の問題を超えてしまつたのも、ダンが手助けしたからだ。ダンへの想いがあつたからだ。ダンは、善良な表情の向こうで残酷な笑みを浮かべる。

実際、ロスタヌスの研究を影ながら補助してきた研究者たちにとつては、シンカは家族同然になつていた。

シンカはまっすぐ、素直に、賢く育つしていく。誕生日には、研究者も警備兵も集まつて、本人抜きで密かに祝つたものだ。

あの若い研究者は、最近派遣されてきたから分かつていない。

ダンにしても、研究が表ざたになつて、研究所を追われてしまつたから、あの子の成長を見守つたわけではない。今になつて、戻つてくるなんて。

「ふう」

一つ、大きなため息をつく。ロスタヌスが、幼いシンカが熱を出して、慌ててここに運び込んだことを覚えている。

デイラの人々に知られてしまふから、できるだけ、研究所に入れないようにとの指示だつたが、動搖した彼女は聞き入れなかつた。

研究員みんなも、シンカが三日後に意識を取り戻したときは手をたたいて喜んだものだ。

「本人が気付いたら、どうなるのかしらね。ねえ、ロスタヌス、本当にこれでよかつたの？」

セイ・リンの瞳に涙が光る。

そのとき、不意に研究所に警報が鳴り響いた。

「何があつたの！」

セイ・リンは制御室に向かつて走り出す。

## 7・シンカ3

シンカたちは、あの研究室の横の部屋で宇宙の図鑑を見せてもらっていた。新しい知らなかつた世界。

空気のない宇宙空間。最大十万光年を四時間で移動できる最新の宇宙船。

興味は尽きない。

そのとき警報が鳴る。

「なんだ？」

研究室に行くと、研究者たちも慌てている。

「制御室、何があつた？」

ダンが、制御室に報告を求める。

「シン川の水位が下がつた模様です。上流で、ファシオンの軍が、橋の建設工事を始めたのではないかと」

「影響は？」

「先日の攻撃でカモフラージュ装置が故障していますので、水がな

くなると丸見えですよ！」

「なんで直しておかなかつた！」

「人手不足ですよ！ 警護班は五人しかいないんです！ とにかく、エントランスからと、排気口からの侵入に備えて、人員を配置します。システム修復に数人、よこしてください。」

「しようがないな。分かつた。」

通信をきくと、ダンは穏やかな表情とは少し違つた雰囲気で、三人を見る。

「シンカ、危険だから、君たちは部屋に戻つていってくれないか？」

「あの、お手伝いします。」

「侵入してきた聖帝軍をやつつけんくらい、慣れたもんだからな。シキが腕をぐつとまげて力こぶを作つてみせる。」

ダンは少し考えて、言った。

「では、シンカはセイ・リンとともに行動してくれ。シキとミンクは制御室の警備兵を手伝ってくれ。」

「分かった。」

シンカはそう言つて、シキと拳を合わせる。

「後でな。」

「ミンクを頼むよ。」

にっこり笑つて、三人は出て行く。

ダンは、シンカたちがいなくなるのを確認して、研究者に命令を下す。

「データをすべて本国へ送れ。リスクマーカーのレベル4で行くぞ。場合によつてはここを放棄する。」

「了解しました。」

研究者たちは、それぞれの場所に散り、作業を始める。

ダンは、腰につけた通信機で、セイ・リンを呼び出した。  
「セイ・リン。シンカを地球へ送る。警備のふりをして、至急エン

トランスへ連れて行くんだ。

あの二人は引き離せ。」

「・・・了解しました。」

シンカたちが入つてきたあの通路の途中に、緊急脱出用の小型艇がある。

その船でステーションまで行けば、後はなんどでもなるのだ。セイ・

リンは、苛立つていた。

ダンは、本当に冷酷だ。ロスタネスの気持ちを知つていながら利用していた。そんなダンに気付かず、当時はセイ・リンも惹かれていた。セイ・リンは、ロスタネスをライバルとして意識していた。

結局、シンカの誕生で、私はあきらめたのだけれど。ほろ苦い記憶。

「ダン、なんだって？」

セイ・リンの後を追つて走りながら、シンカは問う。  
「エントランス、あなたたちが入ってきたあの入り口を警護するの。  
一番侵入されやすいから！」

うそを言いながら、苛立ちを感じる。

シンカたちが初めてセイ・リンと出会った扉の外に出ると、赤毛の女兵士は立ち止まつた。

「はあ。すごい足、速いね。さすが軍人さんだ。」

「あなたの鍛え方が足りないのよ。あ、これ、持つていろようじにつてダンが。」

「え、何？」

受け取ろうとして手を差し出す。

同時だつた。セイ・リンが何か筒状の銀色のものをシンカの手のひらに押し当てた。

ちくりとした。

「何・・

「悪く思わないで。あなたのことには嫌いじゃないんだけど。仕事だから。」

ウインクを一つして、セイ・リンは小型艇の準備をはじめる。  
シンカは、視界がぐらつくのを感じる。足の感覚がない。  
向こうで、セイ・リンが通信機で誰かと話をしている。  
壁にもたれかかつたまま、シンカはばざるばざると座り込んだ。  
気分が悪い。目が回る。

何だよこれ、・・シキ、ミンク。

二人は大丈夫だろうか。

視界が暗い。目を開けているのがどうかも分からぬ。  
耳鳴りがひどい。

そのまま、どれくらい時間がたつたのだろう。手足の感覚もない。

ぐいと肩を起こされ、相手がダンだと気付いた。

「・・・」

ダンと呼んだつもりが、言葉にはなっていない。

「セイ・リン、準備はどうだ？」

ぼやけた視界の端で、赤い何かが動いている。セイ・リンの髪かな。なんだか暗い。

「ポツドは準備できたわ。」

不意に、ぐらりと通路全体がゆれた。

「しまつた、もう来たか！」

爆発音。足音と、火薬の匂い。

（聖帝軍かな？驚いただろうな、こんなところにこんなものがあるなんて、さ。・・・）

シンカはぼんやりと考えていた。

「きやあ！ダン！」

セイ・リンの悲鳴でシンカの心臓がドクリと脈打った。

はあ、一つ大きな息をついて、シンカは目を開けた。目の前に、腕がある。シンカはダンの体に半分埋もれている。ねつとりと、生暖かいものが肩を伝つて落ちる。血の匂い。

ダンの体を何とかずらす。顔だけ起こすと、背中に矢が見える。

聖帝軍の矢が、ダンの背中に刺さつている。

「セ・・・リン。」

シンカは、まだうまく言葉が出ない。

セイ・リンがあのレーザー銃で、応戦している。シンカは、壁に手をつきながら立ち上がる。

背中の剣に手を伸ばす。

「・・・う。」

ダンの声。大丈夫、まだ生きている。

シンカは、よろめく足で、聖帝軍に切りつける。

セイ・リンも援護する。

必死だった。

何とか、最後の一人を片付けると、肩で息をして座り込む。こんなに、聖帝軍ごときに必死にならなきやいけないなんて・・シンカはセイ・リンにぶつくさ言つ。

「いつもなら、簡単なのに・・バカヤロ。」

「悪かつたわね。」

こちらもあまり余裕はないようだ。ダンのそばにかがんで、傷を見ている。

再び壁に寄りかかって座り込んだシンカは、ぼやける皿をこすつて、たずねた。

「どう?」

セイ・リンは何も答えず、ダンの体に突つ伏した。死んでしまった?

「ダン! ねえ、いいのー。シンカはビリするのよー! あなた、何も話さずに死んでしまつつもり?」

## 7・シンカ4

シンカは、這つて二人のところに行く。

ダンは、胸を矢で射抜かれていた。助からない。シンカは直感した。

「・・陛下に、届けるんだ。そのために、・・・セイ。」

「あなたがいなくてシンカはどうするのよーあなたの子なのよー。」

「！」

驚いてセイ・リンの顔を見、そしてダンを見つめるシンカ。

「違うだろ。研究所皆の、子だ・・・」

ダンの呼吸が途絶えた。

蒼白な顔から急速に生気が抜けしていく。

「ダン！」

セイ・リンが泣いてすがつた。

シンカはその姿をただ見ているしかなかつた。ダンがお父さん?じ  
やあ、レクトは?

まだ、先ほどの薬が残つている。頭がぐらぐらしている。  
うまく、考えがまとまらない。

ダンの腰の通信機が、ピピとなつた。

セイ・リンが涙拭いて、応答する。

「所長は？」主任研究員だ。

「今、息を引き取つたわ。聖帝軍は一応抑えたけど、またすぐ来る  
わよ。」

「所長がレベル4を発令されました。データ転送が終わつたので、  
すべてをダウンします。

我々は、脱出艇でステーションに向かいます。」

「了解。私もシンカを連れて行くつもり。爆破は何分後?」

「爆破！」

ダンを見つめていたシンカが、驚いて顔を上げた。

「五分後です！急いでください。」

「了解！ステーションで落ち合いましょう！」

通信機を放したセイ・リンに、シンカが詰め寄る。

「なんで、あんな事したんだ！俺を連れて行くつて、どうこうつもりだよ！爆破つて、シキた

ちはどうなるんだ！」

「ここは、ファシオン帝国に知られてしまったの。ダンから聞かなかつた？この調査は見つ

かつてはいけないの。だから、すべてを破壊して、何も残らないようにするのよ。」

美しい赤毛の女は、レーザー銃をシンカの額に突きつけた。

「動かないでね。」

セイ・リンは通信機で部下を呼び出した。

「ラカント少尉、あなたたちはリュード人とともに排気口部のポッドで非難して。五分後に

爆破よ！私はシンカと行くわ。ステーションで会いましょう。」

一方的に話して通信を切ると、セイ・リンはシンカを見た。

「シキたちは、警護兵がいっしょに助けるわ。大丈夫よ。さ、このポッドに乗るのよ。」

「まだ、質問に答えていないぞ！」

セイ・リンは無言だ。

「ダンが黙っていたことを、あんたが教えてくれればいいんじゃないのか？」

あきらめたように、シンカを狙っていた銃を下ろした。

「分かったわ。でも、代わりに逃げないでね。」

「いいだろう。」

シンカは青く深い瞳を、逸らさずまつすぐ向けてくる。

「あなたの父親はダンよ。」

セイ・リンはさらつと言った。

「！」

「正確に言つと、ダンの精子と、ロスタネスの卵子で作つた受精卵から産まれた。」

「じゅせいらん？」

「後、そうね、コンイラの遺伝子とか、いろいろと一緒に。」

「え？」

「私は研究者じゃないから、詳しくは分からないし、立場上は教えてもらえないんだけど、ロスタネスが私に言つたのよ。あなたは、ダンとロスタネスの子供。でもその受精卵に、コンイラの遺伝子を組み込んで、作られた、のよ。」

セイ・リンは言いにくいのか、言葉を選んだ。

「作られたって……」

「つまり、新しい人間。地球人でも、リドラー人でも、リュード人でもない。」

そして、その、植物のコンイラが入っているから……正確に言つと、人間といつていいかどうか。あたらしい生き物なの。ああ、うまく説明できないわ。」

生き物？

人間じゃない……だから、すぐに傷が治つたり、コンイラがいらないかつたり、・・・シンカは自分の手のひらを見つめていた。血だつて流れている。言葉も、姿だつて人間だ。それなのに？

「ロスタネスは、デイラの人々を救いたかった。だから、そういう研究をしたの。」

でもね、それは、宇宙で禁止されている研究なのよ。だってそうでしょ？ 人間を作り出せてしまったら、子供を産む必要がなくなってしまう。

死んだらまた作ればいい、なんてことになつてしまつから。でも、ロスタネスはダンにそそのかされて、やつてしまつた。

失敗を繰り返しながら、成功してしまつたの。ダンは、あなたが生

まれてすぐ、罪に問われて、遠い星に転勤になつた。

残された私たちは、あなたを処分することも考えたわ。けれど、それこそ人道に反する。皇帝陛下の命令で、そのまま、あなたを監視し、研究を続けてきた。

シンカは瞬きもできず、赤毛の女性兵士を見つめていた。言葉もない。

「見て。これは、研究所の皆が持つているわ。ロスタヌスが、毎年くれたのよ。」

セイ・リンがカード状のものを、壁面のスクリーンの横に挿し込んだ。スクリーンに映像が映る。

「俺・・・？」

幼い頃のシンカ。母親と笑っている。三歳、四歳。どれも、誕生日のお祝いのようだ。

毎年決まって、母さんがシンカの好きなケーキを焼いてくれた。十歳。十一歳。

次々と映つては消える自分の姿を、シンカは呆然と見つめていた。小刻みに体が震えている。

「ロスタヌスはあなたを本当の子供のように可愛がつたわー。私たちだって、こうやって、小さい頃からずっと見守つてきたー！」

本当の、子供。

じゃなかつたんだ、俺。

「・・・母さんは、・・・俺に『コニラ』の希望を託した。じゃあ、あんたたちは、俺に何を期待したんだ？」

シンカの悲壮な表情が、セイ・リンの胸を締め付ける。

「・・・コニラよ。」

「コニラ？」

「あなたは、からだの中で、コニラの成分と同じものを作り出し

ているの。人体に害のない、新しい成分を。」

「・・それ、を、地球人に使う?」

シンカは自分の胸を押さえた。この体にユンイラが入っている。うそだろ・・?

「ええ。帝国は、あなたを必要としている。だから、連れて行くわ。」

いやだ!

シンカの頬に涙がつたう。

俺が、人じゃない? ユンイラ? 作り出された、生き物。

## 7・シンカ5

「ショックなのは分かるわ。でも、あなたは必要とされているし、愛されていたわ。さあ、一緒に来て。」

シンカの手を引いて行こうとするセイの手を、シンカは振り払った。

「嫌だ、いやだ。」

「もう、しようがない子ね。」

逃げようとするシンカの手に、再びあの銀色のものを押し当てる。

シンカは驚いて手を引き、振り向かれて転ぶ。

「抵抗しないでよ。時間もないんだから。」

シンカが、頭を振つて、立ち上がる。

「え？ 効かない？」

もう一度、薬を注射しようとして、シンカの肩を押された時だった。電流が流れたようなびりりとした痛みを感じて手を離す。

「何？ シンカ、あなた？」

そうか、免疫ができてしまったのかしら、セイ・リンは想像した。ユンイラはそういうものらしいって聞いたことがある。

どうしよう、時間がない。

セイはふと、ダンが自慢げに研究員に話していたことを思い出した。

レーザー銃を構えた。

どこなら、意識を失わせて、大事に至らなくて、運びやすくなるだろ？

シンカは、床に座り込んだまま、どこか遠くを見て、つぶやくようになに話しかけた。

「オレや、二十歳になつたら、旅に出て、世界中あちこち回つて、父さんを探すつもりだつた。

母さんだけじゃなくて、オレ家族が欲しかつた。夢だつた。・・ばかみたいだ。

そんなの、最初から、何もなかつた。」

「・・・オレ、なんで生きてきたんだろ？・・・」

強く閉じた瞳から、涙があふれた。

ぞくりとした寒気が、セイ・リンの背をなでる。

セイ・リンの放つた一閃が、シンカの左肩を貫いた。

その瞬間、白い光がシンカを包んだ。

まぶしくて閉じた目を開けると、シンカが横たわっていた。

「早く、しなくちゃ。」

シンカを抱き起こすと、手が張り付くような感触。

「あつ！」

慌てて、引き離すと、手のひらを見つめる。

まるで、ドライアイスに触れたかのように、真っ赤になつていて、冷えきつている。

再びシンカを見つめると、その体の周囲には、温度変化のためだろう、ゆがんだ空気の層が見える。

(何？どうじうこと？熱を、エネルギーを吸収している？)

通信機がおかしな音を立てる。電灯がちらつき、小型艇の表示パネルも乱れて点滅している。

「シンカ！あなたなの？シンカやめて！」

遠くで爆発音が聞こえた。

(時間？そんな、まだ・・・)

その瞬間、セイ・リンの視界は真っ白になつた。

シンカも、白い光に飲まれていく。



## 7・シンカ6

シンカが、セイ・リンとともに聖帝軍と戦っていた頃。シキとミンクは制御室に走った。

制御室には、警備兵の軍人たちが三人いた。

「手伝うよ！」

そう言つたシキに、若い警備兵がうれしそうに言つた。

「助かります！正直、この設備に警備が五人だけなんて、きつくて。

「おい、レベル4だ！」

通信機で何か話をしていたもう少し年上の、ひげを蓄えた警備兵が叫んだ。

「なに？」

不安そうにミンクが先ほどの若い兵を見る。

「この研究所を引き払うことになりました。惑星調査のことは、フアシオン帝国に知られてはいけないんです。この惑星の歴史に干渉することになつてしまつので。」

「どうするんだ？」

シキがたずねる。

「研究所のデータをすべて太陽帝国の本星へ送ります。それから、この施設を破壊します。我々は小型の脱出艇で、宇宙へ退避するんです。」

シンカはどうしているのか！

二人は見合わせると同時に、走り出していた。

それに気付いた警備兵が、「あつ！ダメです勝手に動いちゃ、危ない！」

「リックス！一人を追うんだ、セイ・リン少佐から、二人を同行させろと！我々は、排気口部から、脱出するぞ！」

「はい！」

リックス少尉は、二人を追つた。施設内はそんなに複雑なつくりではない。制御室と、研究室が一番広い部屋として真中にあり、その上の階に研究者や警備兵の宿舎がある。

施設は川の地下に作られているため一直線の形をしている。制御室側からは排気口部が一番近い脱出経路となる。

二人は研究室のほうへ行つた。逆方向だ。

リックス少尉が、研究室の前に向かうと、避難する研究者たちとすれ違つた。

「リックス！ どこへ行くの？」

「リュード人を助けに。」

女性研究員が声をかける。

「危険よ！」

「命令なんだ！」言いながら走る。女性研究員は、一瞬迷つたが、リックスの後を追つた。

他の研究員の姿はすでにはない。

研究室とエントランスとをつなぐ通路は、侵入者の警報で、自動的にロックされていた。

リックスはそこで一人に追いつく。

「おい、ここを開ける！ シンカはどこなんだ！」

リックスも知らない。

「すみません、緊急事態で閉じられてしまうと、ここでは開かないのです。シンカは、多分セイ・リン少佐と一緒にいます。だから大丈夫ですよ！」

「とにかく早く行きましょう！」

ついてきた女性研究員が言った。

「サーナ！ なんでついてきた！ 危ないだろーー！」

リックスはその女性、サーナの手を取る。恋人同士なのだろう。

「シンカはどうなっちゃうんです？」

ミンクが一人に水を差す。

「大丈夫、シンカは地球に送られるはずだから、ダン所長も一緒に

と思つわ！」

サーナが言った。

「行こう。どちらにしろ、ここにいても仕方ない！」

リックスに促されて、シキとミンクももと来た方角へ走り出した。  
走りながら、シキがサーナにたずねる。

「なんで、シンカは地球に送られるんだ？」

「えつ！」

サーナがしまつたと言わんばかりに、口を押さえる。  
シキがいきなり、サーナを押さえこんでとまつた。

ミンクは前で立ち止まつたシキにぶつかって、鼻を押さえる。

「何するんだ！」

リックスが怒りに銃を抜く。

だが、すでに、シキの短剣がサーナに当てられている。  
「教える！ 何か隠しているな！」

「彼女を放せ！」

「リックスつていつたな。あんたがこの子を大切に思つよつて、俺  
たちにとつても、シンカは大切な仲間だ。」  
リックスは、あきらめたように、銃を下ろした。

「私たちにとつても、彼は大切です。いいでしよう。」

「だめよ、リックス、話してはいけないって命令が・・・」

止めようとするサーナの前に、シキが剣を押し当てる。表情は本氣  
だ。

「サーナ。俺だって、君だって、シンカのこと嫌いじゃないだろ。  
いや、研究所のみんなが、彼のこと、自分の子供のように思つてい  
るじゃないか。

「大丈夫だよ、話しても分かつてくれるよ。」「どうこいつ」と？

ミンクのほうにも視線をやり、リックスは話し出す。

ロスターがはじめた研究のこと。たつた一つだけ成功し、それが

シンカである」と。

帝国に研究の継続を命じられ、シンカを見守つてきたこと。シンカが、新しい生き物であること。

「本当に私たちは、シンカが子供の頃から、彼を守つてきたんです。新しい命だから、いつ、どんなことが起こるか分からない。突然死んでしまうかもしねない。

彼の誕生日には、ここでお祝いをしたりしてたんです。また、一年無事に成長してくれたって。」

シキも、ミンクも、言葉が出ない。

「十五年経つて、やっと安定したんだ。突然出す熱もなくなつた。

私たちは、あなた方よりずっと長く、見守つてきたんです。」

「だから、初めてここに来たとき、あんなに喜んでたんだ。」

ミンクが納得したようにうなづいた。

「ええ、デイラが攻撃を受けた後、我々は必死で彼を探しました。

やつと、皇帝陛下も、彼を保護してくれる気になつたらしいんです。大丈夫、彼に危害を加えるようなことはしません。信じてください。」

「・・・わかつた、とにかく、無事でいるんだな。」

シキもサーナを離した。

「悪かつたよ。」

「さあ、行きましょう！」

詫びるシキをチラッと睨んで、サーナが、リックスの手をとる。盛んに鳴る警報が、四人の不安をかきたてる。

「よし、ミンク。」

「キャー。」

シキはミンクを脇に抱えて、一人の後を追う。

走りながら、聞いた話を頭の中で反芻している。

シンカは、このことを知つたらきっと、ひどくショックを受けるんだろうな。

きれい事言つたって、こいつらは自分たちの目的のために、シンカを利用しようとしている。

コンイラと人間の合いの子。

自分自身がコンイラの成分を持っているから、怪我も治る。コンイラの煙を吸つても平氣なはずだ。

ロスタネスにとつて、シンカは理想の人間だったんだ。シンカなら、この大気のにじつたりユードでも、普通に生きていける。

だが、彼女は、普通に自分の子供が欲しくはなかつたんだろうか？愛する男と自分の間に生まれた子供であれば、理想でなくとも、愛するものだ。

ロスタネス、どんな女だったんだ。。。

デイラの中ほど、シン川の橋のあたりにファシオン帝国の軍隊が集まっていた。

水の止まった川底には、黒い大きな鉄の塊のようなものが浮き出ている。怪しげなそれをこじ開けて突入した一団は戻つてこない。

そこからかなり上流で、大きな爆発音が響いた。

土砂が飛び散り、黒い煙がもうもうと視界をさえぎる。轟音は続いた。二つ。三つ。

風下になる国軍は黒い煙が流れすぎるので動けずにいた。

と、そのとき。

水のなくなつた川底が不気味にゆれ始める。振動で泥が液状化し、浮き出した水はさらに振動を波紋として伝える。

泥に足をとられかけた兵たちが堤防の上に逃れようと隊列を乱す。地中から熱いエネルギーが生まれ、建設中の橋、ユニラ烟に作られた野営、残つていた城壁、すべてを強烈な白い光が飲み込んだ。太陽の光すら遮るほど強く、デイラを焼いた。

その光は、惑星リュードのはるか上空にいた黒い戦闘艦グレスデンからも捕捉できた。

グレスデンは最新の高速艦で、最大十万光年を四時間で移動できる。

搭載人数は百人までと小型だが、戦闘性能や移動性能、どれをとっても現時点では宇宙最高のものだ。

黒い太陽光吸收素材を使用した表面が、つやりと黒く光る。流線型に近い形態で、美しくもある。

グレスデンの艦橋では、栗色の髪の男が腕を組んで、惑星リュードの大気を搖るがす白い爆風を見つめている。

「レクトさん、あの研究所の連中やりましたよー。」

ジンロが、大きな体を揺らす。

「デイラもひとも消したか。ふん、俺たちのこと責められる立場じゃないな！」

レクトがつぶやく。

「レクトさん！生体反応があります！」

通信士の報告に艦橋の全員が振り返った。生きているわけがない。爆発は半径十キロにわたっている。

惑星の黒いあざのようになつた、デイラの存在した座標をスクリーンで見つめる。そこに確かに、何か息をしているものがある。

「場所は？」

レクトの言葉に、一人が慌てて計器を見直す。

「信じられない！爆心地の研究所ですよー！」

「そこに行くぞ。探査機を準備しろ」

「了解！」

そこには、白い部屋だつた。窓には、外光を調整するスクリーンがついている。

リュードに降り注ぐ太陽アストの光を、人工的に採光したコロニーの公共光源は、かなり明るく、今は正午くらいの設定なのだろう。窓の外には、人口樹木が外からの視線をさえぎるように植えられていて、その枝の間から、正面に公園があるのが分かる。子供たちの声が聞こえる。

さほど広くないその部屋には、少年の横たわるベッドと、ベッドに座つたまま使えるようにセットされた回転式の小さい丸いテーブル。シルバーに輝くシンプルな椅子が一つ。

一つに、赤毛の三十歳代くらいの女性が座っている。

背が高く、美しいスタイルの彼女は、いつもの戦闘服とは違う、薄い桜色のブラウスを身につけている。

胸元が深く開き、そこにゆれる赤い輝石のアクセサリーがまぶしい。セイ・リンだつた。シンカの手を握っていた。

「シンカはどうだ?」

栗色の髪の男が入つてくる。

「大佐!」

立ち上がりて敬礼するセイ・リンに、座れといった手振りをし、レクトは隣に腰掛ける。

「俺はもう大佐じゃない。」

「でも、私にとつては尊敬する上官です。今も。」

美しい元部下にそう言われて悪い気はしない。

「ありがとうございました。助けていただいて。」

「ああ。だが、本当に助けたのは、こいつじゃないのか?」

レクトは横たわる金髪の少年を見つめる。

「はい、多分。あの爆発の前、シンカは回りのエネルギーというエネルギーを吸収していました。」

驚きました。彼の周りの空気が熱を奪われ、私は身震いしました。爆発のエネルギーさえ、吸収したのではないかと。だから、私も彼も無事だつたのだと思います。」

「エネルギーを吸収する、か。助けたとき、君は凍えかかっていたからな。そんな力があるとはな。・・なにかきっかけがあつたのか?」

レクトが眉をひそめる。

切れ長の目で見られると、どきりとする。

これは、昔も今も変わらない。セイ・リンは思つ。

この人は、底知れないものを秘めている気がする。美しく、恐ろしい。猛獸のような何かを秘めている。惹かれるけれど決して近寄れない。

「私が、彼に、眞実を告げたのです。ダンのこと、研究のこと、彼自身のこと。」

自分が人間ではないことを知り、シンカはショックを受けた。

「俺のことは？」

「大佐の、ですか？」

大佐は無関係だと思っていたが？

レクトは、赤毛の元部下の、困惑した表情を見て納得する。

「ロスタネスは、あの男に惹かれていたからな。」

「あの？」

「・・まあ、いい。そんなことは、もうどうでもいいことだ。」

レクトは、立ち上がる。ロスタネスは、もういないのだから。

「君は、どうしたい？われらは、太陽帝国に相反する組織だ。君も立場上、我らと一緒にいるとまずいだろう。」

シンカを渡すことはできないが、君を帝国の「ロニーまで送つてやつてもいいぞ。」

「…いえ、私は…」

さっきまで、冷静な口調だったセイ・リングが、口ごもる。

「シンカのそばにいてもいい。こいつも目覚めたとき男ばかりじゃ、つまらないだろうからな。」

くすくすと笑つて、レクトは部屋を出ようとする。

「大佐！あの、教えて欲しいのです！」

ゆっくり振り向くレクト。

「なぜ、そんなにも、反帝国の破壊活動をなさるのですか？」

「俺が選んだ仕事だからな。君も同じだろ？軍人なんだ。命じられればそのとおりに動く。」

「大佐…。」

そんなはずはない。レクトが組織する軍は、この宇宙でもつとも名の知られた傭兵集団だ。

ミストレイア・コーポレーション。きちんとした会社組織でもあり、軍事組織でもある。

会社経営部門のトップはレクトの親友で、太陽帝国の大手銀行、スター銀行社の若きオーナーである。レクトは、軍事部門のトップなのだ。

惑星保護同盟はクライアントとして重要な立場だが、自らが不利になるような任務は受けないはずなのだ。

レクトたちが、デイラを破壊したといつ、確たる証拠が見つかれば、依頼した同盟だけでなく、ミストレイア・コーポレーション自身も危うくなる。

「さうに何か言おうとするセイ・リンをさえぎって、レクトは言った。「もうすぐ同盟の研究医がくる。シンカがこの調子じゃ、動かせないからな。仕事が進まなくて困っているんだ。せいぜい、看病してやつてくれ。」

部屋を出て行く。

見送るセイ・リン。

再び、椅子に腰掛け、シンカの手を握る。両手で、ぎゅっと。

そうすることで、彼女自身の不安が消えるかのように。

「この、リコード宇宙ステーションは、惑星リコードの探査の時代から作られた国際ステーションだ。

ステーション内は、宇宙船発着のドック区域と、各惑星固有のロボットがそろそろ居住区域と、ステーション全体を制御している制御区域でできている。

制御区域の一角に、太陽帝国の施設があつた。

太陽光吸收素材でできているそれは、黒く光り、異様な圧迫感を感じ

じさせる。

入り口は厳重に警備されている。

建物の一階の窓から、その様子を見ながら、ミンクはため息をつく。彼女の後ろには、日に焼けたたましい青年、シキがソファーに腰掛け、組んだ手にあごを乗せて、ぼんやりと宙を見ている。

ミンクの瞳は、赤く、はれている。

二人はここ一時間ほど、一言も口を利いていない。

ほぼ一時間前、ステーションのドックに派遣されたラカント少尉が帰ってきて、到着した小型艇はなく、捜索した結果も思わしくないとの報告を受けたのだ。

「シンカは、どこ？」

ミンクはそう言って泣きくずれた。

小型艇で退避したとき、その窓から“テイラ”と研究所が消失するのを見た。

恐ろしい光景だった。

ステーションに到着して、三日、ずっと待っていた。リユードに戻つて、探したいという衝動を押さえ、研究所の人たちを信頼して。だが、返ってきた報告は、絶望的だった。

この小さな部屋は、横の扉から、それぞれ、ミンクとシキにあてがわれた寝所に続いている。

リビングという風情だ。三人掛けの革張りのソファーと、一人掛けのものが二つ向かい合わせになつていて、間にはテーブル。

ここで、二人は食事をする。

研究所施設のため、あまり派手でもないが、野宿を当然としていた彼らには、立派過ぎる場所だった。

ウイイ。

扉が開いて、リックス少尉が入ってきた。

小さな自信なさげな目が、今日はさらにうつむくと落ち着きなく、

緊張している。

「あの、すみません。・・シンカは大丈夫、だなんて、言つてしまつて・・・」

この青年は、軍人らしくない。だからなのか、ミンクは信頼していた。

「ううん。あなたが悪いわけではないです。ダンも、セイ・リンも戻らなかつたんでしょう?みんなも、つらいでしょ?」

また、少し涙声になる。

「・・・私は、少佐はまだ、死んだとは信じられないのです。ダン所長は、リン少佐の報告で亡くなつたことが分かつていたらしいです。

少佐は爆破の時間を理解しておられましたし、あの時にはすでにファシオン帝国の軍を排除していましたはずです。」

「・・・そう。」

「俺たちを、リュードにかえしてくれないか。」

うつむいていたシキが、声を発した。

「・・・その、私は権限がないので、何ともお返事できないのです。ですが、この研究所の所長に話してみます。お一人がそうなさりたいのなら、そうするべきだと思います。」

シキは、笑わない。

鋭い黒い瞳は、やつれたせいか、淒みを増している。近寄りがたい雰囲気をかもし出していた。

「あの、お一人を気分転換に、外にお連れしようかと思いまして。」

「外?」

「ええ、このステーションにきた人なら必ず行く商業施設です。居住区の中にあるんですが、いろいろなものを売っていますし、珍しいものも見られますので。」

ミンクが、シキのそばに立つた。

「行こうよ。」

うるをそうに見上げるシキ。

「もしかしたら、会えるかもしれないよ。」

「・・氣休めは言わなくていい。」

「あたしは、信じてるもん。シンカは私を一人ぼっちになんか絶対しないもの！」

強く、信じる瞳で、まっすぐ見つめられ、シキも心が動く。泣いていたくせに、女は強いな。

「・・しあうがないな。行つてやる。シンカの代わりにじやないぞ。お前を守るのはシンカの役目だからな。」

すこしだけ、声に元気が出た。

公共光源が、三時の角度に変わる。

居住区の各コロニーはオリジナルパイプという名の通路で繋がれ、そのパイプ内で環境変化に備えることができる。

リドラーのレクトは、仲間とともにオリジナルパイプから共有の商業スペースへ向かう。

パイプの途中のフィルター装置で、大気が変わるので、特殊マスクをつける。

このマスクをつけることで、地球基準の空気を備えた共有スペースで活動できるのだ。マスクといつても顔や口を覆うものではない。彼らに必要な成分を、耳から伸ばした小さいバーで口元に流している。通信装置に似ている。

耳の後ろに取り付けられた小さなカプセルに、リドラー人の肺を痛めないための成分が入っているのだ。

共有スペースの商業区はにぎやかだ。宇宙船で補給に立ち寄った人々が、さまざまなものを持ち歩く唯一の場所だからだ。

もつと、大きなステーションであれば、何箇所かに分けられている。

さまざまな人種が入り乱れ、ごつた返す市場通りを黒い一団が切り分けていく。

総勢六人。シンカと一戦交えた、あのジンロと呼ばれていた男もある。グレーの髪に褐色の肌、頬骨がはつた四角い顔で、いかにも強そうだ。

その脇には少し細めの、顔色の悪い男がいる。皆、一様に貫禄を見せつけながら歩くので、自然と彼らの行く先には通り道ができるいく。

「レクトさん、ボウズはまだ、ダメですか？」  
ジンロが斜め後ろから話しかける。

「ああ、まだ、熱が下がらない。あれをなんとかしないとな。そう

すれば、このいまいましいステーションともおもひだ。

「レクトさんは何である子供にこだわるんですか？『デイラ』でもわざわざ、案内させてみたり。」

ひょろりとした若い部下が尋ねる。

「お前、知らないのか？」

ジンロに肘でつつかれて、歩みが止まり、一人は一団の後ろに残つた。

「何ですか？」

「あれは、大佐の隠し子らしきですよ。」

ジンロは小声だ。

「隠し子？」

「隠してなんかないわ。誰に対しても隠す必要があるんだ？おい。それにな、ピーカン、「大佐」はやめると言つただろう？…」

「す、すみません。レクトさん。」

胸倉をつかまれてひょろりと瘦せているピーカンは慌てて謝る。怒らせではないけない。

……けど、あの子供本人はわかつていなかつたよなあ。

ピーカンは、ぼんやりと考えていた。

レクトがふと歩みを止めた。

「レクトさん？」

視線の先を追うと、人ごみの中でもちらを見つめている少女がいる。銀色の髪、赤い瞳、たぶんアルビノであろう少女は、立ち尽くしてレクトを睨んでいる。

「ありや、デイラの子供じゃないですか？」

ジンロが言った。

「やうだらうな。あそこで俺たちを見たんだらう。じつけを睨んでるわ。」

それにしては楽しそうに、元大佐は言った。

「やりますか？」

ピーカンが懐に手を入れる。

「いや、いい。下手に騒いで、俺たちの存在が帝国にばれると厄介だ。まだ仕事も残っているしな」

少女は歩み寄りうつとして、人ごみに遮られる。その時、レクトは、少女の胸に何かが光るのを見た。

あれは……そう、確かシンカが買おうとしていた。

「そうか」

「なにか？」

嬉しそうに笑うと、レクトは煙草に火をつけ歩き出した。

「お前ら、今のうちに羽のばしておけよ」

男たちは散り散りになり、あつという間に人ごみに消えていた。

ミンクはあまりの鼓動の早さに胸に手を当てていた。

見たことがある。

あの男。

セイ・リンは迷っていた。

逃げ出して帝国の「ロニー」にささえれば研究所の旨と合流できる。それにシンカを医者が診てどうできるとは思えない。

それよりはこのステーションのコンイラ研究所で、デイラから退避してきているはずの彼らに診てもらつたほうがいいのではないか? 設備もある。そして、それが私の任務でもある。

だが。

太陽帝国は本格的にシンカを研究するつもりだ。シンカは太陽帝国の中枢の研究機関に送られるだろう。

地球か、セトアイラス星か。それがシンカにとつて幸せとは思えない。

シンカの母親、ロスタネスの顔が浮かぶ。

セイ・リンは深くため息をついた。

どちらにしろ、この状態のシンカを担いでこの同盟のリドラローニーから脱出るのは困難に思える。

せめてシンカが意識を取り戻し、自分で歩いてくれさえすれば。セイ・リンはシンカの額に手を当てた。まだ熱があるようだ。

あれだけのエネルギーを吸い取ったのだ。  
熱くもなる。そう勝手に理論付ける。

……この子は、この不安定な生き物はどうなってしまうんだろう。  
ロスタネスはこの子の幸せをどう考えていたんだらう。

ふわりと窓から風が入る。

あの研究所の爆破から六十時間たつている。

熱い。まぶたの裏を白い光が焼いているようだ。

シンカは思った。

何があつたんだろう。

ふと動かした自分の手が、何かにあたつて、感覚を思い出す。指を少し動かしてみる。

ぎゅっと、握られる。

だれ？……//ンク？母さん？

だれ？

あつたかい……。

「……セイ・リン」

窓の外に視線が行っていたセイ・リンは慌てて少年を見た。

少年は目をこすつて起き上がる。つとめる。

「あ、まだ無理よ」

それを制して寝かせた。

「ここ、どこ？」

シンカが見回す。

「…………ごめんなさいね。私も気付いたときにはいたの。たぶん、

リドーラ・ロードーの中の居住区だと想つわ

「ひるにー？ 研究所は？」

あの時確か、セイ・リンが俺のこと話して、それから……覚えてない。

「研究所は爆破したのよ。私たちは偶然レクトに助けられたの。これは惑星リュードの上空にあるリュード宇宙ステーションというの。宇宙に作られた小さな町とでも言つかしらね」

「レクトにー？」

少年が起き上がる。

ふらつくのか額を押される。

「大丈夫？ あなたはずつと眠っていたの」

「つかまっているの？」

シンカが顔を上げる。

「ん。まあ、そうね。逃げ出すにしてもシンカ。あなたがもう少し回復してくれないと」

「じめん」

シンカは乱れた金髪をなでつける。ぼんやりする頭で考える。

レクトに会える。セイ・リンについていっても帝国に連れて行かれ。そういうえば、レクトはあの時、俺をどこに連れて行こうとしたんだろう。

でも、セイ・リンについていけばシキたちに会える。

考えがまとまらない……考えるんだ。

俺は、どうしたい？

べつ

「一。」

シンカのお腹が鳴った。

「そうね。ずっと食べてないものね！」

笑いながらセイ・リンにいわれ、シンカは顔を赤くする。  
セイ・リンがベッドサイドのボタンを押して人を呼んだ。  
ボタンの機械音にシンカはじわりと研究所での出来事を思い出した。  
からだの奥が重く疼く。

俺はレクトに会って、父さんのか確かめたかった。けど。  
ぼんやりする頭を一振りする。

今さらそんなこと、聞く必要もない。俺には親なんかいなかつた。  
母さんですら俺のことをティラのために作ったんだ。  
俺が生きてきたことに、何の変わりもないのに。

どうしたらしいのか、分からなくなっていた。

食事はおいしかった。

すべて見たことのないものだが、味を想像してから食べると想像が当たつていたり外れたり、面白い。

白いふるんとした丸い粒が、房になつている果物が甘くておいしい。  
すっかり平らげると、窓の外を見る。歩いてみるとある。  
今は室内にはシンカ一人だ。

テーブルを回転させて押しゃると、もぞもぞと足を動かしてみる。

床に足を下ろす。

普通だ。裸足に床がひんやりして気持ちいい。立ち上がる。

「わっ」

体が重い。歩こうとすると少しもつれる。その時、部屋の扉が開いた。

「シンカ！」

セイ・リンが声をかける。隣にいる、レクトが笑った。

「情けないな」

シンカは壁に両手をついてやつと立っている。

「レクトー！」

片手を離し振り向いてレクトを睨むと、バランスを崩して座り込む。

「ついて」

「いきなりは無理よ。ばかね、ここはリドラ星基準なのよ。重力があなたの惑星より少し強いの」

セイ・リンが駆け寄る。

「ほら」

手を差し出したのはレクトだ。

シンカは躊躇するが、男は「」<sup>1</sup>く自然な動作で手を引いて立たせるとシンカの肩を抱いて歩かせる。

シンカの中にどんな感情が渦巻いているのか、それを疑いもしない様子で。

レクトはテイラを滅ぼした、張本人だ。

シンカの鼓動が早まる。

見上げる。

鍛え上げられた腕は、シキと同じくらいたくましい。身長はシンカより頭ひとつ高い。

切れ長の目に通つた鼻筋。少し大きめの口。シキのよつなたくまさと、セイ・リンに似た纖細さが同居している不思議な雰囲気だ。ベッドに腰掛け、改めてシンカは男を見上げた。

この人が、俺が子供の頃、遊んでくれたのは確かなんだ。

「俺、聞きたいことが」

何から聞けばいいんだろう。整理できず、「…」シンカはまたうつむく。

「なんだ」

レクトが椅子に腕を組んで座り、面白そうに手を組めてみてくる。  
そんな二人をセイ・リンが観察している。

散々迷い、「……母さんを殺したのか？」  
シンカの口から出た言葉は、それだった。

睨みつける少年は拳を握り締めている。

「ストレートに言つな」

それでもレクトは口元の笑みを消さない。

「殺したのか？あの時、母さんと話をしたって言つてたろ！」

シンカは、テーブルを支えにして立ち上がる。声を荒げれば呼吸が乱れる。まだ完全でないためか息が切れる。

「別にその場で殺したわけじゃない」

「だけど！あの宇宙船でデイラと一緒に殺した！」

「そのとおりだ」

「なんで、だよ。なんで、デイラを破壊したんだ！なんで……」俺の前に現れた？

そこで、肩で息をして、シンカは言葉をつなげようと顔を上げる。  
とん、と肩を押され、シンカはベッドに座りこんだ。

「仕事だからさ。俺には、思想だの政治だの、愛情だのは関係ない。  
与えられた任務を遂行する。お前を連れて行って欲しいと頼んだのはロスタンスなんだ」

「母さんが？なんで、母さんがあんたに頼んだんだ？」街を破壊し

に来た、この男に。

「……お前を護りたかつたんだろ」「…」

実験体として、俺を作った母さん。

それとしてなのか、子供としてなのか。護りうとした？

「なぜ泣く」

黒い瞳で、男はうつむいた少年を見つめている。

うつむいたまま、シンカは首を横に振った。

「泣いて、なんかない。何で母さんに会いに行つたんだよ」

レクトは一つ静かに息を吐いた。

「さあな」

「ちやんと答えるよ！」

「ふざけるな、俺がお前に答えなきやならん理由などない」

シンカの怒鳴り声に、レクトの声は逆に低く迫力がこもった。

その睨み付ける視線は、人をぞつとさせる。

セイ・リンは一瞬、レクトがシンカを殴るのではないかと思つた。

「大佐、あの、」

言いかけたもと部下に、レクトは冷たい視線を返す。

「口を挟むな」

なにを言つても、話してくれそうにない。シンカは質問を変えることにした。

それにびびしても、やつぱり、確認したかった。

「レクト、俺、小さい頃遊んでもらつたよな？」

「…」

「これはレクトも意表を突かれたらしい。一瞬、眉をひそめる。セイ・リンも一瞬驚いたようだが、黙つてレクトを見つめ、答えを待つた。

「ふん。覚えていたとは。まだ、三歳だつたらう?」

「その後もあるよ。四歳か、五歳くらいの頃。ミンクも一緒に遊んだ」

「！ああ、あれが……仕方ないな。俺はな、お前に会いに行つたわけじゃない。口スタネスにだ。勘違いするな。一途でいい女だつた」レクトは遠い目をして、思い出しているようだ。穏かに微笑んでいる。

「……俺、あんたのこと、お父さんだと勘違いしたよ

レクトの笑みが消えた。

シンカの蒼い瞳は、まっすぐに男を見つめていた。  
その目元は口スタネスに似ている。

「俺、ずっとあなたに会いたくて、確かめたくて、さ。今、思えば馬鹿みたいだけど」  
俺に親はない。

「ほんとに馬鹿だな。」

レクトが煙草に火をつけながら、目をあわざずに言った。

「こんな父親じや、困るだろ? シンカ。俺はデイラを破壊し、口スタネスを殺したんだぞ」

シンカは蒼い大きな瞳を見開いて、レクトを見上げている。

否定、しないのか？

鼓動が早くなる。

「だから、確かにたかつたんだ。自分がお父さんだと思つた人が、そんなことをするのには、何か訳があるんじやないかって」  
だつて俺はずつと会いたかつた。あの幼い日からずつと、会いたかつたんだ。

「言つただろう。仕事だ」

レクトは冷たくそう言つと煙を吐きながら、時計を見る。それ以上語るつもりはないようだ。

シンカもそれを悟り、視線を床に落とした。

セイ・リンは不思議でならなかつた。なぜレクトは否定しないのか。彼の前では子供に見えるシンカに、あれほど期待させているのに。答えを待つてているのは明白なのに。残酷だ。

「大佐」

「セイ・リン。余計なことは言つなよ。そもそも医者が来る頃だ。そうしたら、お前は同盟の代表星、チームへ連れて行かれる。そんなに窮屈な思いはさせないぞ。心配するな」

栗色の髪の男が立ち去つても、シンカはしばらくじつとしたままだつた。

セイ・リンも突つ立つたまま考え込んでいた。

（なぜ、大佐は否定しないのだろう。ロスタヌスに愛情を抱いていたから？それはおかしい。

シンカに出生の秘密を話したといつたとき、大佐はおかしなことを言っていた。「俺のことは話していないのか」と。その後、彼はな

んと言つた？）

「ロスタネスはダンに惹かれていたからな」

（ロスタネスがダンに惹かれるがために、レクトのことを話さない。つまり、シンカをダンとの子供だとロスタネスが言つていた、それこそが嘘だつた？私は研究員から直接シンカのことについて聞くわけには行かなかつた。その権限がない。だから私に、シンカが誰の子かを話したのはロスタネスだけ。私に、確かめるすべはない。すぐにはダンも転勤になつてしまつていたし）

（私は、ロスタネスの話を聞いて、ダンへの恋をあきらめた。まさか、ロスタネス、私を騙していたの？）

ほろ苦い思い出が、怒りに変わりつつあった。  
かといって、ダンが転勤になつたためにロスタネスも恋が成就したわけではなかつた。

それでもロスタネスはセイ・リンの気持ちを知つていた。セイ・リンが、彼女の気持ちに気付いていたように。

想像は、確信を身にまとい始めていた。

あの研究で、検体はダンとロスタネスの受精卵だけではなかつた。リユード人のロスタネスは欠かせないとしても、多くの検体を用意したはずだ。

その中にレクトのものもあつたとしたら。

可能性は高い。当時レクトは大佐として惑星リユードを含む宙域の統括をしていた。

研究所にもよく来ていた。

だが、ダンを愛していたロスタナスは嘘をついた。

（そうよ、ダンは研究所で、あの時はつきり否定した。「私の子じゃないや。」と。死の間際ですら、その態度は崩さなかつた！私はダンを冷酷な男だと、そう受け取つた。自らの子を検体扱いするでも、もしかしたら、それも間違いだつたかもしない。ダンは、真実を知つていた。いえ、他の研究者皆が知つていた。私だけ、知らなかつた。うそを、信じていた）

セイ・リンはシンカを子供と認めないダンを、冷酷で冷たい人間と思い込んだ。そして、敗れた恋とともにそれは、憎しみのようなものに変わつてしまつていて。

セイ・リンはぎゅっと目をつぶつた。両腕で、自分自身を抱きしめた。

（ダンは、死んでしまつた。私は彼の本当の姿を分かつっていたのだろうか）

不意に、シンカが目をこすり、立ち上がつた。少しよろけながらテレビに手をつき、しかし凛とした目で、セイ・リンを見上げた。

「俺、帝国の研究所に行くよ。そこに行けば、セイ・リンの仲間も、俺の仲間もいる」

「いいの？」

「本当のことなんか、分からなんだ」

「！」

シンカの蒼い瞳が、少しうるむ。

「もういいんだ。レクトには一度と会えないかも知れないけど、それでいいんだ。俺、決めた。帝国にも行かない。リュードに戻るよ。シキも、ミンクも待ってる」

穏かに微笑んでいる。哀しげな、やさしい笑みは、ロスタネスの表情に良く似ていた。

セイ・リンは不意に怒りがわくのを感じた。

「リュードには帰れないわ。地球に連れて行かれるのよ？それで、実験される。あなたは、人間じゃないんだから」

少年は黙つた。

何か言いたげにセイ・リンを見つめたが、唇をかみ締めた。その蒼い瞳を見つめて、セイ・リンは罪悪感を覚える。それでも言葉ばかりが先走る。

「あなたは覚えていないでしょ、けいだい。月に一回は、毎月は、眠らされて研究所に運ばれていたのよ。あなたを眠らせるのはロスタヌスの役目だった。なかなか大変だと言ってたわ。あなたはどんな薬も一度口には効かなくなるから」

「！」

シンカが拳を握り締めた。

「あなたが思うほど、ロスタヌスはいい母親じゃなかつたわ！」

少年は睨み付けた。涙がこぼれている。

「それでもいいんだ。母さんのことだって、レクトのことだって、俺の中では、いまだに母さんと父さんなんだ。それでいいんだ。誰かが話してくれる真実なんかより、俺は自分の気持ちを信じるんだ！」

シンカは涙をぬぐいもせず、田の前の赤毛の女性を見つめていた。

「俺は、母さんのこと好きだつたし、父さん、レクトのことやつぱり好きなんだ。誰かにあいつは悪い奴だとかいわれたって、嫌いになんかなれない！お父さんじゃないんだから嫌いになれって言うほうが、おかしいだろ！」

シンカの視線はまっすぐに、赤毛の女性を見つめていた。

先に目をそらしたのはセイ・リンだった。

「そう、ね。『めんね。私にもその強さがあつたら……』  
ダンの事を誤解などしなかつた。

ダンから身を引いたのも、いつの間にか嫌っていたことも、すべて

自分がしたことだと、セイ・リンにも分かっている。ダンのことを信じ切れなかつた、それだけだと。

美しい赤毛の女性は、一つため息をつくと、今度はやせしく言つた。

「でも、本当に、地球に連れて行かれちゃうわよ？」

「……仲間に、会いたい」

そこで、シンカは涙をぬぐつた。

「人に会いたいんだ」

「分かったわ。行きましょう」

セイ・リンは、シンカが使つたナイフとフォークを拭いて、ナイフをシンカに持たせる。窓のスクリーンをフォークで器用にはずすと、薄くて硬いそれを割つた。

破片に、破つたシーツを巻きつけ懐にしのばせる。

「そこはダメなの？」

シンカが窓をさす。

高い場所ではない。すぐ、地面が見える。

「だめよ。強化ガラスだからね。しかも、センサー付き。殴つただけで警報が鳴るわよ」

「ふうん」

さすがだな。軍人なんだもんな。

シンカも、気を引き締める。

泣いている場合ではない。

「いい？ 敵に遭遇したらレーザー銃を奪うこと。そつき、観察したところでは、あまり見張りはいないわ。このスクリーンの破片はレーザー銃を通さないの。胸のところにつけておくのね」「破片をもらう。薄いけれど思つた以上にしなるし、硬い。

シンカは動きにぐい長袖を破り取る。

その袖に破片をいれて両側を縛ると、服の下から胸にあたるようこ巻きつけて縛る。

セイ・リンが、ブザーを鳴らし人を呼んだ。

「私についてきて。走るのがきつかつたら、ちやんと『面つゝよ』

「了解」

扉の両脇に分かれて隠れ、うなずくシンカ。

足音が近づいてくる。

用事を聞きに来た兵士は、あっけなくセイ・リンの膝蹴りの餌食になつた。

セイ・リンは、兵士から銃を奪つと構え、ドアの外をつかがつ。さつと飛び出していく。シンカも後を追う。走るたびに、手足のけだるさが増す。

重力が強いってこんなに違うんだ。シンカはつづく。環境の違を感じる。こんなに重いところで軍人やっているんだから、セイ・リンの足が速いのは当然だ。

あの時も後をついて走った。

研究所でのことをふと、思い出す。あの、いやな薬の感覚と哀しくて恐ろしい感情が、ふと脳裏によがる。ざわと肌が引きしまる。

部屋の外は廊下になつていて、そこを突つ切ると、施設のエントラ  
ンスらしいところにでた。

案外、誰もいない。

入り口の警備は、さすがに厳しそうだったが、セイ・リンが詰め所の横においてあつた、二輪の乗り物をそつと奪つて、シンカが、兵の注意を引いている隙に、ゲートを開けた。

シンカを後ろに乗せて、走り去る。

途中、黒い大きな乗り物とすれ違つた。中に、医者らしき老人と、レクトがいた。

レクトが、驚いてこちらを見ていた。

あつという間に小さくなつて、見えなくなる。

シンカたちが、オリジナルパイプに到着したときには、すでに、薄暗くなつていた。

人工の光なのが、人間の生態パターンとして、やはり昼と夜は必要らしい。日が昇つて十二時間で落ちるようになつてているのよ。と、セイ・リンが、説明してくれた。少し涼しい風が吹く。パイプ内は、乗り物は禁止されている。パイプ自体が纖細な精密機械でできているためだ。丸い筒状の天井の一番上から、絶えず空気調整の風が流れている。

ここで、細菌やウイルスの消毒もいっしょにされるのだといつ。

二人は、黙つたまま歩きつづける。

シンカは息が切れてつらいが、泣き言は言つていられない。

真ん中のフィルタールームに到着する。扉の中に入ると、背後の扉が閉まる。「マスクを装着してください」と声がして、通路の側面にある、黒い棚が開いた。

青いランプが点滅する。中に、何か小さい機械のようなものがある。「シンカ、あなたもこれをつけたほうがいいわ。」

「何?」

「今までいたところは、リューデやリドラと同じ大気成分だったの。ここから先は、地球基準の大気だから、調子を崩す可能性があるわ。だから、これをつけておくの。」

「わかった。」

セイ・リンに手伝つてもらつて装着する。

正直、何が違うのか想像もできないが。

「行くわよ。」

セイ・リンが前方の扉を開いた。

シンカは目をしばたいた。乾燥しているのか、ちりちりする。

セイ・リンが背後を見て、走り出す。

「急いで！」

シンカが後ろを振り向くと、遠くオリジナルパイプの入り口あたりに数人の人影が見える。

追っ手か。

シンカも、走り出す。

住宅街のような、整った町並みを一人の黒い影が走る。街灯が通りに沿つて立ち、ぼんやりと下を照らしている。

コロニーの「夜」は、公共光源がない。太陽アストの光をリユードが遮っている。すぐそばに、青い大きな惑星が見える。リユードだ。宇宙の濃い闇に、青白いリユード。異様なほど、静かな風景だ。どれくらい、走ったのだろうか。「夜」には人は出歩かないのか、それ違うものはいない。

セイ・リンは、商業区のステイマーク（専用の駐車場）に止まっている、トラムに乗り込んだ。

シンカも肩で息をしながら、座席に座り込んだ。四角いその乗り物は、人を大勢乗せるためのものらしく、白い弾力のある金属の椅子が、左右に2列ずつ並んでいる。セイ・リンが運転席で操作した。かすかに振動を感じる。次にふわりと浮き上がり、静かに夜の町を進みだす。

「はあ。これでひとまず安心ね。後は、このトラムが自動的に銀河帝国制御区域に連れて行ってくれるわ」

「せいぎょくいき？」

「このステーションはね、宇宙船が発着するドック区域と私たちの今いる居住区域、そしてステーションそのものを制御、つまり管理している区域があるの。

その中に、銀河帝国の研究所があるので。ほら、コンイラの畑があるってダンに聞かなかつた？」

「そうか。」

いまや、宇宙で唯一のコンイラの畑。惑星リュードで、ファシオン帝国のキナリスは、新しい畑を作れただろうか？

ふと考えた。

いやな奴だつたけれど、リュードの人々を思つてしているんだもんな。

俺は、仲間のために、何ができるだろ？。まずは、シキたちにあつて、三人で帰るんだ。

心配しているだろ？。ミンクはきつと泣いてる。

「どれくらい時間かかるの？」

「そうね、居住区を出て、制御区域の真中あたりだから、三十分くらいかな。」

「ふうん。」

シンカは、一番前の椅子に腰掛け、改めて、車内を見回す。人が立つて乗つてもいいように、椅子の列には銀色のポールが立っている。床はふかふかして寝転んでも気持ちよさそうだ。

「なんだか、すごいな。これ、磁力を使つていいんだろ？初めてだ。

「

嬉しそうに尋ねるシンカに、セイ・リンが首をかしげる。

「ずいぶん、いろいろ知ってるのね。」

「ああ、母さんが後継者にするように勉強教えたんだって、ダンが言つてたよ。共通語も話せるんだ。」

「そう、すごいわね。」

セイ・リンはグリーンの瞳を細める。

どうじう方向で育てたのだろう。単なる検体にそんな教育を施して何になるのだろう。

研究者は、彼を可愛がっていたから、だからロスタンネスの好きにさせたのかしら。

そこで、セイ・リンは気付いた。平走している黒い乗り物がある！ 中から、何か青い火花が散った。

唐突に、トラムが止まつた。

「しまつた。」

セイ・リンが、かちかちとあちこちを押しているが、反応はない。

「磁気レーザーで壊させてもらつた。」

聞き覚えのある声。

レクトが、乗り込んでくる。背後からあの部下たち。銃を構えるセイ・リン。

「セイ。うしろ！」

「！」前方の窓から入り込んだジンロに背後を取られる。セイ・リンは羽交い絞めにされる。

同時に、レクトがシンカに飛び掛けた。狭い座席の間でよけきれず、そのまま、殴られ、座席と窓の間にぶつかる。

「ぐー！」

耳元でガチャリとなにかが壊れる。

レクトは、右腕の内側を切つた。血が滴る。

シンカが倒れながら、とっさに、あのナイフを構えたのだ。さらに突つ込んでくるレクトのすねを、蹴つてけん制する。

「一」

抵抗に腹を立てたのか、立てずにいるシンカに、レクトが襲い掛かる。

手に持っていたナイフを蹴り飛ばされた。さらにレクトが足を振り上げ、踏みつけてくる。とつせに顔を覆つた腕ごと、ひどく踏まる。

体の下で座席がミシリと鳴った。胸にも、ずしんと痛みを感じる。靴の固い感触が、気味悪く響く。息ができず、意識が遠のく。怖いと感じた。

「やめて！」

セイ・リンが叫んだ。

「・・・」

レクトの腕が、シンカを引っ張り起す。

「俺を、怒らすな。」

青白い顔、怒りに燃える黒い瞳が、少年を見下ろす。額が切れたのか、シンカの白い顔に、赤い筋が流れる。

「レ・・・」

うつすら、瞳を開けるシンカ。その目はうつろで、印象がいつもと違う。

「？」

シンカのまぶたを親指で押し上げる。瞳の色が、金色に変化していく。なぜだ？

「チツ！大気にやられたか。」

シンカの耳につけられたマスクは、こなこなになっていた。「ばかが！なんでいつも俺に従わない！」

セイ・リンは、少年を抱きしめるレクトを見た。

少年の血の赤が、ある女性の瞳の色を思い出させる。

・・レクトの、その想いは、誰に向けたものなんだろう。  
田の前の少年に向けて、ではないような気がしていた。

再び、もとの部屋に戻される一人。それでも縛つたりしないのがレクトの方針なのだろう。

だが再びベッドで寝る羽目になつたシンカはばんやりしていた。怪我ではない。怪我はここに到着するまでに治つていた。

瞳の色が地球基準の大気で変色し元に戻らない。本人はそれでも平氣そうなのだが、レクトは医者を呼んだ。高齢の医者はトレントと名乗り、シンカの熱を測つたり心音を聞いたりしている。

「強いな、レクト」

トレントを無視して天井を眺めたまま少年がいった。表情はない。「感心してる場合じゃないわ」

ため息をつくセイ・リン。

「すまないが、少し血をもらつよ」

デイラでは見られないくらい老齢の医者は注射器を取り出す。

「……」

シンカは動かない。トレントがお構いなしで数本採血する。

「多いんじゃない?」

セイ・リンがどがめる。

医者の傍らに立つて警戒していた。この男はシンカの傷が治つたと聞いて、見られなかつたことを残念がつっていた。

セイ・リンの目からするとこの医者にシンカの事が分かるとは思えなかつた。

レクトから聞いているはずなのに、この状況で採血してどうなると いうのか。しかるべき装置のある施設でなくては意味がない。

同盟のレベルが知れる。

「つむさい。だまつておれ」

老人は白いひげをさすり、しげしげと採血管を揺らしながら眺める。

血液は不意に薄い緑色に変色して凝固した。

「なんじゃ！」

驚いた様子の老人。管に入つていた血液を凝固させないための薬剤へパリンと反応したのだろう。

シンカは老人の声にちらりと視線を向けて、またすぐに天井を見る。シンカが誰かを怖いと思ったことは初めてだった。小さい頃から特別扱いされていたからか怒鳴る近所の酒屋のおじさんも、酔っ払った警備兵もちつとも怖くなんかなかつた。

胸の奥でまだ、少し痛みが残つてゐる。  
たぶん、アバラがどうかしたのだろう。思いつきり踏みつけられたもんな。

「つづむ」

老人が、道具の入つたバッグから銀色のケースを取り出した。ふたをスライドさせると、中に入つていたメスを取り出す。

「何するの！」

「痛い！」

セイ・リンが老人の襟をつかむのと、シンカが叫ぶのと同時だつた。二の腕をざくりと切られてゐる！

「はなさんか！小娘！」

老人がもがこうが、叫ぼうが、セイ・リンには我慢できなかつた。手刀でメスを叩き落すとそのまま右腕を取つて、老人の腕を後ろ手に締め上げる。

「シンカに何するの！」

騒ぎに気付いたのかジンロが入つてきた。

「おい、何してんだ」

セイ・リンがきっと美しい顔で睨む。

「この医者、シンカをメスで切り刻もつとしたのよー」

「なんすか、そりや」

慌てて判断がつかないのか、廊下にもどつてレクトを呼んでゐる。

「何を騒いでいるんだ！」

「レクト、この女を何とかしろ！」

老人がうなつた。床に座り込む老人の腕をねじ上げ、セイ・リンはレクトを見上げる。

「大佐！」

レクトはゆっくりセイ・リンに近づくと、腕をぐいとつかんだ。セイ・リンはあきらめたように手を離した。怒りで唇をかみ締めている。

「まつたく、小娘が！」

老人が腕をさすりながらメスを拾い上げてシンカを見る。シンカは腕を押されて睨んでいる。腕から流れた血の跡が生々しい。シーツにも血が滴っている。

「悪いが、もう一度」

シンカの蹴りが老人のあごを捉えた。

「ふざけるな！」

シンカは怒りに震えている。

「俺を何だと思っているんだ！人形じゃないんだぞ！」

「れ、レクト、こいつを押さえろ！」

顔を赤くしてあごを押さえ、トレンが怒鳴る。

「トレンさん。貴重な存在なんですよ。無茶しないでください」

レクトが気持ち悪いくらい丁寧に言った。

「いいから、押さえろ！お前、わしに逆らうつもりか！」

お前呼ばわりされ、ちらりと老人をにらむと、ベッドの一一番奥で、壁を背にしている金髪の少年を見る。

シンカの顔が青ざめる。レクトがその気になつたら、かなわない。先ほど思い知つたばかりだ。

「大佐！やめてください！」

ジンロに押さえられているセイ・リンが叫ぶ。

「だまれ！小娘！」

老人はヒステリックに叫んだ。

レクトが、ベッドに片ひざをついて、手を伸ばす。  
シンカが後ろによけようとする。  
背が壁にあたる。

「逆らうなつていったよな」

レクトの低い声がトランクで捕まつたときの痛みと恐怖をよみがえらせる。シンカが悔しそうに頭を伏せる。かなわないことが証明されている。

レクトがシンカの腕をとつた。少し震えていた。一の腕の傷口があつたはずのところを見る。

「痛いのか?」「

シンカは、こわばつた表情のままうなずく。

レクトはそつと手を離した。

「傷がない分、どう手当をしていいのか分からしないな。そうやって、痛みに耐えるしかないのか?」

「ああ

「すまんな。同盟はもう少し、ましなのをよこすと思った」

「…」

シンカはレクトを見つめる。金色の瞳が、不思議な雰囲気をかもし出している。

「なんじゃと…きさま、なりす者のへせに、何を偉そうに…」

老人がわめいた。

ジンロがすでに老人の背後にいて両肩に手をかけた。

「やめだ。お前を同盟に預けるのは危険だ。研究所のほうがまだましだった」

レクトがシンカの表情を覗き込みながら、言った。

「ジンロ、お帰り願え。」「

「了解

ジンロは老人を引きずつて出て行く。

「いいのかー、レクトーー、きさま、同盟からも追われるぞー、

捨て台詞が小さくなつていぐ。

「なあ、シンカ」

レクトはベッドに腰掛けた。

まだ、壁にくつづいているシンカを見る。

「お前が逆らうから、抵抗するから殴らなきゃいけなくなる。だから、逆らうな。俺だって、お前を傷つけたくはない」

「……」

「大佐、シンカを帝国に、私たちに返してくれませんか？」  
セイ・リンが言ってみた。同盟に渡すつもりが変更になつたのだ。  
帝国に、もともとの研究者たちの見守る研究所に返してはくれない  
か？

セイ・リンの提案にレクトは眉をピクリとさせた。黒い切れ長の瞳  
が、険しくなる。

「俺は反対だ。君たち研究所の皆がどいつのどいつもりはない。た  
だ、皇帝は本氣でシンカを利用しようとしている。ダンが戻された  
のもそのためだ。ダンははじめから、シンカを帝国の首都星、地球  
に送るつもりだった。地球で皇帝が待つてはいるからな。あの男にシ  
ンカを渡すわけには行かない。まあ、君が我々と行動をともにする  
とこうのなら、歓迎するがな」

と穏やかに語り、「シンカ、お前は一緒に来るんだ」と付け加える。

「なんで？」

シンカの声が少しかれる。

なんでレクトは俺を連れて行きたがる。いつたい、どこへ？

レクトがシンカの肩に手を置いた。温かい。

「俺たちは自由だ。お前にも自由を保障しよう。それが、ロスタネ

スの最期の望みだった」

「でも、レクトは俺を同盟に売ろうとしてたじやないか！」

「誰が売るなどと言つた？保護してもらおうと思つていただけだ。

残念だが、惑星保護同盟では無理だ。レベルが低すぎぬ

その様子を観察していた赤毛の女性が、あつーと小さく声をあげた。  
「大佐、もしかしてそれは・・シンカを仲間にしたいってことです  
か？」

「仲間？」

シンカが目を丸くする。

レクトが、むつとした表情で立ち上がった。

「最初からそのつもりだが。ミストレイア・コーポレーションの一  
員として、迎えるつもりだ」

シンカも、セイ・リンも驚いて顔を見合させる。一人とも声が出ない。だつたら、最初からそう言えればいいのに。あんな強引な言い方されれば、誰だつて誤解する。

シンカはレクトの表情を見あげた。変わらない、長いまつげの奥の黒い瞳が、シンカを見ている。無表情だ。

母さんが死の前に、レクトに望んだ。俺に自由を与えてくれって。母さんはレクトを信用していた。そしてレクトも、その約束を果たそうとしている。

俺に憎まれても人殺しつて言われても。

俺もレクトを信じていいのかもしれない。

シンカは、うれしいのか哀しいのかよく分からなくなっていた。

「もつと、分かるよつと言えよ。勘違いしたじやないか  
「それくらい気付け」

男は視線を逸らし煙草を取り出す。少年のその笑顔は、ロスターネスのやさしい表情にひどく似ていた。

あなたを愛することはできない、だから、一緒にに行くことはできない。そう言った彼女の悲しげな笑顔だ。

セイ・リンはほっとしていた。レクトの組織にいれば確かにシンカも安全かもしれない。

そして、もし本当に親子であれば、一緒にいて当然なのだ。

そこでセイ・リンは口元を緩めた。

レクトの強引さはあるで不器用な父親のようだ。 そう思いつくと近寄りがたい男が以前と違う印象に感じられる。

ロスタヌスはなぜ、この男を愛せなかつたのだろうか。 そんな疑問が心によぎり、今は亡き女性にセイ・リンは問いかけていた。

「分かったよ。俺、一緒に行くよ

シンカは笑顔だ。

「当然だ。それにしてもお前、白兵戦の基礎がなってないぞ。情けない」

「あんたが強すぎなんだよ」

「ほら」レクトが拳を作つて突き出せば、シンカは受け止めようと腕を差し出す。

不意打ちに自身は失敗し先ほどの一の腕にとんと当たる。

「痛いって！」

「バカだな、そこはそういうじゃないぜ」

「どうせ教わるならセイがいいよ、どうせならわー」

「贅沢抜かすな。ガキの癡に」

じゃれあう一人を見ながらセイ・リンも微笑む。

シンカの笑顔を久しぶりに見た。珍しく、大佐も笑っている。うれしくなつて、自分の気付く。

セイ・リンは心を決めた。

「大佐、私もご一緒にどうですか？」

リドラー人であるセイ・リンは、心から太陽帝国に忠誠を尽くすわけではない。リドラは惑星政府がないために、太陽帝国の人間として扱われているだけなのだ。

研究所の皆もそうだ。

孤児として育ち、十八で帝国軍に入り、すぐに惑星リコードに赴任した。もう、十五年近くリコードにいた。生まれた星には何も残してきていない。ここで帝国軍を辞めたからといって、失うものなどない。

「ああ。かまわん。君は優秀だし、部下たちも喜ぶ」  
シンカは、何か考えレクトを見上げた。

「あの、俺、仲間がいるんだ」

「仲間？ リコードにか？」

「いえ、大佐、ステーションの帝国の研究所に」  
セイ・リンが説明する。

「そいつらも連れて行けって？」

「だめなら、俺もいけない」

レクトの顔に今までになく真摯な表情がのぞく。見かけたあのディラの少女を思い出す。

「大切なのか？ 親友か？」

「ああ」

真剣に見つめあう二人。

「いいだろう。俺も一仕事あるんだ。研究所にはな

「私、ね。あの町で多分レクトを見かけたの」  
ミンクが、ぽつりと言った。

シキと二人で共有のリビングで食事をしていた。  
二人とも半分以上残している。味気ない食事。

「早くいえよ！いつだよ」

「商業区の、市場の人ごみで。多分、そうだと想うの。すぐに奥の細い道に入つて行つちゃつた。あのね、私がレクトを見たのは四歳くらいのことだから記憶はあてにならないんだけど、でもシンカに少し似ていたの」

「シンカに？」

「うん。でも、人ごみで近づけるわけでもなかつたし、怖くつて。五、六人の、シンカが言つていたような仲間を連れていた」

ミンクはフォークで魚の残りをつつきまわしながら言つた。

「シンカ、小さい頃から、ずっとお父さんがほしかったんだ」

「ん？」

「シンカは、デイラでは特別だったの。姿が違うことも、コニイラを必要としない体質とか、そんなのすべて含めてデイラの大人たちはみんなシンカのことを大切にしていたの。

いい意味で特別だったの。聖帝キナリスからも匿つていたわ。シンカ自身はそれをすごく嫌がっていたのね。そんなことより、普通にお父さんとお母さんがいることにあこがれていたの。デイラではそういう子供はいなかつたから」

シキは、遠い目をする少女を見つめた。

「私の家はデイラの領主をしていたの。だからよく、帝国の警備軍が交替になるたびに、家に招いてもてなしてしたりしたの」

「そのたびにね、シンカはそつと見に来ていたの。あの時、遊んでくれたレクトが、軍服を着ていたから、だから、もしかして会える

んじやないかつて

結局、あの、私と一緒に三人で遊んだのを最後に、レクトは現れなかつた。

「そんなに慕つていたのか

ミンクはうなずいた。

シンカがどんな気持ちで破壊されたデイラを見ていたのか。改めて苦しくなる。

そこに、リックス少尉が突然、入ってきた。顔には満面の笑み。

「シンカが！ その、ここに来たんです！」

「え？」

ミンクが立ち上がった。フォークを持ったままだ。

「ミンク！」

リックスの後ろから、あの、金髪の髪が見える。

「シンカ！」

駆け寄ったシンカに抱きしめられ、ミンクは胸が一杯になる。

「もう！ 心配したんだから！」

涙がこぼれる。

「ごめんな

ミンクの頭をシンカの手がなでる。その胸の感触も腕の回し方も背の高さも、ミンクは覚えている。少しコンイラの甘い香りがする。それが余計にミンクを安堵させた。

「あ、ミンク」

魚のソースが二人の服についている。

「あつ。ごめんなさい」

ミンクが慌ててフォークを置く。シンカがそれを待つて、また抱きしめる。

「お前、少しばこつちも気にしろよな」

シキがふてくされる。笑っているのだが。

「シキ！ ごめん。俺……」

シキは少年の肩をつかんだ。

「お前、目をどうしたんだ！」

「あ、なんか、変わっちゃったんだ。『』の空気の影響じゃないかな」

「本当！大丈夫なの？」

ミンクも覗き込む。

「俺は別に平気だよ。見えないわけじゃないしさ。それよりシキだつて瞳の色が変わっているじゃないか」

笑うシンカ。元気そうで、瞳の色以外何も変わらない。

「お前、よく分かつたな」

シキが照れたように笑う。

「『』の空気があつているらしいんだ。『』の空気はあの噴火以前の毒素のないリュードの大氣と同じなんだと。研究所の医者が言っていた」

シキの黒い瞳はリュードの大氣に含まれる毒素でにじり始めていた。それが今は澄んでいるのだ。本人ですら医者に言われるまで気付かなかつたのに。

「そつか。よかつた。ミンクは、『』の空気は大丈夫なのか？」

シキだけでなく、ミンクもあの小型マスクを装着していないことに気付いた。

「うん」

シンカの胸にはミンクがしつかりとしがみついている。

無理もない。ずっと我慢していたのだ。

リックス少尉はもう泣きの涙をふいてそっと部屋を出る。三人だけ話したいだろ。

「シンカ、お前、どこにいたんだよ」

「そうよ！なんでもつと早く来てくれなかつたの？」

ソファーにシンカを真ん中に座ると、一人が責める。

「『』めん。俺、昨日まで眠つててさ、ほら、ミンク。俺昔から、た

まにひどい熱出しだらう？あれで、動けなかつたんだ。セイ・リンも一緒にたんだけど  
そつと、うそをつく。

「どこにいたの？」

「……」

シンカは、髪をかきあげた。前髪が伸びて、うるさいのだ。

「……俺とセイ・リンは、レクトに助けられたんだ」

ミンクとシキは身を乗り出す。

「大丈夫？」

「お前、話できたのか？」

シンカは、少し照れたように、頭に手をおいた。

「その、お父さんかどうかは分からないままなんだけど。ただ母さんがレクトに、俺のこと頼んだらしいんだ」

「頼むつて何をだ？ だいたい何でお前の母親がレクトに頼むんだ」「あり、シキ、それはシンカのお父さんだからじゃないの？」

ミンクの一言に、シキもシンカも黙つた。

「え、何か変なこと言つたかな？」

一人の様子にミンクは首をかしげる。

「……何を頼んだってんだ？」

シキが問いかけると、シンカはまた困ったように視線を落とす。

「俺、その、ほら、ちょっと普通じゃないだろ。それでさ。太陽帝国の首都星に連れて行かれることになつているらしいんだ少し、濁して話すシンカに、シキはため息をついた。  
(教えられたのか。自分が何なのか。それでも、やっぱミンクの前では平気な振りするんだな)

「シンカ。あのね」

ミンクが話そぐとする。それを遮つてシキが割り込む。

「それでレクトはそれをどうにかしてくれるのか？」

ミンクはふくりと頬を膨らめた。

そのかわいらしい表情をシンカは横目に見ながら彼女の髪をなでた。  
「あの、俺、レクトと一緒に行こうと思うんだ。俺を仲間として迎えてくれるって言つんだ」

「仲間！？」

ミンクが声を大きくした。

「ミストレイア何とかって、会社のか？」

「うん。セイ・リンがいうには、その会社なら太陽帝国の皇帝から逃れられるんじゃないかつて言つてた。今ままじゃ、俺は研究材料として捕まる。何の自由もなくなる」

シキが、久しぶりの麦酒を味わいながら、言った。

「レクトに会つたことないからさ、よく分からんが、まあ、わざわざ仕事の合間に危険を冒して助けようとしたわけだろ？お前の母さんのためだったとしてもさ、結構いい奴なのかもナ」

「俺もそう思うんだ」

嬉しそうに微笑むシンカ。

「……私は、そうは思わない」

ミンクは複雑そうな表情を見せる。

彼女の両親はデイラとともに亡くなっている。それを実行したのはレクトだ。仕事だと言つた。

「『めん、ミンク』

「シンカが謝ることないよ！だつて私の父さんと母さんを殺したのは、シンカじゃないもの！あの人たちだもの！」

ミンクはシンカの手を振り払つて、部屋を飛び出していく。

「ミンクー。」

後を追おつとしたシンカの肩をシキが抑える。

「シキ、俺、……」

「俺が行つてくる。お前は、自分のことだけ、考えてみ

「！シキ」

シンカが顔を上げたときには、黒髪の男は閉まる扉の向ひに消えていた。

シンカは、椅子に座つて、うつむいた。

俺、ちつともミンクのことを考えてやれてなかつた。

レクトは一日間時間をくれるといった。

二日後の夜迎えに来ると。

それまでにミンクを説得できるんだろうか。

……それとも。

ため息をいくつかついた後だつた。

「シンカくん」

リックス少尉だつた。

「はい」

シンカは立ち上がつた。

少尉は、こつものおどおどした表情で、言つた。

「健康状態を確認したいことこのことなので、一緒に来てほしいんです。」

「え、はい」

迷つたが、シンカはリックスの後についていった。

ミンクは建物の外に出ようとして、ヒントランスの警備兵に止められた。

「何で外に出ちゃいけないの！」

泣きながら怒る小柄な女の子に、困ったように一人の警備兵は顔を見合させた。

「外は危険です」

「わりい、ちょっと癪癢起こしててさ」

追つて来たシキの姿を見て警備兵はほっとしたように手を離した。その瞬間、ミンクは駆け出す。

「あの、ばか」

「待て！ あんたも、外に出すわけには

シキは肩に手を置いて止めようとする警備兵の一人を、睨みつけた。その口元は笑っている。

「どうせ、門より外には出られないんだろ。あいつは俺が連れ戻すから、黙って通せよ」

シキは腰に剣を持っている。剣を抜く様子は見られないが、それをも辞さない迫力にもう一人の警備兵が同僚を止めた。無用な争いは避けるべきだと判断したらしい。

「仕方ない。すぐに戻れ」

「ああ」

にやりと笑って、シキはミンクの後を追った。

建物の正面にあるロータリーを抜け、その先に芝生のある一角がある。

その芝生に座り込んでミンクは泣いていた。

「よつ」「よみ

顔を手で覆つて、ミンクは返事もしない。

「お前さ、気持ちは分かるんだ。親の敵だもんな。しかも、シンカがそちらを選んだことが悔しいんだよな」  
ミンクがかすかにつなずいた。

「けどさ。俺たちに、他に何かしてやれるか?あいつのために何かしてやれるのか?」

ミンクは涙でくしゃくしゃになつた顔を上げた。

「でも

シキはにっこり笑つて、その頭をなでる。

「お前もさ、がんばつてるんだと思つんだ。見かけよりずっと強いし、しつかりしてゐしな。けどさ、今のあいつの状況を救つてやれるのつて俺たちちやないんだ」

「……リコード」「帰ろうよ」

「ああ、帰りたいな」

「また、三人で旅しようよ。樂しそよ、きつと」「きつと、シンカも同じこと考えたさ。だけどな。いくら考えても、逃げられないと判断したんだ」

「じゃあ私たちひびうなるの?ねえ、シンカはレクトと行つちやうんでしょう?」

「お前を置いてくわけないだろ、あいつが。置いてくつもりなら、ここにも来なかつただろ?し。俺たちの前には現れなかつたさ。そうだろ、あのまま死んでしまつたことにしておくのが一番よかつたはずなんだ。それでも俺たちのために来てくれたじやないか。守つてくれるつて言つたんだからさ。信じてやれ」

「シキも一緒?」

「俺はレクトが嫌がるつとシンカについてくつて決めたんだ。それになんかもう、戻れないくらい遠いといつまで來ちまつたしな」  
空には一面の星。

夜のそこには蒼い星が見える。

「あれ、リコードなんだつてな」

ミンクがうなずいた。

「遠くに来ちまつた」

「うん」

ミンクは立ち上がった。

「戻るぞ」

「うん」

「あ、そうだ。シンカの、ほら、生まれのじと。あいつが言ひまでも知らなかつたことにしておけよ」

「でも」

「あいつが言わるのは自分で消化し切れてないからだ。笑つて話せないからだ。だから、あいつが自分で言えるようになるまで見ていてやれよ」

「シキって、なんでシンカのことそんなに分かるの？」

歩きながら前を歩く男の背中を見上げる。

「お前が分からなすぎ。俺にとつてはそつちのほうが不思議だ」

ばしとミンクの小さな手が叩く。

「なんで、シンカ、これに惚れるかなあ」

頭の後ろに腕を組んでシキは笑う。

「ひどいんだから！」

部屋に帰ると、そこにはシンカはいなかつた。

代わりに赤毛の女性、セイ・リンがソファーに座っていた。

「お、シンカはどうしたんだ？」

「今、メディカルチェックを受けているわ」

「ああ、あの医者が見るやつ」

美しい女性兵士の隣にちゃっかり座り込んでシキが笑う。

セイ・リンは、足を組みなおして腕組みをすると、ちらりとシキを見つめた。

「シンカから聞いたかしら」

「なにをだ？」

「シキ、そばによりすぎ」

正面に座つてにらむミンクに、シキは手振りであつちに行けと命図する。

ミンクの頬がふくつと膨らむ。

「私もシンカに同行するわ。あなた方は、決めたの？」

一人の様子に気付いているはずなのに笑み一つ浮かべずに、美しい赤毛のセイ・リンは淡々と話した。

「なんだ、お堅いな。軍人さんは」

「心配、じゃないの？」

「なにがだ？」

セイ・リンはため息をついた。

「今、何をされてるか、私では知ることができない」

「え？」

ミンクが身を乗り出して聞き入る。

「もし眠らされたり私たちから隔離されたりした場合には、大佐に、レクトさんにお願いするしかなくなるわね」

「ま、大丈夫さ」

にやりと笑いながら肩に手を回そうとするシキに、セイ・リンは声を強くした。

「何のんきな」と言つてるの？シンカにとつて、ここに来るにどがどれほど危険なことか！」

「その時には助け出すさ。何が何でもね」

穏やかに笑つてゐるシキを、セイ・リンは改めて見つめた。

「なんだ、あんた、いつの間にかシンカと仲良しになつたんだな。うらやましいな」

「シキ」

ミンクが睨むのと、シキの手がセイヒつねられたと同時だった。

そこに、シンカが入ってきた。

三人に向ける笑顔にセイ・リンはホッとする。シキが立ち上がり、二人は拳を合わせる。

「おう、心配かけたな」

「じめんね、シンカ」

ミンクが駆け寄った。シンカに抱きつく。

「あれ、なんだ、泣くことないだろ。俺も悪かったよ。お前の気持ち、ちゃんと確かめてからにするべきだつたんだ。一緒に来てくれるか？」

ミンクはうなずいた。

シンカは微笑んで抱きしめる。

「おいおい、ミンク、さっきまでどづいぶん違うじゃないか」「つぬさいの！」

シキに反論するその声は、本当に涙声だ。

「シキ、俺の前では、ミンクは可愛いんだ」

ウインクするシンカ。

「それって、どういう意味？」

ちらりと非難めいた視線を送る少女にシンカは笑った。

「俺にとつて一番可愛いくて意味だよ」

「け、やつてらんねえ」

シキがふてくされる。

隣でセイ・リンが笑った。その笑顔は、シキを嬉しくさせた。

翌日、シンカは朝から再びメディカルチェックに連れて行かれた。いずれ抜け出すこと思えばここで警戒させてもいけない。そう、心

配するミンクに笑いかけシンカは再び真っ白な壁に囲まれた研究室へと向かう。

昨夜の採血の結果、変化したのが瞳の色だけでないことがわかつたらしい。シンカの体内で生成されていたコンイラが変質していた。つまり、シンカはすでに地球基準の大気にも、リドラ基準の大気にも順応していた。

その時点での、シンカの小型マスクははずされていたが、さらに研究するためと「う」として、診察台から出してもらえない。

「……あのさ、いつになつたら部屋に返してもうえるのかな」横たわつたまま、シンカは傍らで忙しそうにしている研究員の一人に声をかける。

チクチクする小さな針のついた管をあちこちに繋がれ、動けない。そのまま、研究員たちはモニター やコンピューターに向かっている。話をする人もいなければ、何をどうしているのか説明もない。いい加減、我慢できなくなつてくる。

「あ！ 動かないでくれるかな。正確な数値が出ないだろ？」

眉間にしわを寄せて、睨む若い研究員。名を、セドリック・ラッセウとかいう。眼鏡の奥の細い目で見られると気分は憂鬱になる。

「もう少し、我慢してくれるかな。ごめんね。朝から何も食べてないしね。つらいと思うけど」

女性研究員が取り成すように微笑んだ。

ため息を一つついて、シンカはもう少し、と自分に言い聞かせる。地球行きをやめて正解だった。こんな毎日されたまらない。視界の隅に赤いものが動く。セイ・リンが少し離れたところにいるようだ。

何とかしてくれないかな。

せめて、この眩しい光を消して欲しい。

なんだか暑いし、喉が渴く。

「ユウリ所長、彼は体調が戻つたばかりです。そろそろ休ませてあげてはいかがですか？」

宇宙ステーションの研究所所長は、まだ若かった。二十六、七歳の、しかも女性だ。

太陽帝国の最も優れた研究都市であるセトアイラスでの実績を買われ、この研究の所長に抜擢されたのだ。その上、ここでのコンイラ栽培を成功させている。傲慢になつていて、セイ・リンは感じる。

小柄で少しほつちやりした体型の彼女はくつきり描き込んだ眉をよせて、ガラス越しに処置室の横から見つめている。セイ・リンの声など聞こえていないようだ。

もともと軍人のセイ・リンには研究員の考えることや感覚はあまり好きになれない。研究員は研究を成功させるためなら何をやつてもいいと思つているふしがある。リュードでの研究メンバーは見守ることに重点を置いていたが。すでに方針は転換されているようだ。正直、シンカをこの処置室の診察台に乗せておくこと自体、不安でならない。

いつ眠らされてしまうか分からぬ。

だが今の彼女では、何の力もない。

レクトが明日の夜、任務のついでに迎えに来るといった。それまで我慢しなくてはならないのか。

「セドリック、ランク3を試してみるわ。明日、陛下が御着きになる前に結果を残しておかなくては」

「はい。了解しました」

「陛下がいらっしゃるの？」ユウリの言葉にその顔を見つめるセイ・リン。

だが年下の所長はセイの存在 자체を認めないかのように振舞う。

「始めて」

「はい」

完全な防護服に全身を包まれたセドリック・ラッセウがさらに分厚いグローブに替え、小さな液体のアンプルを取り出す。慎重に注射器にはめ込むと、シンカの手首の点滴に注入した。

「暴れたらいけないから、ちゃんと押さえてよ」

ユウリ所長が命じる。

「暴れるつて、何を入れたんですか？」

「ランク3。つまり、空気感染の恐れがあるウイルスよ。地球人はこれにかかると二十パーセントの確立で死にいたる。症状は発熱、嘔吐、リンパ球の腫れ、人によつては神経障害もあるかしら」

「そんな！もし、死んでしまつたらどうするんですか！？」

赤毛の女性兵士をこの研究所所長は快く思つていない。ユウリより頭二つ分高い背丈美しい体型、リドラ人特有のしなやかな手足と強さ。地球人の彼女はどれ一つとして持ち合わせていない。勝てるのは頭脳と色の白さだけ。

冷ややかに、セイ・リンを見上げて、言つた。

「あら、大丈夫よ。すでに、ランク1とランク2はすんだわ。何の反応も示さなかつた。ランク2では黄熱病C5を使ったのよ」

「そんな危険なウイルスを！」

地球でもはるか昔に克服したはずのウイルス性の熱病だつた。しかし、それは他の惑星で新種を生み出し、C1から最新のもつとも危険なウイルス、C5まで発展している。それを、使つたのか！ワクチンがないわけではないが、危険な病氣だ。ランク3とはいつたい何を使つたのか。聞きたくもない。

「あら、セイ・リン少佐、顔色が悪いわよ？お気に召さないようでしたら、ごらんになつてなくても結構。どうぞ退室なさつてください。あなたが、どうしてもつて言つから、入れてあげているのよ」

セイ・リンは拳を強く握る。

「所長、反応ありません。白血球数も変化ありませんが、ウイルス  
自体は消滅しているようです。コンイラの坑ウイルス反応はすばら  
しいものがありますね！」

「ありがとうございますセドリック。ご苦労様。記録して、シンカを休ませて  
あげて。私たちも休憩しましょう。三時間後に、経過を見るために  
診察と採血して」

ほつとするセイ・リン。

時間は昼をとつぐに過ぎていた。向かって左側が全面ガラスになっ  
ている廊下を歩きながら、明るい日差しにセイ・リンは目を細める。  
傍らを歩くシンカは、黙っている。疲れたのだらつ。

「俺、もういやだな」

しばらく歩くと、少年がポツリと呟いた。

「明日、彼が来るまで何とか引き伸ばしたいわね。このままじや、  
参ってしまうわ」

「目が、さ」

「どうかしたの？」

「うん。チクチクするつて言つか。あの、金色になる前に感じたみ  
たいな、変な感じなんだ」

それで、先ほどからしきりと擦っていたのか。

「あの場では、言えなかつたのね。ごめんね。つらい思いさせて。

私は何もできない」

「いいよ。あそこで言つたらまた何されるか。あーあ。腹減つた！..  
首の後ろを軽くもみながら欠伸するシンカ。

セイ・リンは明日、レクトが来る予定時刻より早く太陽帝国の迎え  
がきてしまつことをシンカに伝えるのをためらつた。

太陽帝国皇帝、リード五世も来る。レクトに知らせて、時間を早  
めでもらわないと間に合わない。それくらいは自分がやらなくては  
と、生来の生真面目さで覚悟する。

皇帝が自ら辺境へ赴くなど珍しいことだつた。地球を出るにとまらず滅多にないのだ。

だが、所長がああ言ったからには本当なのだろう。自分が、もう少し立場が上であれば、情報も入るところのこと。

「あれ、蒼くなつた」

気付くと、シンカはガラスに映つた自分の瞳をのぞいている。

「そうね。元に戻つたみたいね」

「やだな、なんか擬態する虫みたいだ」

「どつちも似合つてるからいいわよ。私も変えられるなら赤毛を何かしたいわ」

「いいじゃん。どこにいてもすぐ見つけられるし」

赤毛のセイ・リンが青い瞳を見開いた。

「ロスタンスと同じこと言うのね」

「そつか。俺も同じ」と言われたな。俺、デイラでは目立つてたら、いつでもあなたを見付けられるから、それでいいのってさ」「そういう問題じゃないのよね」

「そうそう。母さんその辺はちょっとずれてた」

笑うシンカ。

シンカもちょっと似てるのに、とセイ・リンは少年を見つめる。

「セイは好きな人とかいないの?」

「いないわよ。今は」

少し、遠い目になる。かまわずシンカは続けた。

「シキとかどう? いい奴だよ」

「目の前にいれば好きになるつてものでもないでしょ?」

「なんだ。残念」

もう一度伸びをする少年を、セイ・リンは穏やかに見つめた。

部屋に戻ると、すでに食事が届いていた。

シキが待っていた。心配していたのだろう。苛ついたようすだ。ミンクは中庭で、もらつた子犬が気に入つて遊んでいた。

まだ、シンカが戻ったことに気付いていない。部屋の窓から、遊んでいる姿が見える。

「あの果物はないの？白くて、ぷるんとした。」

セイ・リンに問い合わせる。

「ああ、レンエの実ね。夕食に出すよつて言つておくれわ。」 そのくらいなら、してやれる。

「ありがとう！」

うれしそうにほお張る少年を見つめる。いつの間に近寄ったのか、シキがセイ・リンの横に立つて、小声で言った。

「何されたんだ？」

「いろいろ。」

赤毛の女性はうつむく。悔しさが顔に出る。

「いろいろつて」

セイ・リンを不満そうに見つめるシキ。

「シキ、もうぐどつているのか？まだ、昼だよ。」

サラダで、頬を膨らませながら、少年が笑う。

「そんなんじやねえつて！」

「大人なんだから見せつけんなよ！」

にんまり笑うシンカ。

シキはばつが悪そうに、セイ・リンのそばを離れる。

「シンカ、午後は自由にできるようにするから。」

そう言つて、赤毛の美しい女性兵士は部屋を出て行った。

「おまえ、俺のことなんだと思つていいんだよ。」

シキはむつとしながら、シンカの横に座つて、デザーターのチラノーレートをつまむ。

「俺が、自分で話すからさ。セイ・リンに聞かなくたつていいだろ。」

「聞こえてたか。」

拍子抜けしているシキ。

「でも、お前、自分のことひやんと言わねえだるーが。いつも、我慢してよ。」

「分かつたよ。でも、結果として俺は今、ぜんぜん平氣なんだからさ。いいだろ。あいつらは、俺がどんな病気にかかるか試しだけだよ。」

「病氣?」

「地球のが多かつたな。多分、地球に連れて行くつもりだからだろう。あわただしくいくつか試したみたいだ。俺に注射した薬に、病氣の名前があつたから。」

「本当に、平氣だったのか?また、前みたいに、傷が治つてゐるから隠しているわけじゃないだろうな?」

「大丈夫だよ。セイ・リンだってここでは立場弱いんだ、あんまり無茶言うなよ。」

シキは、少年の金髪をくしゃりとなでた。  
自分の至らなさに、恥じ入る。

「悪かったよ。」

「彼女に直接言つてみたら。少しは進展するかも。」

「お前、女なら何でもいいつて詰じやないぞ!」

「つまんねー。」

そこに、ミンクが戻つてきた。

「シンカ! 戻つたの? 大丈夫だつた?」

「 もちろん。」

につこり笑う。

( そうだ。三時間後だつてあの女所長が言つてたな。今のうちに研究所内を見て回つておこづかん。脱出するときに役立つかもしれない。うまくいけば検査を無しですむかも )

シンカはそう思いつくと、わくわくしてくる。基本的に、冒険は大好きだ。

「俺、ここにあるつていうコンイラの煙を見たいな。」

「ここにあるのか?」

シキは知らなかつたらしい。

「 そう聞いた。言つてみようぜ! 」

三人は部屋から出る。廊下や中庭には、警備のカメラがある。かわりに、変な見張りとかがいなくて、気持ち的には楽だつた。研究所側で不都合を感じれば何かしら手を打つてくる。そつなるまで、何してもいいわけだ。

「 シンカつて、本当にこつていう時、すゞく生き生きしてゐるね。」

「え? そうかな。」

研究所の建物は、四角いビルが一棟で構成されている。敷地は半円の形をしており、ちょうど正門が円周の真中にあたる。その敷地に、二棟のビルが斜めに平行して立つていた。

シンカたちは、門から見ると奥になるビルにいた。二棟のビルは地下で繋がつていて、その地下にコンイラの栽培所があつた。栽培所の入り口には、兵士が立つてゐたが、見学したいといつと、通してくれた。

そこは、蒸し暑い空氣で満たされ、低い天井から明るい照明が照らされている。確かに、デイラの栽培所にも似ている。ただ、デイラより、栄養を与えられているのかコンイラ一つ一つが大きい。

「すゞ」いね。デイラと同じくらいは、あるかも。」「

ミンクの感嘆の声に、シンカもうなずく。

「ああ、広いな。ほら、ちゃんと花がついてる。実もなるなこれは。

「野生のとはだいぶ違うな。」

シキが、首をひねる。

「野生のは、栄養が足りないから、まともに実なんてならないんだ。だから、減っているわけだしね。ここでなら、きっと、かなりの量の成分がとれるな。」

眺めるだけで、実際に植物そのものには触れられないようになっていた。植物のある部屋は、透明なガラスに覆われ、さりにその表面には薄く水のまくが張られている。

常に滴り落ちているその水には何か意味があるんだろう。

「ミンク、お前、体は大丈夫なのか？」

「今のところ、しづくが残っているから。」

「そうか。」

シンカたちがいる場所のちょうど右手側。栽培室の壁面に窓がありしきものがいる。

畑に向かつてガラス張りになつてている小部屋で、中に、青い液体の入つた細長いビンが、たくさん保存されているのが見える。こちらからでは入ることができない。ここで手に入れようと考えていたシンカは、当然が外れた。

・・・いずれ、ミンクを連れて、レクトたちと旅立てば、方法は、一つしかない。

シンカは覚悟を決めた。

「俺、ちょっとさ、」

言いかけたところを、ミンクがさえぎった。

「私も行く」

「え？」

「俺たちだって、考えているんだぜ。研究所の女所長さんに、あれ

をもらいに行くんだろう?」

シキが、小部屋の青いビンを指差す。

「一人で行っちゃダメよ」

にっこり笑う一人。少し、目的は違うのだが。

「まあいいか。じゃ、奥のビルの最上階だ。行こう。」

そこは、警備兵がいた。

胡散臭そうに三人を見、所長のユウリ・ケスネルに取り次いだ。正直、シンカは自信はなかった。一度自己紹介されただけで、彼女には親しみも何も感じていない。その後の検査にもいたはずだが、口も利いていない。

ミンクと同じくらいの背の、小柄な女性。

「こちらへ。」

案内されて、入った部屋は広く、ふかふかした毛皮を敷き詰め、金色の縁取りがされた絵画が、壁を埋めつくしている。

甘い香の匂いがし、シキはおえつと喉を手で押された。

白いふさふさした毛皮のカバーのついた大きな椅子に、不似合いな小柄な女性が座っていた。

その前にある大きな机も、彼女を小さく見せてているだけだ。

「用件は何?忙しいの、手短にして頂戴ね。」

こちらの表情も見ない。手元の資料に目を通している。

「あの、俺のコンイラの成分を取り出すにはどうしたらいいのか教えて欲しいんです。」

シキとミンクがこちらを振り返るのが分かる。

「変わったことを聞くのね。」

はじめて、シンカの顔を見つめた。ユウリ所長は、かけていた縁のないめがねを少し動かし、じっと、シンカを見つめる。

「教えて、実行できるのかな？」

子ども扱いした口調。シキがいやな顔をしている。

「はい。多分。」

「・・・コンイラの成分は、君の白血球に含まれているわ。顆粒球にあるのよ。通常の超遠心分離で取り出せるわ。」

「それは、他の人体に使用しても大丈夫な状態ですか？」

「そこは保証できないわ。なんなら、その女の子で試してみる？ 私も興味あるわ。」

シキがミンクを見る。ミンクはいつもの頬を膨らますじぐさで、女所長を睨んでいる。

「それは、させられないです。分かりました。」

にっこり笑うシンカ。

ユウリは少年をじっと見つめる。基本的なことは、知っているようね。

確かに、育てた母親が、研究者だったという。リュード人でありながら、短期間で帝国医師免許を取得し、生物学の博士課程を終えた天才だとか。

「・・・ロスタネス。優秀な研究者だったと聞いたわ。さすがね。あなたに教育することも怠らなかつたのね。」

ユウリは科学に興味ある優秀な人間は基本的に好きなのだ。つまり、どんな人より、科学者が優れていると考えている。

「いいえ、あなたには及びません。それに、俺は、基礎知識だけです。別に、それが何に役立つかも知らなかつたから。」

「君は、科学者になる気はある？」

シンカは首を振った。

「もう、注射や点滴は見たくないです。」

「そうかもね。そういえば、そろそろ時間なんだけど、どうなの？」

「今のところ、インフルエンザM3ウイルスも、黄熱病ウイルスも、メスエイナウイルスも平気みたいです。」

にっこり笑うシンカに小柄な所長は目を見張った。

「知っていたの！では、その症状もよく分かっているわね？」「はい」

シンカはにこやかに嘘をついた。知っていたのは黄熱病だけだ。後は名前が読めただけで、どんな病気が、なんて知らない。

「ですから、午後の検査はなくてもいいかなって」

「仕方ないわね。何か変化があつたらちゃんと言うのよ」

ユウリが、初めて笑つた。多分、この研究所に来て初めてだ。もちろん、リコードから来た三人は知らないことだが。

「ありがとうございます。」

シンカが、きつちりとお辞儀する。

「いいえ。君が、こんなに面白そうな子だと思わなかつたわ。その気があれば、もっといろいろ教えてあげるわ。いつでもいらっしゃい」

丸い白い顔に、パツチリした瞳が笑う。笑うとそんなに悪くない。シキはそう感じた。

（多分、俺やミンクが口を利いたらとたんに不機嫌になるだらうけどな）

すでに、不機嫌なミンクを見ながらシキは思つ。

（シンカは、女に取り入るのはうまいよな。年上に受ける。セイ・リンにも気に入られているし。俺も今度真似してみるか？）

シンカが礼をいい、残る一人もそしやこに頭を下げ、部屋をでた。背後で扉が閉まるとき、シンカが大きく息を吐いた。

「シンカは誰にでも、うまくお話するのね。」

ミンクが口を尖らせる。

「まあ、まあ。ミンク。なかなか、才能だと思うぜ俺は。」

「ああいう人には、いい子でいるのが一番なんだ。」

ふーん。冷たく言って、一人先を歩き出す。すねている。

そういうハックのほうがよっぽど可愛いのに、分かつてないよな。  
シンカは思つ。

「お前、コンイラ、どうあるつもりだ？」

「こりかは、俺の中の成分でつてことになると思ひ。でも、今は、  
このコンイラから取つた成分が保管されていただろ。  
あれをもらおうと思つてさ。大量になるから、レクトがきたときには、  
じやくれにまきれていただく」

「……悪党」

「強盗経験者にいわれたくないな」

金髪の少年は、可愛らしく顔で笑つてみせた。

その夜、部屋に子犬を入れてもらえないとかで、ミンクがすねて大変だった。自分も外で寝るなどと言い出す。

「ミンク、研究所の環境はきちんと管理されているんだ。動物は入れないんだよ。」

シンカがやさしくなだめても、かわいそうの一点張りだ。仕方なく、庭でクンクン鳴く子犬のために、三人は警備兵を説得して、外に出た。

警備兵が背後から見張っているのが感じられる。

「お前、女に甘いのもいいかげんにしろよ。」

シキが酒ビン片手に、不機嫌だ。

「まあまあ、リュードを眺めながら飲むのも、おつだと思つよ。」  
人工の空は、光源がなければ宇宙が見える。すぐ近くに、青い美しい惑星が見える。大陸の形が見えるくらい鮮明だ。

リュードの大気も、今日は澄んでいるんだな。シンカはしばし、思い出に浸る。

傍らに立つシキも、濃い蒸留酒を口元に運びながら、遠い目をしていた。

「俺はさ、一生、あの星で、国とユンイラを恨みながら、ろくでもない生き方して、後、十年くらいで死ぬつもりだった。」

「ぽつりと、シキがつぶやいた。

「嘘みてえだな。俺は、すっかり体調がよくなつてよ、医者があと三十年は普通に生きられるつて言つんだぜ。」

「・・・いつか、みんなそなうるといいのにな。」

シンカが相槌を打つ。

ミンクは、医者に、ユンイラを少しづつ減らせば、もう少し長生きできるようになると言われたという。それほど、大気の違いは大き

いのか。

この、人工の空気が、惑星リュードでも作れたらいいのに。

「お前が、今後レクトと行くだろ？その後どうするんだ？」

「俺、ミンクの体を治してあげたいんだ。長生きは無理かもしれないけど、せめて、ゴンイラがなくても、ちゃんと普通にしていられるようにな。

できれば、医者になりたいな。」

「何だよ。ロスタネスと一緒にやねーか。」

「そうだね。シキは？」

「俺はさ、せっかく人生が長くなつたんだ。もつと、腕を磨いて、あちこち行つて。面白いもんみてみようかな。」

「酒と女？」

「それはお前、男の人生になくてはならないものだぞ。」

「一人の子を守るのもいいと思うけどな。」

「そういうのに、出会えたらな。」

黒髪の精悍な男は、にやりと笑つ。

ワンワン！

子犬が吼えて、駆け出した。

「あ、待つて！」

ミンクが追う。

「おい、ミンク。離れるなよ。」

「人も仕方なく、歩いていく。」

庭には、人工の芝生が敷かれ、しつとりとした感触が足に心地いい。

建物の角を曲がり、裏庭に続く小道に出たときだった。

「シンカ。」

「！」

セイ・リンとミンクが立つている。よくみると、背後に黒づくめの

男が数人。

レクトたちだつた。

「あれ？ 明日じゃなかつた？」

「皇帝が明日の晩に到着することが分かつて早まつたの。連絡しようとしたら部屋にいないんだもの。」

「じめんなさい。」

そこはミンクが謝つた。

「あんたが、レクトか。」

黒い男たちの中で一番背が高く体格のいい、栗色の髪の男にシキが声をかけた。

「君が、シキか。」

軽くにらみ合つて、しばし、沈黙。

「ふん。スカウトしたくなるな。腕も立つんだうー。」

レクトがやりと笑う。シキもふんと笑つていつのまにか構えていた手を戻す。

「レクト、頼みがあるんだ。」

シンカは、ミンクの肩に手を置いて、男を見上げた。

「お前たちの荷物なら、持つてきたぞ。」

ジンロが後ろから取り上げられていた荷物を渡してくれる。

シキはうれしそうに腰に剣を戻している。

シンカは、長剣を背に負いながら、言った。

「コンイラの畑にある、コンイラの成分を取つてきたいんだ。栽培所の横の部屋にあるんだ。少し待つてくれないかな。」

「必要なのか？」

レクトの眉がピクリとする。後ろの部下たちも顔を見合わせる。

「ああ、ミンク、この子なんだけど、今のところ、それがないと生きていけないんだ。」

シンカが、肩の剣を整えながら言った。

「場所は分かっているから、行つてくるよ。」

「俺も行くぜ。」

シキがついていこうとする。

レクトが、シンカの肩を押さえ止めた。

「何？」

「俺が行つてくる。」

そう言つて、少年の肩をたたく。

「レクトさん！ 時間がないつすよ！ 危険です！ ジンロが止めようとする。」

「危険？」

「俺たちは畠を焼くために来たんだ。もう、時限装置が動き出している。」

ひょりとした部下が、言つた。

「レクトさん！」

「ジンロ、頼んだぞ。」

片手を挙げて、にっこり笑いながら、レクトは駆けて行つてしまつた。シンカも、後を追おうと飛び出しかける。

その腕を、ジンロがつかんだ。

「俺も行くよ！」

危険なんだろ？

「だめですよ。あれは命令なんす。俺たちは、レクトさんの命令には絶対服従で。」

シキも、残りの部下に押さえつけられてもがいでいる。ミンクは半分泣きながら、セイ・リンにしがみついていた。

「だけど！ 死んじゃつたらどうするんだよ。」

「ばかっ！ 声がでかいぞ！」

警備兵が走つてくる音がする。ちょうど、建物の反対側で、脱出の陽動作戦用に仕掛けた小さな爆発が起つた。

警備兵は方向を変え、爆発のあつたほうへと走り去つた。

「チッ！行くぞ。話は後だ。」

ジンロはシンカを強引に抱き上げると走り出す。

裏庭の奥に止めてあつた、後ろが荷台になつてゐる大きい車に、乗り込む。

「レクトを置いていくのかよー。だめだよー。」

ジンロの皮手袋をした手のひらが押されるので、声になつていなかつた。強引に車が走り出す。

まだ暴れるシンカを、がつとジンロが殴る。

「ボウズ！ 行つても足手まといだ。レクトさんは、口下手で無愛想で乱暴だけど、あんたのことを思つてしてゐるんですよ。聞けって言われたじやねえつか？」

（俺に逆らうな）

そう言つたレクトを思い出す。

シンカは、ジンロを睨みながら、シートに座りなおした。

シンカの左右と正面に一人レクトの部下が座り、後ろの座席にシキとミンク、そしてセイ・リンがいる。

ひどくゆれる。

「レクトさんは、非情な振りしてゐるけど、結局俺たち部下にも、あんたたちにもできるだけのことしてくれてるんですよ。リュードでだつて、ボウズをアストローデまで、探しに行つたんだ。デイラで、ロスタネスさんをあきらめなきやならなかつた。だから、危険を冒してあんたを迎えて行つた。俺とやりあつたときに、荷物に発信機をつけておいたんすよ。危険から遠ざけるために、首飾りを買いに行かせて、その間に仕事を済ますつもりだつた

「！」

ミンクが首飾りに手をやる。

「あんたが、何も知らずに抵抗して、レクトさんを危険な目にあわせそうだったから、俺はあんたを撃つた。レクトさんも、これ以上チームに無理をせられねえってわかつてたから、何にも言わなかつたつす。あの日、任務の後ふさぎこんでて、正直つらかっただすよ」シンカは黙つて足元を見つめていた。

「……母さんは、なんでレクトと逃げなかつたの？」

ジンロの灰色の小さい目が少年を見つめる。穩かに答えた。

「俺たちが行つたときロスタネスさんは、ダンと喧嘩していたつすよ」

「ダンと？」

「ダンが、あんたを帝国の本星に連れて行こうとしていたから。ロスタネスさんは、そこではじめて、帝国があんたをどうするつもりなのか知つた。泣いていたつす」

「ダンが去つた後レクトさんが話にいつた。ロスタネスさんはあの町を離れることができなかつた。あの町のためにすべてをささげて研究してきたつす。彼女は三十七歳。コンイラの中毒で余命も少なかつた。それに、これまでずっとレクトさんを拒否してきたんだ。今さら、助けてくれとも言えないつす。レクトさんの仕事を止めることはできない、それもよく分かつていたんすよ」

「それで、シンカだけでもつて？」

セイの言葉に、ジンロがうなずいた。

「レクトさんは、いつもの人らしくなかつた。いつもなら強引にでも連れて行くつすよ。あんたたちにしたみたいに。だけど、ロスタネスさんにはできなかつた」

ミンクが静に涙をふいた。隣にいたセイが、そつと肩に手を置く。ロスタネスを一途でいい女だと、そういうつたレクト。想いを遂げることも出来ず、失うしかなかつた。

一途だつたのはレクトの方ではないか。

その時だつた。研究所の方角から、大きな爆発音がした。爆風がここからも感じられる。

振動に震えた車内で全員がびくりと身体を強張らせた。

ジンロも、哀しそうに目を伏せた。

「今の、レクトは？」

ジンロは首を横に振る。

「わからないつす。けど俺たちはレクトさんの命令どおり動くだけつす」

「俺、いやだ！助けに行かなきや……」

言葉が終わらないうちに、シンカの力が抜け隣にいたジンロに倒れかかる。

ジンロは反射的にシンカを支えながら、背後のセイ・リンを見つめる。

「だめよ。今、シンカを暴走させるわけにはいかないわ」

セイ・リンの厳しい表情に車内の誰も口を開かなかつた。

火災を止めるためのものか緊急車両が何台も、赤いランプを点滅させながらすれ違う。

赤い光が、シンカの頬を光らせていた。

宇宙船グレスデンは、一日前からステーションを飛び立っていた。後に疑われないためだ。

研究所で爆発事故のあった直後、ステーションの裏側にある警備用小型ドックから、三艇の小型艇がそつと飛び出してきた。

グレスデンは三艇とも回収する。

シンカはセイ・リンの主張で、眠られたままグレスデンに運ばれた。

不満はあるがシキもミンクも、ついていくしかない。

翌日、シンカは目を覚ました。

広い部屋だった。シンカ以外だれもいない。レクトが使っていた部屋だった。男の着ていた服がクローゼットにあることで気付いた。ほんのり煙草の匂いがする。

寝室と書斎、そしてリビング。黒い家具と、シルバーフォックスの毛皮で覆われた床がしつとりと馴染み、落ち着きのある空間になっている。

書斎もきちんと整頓され、分厚い本が並んでいる。この時代に紙でできた本が残っているのは珍しいことだった。

もちろん、シンカにはそんなことはわからない。いくつか、本をめくつて見るが、難しい言葉が多くてさすがに読めない。母さんの部屋にもこんな感じのがあつたな。

ほんやりと考える。レクトは戻らない。

また、風景がにじむ。

まだ、誰にも会いたくなかった。だから、一人でソファーに沈み込んでいる。

母さんが亡くなつた後、レクトもいりして、ぼんやりしたのだろうか。

戦闘艦グレスステーンは、惑星リュードから五十光年離れた惑星セダ上空に停泊していた。

リュード宇宙ステーションの研究所爆破から一十時間が過ぎようとしていた。艦内では、艦長の部屋の前で、三人がもめていた。

銀色の髪の少女が、食事を運び入れようとするが、黒髪の青年が止める。

「いいじゃない、だつてシンカも」飯食べないと。せつとお腹すいているよ」

「自分から出でるまで、待つてやう」

「でも」

セイ・リンがため息をつく。

「そつとしておいてあげたまつがいいと思つわ」

「でもつー」

ミンクは頬を膨らめて怒る。

「ミンク」

「もうー、シキも、セイ・リンも、なんでー！」

シキは、いつこのときミンクが成長してくれればと思つたことはない。男が、落ち込んでいる姿をみられたいはずはないのに。

「いい。」

「ミンク。いらっしゃー。」

セイ・リンが、ミンクを強引に引つ張つていった。

「あ。シキがため息をつく。

シンカ、女に甘いのはよくないぞやつぱつ。

「セイ、なんでだめなの？」

ミンクは自室のテーブルに持っていた食事の盆をおいて言った。

「ん。ミンクは、」両親を亡くしているわね、確か。」

「…うん」

「その時、シンカはどうしてくれた？」

「シンカは一緒に町を出て。働いて、旅の資金を稼いで何もかもしてくれたの。私、ただついて行つただけだつた」

「シンカもお母さんを亡くしたんでしょ？」

「うん。でも元気だつたよ。ずっと笑つてたし」

セイ・リンは天を仰いだ。赤毛の長い髪が、ふくよかな胸元に流れている。

軍服ではないが、動きやすい乗務員用の作業着を着ていて、男性らしい服装がよけいに色っぽさを感じさせる。

ミンクは、大人の女性に、負けたくない。

だって、私はずっと小さい頃からシンカのこと見てきたんだから！  
「あの時にね、シンカが私のためにがんばってくれたの。だから、今度は私が大切にしてあげるの」

「ミンク。あなたがそばにいるとね。『デイラを出てからずっとあなたを守つていたときのように、シンカはがんばつてしまつたのよ。シンカがつて口스타네스を亡くしたばかりだつたのに笑つていたでしょう？無理させていたのよ』

「……」

「あの時あなたのために弱氣なんて見せなかつたシンカが、今は誰とも話をしたくなくて、出てこないのよ。それだけ今はつらいのよ。そつとしておいてあげましょう。きっと誰にも、弱い自分を見せたくないのよ」

「でも、私は弱くてもシンカのこと好きだもの…」

「もちろんよ。女は、男が弱いことを知つているものよ。知つていて、知らない振りをするの。」

「セイ」

「そうして、男が意地を張つてでも強くいよつとする姿を愛しいと思つものなの」

セイ・リンは赤い髪をかきあげ、小さくため息をついた。  
偉そうなこと言つてると自分をふと振り返つてしまつ。

「待つことはつらいでしょ？でもシンカは今もつとつらい気持ちでいるのよ」

シンクはつづむいて、自分のベッドに座り込んでいる。

「きつい言い方して悪かつたけど、ねえ、シンク。もう少し大人になつて」

シンクは大きく首を横に振つた。

「私が子供だから、分からないつて言つの？ シキやセイは大人で、私は子供だから、私が考えるのは違うの？」

「そうじやなくて」

シンクは泣き出していた。

どのくらい眠つていたのだらう。

黒い革張りのソファーでシンカは目を覚ました。

天井を眺めたまま大きなあぐびが出る。

ああ哀しくてもあぐびなんが出るんだ。前もお腹だけはすいたよな。

ぐつ。

またかよ。

自分の体の要求にいましさを感じながら、起き上がる。

怪我してもすぐ治るし、病氣にもかからないし、どんな空氣でも順応するし。母さん、本当に丈夫な体を作ってくれたんだな。  
変に感心しながらバスルームでシャワーを浴びる。しつかりと瞳が蒼いことを確認して、あーっと声を出してみる。  
いつもどおり。

また、みんな心配しているんだろうな。

少し照れくさいな。緊張しながらも部屋の外に出ることに決めた。あれからどのくらい時間がたつたのかは知らない。  
リビングのドアを開けようとしたその時だった。  
誰かが外からドアを開けた。

「ちょっと待てって！」

シキの声。

田の前の男は、知らない顔だった。

「どうやら、シキはこの男が入ることを止めようとしたらしい。後ろから、男の肩に手をかけている。

「シンカ！」

誰より早く、この、見知らぬ男が声を出した。気付くと、男にじがつしじ抱きしめられてくる。

「誰だよ。」

シンカより頭半分大きいこの男は、とろけるような笑顔と、滑らかな口調で言った。

「私は、カツシ。レクトの親友であり、同僚でもあるんだ。」「とても、軍人には見えないが。身長の割りに華奢な腕、服装も、詰まつた襟のぴったりとしたスマートなもので、とても動きにくそうだ。」

「・・・あの。離してくれませんか？」

「おおーあの、レクトの子とは思えない綺麗な発音ですねー。」

「俺、レクトの子供じゃなこよ。」

「いやいや、この眉は奴にそっくりじゃないですか」

うれしそうに笑う。ちょいびレクトと同じく「うー」の年齢。田麻色の髪に、緑の瞳。

やさしげな瞳がレクトとは違う魅力を放つ。

女性ならきっとつられて微笑んでしまうだろう。

カツツヒと名乗った男はシンカをそのまま、ソファーのといじりまで引っ張つてくると、自分と向かい合わせに座らせた。

シキがむつとした表情でついてくる。

「いや、感激だな。奴から話は聞いていたけど、こんなに可愛いことは！それは、奴も夢中になるはずだ！」

「いい加減に、説明してもらえますか?」

さすがに、シンカもいやになつてくる。完璧な笑顔を崩さず、一人で感心している。

「ああ。私は、このミストレイア・コーポレーションの経営管理をしている。カツツエ・ダ・シアス。

よろしくね。レクトとは、太陽帝国の大学で一緒にね。まるつきり正反対なんだが、妙に気が合うんだ。

この会社も、奴と共同で経営している。奴が軍隊を辞めたって言うんでね、常々才能を惜しんでいた私が、誘つたわけだ。

君のことは奴から聞いているんだ。もちろん、かのロスタンネスのこともね。」

そこで、カツツエは一瞬、遠い目をした。

「あの。」

「いや、本当に、奴が落とせない女性がいるとは思わなかつた。私もね何度も忠告したんだ、やめとけつてね。けど、奴はほれ込んでさ。

まあ、君を見るとよくわかる。美しい女性だったんだな。」

ものすごいおしゃべりだ。

シンカも、シキも、口を出す余裕がない。

カツツエは話し続けた。レクトがこのミストレイアでどういう地位にあるか、どれだけ有能であるか。部下に慕われているか。などなど。

「俺、お腹すいたんだ。」

強引にシンカがうつたえてみた。

「! そうか! 良かった! レクトのことでも落ち込んでるって聞いてたからな、心配したんだ。今日、到着したばかりなんだが、私が今、

この艦の臨時の艦長をしているんだ。

なんでも私に言つてくれたまえ。ああ、食事だつたね。すぐ用意させるよ。何か食べたいものはあるのかい？」

相変わらず二口一口して、話し続いている。

(もしかして、この人は俺のこと慰めようとしているのかな?)  
ふと、シンカは思った。

「レンヒの実が食べたい。」

カツツヒのしゃべりがとまつた。

「あの、ダメですか?」

ぶはっと吹き出して、お腹を押さえる。苦しそうに笑っている。

シンカはシキと田を合わせる。どうすりやいいんだ、この人。

「ハツハツ・・じめん、いや、レクトと同じだったから。つい。」

レクトと同じ。レクトの子供。

「カツツヒさん。落ち込んでるんじゃないですか?」

シンカの言葉に、男は黙った。

「・・・利口だね。本当に、レクトが気に入るのも良くわかる。」

先ほどまでの、派手な笑顔が消えて、哀しげな、物静かな表情になった。

自分をまっすぐ見上げる少年を、改めて見つめる。蒼い大きな瞳、金色の髪。白い肌。

レクトとは違う。けれど、どこか似ているのだ。あの、お人よしの大ばかやうつに。

「シンカ、ミンクに顔みせてやれよ。心配してたぞ。」

「ああ。シキも、じめん。心配かけて。」

「俺はいいや。お前の気が済めばそれでや。」

拳をつきあわせて、じつんとやる。いつのまにか、それが挨拶になつていた。

そんな姿を、カツツエは穩かに見つめている。

食事を待つ間、シンカはミンクの部屋に行つてみた。が、外出中らしく、鍵がかかっている。通りかかったセイ・リンに聞くと、資料室で宇宙史の勉強中だという。

宇宙史？

「もつと、いろいろ知りたいんだって言つてたわよ。シンカも女子追っかけてばかりいないで、少しほと体鍛えたら？ 前より瘦せたわよ。」

むつ。

「シキといっしょにするなよ！

なんだか、自分がしばらく一人の世界に浸つっていたせいでの、みんなが変わつてしまつた感じだ。

ミンクが、歴史の勉強？

別にサ、心配されるのを期待したわけじゃないけど、・・・。

俺、甘えてたんだな。

この、なんとなく感じる違和感も、久しぶりに出てきて歓迎されない気がするからた。心配して欲しい、って、心のどこかで思つていたのかも。

やだな、俺。

シンカは、無機質な通路をとぼとぼと歩いた。静かで、自分の足音ばかりが響く。

シンカは首をふつて、食堂に行くことにした。食事ができているか

もしれない。部屋に運ぶつて言われたけど、そんなことしてもらわなくてもいいもんな。  
ミンクにだつて、すぐに会えるし。会つたら、『めんつて言わなきやな。

食事を済ますと、シンカは、ミンクを探しつつ、艦内を探検することにした。本能のようなものだろうか、今、自分がどんなところにいるのか、確認しないと気がすまないのだ。

何もかも、珍しい。前回、デイラから助けられたときは、寝込んでいたので記憶になかった。

手をかざすと自然に開く扉とか、人が通ると灯りが点く仕組みとか。最も気に入ったのが、重力のない区域だ。

艦の動力部で、大きな機械が動いている。動力部には重力がないほうが効率的だそうだ。

「ボウズ！あんまり邪魔すんなよ。」

レクトの右腕か、左腕あたりのおっさんが、声をかける。

シンカは遊泳を楽しみながら、手を振った。動力部の周囲から、艦の両側にある艦砲に続く空間がある。その座席にこつそり座り込むと、外が見える。

スクリーンは、動いていないのでただ、目の前の宇宙空間を映しているだけだ。それでも、シンカには十分面白かった。セダ星らしき、赤い惑星の表面が見える。

どんよりした赤い大地に、灰色の雲のようなものが放射状に広がっている。大きい雲から小さいものまで。ぜんぜん違うんだ。リュードとは。

その時、スクリーンの端に、何かが横切つた。

「？」

不意に、響き渡る警報。

艦内に機械的な声が響いた。

「太陽帝国軍艦隊接近中。乗員は配置に戻れ。臨戦体制をとる。」  
なんだろ！

シンカは慌てて、そこを飛び出すと、その勢いのまま空間を泳いで、  
動力部を突っ切る。

中央通路に戻つて、重力を重く感じながら、艦橋に向かつた。

艦橋では、カツツェが誰かと通信している。

シンカが近寄るのを横からジンロが止めた。

「だめだ」

「？」

なんでも、と言おうとしてジンロの背後、隅にシキヒミングが立っているのが見えた。

にっこりして、シンカが歩み寄るのをした時だった。

「レクト・シンドラは貴艦の艦長だな」

レクト！？

シンカは振り向いた。

中央の大きなスクリーンに太陽帝国の軍服を来た、五十歳くらいのひげの男が映っていた。恰幅のいいどっしりした人で高い階級の軍人だとわかる。

「そうですが、何か？」

カツツェが穏かな表情を崩さずに対応している。

「ある事件の容疑者として、我々が預かっている。よって、貴艦内の捜索を行いたい」

生きていた！

シンカが振り向くと、嬉しそうにミンクが微笑む。そちらに駆け寄ると「よかつたね」と声に出さずに話し、両手を握り合つた。シキも笑つてシンカの背を叩く。

再びスクリーンのほうに向き直ると、ジンロがこちらを見て目を細めていた。シンカも満面の笑みを返すと親指を立ててみせる。

シンカたちに限らず、グレスデーンの乗組員皆がここここで嬉しそうなそぶりを見せていた。それもシンカには嬉しかった。

密やかに沸き立つ艦橋で、カツツエだけが緊張を穏やかな笑みで覆い隠し、話し続ける。

「容疑者は穩かではありませんね。ステーションで誘拐されましてね、心配していたところです。彼は被害者ですよ」

軍人はカツツエの言葉にあからさまに嫌な顔をして見せた。

「ほう。あ奴を誘拐しようなどと、そんな恐ろしいことを誰がたらむのだ。戯言はやめてもらおう」

「太陽帝国の皇帝陛下程の力があれば、簡単でしょうね」

「おのれ、貴様、陛下を侮辱する気か！」

ひげの軍人は顔を赤くしている。

「いいえ。すでに貴官はシンドラを捕らえているではありませんか。宇宙協定では固有惑星の宙域外で法を犯したものの平等な扱いとして、中立星軍の保護下にすることが決められているはず。たとえ貴官のおっしゃるとおり、レクトが何かしらに関与していたとしても、中立星軍に引き渡す義務がある。捕らえている時点で、すでに誘拐でしょう？」

カツツエの穏かな物言いがさらに相手を怒らせている。

「貴様、太陽帝国に逆らつつもりか？」

「太陽帝国大佐ともある方が、力づくで連れ去った人質を使って、我ら民間人を脅すのですか？」

「人質などではない！」

「では、返していただきましょう。私たちは逃げも隠れもしません。逮捕するなら容疑が固まつて、証拠がそろつてからにしていただけますか」

「そ、それは……」

カツツェは表情を変えない。シキは背後で腕を組んで観察していた。

さすがに宇宙でもっとも大きい銀行のオーナーだけはある。見かけによらず豪胆な男にシキは面白みを感じるのだろう、目を細めて行方を見守っていた。

シンカに出会つたときにも感じた、「面白いかもしれない」という興味がシキを動かす。

「もうよい。下がれ」

スクリーンの向こう、大佐の背後から黒い衣装を身に付けフードを深くかぶつた大きな影が動いた。

苛ついた様子だ。その姿を見て、グレスステーンの艦橋の乗務員が互いに目を合わせたり、立ち上がりかけたり。スクリーンの向こうの相手に明らかに動搖した。

「これは、皇帝陛下」

シンカはその真つ黒な姿を見つめた。

太陽帝国皇帝？

この、大男が？

「カツツェ・ダ・シアス。そなた、我を甘く見ると困つたことになるぞ」

影がいつ。ガラガラした、重苦しい声だ。

ミンクはぞつとしてシンカの手を握り陰に隠れるように寄り添つた。

シンカは少女の髪を腕に感じながら抱き寄せる。

とにかく、レクトが生きていることが嬉しかった。

カツツェはあの完ぺきな笑みを消し、皇帝から目をそらさず睨みつけていた。

「どちらにしろ、レクトは重傷だ。今は動かせぬ。我是そこにいるリュード人を、いや、シンカという少年を渡してもらいたいのだ。私の研究所から逃げ出したようなのでな。そちらにも迷惑をかけていよう」

名を呼ばれてシンカはびくりとスクリーンを見上げた。ミンクが寄り添う。

相手から見えているのか？

ジンロは、だから俺を止めたのか。

そつとジンロのほうを見ると、彼は大丈夫だと手で合図した。

「いいえ、ここにはそういうものはおりません。第一、リュード星はまだ、調査期間のはずです。太陽帝国皇帝といえども、調査中の惑星の人間を、惑星外に連れ出すことは禁じられているはずですが？」

さらりとカツツェが言つてのけた。

「くく。惑星保護同盟に加盟していればな。我が帝国は今や自由。シンカは我々が作り出し、育てたのだ。返してもらひ。ああ、カツ

ツエ・ダ・シアス。君たちのそのミストレイアも、我が帝国に属する法人だな。逆らわないほうが身のためと思うが？」

「もちろん存じ上げております、陛下。私たちは『』一般の民間人として、自分の会社を運営しているに過ぎません。陛下が壊そつとすればそれこそ、たやすいことでしょう。ですが陛下。太陽帝国皇帝が強引な方法を取れば、ますます、他の惑星政府が疑念を抱くでしょう。例の、コンイラの騒ぎもそうです。コンイラなるものの研究は太陽帝国が全宇宙を制するために行われている、などという不埒な噂が流れているではありませんか」

「ふん。大義名分を振りかざしあつて。まあ、よい。そこにシンカがないなら、どこにいるのかレクトに尋ねるまでのこと」

黒い影の皇帝はスクリーンから消えた。

「チッ。陛下までそこにいるとは」

カツツエは額に浮き出た汗を感じながら、息をついた。

「カツツエさん。帝国軍、離れていきます。ワープに入るようです」「警戒態勢を解く。今の通信記録は保護しておいてくれ。何かに役立つかもしれない。他のものは従前の作業に戻つてくれ。お疲れ様」

につこりといつもの笑顔に戻ると艦橋内の緊張が解けた。

通信士や操縦士など、約十五、六人がざわざわと感想を語り合つてゐる。ちらちらとシンカのほうを見る者もいる。

レクトが生きていたことには皆一様に嬉しそうだったが、帝国軍に拘束されているとは。

シンカはレクトが気になつっていた。皇帝は恐ろしげな男だった。

レクトは大丈夫なんだろうか。重傷だとも言つていた。

「シンカくん。来なさい」

カツツエに促されて、三人は乗組員の個室が並ぶ船室の奥の会議室についていった。

会議室には大きな橙円のテーブルがあった。取り囲むように椅子が三十脚程。縦長の部屋は広く、調度品も他の部屋より豪華に見える。もたれるとぐんとしなる気持ちいい椅子に三人は腰掛けた。その隣にカツツエが座る。

少し疲れた様子だ。顔色が悪い。

「あんた、すごいな」

シキが言った。

「あの状況で、よく分けに持つていいたよ」

「ありがとう。まあ、あの大佐くらいなら何とかなるんだが。リトード五世陛下は威圧感があつただろう?」

三人は黙つて頷いた。

「声は低いし、迫力があるし。すごい、怖かった」

ミンクが素直に言つ。

そういえば、ミンクの顔色も良くない。

ミンクが最後にユンイラを使ったのはいつだろう?はなれていた間に使つたかな?大丈夫なんだろうか?

シンカはそつとミンクの手を握り締めた。

「太陽帝国皇帝、リトード五世。太陽帝国は代々血筋で継承してい  
てね。五代目ともなると、血が濃くなるんだろうな、人間離れして  
いるんだよ。地球人なのに百歳を超えているって話だ」

「百歳？」

シキが繰り返す。

「ああ、最近は常にあの姿でね、顔をまともに見た人間はないん  
じやないかな。偽者説が流れることがあるくらいだ。君たちリュー  
ド人は宇宙でもかなり短命なほうだから驚くだろうね。今、この宇  
宙で人科とされる種族のうち最も長生きなのは、この下にあるセダ  
星でね。

平均は一百歳前後だそうだ」

「ふえーすごい！」

ミンクが変な声を出す。

シンカはあまり興味がなかつた。実際、シンカは自分自身が「通常」  
何歳まで生きるのかなど、知らない。それよりもレクトが気になつ  
ていた。

「カツシロさん。レクトは、どこに連れて行かれたと思いますか？」

亜麻色の髪の穢かな男はにつこつといつもの笑顔を見せせる。

「おそらく地球だと思う。そこに君を連れて行く予定だったらしい  
から、おびき寄せるならそこが一番手っ取り早いだろう？」

「おびき寄せるって」

「皇帝も君を救出に向かわせるために、わざとあんな言い方をした。  
君はそれに、乗るつもりじゃないだろうね？」

シキが横で大きくなづいている。

シンカは納得できない。

「でも、レクトが！」

「当然、罠が仕掛けられていると思うし、状況的に我々はかなり不利だぞ。表向きはミストレイアは動けない。つまり、何の護衛もつけられない。政治的な根回しをしてそれからにするべきだと思うね」「確かに。俺は、何の力もないけど。でも、あいつらがレクトを捕まえている事だって、俺を捕まえようとしていることだって、合法的なことじゃないんだよね？だとしたら、なりふり構わず行動している気がするんだ。そんな相手に政治的な根回しなんて、できると思えないよ」

シンカの言葉にカツシエは首をかしげた。

「なあシンカ。相手は太陽帝国なんだ。君には実感がわからないかもしないが、この宇宙に百以上もの殖民惑星を持つている。宇宙最大の軍隊もある。もしうまくいってレクトを助け出せたとしても、だ。彼は永久に追われる身になる」

「俺を、かくまったく時点で、レクトは覚悟してたんじゃないのかな」視線をテーブルの上に組んだ自分の手に落としたまま、シンカはつぶやくように言った。

デイラから救い出した、そのときからレクトは俺のために行動していた。そう、母さんとの約束もあるだろうけど。すべて俺のため。

「シンカ、それはないよ。いくらレクトでも一生帝国を敵に回して逃げ切れるなんて思っていないさ。あいつははじめから君をデイラ

の事件で死んだことにするつもりだったんだ。それが最善の策だつた

「…それ、つて！？」デイラの事件？それは、最初の？

驚いた三人の表情に、カツツエは内心、面倒なことを言ってしまったと後悔していた。

「なんだ、あいつ。言つてなかつたのか。……甘いな」

「それって、まさか、あの」

立ち上がり、シンカが身を乗り出してカツツエの顔を覗き込む。

「聞きたいのかな？」

カツツエは一つ息を吐く。

その緑色の瞳は三人の顔を順に見渡す。

ミンクは大きな目を潤ませて胸の前で拳を握り締めていた。  
シキはシンカの肩に手を置いていた。

シンカは、テーブルに手をついて、真っ直ぐカツツエを見つめている。

話し出さないカツツエに待ちきれないのか、シンカが口を開いた。

「レクトは、仕事で。任務だから、デイラを破壊したつて、言つたんだ

「ああ、そうだね」

カツツエはうなずく。

「……その、はじめからつて？」

「言つたら、俺がレクトに殺されそうだな」

「……言えよ」

シキも待ちきれなくなっている。

「言つたとして、誰一人、救われないのにか?シンカ、そんなものを君に背負わせたくないくて、あいつは黙つているんだよ」

カツツエは、ゆつたりと背もたれに体を預けて、足を組み替えた。

「……それでも、俺。の人を誤解していくくない」

シンカの真剣な視線を受けて、また一つカツツエはため息をついた。

「強いんだな。さすがに、受けた教育が違うのか？怖がるってことを知らない。レクトにそつくりだ。少し、いじめてみたくなる」

シキが怪訝な顔をしてシンカとカツツエを見比べた。

「話してください」シンカは強く拳を握り締めている。

「確かに、レクトはミストレイアの任務として依頼を受けた。断りにくい相手だったからね。君のことがなくたって、引き受けたかもしれない。だがレクトはそれを利用したんだ。畑を焼くだけなら、あんな攻撃必要なかつた。最初からレクトは計画していたんだよ。リード五世から君を保護する目的で、カモフラージュのためにデイラを焼き払つた。すべて、計算づくだ。レクト・シンドラという男は、そういう奴だ。聞かなかつたかな。宇宙でもつとも冷酷な、軍神と呼ばれる男だと」

誰も、口を利かなかつた。

「シンカ。君のために、あいつはデイラの住人を皆殺しにしたんだ。口スタネスすら、含めてね」

シンカの肩が小さく震えて「これ」とシキは気づいた。

視線を机に落とし、鼓動を落ち着かせようとしているように見える。

ガタン。

振り向くと、ミンクが部屋を飛び出していった。

「あ、」

シンカが振り向いて、飛び出しかける。シキはその肩を抑えた。  
「やめとけ」

シンカは一瞬振りほどこうとしたが、抑えられて動けず。シキの顔を見上げて、そのまま力なくうなだれた。

「今は、そつとじいやれ」

シンカは黙つてうなずいた。

「お前も、部屋に戻つて休めよ。食べたのか？」

シンカが、首を縦に振つた。

「じゃあ、また、少し寝ておけよ」

髪をくしゃくしゃとなでられてシンカは大人しく部屋を出て行つた。

見送ると、シキは改めて、亜麻色の髪のレクトの親友を見つめた。

「あんたもなかなか」

そういつて座りなおした。

「なんだ？」

穏やかに、柔らかい笑顔を崩さないカツシヒに、シキは底知れないものを感じる。レクトと、同類なんだなこいつも。

「まあ、うまくまかしたつてここだな」

「何をかな？」

にやりと笑うシキに、やせしげに微笑み返す。

「どうせ、あんたもレクトを助け出すつもりだらうへ・シンカが言つたとおり、すでにシンカの所在はばれてる。根回しなんかできない」

「ほう」

「俺は参加させてくれよ。そつと聞いたぜ、この艦、すでに地球に向かつてるつてな」

カツツエは目を細めた。

「レクトには悪いが。私も知りたいことがあってね。シンカも連れて行くことにしたんだよ」

シキは眉をひそめる。

「何だ？あいつも行かせるつもりなのか？行かせないために、デイラの話をしたんじゃないのか」

くくつとカツツエが笑う。

「そこまで計算高くはないね、私は。やさしくもない。それにだ。レクトは、私にすら話そとしなことがある。それが、気になつていてね」

「何だよ」

カツツエはシキに顔を近づけた。

シキより少しだけ背の低い彼は穏やかに笑つて、シキの耳にはめられた自動翻訳機を軽く引っ張つた。

「おい？」

「あいつは、何かたくさんでいる。私にも黙つて画策するときにはね、必ず、歴史を動かすようなことをしでかすんだ。過去にいくつも例があるんだ。今回こそは、何をたくさんでいるのか、知りたくてね」

機械を元に戻す。

「なんだ、なんて言つたんだよ！共通語とやらか？おい！」  
くくくす笑つたまま、カツツエは立ち上がった。

「地球までは一週間はかかる。それまでに、シンカを立ち直らせておいでくれよ」  
「おい、なんて言つたんだよ…」

亜麻色の髪の男は、振り向きもせずに出て行った。

グレスステーンは地球に進路を取り、約二億光年先の太陽系を目指していた。到着まで一週間はかかる。

艦内は今ちょうど、深夜の設定のようだ。通路は足元のぼんやりした明かりだけで、ところどころにあるスクリーンから見える宇宙も、暗くただ時折小さな星の瞬きが通り過ぎる。

ワープ航行中はほとんど何も見えない。

それでも、深夜、そのスクリーンの一つにもたれて、じつと宇宙を見つめる少年がいた。

金色の髪が襟についておかしな方向にはねようとしている。くすぐつたいのか、先ほどから気にしている。

深夜。

静かなそこに立ち宇宙を眺めるのがシンカの日課になつて、三日が過ぎていた。

昼間はいつもどおりの笑顔でレクトの部下から格闘技の稽古をつけてもらつたり、リュードにはなかつたさまざまな技術について教えてもらつていていた。

シキも、「何だ、案外元気だな」と、喜んでいる。

ミンクとは、まだ、あんまり話ができない。

ミンクは資料室にこもって、歴史の本を読んでいるのだそうだ。

セイ・リンが彼女に付き添つてくれているので、会えないのは寂しいが我慢した。

会つたとして、何をどう話していいのか、よく分からなかつた。一度、通路で偶然すれ違つた。

「ミンク」

声をかけた。

彼女は悲しげに笑つて小さく手を振り、何も言わずに歩いていって

しました。

俺はその後姿を引き止めることが、できなかつた。

小さく、息をついた。

その蒼い瞳には、暗く深い宇宙の闇が映つていた。

「眠れないのかい？」

びくりと驚いて、シンカは背後を振り返つた。  
薄明かりの中でカツチエが笑つていた。

それは、一瞬恐ろしかったを感じさせる笑みだ。

「あ、はい。地球ってどんなところだらうと思つて  
「ふうん。なんだ、私は君が落ち込んでいるのかと思つたよ  
「正直、最高な気分なはず、ないです」

再び、宇宙を見つめるシンカの肩にカツチエは手を置いた。  
案外、華奢な少年の肩。カツチエは一瞬、眉をひそめた。

大人たちに混じつていつも元気に、怖いものなしの顔して笑う少年  
もやはり子供なのだと思い知らされた気がした。

十七歳。地球なら、その年齢は間違いなく守られる存在。

「本当に君も地球に降りるつもりか？」  
「はい。レクトを助けるんだ」

「あいつを恨まないのか？君のお母さんを、ロスタネスを殺したんだよ？」

シンカは、肩越しに男を振り返った。

「それは、もう決めたんです。自分の気持ちに正直になれば、レクトを嫌いになんかなれない」

シンカは人懐こい笑みを浮かべていた。肩に置かれた手をそっと、引き離して振り返った。

悲しげな微笑み。

以前カツツェに、レクトが語つたことがあった。ロスタヌスの悲しげな笑みが、なんともいえないんだと。

それがこれなのかもしれない、と男は目を細める。いつの間にかカツツェはシンカの手を握っていた。

「あの？」

「あ、ああ」

慌てて手を離して、カツツェは気付いた。

「シンカ、その手首の」

「！」

シンカはびくりと、右手を引っ込める。

「今のは、リングだね？」

穏やかに、しかし強く睨むように見つめられて、シンカは右手を差し出した。

その腕にはめられた金属の薄い輪は、どうやっても取れなかつた。研究所では様々なことが起こつたから、すっかりその存在を忘れていた。

「これ、リングつていうんですか？ステーションの研究所ではめられて。取れないんだ」

鈍く黒く光るそれを、シンカはこつんとつづいて見せた。

「何の、説明もなかつたのか？」

「痛かつたです。麻酔みたいなのが打たれて、なんだか知らないうち

にはめられて。はめてから、一生取れないとか言われてもさ、困るよね」

悲しげにシンカは笑つた。

あのステーションの研究所で、ミンクが飛び出してシキが追つていった、あの後だった。

健康状態をチェックすると言われてついていった。

そのときにはめられたのだ。

何なのか、たずねても誰も答えてくれなかつた。

研究材料なのだと、思い知らされる気分だ。

カツツエはリングをしげしげと見つめていた。

「いや、まあ、普通はたいしたものじゃない。地球ではね、これを身分証明代わりにしているんだ」

カツツエが見せた、彼の右腕にも同じような、でも少し違つ感じの物がはまっていた。

「私は簡単に取れる。これに、クレジット機能や、通信機能、さまざまな機能をオプションでつけることができる」

そういって、カツツエはパチンとそれをはずして見せた。

「どうやるの？俺、これ取りたいよ」

カツツエがはずそと試みるが、首をひねるばかりだ。

「だめ？」

「ああ、ちょっと、私のとは違うな。赤外線に反応するんだ、身分証明らしき機能はあるようだが」

「ふーん。便利かな？」

カツツエは、無言でシンカの腕を引いて歩き出した。

「あの、ちょっと。なんだよ」

「いいから来なさい。何の認証なのか、確認したい」

カツツエは確信があつた。

この全宇宙に広がるネットワーク、通称、星間ネットワークのための認証だろう。そこに、カツツエの知りたかった情報があるのかもしれない。

レクトの部屋に入ると、そのままシンカを、デスクの端末のところまで引っ張ってきた。

デスクの側面の細いスイッチに指をかざすと、ふわりとホログラムが立ち上がる。

「うわ、なんだ？」

四角いスクリーンが、画面だけ空中に浮いているように見える。シンカが一瞬驚いた後に、それに指を突っ込んでみる。

映像だけなのだが、シンカの指に反応してそこだけ虹色に歪む。カツツエがシンカの腕をつかんで、強引とも言える力でリングの中央をホログラムにかざす。

ふわりと画面が数倍の大きさに広がって、白く光る。

が、次の瞬間、大きなそれは消え、もとの小さなホログラムが小さく点滅した。

「……今は、無効か」

不満そうにあごに手をやつて、カツツエは考え込んでいた。

「説明、してくれないのか？」

シンカが鼻息をふんと吹き出して軽く睨んだ。

「……何も、言わなかつたか？ 思い出してくれ、何も言われなかつたか？」

肩をつかまれてシンカは天井を仰いだ。

「この人、相手に説明するの嫌いなのかな。」

「所長だつて言つてたヨーリつて人が、なんか言つてたよ」「なんて？」

「あの人もつける理由が分からないつて。ぶつぶつ言つてた。そこは同感だつたから覚えてる。不満そうだった。正式な何とかがないのにとか、なんとか」

「まあ、いい」

手で制されて、シンカは自分の番とばかりに早口で質問する。そうしないとまた、横槍を入れられてしまいそうだから。

「あの、カツツェさんは何を知りたいんだ？ それと、これと、なんか関係あるのか？」

今度は、シンカがカツツェの袖を捕まえていた。

「あ、ああ。仕方ないな。君が特殊な存在なのは私も知っている。しかしね、ただユンイラの成分を取り出すためだけの検体であれば、何も認証なんかつける必要ないだろう？」

シンカは黙つて首をかしげる。認証、自体になじみがない。

「認証は持つことで人として登録されているということなんだ。この星間ネットワークにね。戸籍を持つって事なんだ。おかしいだろう？ 実験で作ったとか、検体とか、散々人間扱いしなかつたくせに、なんで今、君に認証を与えたんだ？」

「……質問してるの、俺なんだけど」

「あ、ああ。私はね、シンカ。皇帝の目的が、どうもユンイラだけではない気がするんだ。そして、きっと、レクトもそれを知つてい

る

目的？

「それを、知りたくてね。  
にしたんだ」  
だから危険を承知で君を地球に送ること

そこで、シンカはにつこりと笑つた。

「そうか。だから、あんなに反対してたのに、救出に行くことにな

嬉しそうに笑う。

「シンカ」

「なんで、何をそんなに心配してんのだよ、俺、大丈夫だよ。レクトを助け出せば、きっと、カツツエさんの知りたいことも分かるよ」「……君の、その根拠のない自信は、どこから来るんだろうね」

あきれたように両手を挙げる男に、シンカは笑つた。

「せりと、若さからだよ！」

二九

小さく舌を出して頭の後ろで手を組んでみせる  
いたずらっぽく笑うシンカ。

「はあ?」  
「なんかで、俺、考えてもしょがない」と思ひ切った。

「俺、思つたよつに行動する。分かりもしないこと悩んでも仕方ないし、済んでしまつたことで落ち込んでも、元に戻るわけじゃない。なんだか、分からなないことばかり、たくさんありますわ、逆に、どうでもよくなつたみたいだ」

「投げやりって言わないかな、それは」

「それでもさ、俺は生きてるし。ミンクも、レクトも。今まで、俺なりにがんばって生きてきたしさ、これからも同じだと思つ。感じ

たとおりに、生きるだけだよ

子供だからなのか。

あきらめているのか。

それとも、それほど、心が強いのか。

カツシユは金髪の少年に目を細めた。

まぶしく感じた。

「俺、やつ思つたらア。ミンクにあいたくなつた！ 行つてへる。」

「おー、夜中だぞ！ おー」

シンカは部屋を飛び出していった。

静まり返った室内。広い、レクトのための部屋。今はここにない部屋の主を思い、カツシユはつぶやいた。

「そりやつて、母親の死も故郷の思い出も、背負ひ重圧も。乗り越えていくのか。ただ、感じるままに、生きることで、そんなに簡単なことは思えないのだが。……レクト、お前すら乗り越えられないものを、あの子はもう笑つて話すんだ。お前、すでに越えられているかもしないぞ」

シンカはミンクの部屋の前に立つて、一呼吸した。

「ミンク？」

ノックしても返事はない。開けてみると、かぎはかかっていない。

シンカの部屋、正確にはレクトの部屋だが、そじとはぜんぜん違った雰囲気だ。白い、ふんわりした床には薄いピンクの花の模様みたいなものが一面にあり、

テーブルと椅子は精

緻な彫り物が施され洒落た感じだ。横に長いその部屋は、入り口側にテーブルと椅子、

本棚などがあり衝立をしきりにして、その向こうにベッドがあるらしい。

「ミンク？ 眠ってる？」

そつと、のぞいてみる。

ミンクがベッドの前にあるソファーに横たわっていた。足元に、歴史の本が転がっていた。

「ミンク！」

駆け寄つて、そつと額に手を当ててみる。意識がない。

熱が高い！

抱き上げて、ベッドに運んでやる。

想像以上に軽く、それが不安をかき立てた。痩せたんだ、前より。

「ん…」ミンクの白いまぶたが震えた。

「ミンク？ 医者を呼ぶか？」

「シンカ。ごめんね」

声に力がない。

「何を言つてるんだよ。今、医者を呼んでくるよー。」

「待つて」

ミンクはシンカの袖を握り締めていた。

「だけど、調子悪いんだろ？？」

ミンクに引かれるまま、シンカは横たわる少女のそばにかがみこんだ。

「「」めんね…大好き

小声でささやく。

鼓動が早くなるのを感じながら、シンカはミンクの大きな赤い瞳を見つめた。ミンクから、そういう言葉を聞いたのは、初めてだった。

「ああ、俺も」

笑って見せつつもシンカは内心穏やかではない。

「ごめん、ってどういう意味だよ。

どうしちゃったんだよ！」

ミンクは、ほっとしたように手を閉じ、シンカの服を離す。そのまま、何も動かない。青い顔をして、やけにゆっくり細く息をしている。

「ミンク？」

「ごめんね。コンイラ、もうないの」

「なんでもっと早く言わないんだよ！」

「でも、誰に言つても、ないものはないんだもの……」

シンカはミンクの手を握り締めた。そのとおりだった。

ステーションでコンイラの成分が爆破され、もう、この宇宙にはないのだ。惑星リコードで野生のコンイラを見つければ、いいのだが、それも今は不可能だ。

青い顔をして再び目を閉じるミンクを見ながら、シンカは不意に立ち上がった。

腰にある短剣を取り出し、バスルームの熱湯で洗う。一緒に手も洗つた。

「ミンク。目を閉じたままでいいから、これ、飲むんだ」  
ミンクは、もう、目を開けるのも、口を開けるのもつらかった。  
どうしようもないことと分かっているから、ずっと我慢してきた。  
食欲もなく、日に日に力を失っていくような感覚。怖くて、何度も  
泣いた。

歴史の勉強は、部屋にこもるいに口実になっていた。

「ミンク？」

シンカの手が、やさしく体を起す。温かい手。

そのまま、抱きしめていて欲しい。深く眠れそうな気がした。

ふいに、口元に温かいものが触れる。

唇？ ううん、だけど。ミンクは少しだけ口を開いた。

何か、覚えのある苦い味。甘い香り。キスとは、違う。

コンイラ・・・?

温かい液体をほんの少し口に含んだだけなのに、体が温かくなつていいく。

「シ・・ンカ」  
もつと。

声にならなかつたが、シンカが、また甘い香りの液体を呑ませてくれれる。少しずつ、何度も何度も。

「ふう……」

小さく息をついて、ミンクは目を開けた。

シンカの耳がアップで見える。抱きしめられているみたいだ。

「よかつた」

少し、震えている。

それがシンカなのか、自分なのか、ミンクにはよく分からなかつた。

「『』めんな。もつと早く、『』すすればよかつた」  
シンカが、泣いていた。

胸が締め付けられて、ミンクも涙があふれた。シンカの泣き顔。あまり見たことがなかつた。

「シンカ……怖かつたの」

「うん」

「怖くて、でも、『』じょうもなにって思つたから……」

「大丈夫。俺が守るつて言つたら？ お前は何にも無理なんかしなくていいんだ」

「うん」

ミンクはまた、瞳を閉じる。シンカのぬくもりが、うれしい。  
「もう少し、寝てるんだ。医者を呼んでくるよ」

「だめ。もう少しこうして」

シンカの腕に、力が入る。

「私、シンカがいてくれれば、ほんとに幸せだな。あのね、たくさん、なくしちやつたけど、シンカだけは、そばにいてくれる」

「うん」

「そばにいてね……」

「うん」

ミンクが眠つたのを確認して、シンカは、部屋の通信装置で、シキにそつと医者を呼んでくれるよう頼んだ。セイ・リンも呼んだ。グレスデーンのみんなに心配をかけたくない。  
程なくして、シキとセイ・リン、船医で女医のガンスさんが入つてきた。

シンカを見るなりシキが叫んだ。

「シンカ、お前も怪我してるじゃないか！」

「自分でやったんだよ」

指先ではすぐに傷がふさがつてしまつので、シンカは手首を切つたのだ。それでも、数回切り直さなければならなかつた。

気付けば、血まみれになつていた。

それでも、自分の血で、ミンクが助かつたことに満足していた。この後、何の問題もなければ、これからもこの方法でミンクを助けることができるのだ。

「それより、ミンクを診てやって欲しいんだ。コンイラが切れてしまふん経つっていたんだ。俺、気付いてやれなくて。俺の血で、何とか良くなつたと思うんだけど、でも、まだ油断はできないから」

「シンカ君、君も、少し診察が必要ね」

「え？」

すでにミンクの様子を見ていたガンスさんが、一いちらを振り向いて言つた。

「かなり、出血してゐるじゃない。シキ、医務室に連れて行つて。服を着替えさせてね。それじゃ、田立つちやうから、後から行くから、待つて。ミンクは動かさないほうがいいから、ここで診るわ。セイ。手を貸して」

「ええ。ほら、シンカ。あなたも顔色悪いわよ」

セイ・リンが一人をせかして部屋から追い出す。

「ガンス、どうっ..」

セイ・リンが、ミンクの口元の血をそつとふき取りながらたずねる。

「そうね。この子、もともとかなり内臓をいためていたからね。しばらくは、起きられないわ

「そんなに悪いの?」

「内臓は、治る性質のものではないわ。生まれつき、コンイラの副

作用だつて言つてたわね。ある意味、この子だつて十分突然変異な  
のよ。健康という概念からすれば、シンカのほうがずっと健康ね

「やっぱ。私、この子にきついことを言つてしまつたわ」

セイ・リンの言葉には溜息が混じる。

「何を？」

ガンスはシンクの腕に、点滴をつけながらさりげなく尋ねる。

「ずっと、シンカに甘えていたから、つい。もっと大人になつてつ  
て」

「別に悪いことじゃないじゃない？」

「そうね。でも、私には、この子の生きてきた道はわからないわ。  
シンカが何であんなに甘やかすのか分からなかつた」

ガンスが少し笑つた。

「あら、私ならあれくらい、やさしくしてくれる男がいいわ。セイ、  
あなたいい男に恵まれなかつたんじゃない？」

「俺みたいな、ね」

黒髪の男が、戸口に立つてゐる。

シキは白いシャツに白い合成纖維のブルゾン、織り柄の入つたグレ  
ーのパンツをはいている。このグレスステーンの乗員服だ。  
すっかり地球人らしい感じだ。背が高く体格がいいので、様になつ  
ている。長く伸びた黒髪はそのままだが、返つて野性味を増して色  
っぽい。

「シキ！驚かせないでよ、シンカは？」

ガンスが、口元に人差し指をあてる。

思わず声が大きくなつて異常とに気付いて、セイ・リンはあわてて  
黙つた。

その様子を、にこやかに見つめながら、シキが答えた。

「医務室で眠つちまつた」

「そう」

シキは氣を使ってか、ベッドの見えない位置で壁に寄りかかつたま

ま、話しだした。

「あいつはさ、親も故郷もなくして、ぼろぼろだったけど。ミンクを守るうとする責任感で、あいつ自身を普通に保っていたんだと思つ。俺が出あつた時、ひどく気を張つてた」

「まだ、十七歳だって言つのにね。なんだか、つらいわね」

ガンスがぽつりと言つた。

「さて、この子は当分、安静よ。シンカのウンイラがどのくらい持つのか分からぬから、目が離せないわね」

「ありがとう。ガンス」

シキが、深く頭を下げた。

「やあねえ。シキ。これが私の仕事なんだから。次は可愛い坊やね。むさくるしい男たちばかりだつたから嬉しいわよ。私は」  
五十歳は過ぎていると思われる恰幅のいい女医は、につこりと笑つた。

セイ・リンは一人を見送つて、ベッドの横のソファーに座る。

シキたちは地球に向かうと言つ。セイ・リンも、カツシュに同行を命じられていた。

シキの言葉から、自分が始めてシンカとであつた時を思い起こしていた。研究者ほど幼い頃のシンカを知つてゐるわけではない。だから、予想していたより遅しく生意気に感じた。

スクリーンや映像でしか知らないシンカは、自分がそれと知つて泪した。

怒つて、悲しんだ。

やはり、普通の子供ではなかつた。

シンカがどんな生き方をするのか、見てみたくなつた。手助けした

くなつた。だから、帝国軍を抜けたのだ。

カツツエが、要求することは、実行できそうもない。

「もし、シンカが皇帝の手に落ちたら、シンカを殺してほしい」

カツツエ・ダシアス。あの顔での笑顔で。よく、そんなことがいえる。

セイ・リンはため息をついた。

ミンクの状態は、徐々に良くなつていった。シンカの血液を口から摂取したことが返つて良かつたとガансは言った。

輸血のような方法は、やはりまだ危険なのだ。

シンカは女性乗務員が「うらやむくらい」、毎日ミンクのところに通つた。

「お前はほんとに呑くすタイプだな」

「シキにも呑くしてるだろ?」

「足りない」

「ほんとにわがままだな!」

笑うシンカ。

その笑顔が以前よりずっと優しげになつたことに、シキは気が付いていた。

ミンクを失うかもしないと言つショックが、えたのかも知れない。以前に増して、シキにも、ミンクにもみんなに氣を使うようになつてゐる。

最後の最後で、自分で何とかしようなんて。全部自分で背負お

うなんて考えるなよな。

シキは、一抹の不安を覚える。

グレスデーンは、月にあるミストレイア・コーポレーションの基地に到着した。

あの、皇帝と通信した日から、一百四十時間がたつていた。

途中の磁気嵐や、帝国の警備艇から逃れるために、時間がかかったのだ。

そこからは、グレスデーンではなく、小型のシャトルで地球に行かなくてはならない。

通常、宇宙船はすべて、宇宙空間で作られる。専門のステーションが惑星のはるか上空にあり、そこで無重力空間を利用して製造される。

つまり、大型の宇宙船が離着陸するステーションは惑星上にはないのだ。

人々は、月からの定期的なシャトル便で地球と月を行き来する。シャトル便「ムーンスター」は、公共交通機関として、最も需要が多い。

三時間おきに地球に向かつて飛び立つ。これは、スターバンク社の子会社が運営しており、カツシエから渡されたスター銀行社のパワースポーツで四人はすんなり乗ることができた。

目的地は、首都、ブループール。

そこに、皇帝のいる中央政府の建物があり、研究所も隣接している。ミストレイアの諜報部員の情報では、その建物のどこかに、レクトがいるらしい。

シンカは、地球人の標準的な服装をしていた。ハイネックの黒いノースリーブに、黒いふわりとしたパンツ。

すねのあたりで絞られていて、ブーツに収まるよくなっている。黒いブーツには金色のラインが入っている。

これには、警備センサーをかく乱させるための装置が仕込まれていた。

肩からかけた、長剣は、今の地球の治安であれば、誰もが装備する程度のものだ。シキも、腰に剣を挿している。

乗務員服に黒いコートを羽織り、シンカと同様のブーツを履いている。

目立ちたくないでそうしているのに、シキはやけに目立った。

もちろん、シキの横に立つ、赤毛の美しい女性にも、人々は視線をひきつけられた。

「ミンク、すねてた？」

セイ・リンが小声でたずねる。

「そうでもないよ。ちゃんとなだめてきたから。」

自信ありげに、シンカが笑う。

「そのほうが、いろいろとやりやすいしなあ。」

ジンロがつぶやく。

「あ。なんだよ、大人のくせに、見せ付けて。」

シンカは、セイ・リンがシキの腕に手を回すのを見逃さない。

「恋人同士に見えたほうが目立たないでしょ？」

シキの肩にもたれかかりながら、セイ・リンがウインクする。シキは、シンカの期待する顔をしていない。無表情だ。

「なんだよ。緊張してんだ。」

少年がからかう。

「うるさい。」

シキに額をこつんとやられる。

「緊張感ないなあ、お前ら。」

あきれのジンロ。めずらしく、笑っている。

混雑したシャトルは、指定席が取れなかつたので、四人は窓際に立つてゐる。

青い、美しい星が見える。

「リュードに似てる。」

「ああ。」

ジンロ以外は、初めて見るのだ。ここから、地球人が宇宙へ旅立つた。

その科学技術がなければ、各惑星はいまだに、他の惑星に生命があるなど知らなかつただろう。そういう意味で考えれば、地球人の功績は大きい。

シンカは、改めて、星の大きさを感じた。

人間が、何をしても、どんなに進化しても、この星はきっと、いつも変わらず青いままなんだろうな。

同様に、たとえ、リュードの人々がすべて滅びてしまつても、あの星は、きっとあのままなんだ。カンカラ王朝が滅びたときも、そして、今も変わらず青い美しい星だ。

ユンイラは、星が自分を浄化するために生み出したものなのかもしれないな・・・。

シャトルから青く見えた地球は、近づくにつれ、そこに含むさまざまなものを見せつける。

ちょうど、ブループールは夜だった。都市の夜景がもう一つの宇宙のように煌いている。まるで、大きな星雲のようだ。大気がにごっているのか、薄桃色のもやがかかり、それを透かして街灯りがちらちら輝いている。それは、ぐんぐん近づいて、高く伸びた高層ビルが、幾重にも重なる黒い影が見える。

たくさんの空を飛ぶ乗り物が、群れになつて飛んでいるかのように、建物の間を縫つている。

無機質な大都市は、騒音とぎらぎらしたネオンであふれていた。シンカは圧倒された。

「すげえな。」

シキが何気にセイ・リンの肩に腕を回しながら、つぶやく。

「私もいくつが惑星を回ったけれど、こんな大規模な都市は初めてだわ。」

「ジンロは？」

シンカが、腕を組んでじっと景色を眺める男に声をかける。

「・・俺は、ここリドラコロニーで育つてるからな。見飽きるくらいだ。」

故郷に戻ってきたにしては、あまり嬉しそうではない。

「さて、到着だ。行くぞ。税関は通れない。まず、地下に行くか。」「地下？」

歩き出すジンロを田印に、人ごみに踏み込む。シキたちも後に続く。

ここ、地球は、地上と地下、二つの都市があるとジンロが言った。地下には、普通の人々が暮らしている。地上は、特權階級だけだ。彼らにしてみれば自分たちが普通で、地下にいるのは野蛮な下層民

だと呼んでいるらしいが。

「俺はもともと、地下にいたんで。」

ジンロが言つ。

「特権階級のやつらと、俺たちは、人生が違うつス。けど、あきらめきれない連中もいるつス。地下には、そういうレジスタンスが繩張りを持つていて、こゼりあいしたり、帝国軍とやりあつたりしてるつス。

俺みたいに、自由に生きたい人間には、住み心地が悪い。俺は、特権階級のレクトさんや、カツツエさんを尊敬しているつすよ。

到底、かなわないとと思うつス。けど、それはそれ、俺は俺にしかできないことがあって、そこをレクトさんに買ってもらつているつス。

」

シンカは、背の高いがつしりした男を見つめる。いろんな、経験をすべて飲み込んで、本当は仕事のためならどんなこともできるのに、それを匂わせない。

相手に、緊張感を持たせないのんびりした雰囲気。でも、同じ顔で、誰かを殺すことなんてぜんぜん平氣。

怖い男なんだ。

初めて、出合つたときには、剣を交えても、その怖さを感じ取れなかつた。

我ながら、子供だったと思つ。

エレベーターを出ると、そこは確かに地上とは違つていた。

古い建物、不潔な路上に、横たわる人や座り込む若者。飛んでいる乗り物も、地上で

見たほどは多くない。薄暗く、じめじめしている。

「皇帝の中央政府ビルの地下に、廃棄物処理場があるんスよ。そこから、入るのが一番だと思うんで。」

「ジンロは入つたことあるのか?」

シキが問う。

「ああ。俺たちは何かと、忙しいんでね。」

三人は、ただジンロについて進むしかない。

途中のバーで、ジンロが休憩を取る。

薄暗いバーで、シンカの金髪と、セイ・リンの赤毛は目立つた。人々の視線を感じながら、あまりおいしくないスープを飲む。カウンター越しに、太った女性がシンカを覗き込む。

「あんた、家出かなんかかい？ ジンロにだまされてんじゃないの？」

売られちゃうよ。」

小声で、ささやく。

「え、大丈夫だよ。」

につこり笑うシンカ。薄暗い照明にも、蒼い瞳が輝く。

「いや、もつたいないねえ、うちで引き取ろうか？」

「おいおい、やめてくれっす。ドンナ。地下を見てみたって言つから案内してやるだけっすよ俺は。お連れさんが怖いんだ、下手なこと言わぬでくれっす。」

シキを指差す。シキは、睨みながらも、すでに一杯目を飲んでいる。横のセイ・リンも、グラスを傾ける姿がさまになつてている。

なんだよ、俺だけいつも子ども扱いかよ。

シンカは、お酒の入ったグラスを恨めしそうに睨む。

睨んだだけで、口に入れるのは冷めたスープなのだが。

地下の町は、シンカの知つてゐるアストロードとはまた違つた。けだるい空気が漂う。

その中を一時間ほど歩き、四人は大きな建物の前についた。そのまま地上まで続いているらしいその建物は、一番上まで見ることができない。

頑丈な扉がついていて、そこには近づくなと言つ意味の文字が刻ま

れている。ドアを押したのか、ジンロは器用に扉の横の機械を操作する。

音もなく、ゆっくりと扉が開く。

中は闇だ。ジンロに背中を押されて、三人は入つていへ。

背後で扉が閉まつた。

同時に、足元にだけ、小さな灯りがぼんやり点つた。

「これが、センサーつす。このブーツを履いている限り、こいつに引っかかることはないつす

よ。」

四人は、たくさん水の入つた池のような設備や、背の高い透明なタンクに、泡を立てる液体が流れ込む施設の、多分、点検用通路と思われるところを進んでいく。

所々、いやな匂いがしたり、蒸氣が充満していたり、快適ではない。通路の終わりに、小さなエレベーターがある。

ジンロは、持つていた荷物から、小さい機械を取り出し、エレベーターの横の壁にある配電盤を開けた。そこに、機械をつなぐ。

機械は端末のようなもので、そこに何か打ち込んでいる。

「これで、いい。この先は、全部モニターで監視されているつす。だから、じつして、監視カメラのデータを凍結して、俺たちが映らないようにするつす。

エレベーターが動いているつて情報も消えるつす。」

「すごいな。」

シンカが感心する。

「この辺は、レクトさんに教わつたつすよ。あの人は、じつはことに関してはすごいから。」

「そうね。」

くすりと、セイ・リンが微笑む。レクトは大佐になる前には帝国軍

情報部の将校だった。

朝飯前だろう。帝国も厄介な相手を敵に回したものだ。



レクトはベッドに横たわっていた。

黒く鈍く光る壁に囲まれた、狭い部屋だ。

中央政府ビルの二十階ほどにある、拘留施設であることはすぐに分かった。帝国軍の大型艦船の中で、レクトは五日後に目を覚ました。いくらかの火傷と、飛び散った栽培所のガラス片があちこちに刺さった状態だったらしい。

ガラスの裂傷は、まだ、完全には癒えないが、傷口の保護シートによって日常生活程度の行動はできる。

外傷を伴わない怪我については、よく分からなかつた。なにしろ、医者は何の質問にも答えず、薬や点滴の説明も何もない。

地球に到着した七日目には、苛立ちで医者を殴りかけた。

翌日から、レーザー銃をあてがわれての治療となってしまった。我ながら、情けない状態だな。

レクトは思つ。

どうして、あの時、シンカの頼みを受けて危険を冒したのか。今考  
えても、分からなかつた。

とつと、そう、行動したくなつたのだ。カツツエに言わせれば、  
大ばかやうつてところだな。

冷静に考えれば、あのミンクとやらが体調を崩したとしても、すぐ  
に死んでしまうわけではない。

自分が、自分の組織すら危険にさらじて行動するほどのことでもな  
かつた。

どうも、シンカにかかると俺らしくなくなつてしまつ。

あいつが、ロスタヌスに、似ているからか・・・。

まあいい。

カツツエなら、俺が自力で脱出するのを待つか、政治的に手を回す

だろう。さて、どうするか。

ついでだから、リトード五世に聞いてみるか。聞きたかつたことがある。

それもいいだらう。どちらにしろ、時間はある。

レクトは、前髪を振り払う。少し伸びただけでうるさく感じる。グレスデーンで雇っている美容師は、三日一度は、手を入れてくれていた。

それが、もう十日以上ものび放題だ。後三日もそのままでは、シンカと同じくらいの長さになってしまふ。気に入らない。

「煙草が吸いたいなあ。」

ポツリと声を出す。一人でいる時間が長いと、独り言が増えると言う。こんな感じのことか。

薄い灰色の天井は、中心に換気口がある。

天井全体に点在する小さな照明は、適度な暗さで、今が夜だと言うことを表している。

昼間は少し光度が上がる。窓一つない、小さな四角い部屋。レクトが歩いても五歩行けば突き当たる。

軍隊生活が長かったせいか、空も太陽も宇宙も見えない環境や狭い部屋などは気にならない。ただ、煙草は吸いたかった。

気になっていた、いくつかの仕事を思い出しながら、ベッド以外何もない部屋を歩いてみる。継ぎ田一つない壁、騒がれてもいいように防音が施されている。

この一十階の拘留施設は、政治犯や帝国が表立つて逮捕できない人間を拘留するためのものだ。レクトも何人か、ここにぶち込んだ記憶がある。

限られた者しか、この存在を知らない。皇帝と、側近、情報部の将校以上の者、帝国政府では大臣クラス。だから、この部屋には監視カメラはない。

カメラがあれば、その回線を探ることで存在を知られてしまうから

だ。

その分、気楽でいいが。

通常、この部屋にはベッドだけだ。だが、今は、レクトのために栄養剤の点滴の機材がある。体温を測る機械、体調が悪い場合の呼び出しボタン。

くつく。笑った。

ずいぶんいい待遇だ。

再びベッドに横たわる。点滴の針でも、とつておくか？医者は気付くだろうか？

いくつか、脱出のショミーレーションを頭に描き、一人にやにやしている。

ふと、誰かが入ってくる気配がする。いつもとは時間が違う。体を起したのと、扉が開いたのと同時だつた。黒い、すその長い衣装をつけた、長身の男が入ってくる。頭には黒いフードを深くかぶり、顔は見えない。

「またか。何の用だ。皇帝陛下は暇を持て余しているのか。」  
レクトは、あからさまに眉をひそめて、再びベッドに横たわる。

「相変わらずだな。」

低いガラガラした声でリトード五世は笑った。

「・・・。」

「今だ、母親のことが忘れられぬか。」

皇帝が、黒いフードの下で笑う。

レクトは、栗色の前髪が視界を妨げていることも無視し、険しい视线を天井に向けている。

母親。それが今の自分にとつて、大して意味のないものとは思つて  
いる。

彼女の記憶は少ししかない。

自分の生き立ちに疑問を持つことなどなかつた。ただの、孤児。

里親はいたが、大して裕福な家庭でもなく、ごく普通に育つた。

彼らは、俺を死んだと思っているだろう。

髪の色を変え、名を変えて。

得るものに對して、失うものも当然ある。

そうして生きてきた。

何も失うことなく、全てを得ることなど、不可能。

そうして、手に入れた地位を、捨てる気になったのは、自らの出生と、母親が皇帝に殺されたことを、知ったからだった。

母親の死の理由を知つたからといって、別に何ということはないはずだつた。

しかし、母を死に追いやつた人物を目の前にして、冷静でいられないのは、不思議な感覺だつた。

自分自身、理由が分からぬ。

ただ、この男を目の前にすると、苛立つ。

だから、帝国軍を辞めた。

それだけのことなのだ。

一つ小さく息をついて、話し出した。

「何のために、俺だけ残した。」

「残した、とは？」

皇帝が逆に尋ねる。

「俺と同じように、あんたの血を持つた奴らが、五人はいたはずだ。研究資料にあつた。皆、行方が分からぬ。どこにいるんだ？」

「知らぬな。」

「何を企んで、俺たちを産ませた？後継者にするつもりではなかつたのか？」

高齢のリトード五世は、約四十年前くらいから盛んに後継者を望んだ。自らが六十歳を過ぎていたため、人工授精を多用した。

生まれた子供は五人。

それぞれ母親が違っていた。

その異母兄弟の存在を知ったのは、帝国軍を辞してからのことだった。

「どれも失敗だった。レクト、お前すら、我が望みにはかなわなかつた。」

ふん、と、レクトは笑つた。

「それはラッキーだつた。」

嬉しげに笑う男を、太陽帝国皇帝は黙つてみている。フードの下の口元が、笑つたようだ。

「だがな。」

「シンカはやらん。」

言いかけた皇帝に噛み付くよついで、レクトが言つた。

起き上がり、まっすぐ、皇帝を睨んでいた。

「決めるのはシンカ本人だ。お前にも選択肢をやるつ。」「低く笑いながら話す皇帝を、気に入らない様子で、レクトは横目で睨む。

再び、ベッドに寝転ぶ。

「」のまま、一生追われ続けるのも、得策ではあるまい?」

「・・選択肢とは、何だ。」

「太陽帝国皇帝に忠誠を誓つか、死を選ぶか、だ。」

あきれたように口をゆがめると、レクトはいやみな笑いを浮かべた。

「ばかなことを。」

「お前は後継者にはなれん。だが、我に似てい。」

「吐き気がするぜ。」

「気付かないか?」

レクトは寝返りを打ち、皇帝に背を向けた。

「我が、お前の母親を殺したように、お前もシンカの母親を殺したではないか。」

「一緒にするな。」

微動だにしないレクトの表情は見えない。

それでも、皇帝は声に笑みを含み、楽しそうだ。

「血は争えん。シンカもさぞ、お前を憎んでいるのだつ。」「くくく、と低く笑う。

「・・あこつは違つ。」

ぱつぱつしたレクトの声が、皇帝に聞こえたかどつか。

「レクト、忘れるな。お前に『えられた選択肢は、皇帝に協力し、太陽帝国の政治を行うこと』。断るのならば、抹殺。お前はお前の選択肢をどうするのか、シンカを捕らえるまでに考えておくことだな。」

すその長い黒い衣装を翻し、背の高い男は去っていく。

レクトは、脱出することを決めた。シンカがとらわれてしまつ前に。カツツエが、選ぶだらう選択肢で、一番安全なのは、俺が自分で脱出することだ。

カツツエが人質などといつ罷にはまるわけはないが、シンカがそれに従つたかは、分からぬ。

どちらにしろ、期限が切られた。どうにが、選択肢だ。

レクトの独房を出たところで、リード五世を帝国軍元帥、メインが迎えた。

白髪の丈高い軍人を、皇帝は押しのけるように歩き続ける。

「陛下。なぜ、お認めになられませんか！」

「うるさい。私に意見するな。」

黒い衣装を翻す皇帝に、メインは食い下がる。

「待望の聖血者ではありませんか！」

「メイン、我はお前に許可したか？あれにリングをつけるなど、何を勝手にやつておるのか！」

「しかし、陛下。」

「それとも、お前は勝手に後継者を立て、我を「生き者にしてみつ」とでもたらさんでいるのか。」

「 こえ、そんなん。」

早足で歩き続ける皇帝の後ろから、メインソンは静かに歩いていく。

シンカたちは、廃棄物処理場から、研究所の地下室にたどり着いた。そこは、同じ地下でも白く明るく、清潔な感じだ。

「本来は、排気口を進むといいんですけど、研究所の排気は何が含まれてるか、わかったもんじゃないすから。まあ、この時間なら、そう、人はいないつす。」

ジンロの後について、人気のない廊下を進む。日付の変わった深夜の研究所は、ただ白い灯りが静まり返った廊下を照らしている。足元のセキュリティーセンサーも稼動している。つまり、誰もいないと言つことだ。

四人は、非常階段を使って、研究所の五階まで上がった。そこから、中央政府ビルへ続く連絡通路がある。通路は、所々、防犯のシャッターが下ろされていて、通れない。

ジンロは、防犯シャッターの脇にある、通用口を小さな機械を使って警報が鳴らないよう、器用に開放する。

後一つで、政府ビルというところで、ジンロが、三人を振り返つた。  
「ここからは、警備兵がいるつす。レクトさんがいるはずのところは、二十階で、エレベーター内で警報が発動したら、自動的に一番近いフロアで止まるつす。

警報を鳴らされると、そのフロアは閉鎖されるんで、廊下の天井にある排気口に隠れます。その時は、撤退つすよ。

俺たちが捕まつたら、かなりやばいっすから。レクトさんと合流したら、レクトさんに従う。あの人は、ここに詳しいつす。」  
だまつて、三人はうなずいた。

「しかし、便利だよな。」

シキがひそひそとシンカに話しかけた。

「こいつ着てれば、あのレーザー銃も通さないんだろ?」

服の下の、少しづつしりと重いベストをつついてみせる。

「通さないってだけなのよ。」

セイ・リンが笑った。

「衝撃や痛みはあるし、腹部は場合によつては被弾するわ。」

「油断するなつてさ、シキ。」

「はん。お前にさ、気をつけろよ。」

「そこで拳をこつんとやりあう。」

「ほんとに、緊張感ないつすね。」

あきれのジンロ。

最後の通用口を開くと、四人は、ジンロのタイミングに合わせて、入り込む。

そこは、政府の職員用レストランスペースで、市街を見下ろせる大きな窓に、カウンターがついている。

背もたれのないイスが幾つか並んでいる。脇に、壁に埋め込まれた飲み物のディスペンサーがある。

たしか、同じようなものが、デイラの研究所でもあった。そこを過ぎると、広い廊下に突き当たる。

ジンロが、壁の配電盤で、また、カメラの操作をする。フロア「J」とに制御が必要だと呟つ。

ジンロの合図で三人は廊下に出る。広く天井も高い。片側が、大きな窓になつていて、市街の夜景が派手な模様を作つてゐる。中一階あたりの位置に、窓に沿つて手すりのついた通路がついてゐる。

その通路は、シンカたちのいる廊下とは別の、どこか奥のほうへと続いている。誰が使うのだろう?

まるで、廊下を歩く人々を見下ろしているような、通路。

「あれは、皇帝専用の通路ですよ。あそこから、職員の様子を見下ろしているとか。」

「ふうん。」

気になりながらも、シンカは三人の後に続き、エレベーターに乗り込む。さすがに、人気はない。

警備員の巡回も、この広い建物ではそつそつ、行われるものでもないだろう。

エレベーターは大人が二十人くらい乗っても、狭さを感じないくらい広い。

ジンロが二十階を選択しようとする。

「！」

ジンロが小さく舌打ちした。

「どうした？」

シンカが小声だたずねる。

「やつぱりっす。二十階は、特別なフロアなんすよ。普通じゃ止まれないっす。一つ上のフロアから、いくしかないっすね。」

「でも、二十階、点滅したぞ。」

シキが、表示板をじっと見る。ジンロも驚いて表示を確認する。すると、エレベーターが動き出したようだ。音もなく、振動もなく、ただ、表示板の数字だけが増えていく。

「誰かが、二十階から呼んだんだわ！」

セイの言葉に、ジンロはうなずいた。

「こっちからの操作は拒否されてるっす。」「着ぐぞ！」

四人は、構えた。

扉が開く。同時に、ジンロが、ナイフで突きに入る。

相手は黒い服の男六人だ。

シンカも短剣を構えて、黒服の男、大きなゴーグルのようなもので顔半分を隠している、かなり鍛えられた男に突きを見舞う。かわされると同時に、次の動きに移る。

「その子供を殺すな！」

ガラガラした低い声がうなるように響いた。

「皇帝！」

セイ・リンが黒服の男を後ろから締めながら叫んだ。

「！」

その時だった。頭上から誰かが飛び降りる。

セイ・リンが相手していた男を一撃で倒した男は、にやりとしながら黒服の銃を懐から取り上げる。

「レクト！」

レクトは下のフロアで見たような中一階あたりの、やはり窓際にある通路から飛び降りたのだった。

黒服を押しのけて、一瞬シンカの顔に笑みが浮かぶ。

その瞬間だった。

ものすごい力で腕を引かれ、シンカは肩から床にたたきつけられる。

「・・・」

すぐに起き上がれないシンカを、黒い腕が抱えて走り出す。

なんだ、・・・？

「シンカ！」

シキの呼ぶ声がすでに遠い。

シンカを片腕で抱えて走るその男は異常に速い。じつじつした腕、まるで、機械のようだ。

「はなせつ！」

もがいてもびくともしない。挟まれて両手は自由にならない。  
皇帝は、鉄の腕を持っていた。異常なスピードも、百歳とは思えない。

い。

「これは、元帥。お久しぶりですな。」  
レクトは目の前の元上官に銃を向けた。

「まあ、待て。」

元帥は両手を前に出し、戦意のないことを示した。  
「メイン元帥、どいていただけますか。」

眉をひそめて、レクトが睨みつけた。

目の前の黒服を倒したシキが、立ち止まつて、レクトの肩を叩く。

「おい、シンカを追うぞ！」

「まあ、待て、大丈夫だ。シンカは危害を加えられたりしない。」  
メイン元帥がシキの前に立ちふさがる。

「どけよ！」

飛び掛ろうとするシキを、レクトが止めた。

「なんだよ、止めるな！」

シキは見詰め合っているかのようなレクトと老人を睨んだ。

ジンロも、セイ・リンも、一人の様子を見ている。

「久しぶりだな、レクト。」

「元帥、私たちはシンカを助ける。邪魔しないでいただきたい。」

「助ける？大丈夫だ。我々は彼を、後継者として迎えるつもりだ。  
危害など加えない。」

メイン元帥の言葉に、レクトは不機嫌に眉を寄せた。

「それを、あの皇帝が、認めるならばな。だが、俺にはそつは思え  
ん。」

「おい、何なんだよ、その後継者って。」

「あの、それは、どういう。」

シキとセイ・リンが同時に声を出す。

メイソンは白いひげを軽くなでて、話し始めた。

「シンカ、彼はそのように育てられているのだ。生まれたとき、彼のもつDNAが、皇帝の後継者としてふさわしいことが分かつてな。

」

「はあ？」

シキがへんな返事をする。それは、ロスタヌスの後継者という意味ではなかつたか。

「コンイラのためでは、ないですか？」

セイ・リンも、険しい表情で見つめる。研究者たちはそう命じられていた。ダンも、そのために命を懸けたのだ。

「そういうわざも立つたが。そんな、あやふやな植物の成分より、稀にしか生まれない聖血者としての存在が重要だ。」

「せいけつしゃ？」

「確かに、知るものはほとんどいない。研究所でも知らずに育てただろう。」

元帥の話を、レクトが引き継いだ。

「皇帝になるにはな、三つの、特別な遺伝子が必要なんだ。どんなに血がつながっていても、それがなくては皇帝にはなれない。

その遺伝子で作られる、脳神経内の伝達物質が、星間ネットワークの中枢に使われているからだ。ネットワークを維持していくために、皇帝の遺伝子は不可欠。

同時に皇帝によってネットワークは守られているわけだ。それを持つものを、聖血者と、政府内では呼んでいるんだ。」

「そう。だから、彼は皇帝の後継者として迎えられるべきなのだ。」

レクトは大きく首を横に振った。

「元帥、リトード五世に、その意思があればといつています。あの男に、誰かにその地位を譲るなどといつ考へはない。」

シキは、頭を抑えている。

「わけが、わからん。」

「・・・そうね、なんと、言つていいか。」

ジンロも、黙り込んでいた。

カツツエも知らなかつたのだろう、だから、シンカが捕らえられたら殺せど、コンイラが皇帝に悪用される前に、殺せど、ジンロは命じられていた。

「あの、レクトさん、どうするんで？」

「もちろん、始めと同じ。助け出すさ。皇帝は、シン力を後継者などにするつもりはない。ただ、利用したいだけだ。」

「レクト、まだそんなことを。お前は、母親のことでは陛下を憎んでおるだけだらう…」

たしなめるように低くうなる元帥。

ふん、と息を荒く吐くと、レクトは冷たい視線を元帥に向かた。

「あれが後継者にする待遇か？何も知らされず監視され、無理やり地球に連れて行くことが。元帥、皇帝が認めているとは思えない。俺はシン力を自由にすると約束したのだ」

「レクト」

「太陽帝国を敵にまわす事くらい覚悟しているぞ。まあ、どう歴史が動くのか、ご老体も見届けてください」

「生意気な口調は、変わらんな」

苦笑して元帥は一步下がつた。

「行くぞ」

走り出すレクトに三人も従つた。

「好きにするがいい。だが、レクト。陛下にもしもの」  
「されば、責任を取つてもううそ」

背後から、メインが声をかける。

「殺しません！」安心を

来たときは違う、狭いエレベーターの中で、皇帝の脇に抱えられたまま、シンカはもがき疲れてぐつたりしていた。

手に持っていたレーザー銃で、皇帝を撃つても、黒い衣装で跳ね返るだけだ。

背中の剣は、この体制では抜くことができない。銃身で殴つても、たたいても、びくともしない。

がっしり捕まれた腕と体がしびれるほど痛い。

「放せよ。あんた、人間じゃないだろ。」

「老いれば、体の自由が利かなくなるからな。多少の治療も必要になる。」

無機質な声で、皇帝は笑った。

眠らされてはどうにもならない、今はおとなしくついていくか。シンカは考えた。機械の体は別としても、皇帝もやっぱり一人の人間なんだな。もっと、厳重な警備の奥について、指示するだけでふんぞり返つていて思つた。

かなりの高さにまで登つた。さっきのエレベーターがほぼ十五、六秒で十五階登つたことを考えれば、今はもう、百五十階くらいには着ているだろ？

首をひねると、窓からすらすら白んだ地平線が、逆さまに見えた。まだ、黒い街の影は、色とりどりの明かりで輝いている。エレベーターを降りると、そこには側近らしき従者が控えていて、皇帝が抱えている荷物を見るなり言葉を詰まらせた。

「陛下・・・」

「二十階にレクトと、ねずみが三匹いる。捕らえておくのだ。殺すでないぞ。レクトだけ、ここに連れてくるのだ。」

「はっ！」

皇帝の背後しか見えないシンカには、側近の姿は見えない。広い部屋に入ったようだつた。頭に血が上つたのか、重い。目がくらうとする。

また、皇帝が誰かに向かつて、命じる。

まだ他にも従者がいるのか？相変わらず子供が抱えるぬいぐるみのように、黒い腕に縛られたまま、シンカはぼんやりしかけた耳を澄ます。

「コウリを呼べ。」

ステーションの研究所にいた彼女だ。生きていたのか！

シンカからは、床しか見えない。

首を回しても研究所にあつたようなコンピューターしか見えない。程なくして、「陛下、コウリです。入ります。」と声がして、ドアが開いた。

「お呼びです・・・シンカ！」

「眠らせて、我の研究室に運ぶのだ。」

皇帝の命令にコウリは少し躊躇したようだ。

「分かりました。」

横にコウリが立つのが分かる。薬を使つ氣だーとつさに膝でコウリを蹴つた。

「きやあ！」

一瞬緩んだ機械の腕をすり抜けて強引に腕を抜く。シンカは頭から床に落ちながら、レーザー銃で皇帝の頭を撃つた。

「ぐあっー。」

むなしくはじかれる。が、さすがにひるんで顔を覆う皇帝。

シンカは、その隙に皇帝の手から逃れると、部屋の扉を開けようと駆け寄る。

開かない。頭に血が上つたためか、視界がぐらつく。

「シンカ！」

背後に駆け寄るコウリを振り向きざまに捕らえて羽交い絞めにする。短剣を首に押し当てた。

「皇帝、ここを開ける！」  
くっく。

皇帝は小さく笑いながら、覆っていた手を離した。

！

フードが外れ、あらわになつた皇帝の顔は、グロテスクな機械の顔だった。

黒い人工の瞳がぐりぐりと動き、シンカを睨む。頭には透明なカプセル状のものに入った脳。

青い液体に浸かっていて皇帝が一步進むたびに小さな泡が立つ。

「止まれよ！」

ドアを背に、女を脅したまま、後ろに下がる。ドアに当たる。

「お前に、その女を殺せるのかな？」

シンカは、とつさにコウリのみぞおちを狙つて、気絶させる。

皇帝の黒い手が伸びる。背中の剣を抜きながらかわし、皇帝の首を狙つてなぎ払つた。

ガツ！

強い衝撃と同時に、機械の腕に振り払われる。  
はじかれた長剣は、部屋の隅に転がつた。

剣では、歯が立たない。

「化け物！」

振り下ろされる機械の手をよけながら、シンカは大きな革張りのソファーのほうへと逃れる。

広い部屋には、このソファーとテーブルのさらに離れた奥に別の部

屋があるようだ。

大きなどつしりした執務用のデスクの横をすりぬけて、そのドアへと向かう。

「お前も、同じ化け物だと聞いたが。」

くつくと笑いながら、皇帝の左手がまっすぐ伸ばされ、人差し指がシン力を狙う。

「！」

黒い指尖から、白いレーザーが放たれた。

左腿に激痛が走る。

転んだ勢いで、壁にぶつかる。

ドアのすぐ前だ。

「おや、平気ではなかつたのか？」

痛がるシンカの表情を、ぐるぐる動く黒い眼球が嬉しそうに見つめる。

柔らかな毛皮の敷き詰められた床を、音もなく近づいてくる。

シンカは、出血する傷口を手で押さえ、痛みにゆがむ視界で、皇帝を睨みつけた。

ぎりぎりまで、回復を待つ。血は止まった。表面の傷はまだだが、骨は大丈夫。動かせるのか。

黒い影が近づいてくる。

「傷が治ると聞いた。その、蒼い瞳はどうなんだ？ 撃ち抜いても治るのかな？」

ぞわりと、背筋が凍る。

黒い手が、のばされる。シンカの顔に触れる寸前、手首を捉えてねじりながら引き倒す。

同時に足を払つた。

さすがの皇帝も、少しごらつく。重い体は、バランスを崩して、手を床についた。

その隙に、シンカは左手をのばし、ドアを開けた。

背後の扉がなくなり、転がるよつに入り込む。

暗い。

かすかな機械音。

皇帝の入つてくる気配を感じてシンカは部屋の奥に駆け込む。まだ心臓をつかまれ

るような痛みが残っている。

「面白いな、シンカ。」

皇帝の声は笑みを含んでいる。

扉が閉じられると同時に白いまぶしい明かりが点された。目を覆うシンカ。

「シンカ！」

シキの声。

脇にレクトもセイ・リンも、そしてジンロもいる。

皇帝が振り向き、いやそうに首を振った。

「役に立たんな。」

先ほどの側近への言葉だらう。

皇帝を囲むようにして構える四人。シンカは皇帝の背後を見つめながら、室内を観察する。

広い部屋は白い壁に囲まれ、宇宙ステーションで見た研究所の設備とほとんど同じだった。

ただし実験用の台は三つ。その分設備が充実している。先ほどユウリに指示した研究室とは、このことなのか。

「うへ、これが太陽帝国皇帝かよ。」

シキが皇帝の姿を見ていやな顔をした。

「シンカ大丈夫か？」

レクトがシンカの怪我を見て取つて声をかける。

「シンカ！」

足を押さえ座り込んでいるシンカに、駆け寄るヒトシキが歩きかけ  
る。

皇帝がその頭を指差す。

「シキ、伏せろー。」

シンカの声と同時に白光が空を薙いだ。寸前で避けたシキの髪がいく筋か、はりりと床に散った。

「あぶねえ」

「やはりな。皇帝、シンカを後継者とするのではないか？」  
レクトが壮絶な笑みを浮かべている。取引だと持ちかけるふりをしながら、結局は自分に都合のいいようにするのだ。周囲や元帥が何をどう言つても聞くよつな皇帝ではない。

シンカを救おうとリュードに潜入しあの街を破壊した、レクトの行動は間違つてはいなかつた。

皇帝は嬉しそうに笑つた。

「くく、後継者など、馬鹿なことを。こんな子供に何をさせるとこうのか」

「何だよ、後継者つて」

シンカが睨みつける。

「それに子供つていうな

それがカツツヒが言つていた、皇帝やレクトが隠していた目的なのか？

シンカは皇帝の後姿と、レクトの表情を見比べていた。

皇帝は凶器を仕込んだ指をゆっくりとセイ・リンに向けた。

「危ない！」

シンカが叫んだときには、赤毛の女性は肩を押されて倒れかかる。あの防御服も肩は保護できない。皇帝はそれを知っているのか。

レクトの銃から報復のレーザーが放たれるが。皇帝の額にきつちり命中したそれは空しく弾かれ、シンカの腕をかすつた。皇帝は平気なのだ、レクトも一発目を躊躇するしかない。

ジンロの銃もシキの間隙をついた剣も、すべて歯が立たないようだ。シキが皇帝に突き飛ばされ壁に打ち付けられて頭を押された。

「シキ！」

一人、皇帝の背後にいるシンカは隙を突いて短剣を皇帝の背に突立てた。厚い黒いマントの布越しに感じるそれは、人間ではない。硬く短剣は一ミリも食い込まず、そつとするような甲高い音を立てた。シンカにつかみかかる黒い腕をかわして、四人に合流しようとした。駆け出した。

レーザーが足先を弾く瞬間に飛びのこうとし、シンカは反動で実験台に腰をぶつけた。

「いて」

「シンカ！後ろ！」

セイの声で振り返る。

肩をつかまれそうになる。腕をひねるようにして振り払うのと、シンカが斬り付けるのと同時だ。

痛む足を引きずりながら、レクトの横に駆け寄った。

「大丈夫か」

「そつちこそ、大丈夫なのか？心配したんだ」

まじめに話すシンカにレクトは目を丸くし、それから「は」と呆れた息を吐き出した。

「バカが、俺を心配するなど百年早い」

「はあ！？」

「痴話げんかしてゐる場合じやないつすよ」

冷静なジンロの低い声にシンカは複雑な顔を、改めて皇帝に向けた。皆と合流できたことがシンカを安堵させていた。

「状況は変わらんぞ。シンカ。お前が拒めば、四人は死ぬだけだ」「なんだよ、それ！」

返事もせずに皇帝のレーザーがジンロの胸を撃つ。ジンロは構えるまもなく、衝撃で数歩下がつた。支えようとしたレクトにも、容赦なくレーザーの光が注がれる。

「やめひー。」

「お前にかかつてゐるのだぞ？ お前わえ言つ」とを聞けば、四人は生きられるのだ。考えてみるがいい、このまま全員を殺し、最後にお前を捕らえることも出来る。せめてもの慈悲だぞ、シンカ。こちらに来るので」

シンカの肩をシキが押さえる。

「わかつてゐんだらうな、シンカ。俺はお前のために來たんだ。お前が一緒でなきや、死んでも歸らん」

「シキ……」

「このままお前を置いて帰つたつて、ミンクに殺されるぞ」そう言ってシキはウインクしてみせる。

「わうよ、シンカ

セイ・リンも笑う。

白い光が赤毛の女性に向けられる。

シンカとシキがそれに気付いたのは同時だった。

「セイ！」

シキはセイ・リンを庇い、一人そろつて身を投げ出した。

「シキ！」

シンカが駆け寄る。

シキは腹部を押さえていた。耐熱服も、腹部は弱い。じくじくと血の流れ出すそれにシンカはぞくと震えた。苦しげに息をつくシキはうめくことも出来ずにはいる。

このままでは。

「シンカ、一人ずつ、殺していくぞ」

追い討ちをかけるような皇帝に「黙れ！」とレクトが飛び掛る。腕をつかむと、人間離れしたその機械の男を全体重をかけて引き倒した。露になつた皇帝の首に短剣をつきたてよつとする。そこには接続部。弱点ではないかと思われた。

が、剣はむなしい音を立てて弾かれた。機械の腕は尋常でない力でレクトを突き飛ばす。ジンロが入れ替わるように蹴りを入れる。皇帝はそれを受け止めると、横にひねりながら起き上がり、勢いで転がるジンロをさらに蹴りつとする。

レクトの上段蹴りが皇帝の首を狙う。ぐらりともしない。一回目の蹴りが腹に入つたが、平然として皇帝はレクトの両肩をつかみ、床に投げつけた。

「シキ！」

「シキー！ かりしNのよー」シンカの叫び声にもシキの反応は鈍い。

セイ・リンが大きな瞳に光るものを見た。シキの口に焼けた腕が伸び、セイ・リンの赤毛に触れた。

「なんで、庇うの！ 貴方の目的はシンカを護ることでしょう？」

「…シンカなら、分かってくれるわ… 一人の女を守るってのも、い

い

セイ・リンがシキの名を呼ぶ声を聞きながら、シンカは短剣で手首を切った。

シキの腹部の出血を押さえようとしていたセイ・リンをそつと引き離すと、シンカは自分の血を含ませた布を傷口に押し当てる。効くかは分からぬ。

シンカは塞がりかけた傷口をさらに切り裂き、布の上から血を滴らせる。震えるほどどの痛みも、失うことを思えば気にならなかつた。あの時のミンクと同じ。失うわけには行かない。

大切な友達だ。

「シンカ…？ 何、してる」

シキのかすれる声。かすかに青ざめた頬に赤みが差した。

「俺は、どうせ長くない、お前も知つていただろ」

「違うよー。リコードを出れば、ちゃんと治療すれば治るつて、言ってただろー」

「…お前に会えて、最後にさ、俺ひっく生きられたと、思ひぜ…」

「だから、死なせないつてば…」

シンカは血にまみれた手で涙をぬぐつた。

「ユンイラは、嫌いかもしれないけどさ。俺、シキを死なせるわけには行かないんだ」

シンカは穏やかに笑つていた。

その笑顔は、いつか見たことがある。

シキは思い出した。カンカラの遺跡で、遠くを見ながらいつか空を飛ぶ乗り物に乗つてみたいと話した時。思いつめ、何かを考えている瞳。

セイ・リンも思い出していた。ステーションのロビーで、レクト

から逃げ出すことを決めたとき。眞実より、自分の意志を選んだときの。笑顔だ。

「おー！シンカ！」

シキが、止めようと手をのばす。

それは届かない。

「だめよ！シンカ！」

セイ・リンの声も聞き流し、シンカは立ち上がる。蒼い瞳でまつすぐ、太陽帝国皇帝リトード五世を見つめた。

「シンカ！だめだ！」

レクトが叫んだ。その瞬間に皇帝に突き飛ばされ壁にしたたか背中を打つ。

「レクトさん！」

ジンロが背後にレクトをかばう。

レクトは、思い出していた。あのロスタネスの哀しげな微笑を。それを浮かべる、シンカの表情を。

「なんだか分からないけど。要求をのむよ。好きにすればいい」

シンカの言葉に皇帝は動きを止めた。

そう、始めから、覚悟してきていた。

ミンクのために、ガансに血清を作ってくれるよう頼んである。戦場で幾人も男たちを送り出してきた軍医のガансは、黙つてシンカの頼みを聞いてくれた。もし帰れなかつたら、ごめんつて言っておいてくれるはずだ。

「いいだろう」

皇帝はジンロの足を撃ち動きを止めると、シンカに来いと促した。

シンカは皆の声を聞きながら、皇帝の手の届く距離まで近づいた。

「コウリ！」

皇帝の呼ぶ声でレクトたちの背後から小柄な女性が恐る恐る入ってきた。先ほどから隣で様子をうかがっていたのだろう。

「シンカに薬を」

ユウリが周囲の視線におびえながらも細い金属の筒をシンカの腕に押し当てた。

ちくりとする。あのデイラの研究所で、セイ・リンが使った薬と同じだろとシンカには予想できた。

あれ、好きじゃなかつたな。

めまいと共にぐらりと視界が揺れる。

「皇帝、シンカに選ばせるといった、あればなんだつたのだ」

レクトの声のようだ。

選択？

身体はますますけだるくなり、シンカは立つていられないほど気分が悪くなっていた。悪寒に手が震えた。

「あれか。我の一部となるか、帝国を治めるか」

「我の、一部？」

シンカが、かきうじて声に出した。

「そうだ。お前は我を倒せなかつた。我を凌駕できれば考へないでもなかつたが。力ないものは死に値する。お前は我の一部として永遠の命を我に『えるのだ！』

「！」

「永遠の命？ぐだらねえ。」

顔色の良くなつたシキが血の混じつたつばを一つ吐くと、セイ・リンに支えられながら上半身を起した。

シンカは暗くなる視界にシキの様子すら理解できていなかつた。思考はしつかりしているのに、どうにも体が自由にならない。耳を塞

ぐ耳鳴りやこみ上げる吐き氣と悪寒、震える手足。ついに立つていられなくなつて膝をついた。そのまま、くたりとうずくまる。それでも意識の片隅で皇帝の声を聞いていた。

「我は、いやつの素晴らしい体が欲しい」

なに言つてゐ?

「いやつの細胞は老いないのだ。寿命一百歳のセダ星人でも、十五歳を過ぎれば細胞の老化が始まる。シンカは、今だ生まれたての赤子のような細胞を維持しているのだ。恩るべき治癒能力もその理由の一つ。その永遠の生命力をもつた臓器は我に相応しい。移植され、永遠に我とともに生きるのだ」

「勝手なこと言つな!」

レクトが叫んでいる。

吐き氣がする。移植?

何を…?俺を?

「我がここまで生きてきたのも、レクト、お前のような我の血を引く若者の臓器があつたからこそ」

「やはり、お前が殺していたのか!」

「お前の兄弟は、今、我とともに生きている。」

そういつて、皇帝は機械の体を示した。

「お前は殺すにはいたさか惜しくてな。だから、お前の血を引くシンカを作らせた。コンイラの成分で、まさかこんなに理想的な生き物になるとは思わなかつたが」

「そのために、コンイラを研究したのか?シンカを」

レクトが怒りを押し殺し、低い声でたずねる。

「そうだ。馬鹿なやつらは我が宇宙制服を企むなどと勘違いしたようだがな。この宇宙で我的力が及ばないところなどないではないか。すでに支配されていると書うのに、下らぬことよ」

「貴様！」

座り込むシンカを引つ張り上げ、手術台に乗せようとする皇帝に、レクトが飛び掛った。

「シンカ！」

皇帝の手を払いのけ、レクトは力ないシンカを抱きとめた。かすかにシンカの意識にそれが分かる。

父さん。

つぶやいたのは声になつてゐるのか。

「レクト、そなたの選択は決まったのか？」

「誰が、お前などに協力するか！」

「ふん。死を選ぶか」

皇帝の手が、シンカを守ろうとするレクトの背に当たられた。白い一閃が男の背を突き抜け、シンカの皿の前を走った。

なんだ？

肩を抱く温かい腕が、ふとなくなつた。

床に座り込んでいるシンカの前に、レクトの意識を失つた顔があつた。

「？」

レクト？

心臓がどくり、と大きく鳴った。

「う、さん？」

血液はゆっくりと男の下に広がっていく。

まさか…。

鼓動が大きく脈打ち、何も聞こえない。聞こえないが、シンカは叫んでいた。嫌だ、レクト、死んだら嫌だ。

閉じられた男は、動かない。

栗色の髪がかかる背に、レーザーの跡。血の匂いが広がる。視界がぼやける。

「レ・・クト！」

あふれる涙を感じる。

ずっと、探していた、父さんなのに。  
違うかもしれないけれど。

父さんだと、信じると決めた。

ぐいと腕を引く皇帝に、シンカは蒼い瞳を向けた。強い力に引きずられ、レクトから引き離される。

「太陽帝国皇帝は永遠なのだ！貴様らのときが何をしても無駄だ！」

「父さん」

引きずられながら、シンカの声が震える。

「レクトさん！」

足を引きずつて、駆け寄るジンロ。レクトを抱き起しす。

「一・シンカが」

セイ・リンが寒さを感じて、シンカを見つめた。  
うつろな蒼い瞳は何も見ていない。

それは覚えがある光景。

シンカの体の周りの空気が歪み始めた。

「なんだ？これは、……」

皇帝が異変に気付いた。シンカの手から、熱が奪われていく。  
凍つっていく。

厚い黒いマントの生地に空気中の水分が凍りつき、白い霜となつて  
ちりばめられた。それは沁みのようなものから次第に広がり、見てい  
るうちに皇帝の腕全体を白く染めた。

「は、はなせ！」

もがいたとたん、機械の腕はミシと嫌な音を響かせ、パシンと砕け  
る音がする。

限界まで温度の下がつたそれは、ガラスのように脆い。

「くそ…やめろ、シンカ」

皇帝は唸るが、既に肩まで凍つた手は動かせない。

「おい、シンカはどうしたんだ！なんだ、この寒さは  
シキが背を這う寒氣に、身を縮める。

「力が暴走したのよ！研究室の爆破のときも、同じだつたわ！  
セイ・リンが叫ぶ。その息は白く急速に凍つていく。

「力…？」

シキはシンカを見つめていた。人間とは違うと聞かされても実感は

なかつた。今それを見せ付けるようなシンカの様子はシキには切ない。

「彼の力のおかげで私も救われたわ。あの後、まるで小さいう子供みたいに熱を出すの、看病するの大変だったんだから」セイ・リンのそれはシキを慰めているようにも聞こえた。

ジンロは片足を引きずしながら、レクトの体をシンカから引き離した。

「う、……ジンロ」

「レクトさん。良かつたつす。急所は外れてますが、肺を傷つける可能性があるつす。止血もしなきやならないですし、動かないでください」

恐ろしいほど冷氣で、レクトの唇は紫色に変わっていた。

「シンカは？」

ジンロが、白く光るシンカを見つめる。

レクトもその視線の先を追つた。

皇帝は、すでに首まで固まっている。

シンカの体は熱で白く光り、周りの空氣のゆがみが、まるでオーラを見せるように煌く。

呪う言葉を吐き続けながら皇帝は少しずつ動きを止めしていく。すでに頬まで冷氣の白に染まっている。

「おのれ、シンカ！ キサマ……コルサン……」

皇帝の声が途絶えた。

脳を包んでいたカプセルが硬質な音を響かせて凍結した。

シンカが白く発熱する手を添えた。身体に蓄えた熱い塊をすべてそこに、その一点に吐き出すように。シンカは目を閉じた。

急激な温度変化に、それは碎け散つた。青い液体は美しい宝石のよう青くきらめきながら飛び散る。

シンカはそのまま、眠るように倒れた。

レクトは「シンカを」とジンロに指先で合図した。

吐く息が白い。

うなずいて、レクトをそつと横たえさせると、ジンロは少年に近づき恐る恐る触れてみる。

熱で火照っているようだが、熱を吸い取られる感じはない。  
そつと、抱き上げる。

足元で割れた破片がかすかに音を立てる。横たわった黒い服装の機械は、グロテスクな姿を晒していた。

「殺しちまいましたね」  
ジンロがぽつりと言つた。

セイ・リンがシンカの高熱を発する額を押さえる。

シキはウンイラが効いたのか、シンカの様子を見ようと這つてくる。  
「どうなるのかしら。太陽帝国は」

セイ・リンの言葉にジンロが笑つた。

「皇帝一人になくなつて動いていくつすよ。みんな一人一人自分の  
考へで生きているんだ」

「そうね」

セイ・リンが首を振つて息をついた。

「さて、どうやってここから脱出するかっすね」

ジンロが室内を見回す。まともに歩けるものはいない。絶望的だ。

ドアが開き、四人は一斉に振り向いた。

帝国軍を後ろにつれ、メイソン元帥が前に進み出た。

身構える三人。レクトは、青い顔で、横たわったまま老人を見る。

「メイソン元帥」

レクトは横たわったまま、小さくため息をついた。

計ったようなタイミングに、この皇帝の親衛隊を勤める元帥が何を期待していたのかを悟った。レクトの口元には皮肉な笑みが乗る。待っていたのだろう、新たな後継者が、皇帝を倒すのを。

元帥は背後の兵士に武器を収めるように示した。

白衣の医師だらうか、数人駆け込んでくるとレクトやシキの治療に当たる。

メイソン元帥は改めて、ジンロに抱きかかえられている少年の前で膝をついた。

「なんすか？」

ジンロの眉にしわが寄る。

「新たな皇帝として、彼には太陽帝国を支えてもらわねばならん」「だから、それは」

言いかけたシキが、判断を仰ぐようにレクトを見つめた。

レクトは医師の治療を受けながら、片手を挙げた。止めておけといふことか。

「どうするかはシンカに決めさせねど。もう、リトード五世はいないんだ」

「しかし」

シキがシンカを見つめる。目を開けたものの、シンカはまだ呆然としているようだ。

「シンカ、分かるか?」シキの声に、シンカは数回瞬きをする。

「あ?ええと。俺、わけがわかんない、よ」

「皇帝がどう判断なされようと、我らは貴方を後継者として認めています。貴方は皇帝になるべくして育てられた。コトード五世陛下の亡き後、貴方が帝位を継ぐのが本来というもの」

話の内容をやつと理解し、シンカは眉をひそめた。シンカは、ジン口とセイ・リンに支えられて立ち上がった。

「あの、分からんんだ。俺は皇帝を殺したんだよ?あなたたちだつて、受け入れられないだろ?おかしいよ」

く、とかすかに向こうでレクトが笑った気配。  
シンカはそちらをちらりと見て、首をかしげる。

マイソンはシンカの正面で膝をついて見上げると、微笑んだ。

「私たちは皇帝に仕えているわけではありません。帝国のためにあります。よりよい未来を築けるのならば、本来、皇帝は誰でもいいのですよ。ただ、聖血者の資格は必要です。あなただけなのです。今、皇帝になれるのは、あなたはそのためには育てられているのです。辺境の惑星にしてはたくさんの方を教えてくれましたのでありますか?そして、期待以上だと報告を受けています。申し分ありませんよ。あなたの腕のリング、それは帝位を継ぐものの証です。もづ、外すことはできないのですよ。そして、今、あなたがこの話を受け入れてくださいなければ、太陽帝国は混乱し、たくさんの戦争があこがるでしょう」

リング、カツチエが言つていた、これがそれなのか。シンカは左手で右の腕にはまつた金属のそれをなでた。

今は、シンカの体温のためか温かく感じた。

「いつの間にリングなんか。あきれますよ、元帥」レクトの口調には揶揄が含まれる。

「我々には、帝国を守る義務がある。前皇帝がなんとおっしゃられようど、帝位を継ぐものを保護するのは当然のこと。もちろん、レクト。シンカが帝位を継ぐのであれば、お前も皇帝に忠誠を尽くすのであるわ？」

元帥がにやりと笑う。

皇帝の動きを見守りながら、元帥が手を回していたのだろう。レクトはかなわねえな、と小さくつぶやいた。

「あの」

シンカが周りを見回す。

シキも、セイ・リンも少年の顔を見つめた。メイソンは期待に満ちた目で微笑む。

答えを待つていた。

「俺のお父さんって、皇帝だつたの？」

静まり返る室内で、一人だけ吹き出した。

苦しげに傷口を押さえて、レクトは横たわったまま言った。「ばか、お前の父親は俺だ」

笑い続けるレクトに、シキも笑う。

セイ・リンも、ジンロですらにやりとした。

「なんだよ、笑うなよっ！」

少年は頬を赤くする。

それが重要なのだ、シンカには。そして、レクトの答えが笑顔を作らせる。

ちょうど、ブループールの夜が明けた。

ガラスの壁面一杯に、金色に照られた町並みが輝いた。

最上階のこの部屋にも金色の朝日が差し込む。

少年の髪も朝日を浴びてゆらめく。

嬉しそうに微笑むシンカの瞳の蒼は、地球の蒼を思わせた。

了

## 11・地球7（後書き）

ここまで読んでくださつてありがとうございます！

この作品は「面白いRPGをやりたい」という私が思いつくままに書いたシナリオでした。

小説になるなんて考えてもいなかつたのですが。

描き終えて、自己満足じや淋しいと、投稿してみました。

生まれて初めて小説を書いて、完結させて。その楽しさは言葉に表せないほどでした。

以来、物語を書くことが趣味になつて、今現在は、「蒼い星」の続編3編、その他の長編ファンタジー3編、現代ものいくつかなど。ずっと書き続けています。

一人でも多くの人に、読んでいただきたい。楽しんでいただきたい。それが、私の願いです。

楽しんでいただけましたか？

感想、評価など、いただけると嬉しいです

2008・8・10 筆者拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3077e/>

---

蒼い星

2010年10月16日02時27分発行